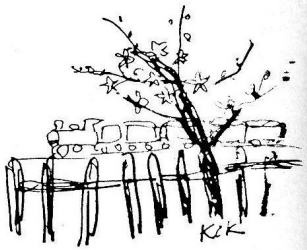
目　次

風景断章（詩十編）……青木昭成　1
Gone are the days……山根三枝子　8
逆立ち……柴田富佐子　14
【連載】
近藤富蔵の生涯（十四）……金子正義　24
有院家の人々（四）……大和禎人　29
修羅の銀行（六）……三戸岡道夫　41
（「金融山脈」改題）
千三百年目の仇討（三）……佐々木一郎　50
編集子のメモ……61

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



風景断章

青木昭成

砂丘

風があおい海の白く泡だつ渚からくる
ひとすじの人の足跡につらぬかれ
風が砂丘の輪をたしかめながら走る
　誰の心のなかにも勾配が生れる
　誰の肌のそとでも予感が消える
空と海とまるく溶けあって水平線になる
いく千萬年の海鳴りにへだてられ
涸れかけた運河がよこたわっていた

運河

底のよどみの縁に釣人が
ときおり腰かけ黙っている
ながい雨期のあとでも一日の
水位はすこしも変らなかった
いちはつ　水門　ポプラ　ばらの垣根
町のはずれの鉄橋の脚
人は心につめたい鏡をもっていて

しきりに己の背後の風景をのぞきこむ
土手にはきまって野犬が群れ
彼岸のかなたに新駅が出現した
というのに

庭

銀杏の葉が散りおわった日
人の心は手術をうけた　黄昏の手で
だが義眼のほほえみをとどめ
固い石垣のうえにいつまでも
投げだされているのは一体　誰だろう

谷間

トンネルを通りぬけた人々の
手は急に山峡の会話のなかに融けてしまう
彼等の心理をすっと追いこす風は
はるかな谷間の木立をせりあがり
生きるという呼吸を
美しいスキ間にすぎなくしてしまう

机のランプの笠に夜気がふりつもる
無限に　扉をへだてて
庭の芝生がよみがえる

夏の門

誰もいない夏の門があり
無花果の葉たちが高く　低く
やがて散る性によって組立てられている
それは人が植えたものか
わざと繁るにまかせていたのか
頭をのけぞらせて　その下を通るのか
誰が、大地をやって来て
舞台のその脇を飾るのは
闇の夜にあせする榊のみき
無量の壁を埋めつくすのはにしきづた
いずれの葉たちも蒸れさざめきあい
迷信の跫音がきこえてくる　ふと

橋の上

まれに人が
退屈な星の姿をして橋の弧のうえにいる
夕陽をあびた胸には　嘘もなく真実もなく
ただ　かた方の頬に対岸など写し
かた方の頬に靄をたなびかせて
まれに人が
比喩を見うしなった顔をもてあましている

晩秋

声　この魂の陰影　その距離を
人は眉間にしっかり貼りつけていた
傾いた陽差のなかの畑の
せっせと黍の秋をいたずらする鴉が
音もなく翔びたち　石ころが残り
犬の足裏のたこを鳴らす固い土
土に含まれた死　死をめぐる実感は
あらゆる落葉に託されて
だが　人は唇にあつまる祈りの数々を
パイプの穴から吸いだしていた
きまって　この魂のいつぷくから流れ
渦まきながら薄れる　生命の幻

夜の陸橋

夜の陸橋の下を轟音がゆさぶっていた
そう　人の肉体の疲れを通過して
火花を散らしながらゆくのは列車
そう　瞬間のはやさで魂をうばい
いま奔りさったのはうつつの時刻
だが蒼い踏切にゆっくり入ってくるのは
メタファーの電気機関車だ

貯木場にて

疵つき積みあげられた広場から
ラワン材が曳きだされてくる
人はその時　己に遠く己に近い
ひとつの声をきかねばならぬ
命をなくしたものの饐えた臭いしか
もはや漂わさないあの木口に
永久の年輪のゆくえを問わねばならぬ

砂利採取船

船は砂利のなかにもぐって汲みあげる
無から一粒づつの石ころを
大気の下にみずからを
はるかに鉄橋をかすませて
船は一条の煙をまっすぐ吹きあげる
歴史の重みに沈みながら
山々の灰いろを従えて

街

にびいろの橋を渡る　と再び街
いたる処でつむじ風が　瞬間に生れ消える
いちょう　すずかけ　いとやなぎ

梢の上空をながれる飛行船はときいろ
横腹にひかる文字のふしぎな無言

人は人で　髪の乱れに手をそえて
吹きだまりのように囁きあう可笑しみ
雑踏はここから始まる　車は決まった方向に
疾走し　人は勝手に群れ歩く
訳もなく当てもなく往きつく歩行者天国

みんな裸足で車道を斜めによぎる
次から次から　わざとゆっくりと　これは
あたらしい習慣か　めずらしい皮肉
とあるビルディングの角を曲る
そこは突然に影絵の裏側　複製の街並み

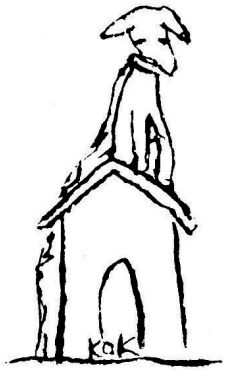
誘おうというのか
昼　わたしの神経は騒音のなかで眠る

朝　わたしの扉をいそぎ足で入る人よ
その影よりもたくさんの人々が
夜　顔をなくした姿勢で出てゆく
わたしはきまって引留めようとして
その都度　何かを失っている

かって　愛おしんでくれた人たちが
今はわたしを懼れる
どこかで配管がほころびる
モネやセザンヌが甍に立てかけられて
人は黙って顎をなでるしかあるまい
片手にぶらさげてきた記憶の紙袋を
その辺に捨てようかと　簡単に考える
運河の擁壁がなぜか見えがくれして
人が埋めのこした排水管が　今も
怪しい洞を街の空気に向けている

ビル

夜　わたしの内部を夜警が歩きまわる
わたしは醒めているのに眠りへと
どこかで階段が音もなく磨耗する
そのすべてを知っていて
空の高みにわたしは静止している。



Gone are the Day

山根三枝子

私は夢をもって漫画家としてのスタートを切ることが出来たように思います」と。

このような経験は大低の人には一度や二度はあるのではないだろうか。朝子は最高学年つまり三年生の秋を思い出す折にはシェクスピア作の史劇「ジュリアス・シーザー」を合わせて思い出すのである。何故ならばその芝居の中でシーザーの口から出た一言が彼女に大きく響き、心の空白部分に解答を与えてくれたからだ。

小学生時代にシェクスピアの作品、例えば「ヴェニスの商人」とか「ハムレット」や「リヤ王」など童話として分かり易く書かれたものを朝子はよく読み親しんだ。そして、喜んだり悲しんだりワクワクしたり気を揉んだりしたあげく何んとうまく出来たお話なんだろうと大いに感動したものであった。しかしいずれにしても原作を読んだわけではなく詩で出来ている劇であることも知らなかった。

よく「私の人生に於ける転機となった一言」とか「……の一冊」とか言って自分の人生にとって影響の大きかった一言又は書物などについて人が語ったり書いたりしているのを見聞きする。最近もサトウサンペイ氏がTVを通してこんな風に語っていた。

「サラリーマン生活をこのまゝ続けようか、そうすれば一応は安定した生活をおくることは出来る。それとも思い切って漫画家になろうか。どちらをとるべきかと迷っていた時がありました。そんな時にたまたまチャップリンの「ライム・ライト」を見ました。自殺しようとした女性を救い彼女が死にたいと言うのを諫めてチャップリンが扮する男は言います。『若し愛と夢と希望とsome money（いくらかでもお金）があれば生きていけるんだよ』と。その時僕はそうかmuch moneyではなくてもsome moneyがあれば生きていけるんだなという思いがひらめきました。この言葉に勇気づけられて

やがて女学校も卒業して専門学校に進みやっと原作にとりくむチャンスが与えられた。あの学生時代に若し試験がなければあれ程丁寧に読みはしなかったであろう。又丁寧に読んだのでなければ見過ごしてしまった言葉であったかも知れないし切れ味のよい頭脳であったら一字一句をあんなにゆっくり学びはしなかったであろう。他の学課の準備もあったことだし毎晩少しづつ一週間位かけてやっと復習出来たようであった。教室での授業は重点主義で大へんスピーディーであったので復習には時間を要したわけであった。

このプレイの一幕あたりつまりはじめの部分には人間の懐く（このプレイの中ではシーザーの暗殺という出来事に係わるのだが）不安とか大きな恐れを、現実に起こるさまざまな現象つまり前兆とか夢見とか迷信とかを用いながら表現しようとしている個所がある。

こゝで一寸話がそれるようであるが実はこれから話さねば朝子にとっての「一言」の説明も充分にはならないであろう。

彼女が死というものを初めて意識し恐怖心をもつようになったのは小学校の四年生位の時であったようだ。何がきっかけであるかと言うとそれは或日のこと小学校の男生徒が市営プールで水泳中に心臓麻痺で死亡したことであった。水泳が大好きでいつもプールで楽しく泳ぎまわり心臓が破裂する位、長い間呼吸をしないで潜航して泳いでいたりした者にとってはそのショックは大きかった。自分の学校のプールでの出来事でなかったことがせめてものことであったのだが。

自分も何時かはあんな風に突然死んでしまうんじゃあないかと大変こわくなった。それだのにその大きな心配ごとを口にすることはしなかった。うまく表現することが出来なかったのかも知れない。或いは口に出すのも忌わしかったかも知れない。その思いを誰にも理解して貰えないと思いつめてもいたようだ。それは漠然としたものだがだんだん大きな悩みとなって心の底の部分を占領し心を暗くしていくものであった。その為小学校の卒業記念写真に級友達と並んで写っている彼女の表情は暗い。

女学校に入学してからは、そういった恐れはだんだんと忘れかけてきた。友人達の中には朝子のことをお茶目さんと呼んだり中には不良少女とかげ口をきく人もいる位陽気に自分のしたいようにふるまって一見何んの屈託もない幸せな少女に見えていた。自分が死にしかと結び付けられているという悩みからは一応逃がれたようであった。しかし完全にそれを放逐してしまったわけではなかった。今度は徐々にではあったが自分ではなく両親が死にはしないかと気にするようになってきていた。恐らく自分をこんなに保護してくれているものがいなくなったら自分の今の生活は消え失せてしまうだろうと考えて心配になったりしていた。

やがて青春の時代を迎え結婚ということもそんなにかけ離れた所にある問題ではないと思えるようになって来た時、今度は自分の夫となるべき者の死を考えるようになった。未だ結婚もしていないというのに……。そして子供を抱えて早ばやと未亡人になったらどうしようかと心配するようになった。そうなることには一種の運命的な定めとも言える要素があるのではないかと思ったりして暇な時などには雑誌に書かれた手相なども真面目に見たりした。又人相などについても見聞きしたり考えたりしたこともあった位だ。

寮で友人達とお喋りする時など愛とか結婚とか人生、又友情とか生とか死という問題についても色々話合ったりしたこともあった。しかしそれ等は経験の浅い者達、又勉強だけに追われていて現実を知らない者達の空理空論のたわいないものでしかなかった。

愛とは何んだろう。愛と自分の生活というものはどう結びついていくのだろうか、いや愛と結婚生活というものはどう係わっていかねばならぬのか、真実の愛とは何んだろう、夢やあこがれと現実の世界は如何に調和させていくべきなのであろうか

そういった諸もろのとりとめない想いや疑問で混沌とした状態の中に在った時に一人の青年が現われ彼は朝子との結婚を望んだ。既に三年以上も知り合っている間柄だし朝子の両親も彼との交際のことは知っていた。彼は一見何んの欠点もないように見え何かにつけ朝子に親切にしてくれていた。しかし朝子は彼と結婚しようという積極的な気持にはなれなかった。それは何かを恐れていたからだ。つまり不思議なことなのだが又理由は分からないのであったがその青年が死という運命にとりつかれている人間のように思えてならなかったからであった。丁度小学生時代に自分が死にそうだと思えて仕方なかったように。説明しようにも謂れのないものであり漠然とした不安感からであったようだ。そしてそれは簡単に拭い去ることの出来るものではなく結婚を考える時は何時もそういった不安感に襲われて結婚を肯定的に考えることが出来なかった。それだのに誘われるまゝによく新宿で待ち合わせては映画とお食事を共にしたりしていた。台北という遠い（飛行便はなかった時代なので）故郷を共にする二人はそういう風にして慰めを得ていたようでもあった。

楽しいことの多い学生生活の中で、一見幸せといえる生活の中でその反対のことが在るんだということを恐れる気持が朝子を悩ますのであった。どんな幸せも何時なんどき訪れるかも知れない死の危険、死によってすべては失われてしまうという危険に晒されていない人はいない。

結婚を考えて交際している青年。そしてその彼に死を結びつけて悩んでいる朝子。彼の死を予感していた朝子。

彼にどんな返事を与えたらよいのだろうか。こんなに恐ろしい予感がするのに肯定の返事をしてよいのだろうか彼とのこの交際は続けるべきではないのではなかろうか。

そういった思いは丁度「ジュリアス・シーザー」の初めの部分、つまり一幕二場あたりでかもし出されている不安感、恐怖感に通じるものがあった。

人智では森羅万象を理解することは出来ない。だから人間は何か悪い前兆とも思えるものが現われたりすると不安を懐いたり夢見の良し悪しを一寸ばかり気にしたり又占いを信じたりする。信じないとしても少しは気にする。そして出来ることなら悪いことを避けたく思う弱みというものを持っている。

シェイクスピアの時代の人も又それから数百年を経過した東洋の現在に生きる人間もそういった点で似通ったところがある。更にシェクスピアのこの史劇はギリシャの「プルターク英雄伝」や「ローマ内乱史」を種本にしたことは間違いないことだと学者達の意見は一致しているそうだ。勿論劇作の天才ともいわれるシェクスピアがそれを芝居にしたことは大いに認めるべき点ではあるけれども事件、捜話という素材を其等からとっているということは明らかだということだ。暗殺というハプニングの前に起こる様ざまな凶兆、アーテミドーラスの予言、キャルパーニャ（シーザーの妻）の恐ろしい夢見等々。二千数百年前のギリシャ人の持った人間の弱みも現在の人間の弱みに似通ったものがあるということは朝子を興味深くした。芝居の中では先ずはじめの部分に占者の呼び声がある。

「三月十五日に御用心あれ」

暗殺の行われることやその日を観聴衆に印象づけている。

キャルパーニャは自分の非常に悪い夢からの不安と予感で、夫、シーザーがその日の朝元老院に出かけて行くのを必死で止めようとして言う。

「あなた、私、いまゝで前兆など気にしたことはございません。でも今日は外にお出かけになってはいけません。これはたゞごとではございません」

と外出を止めようとする。そして更に夜回わりの見聞きした恐ろしい現象、つまり前兆ととれるもののことを告げる。それは

雲上での焔の戦士の戦い、馬のいななき、手負いのうめき、キャピトルに降る血の雨、町まちには亡霊の泣きわめく声、墓場が口を開けて死人を吐き出す等々。

更にキャルパーニャは続ける。

「あなたは自信のあまり、智恵を失くしてしまわれました。

どうぞ、今日はお出かけにならないで。

お引留めしますのは、あなたの恐怖心ではなくてわたしの恐怖からだとアントニオに伝言させまし

よう」

シーザーが暗殺されることを予め知って読んでいる朝子は

「シーザーよ、外出するんぢゃあない。キャルパーニャの言うことは本当なのよ。どうか外出しないで」と心のうちで必死に思いながら読み進んでいくのであった。

一体このような不吉な感じに見舞われた時、いやこれ程大きな心配ごとでないとしても不吉な予感に襲われて心配することは誰でも経験のあることだと思う。とぎすました心、もしくは本能的と言ってよいような心のうちに浮かぶ予感に真実性があるなら、悪い運命に対し身をかわすことも出来るのではないだろうか。

生と死の岐路にたつこの芝居のこの場面でシーザーは如何に分別しどんな態度をとるのだろうか。朝子自身も人生の岐路に立っているような思いがあったのでシーザーは何んと言うのだろうかと全神経は次に出てくる彼の言葉に集中した。

美しくて静かで夜には真暗となるあの昔の武蔵野のだゝ中の寮の雰囲気の中には朝子の純粋な思いをさまたげるものは何もなかった。どの部屋の人も皆、静まり返って勉強していた。

大シーザーは答えて言う。

「全能の神々の計画し給うことを
われわれはどうして避けられようか
やっぱり
シーザーは出かける。この前兆は
シーザー一人のためではない
世界全体に対するものだ」

という解釈をする。そして更に

「死、これぱかりは免れ難い終末で
来る時には必ず　来るのだからな
(…… death a necessary end
will come when it will come.)

朝子はシーザーのこのスカッとした勇敢で壮大な言葉にすっかり感動してしまった。そうだ、正にその通りだ、と。シーザーはこの言葉を発したのちも一度外出をためらうのであるが誘いの者の甘言につられ、又その日に彼を王位に就けることを元老院が決議しているのでと知らされてキャピトルに出かけて行く。そして暗殺されてしまうのだ。

朝子は death を the time にして広く何か困ったこと、嫌なことの時として〝The time will come when it will come〟ということにした。つまりくよくよしたって仕様がないシーザーのように強くなりたいと思った。前兆と思われるものを恐れたり迷信にまどわされそうになった時など勇敢に積極的に自分の信じる方向に進む勇気と姿勢をこの言葉は朝子に与えてくれたようであった。

あの時から長いながい人生の月日が流れて行った。戦争という大きな試練の火の中も三人の幼児をひきつれて通り抜け、困ったり心配したりという場面は多々あったが朝子は強く生きていくことをあのシーザーの言葉から与えられていた。しかし今、朝子はあの時の感動を忘れかけて来てもいる。別のそしてもっと真実な言葉も与えられていることを思うのである。

猶こゝで一寸ばかり付け加えておきたいことなのだがシェクスピアの芝居は見る芝居ではなくて当時は聞く芝居として作られているとも言われている。例えば「ハムレット」の中の劇中劇で〝Let's hear the play〟(さあ、芝居を聞こうぢゃあないか)という言葉があるように。この「シーザー」の芝居は特にそうではないかと思う。だからいつかTVで放映されていたものにはマイナス要素が多すぎて大きな幻滅感があった。それは沢山ある惨劇の場面がカラーであるためにリアルに出すぎていて肝じんなそして耳を傾けて味わうべき言葉を視聴者がキャッチしにくくしていることが原因であったようだ。例えば読んでいる時であれば Brutus stab Caesar の三つの短語で、あ、やられたんだなと分かるのだがTVの画面では見るも無惨な殺人現場となってしつこく表現されていた。猶この場面の〝Et tu Brute!〟(ブルータスお前もか!)と言う言葉は有名で以後色々な人間により時折フトした場合に使われて来た。

暗殺後、対立していたアントニオとブルータスは民衆の前で追悼と暗殺の理由を説明する演説をするのだが心憎いばかりに立派な演説でそのたくみさに感心させられたものであった。理想主義者のブルータスは現実派のアントニオに敗れるが終りの辺りでシーザーの亡霊と覚しき幽れいが現れてブルータスに「明日フィリパイで会おう」と言ってブルータスの死を暗示すると共に仇討を成しとげるとも考えられる。この作品を支配している一つの支配的な力、古典ギリシャ悲劇に見られるような運命的な力がこの芝居の中に揺曳しているように思われるのである。

(未完)

逆立ち

柴田富佐子

三十分ほど遅れてクラス会の会場に着いた時、座敷の正面に坐っている八木沢が右手を挙げて茜を招いた。外のだれかれに目顔で挨拶しながら、茜は空いている八木沢の左隣りに坐った。

「遅かったね」

声をひそめて八木沢が言った。

「出がけに人が来て」

円卓を囲んだ会場では、井原の話が続いていた。

「何の話」

小声で聞いた。

「松丸君に会ったんだってさ」

左隣りの石田が茜のコップへビールを注ぎ足してくれた。

「あら、有難う」

「相変らずきれいだね」

「意地悪」

茜は石田を小突いた。

「何しろ卒業以来だろう。髪なんか俺よりずっと薄いし、顔も体も太っちゃって、似てるけど違うかな、でもよく似てるな、って思いながらチラチラ見てたんだよ。向うも俺の事が気になるらしくチラチラ見てるんだ。その中、横浜を過ぎた頃に、二人の視線がぱったり合ってさ、二人同時に、ああ、って言っちゃって、それから席を移してずっと大阪までしゃべり通しだった。あいつ、今福岡に住んでるんだって、本社が福岡の会社だから、ずっと九州をあっちこっち廻されていたらしい」

井原が出張で乗った新幹線に、偶然松丸君が乗って来た。空席を探しながら歩いて来る男を、井原は松丸君に似てると思った。執拗く注がれる視線に気が付いて、松丸君も井原を見た。一瞬松丸君の顔に、驚きの表情が走るのを見た。が、井原が似てるけど、違うかもしれないとたじろいだように、松丸君にも迷いがあった。卒業以来二十年余りの歳月は、二人の印象を変えたのだろう。しかし無視出来ない迷いは残って、松丸君は井原と同じ並びの通路を挟んで反対側の席を選んだ。

「そうと判ってしまえば、もう二十三年なんて歳月はふっとんじゃって、あの教室でワアワアやってた頃と同じ気持ちだよ。缶ビール飲みながら大阪までずっと話し通しだった」

「ベターハーフは元気なのかなあ」

一同の関心はそこにあった。

「それがね、何と驚くじゃないか」

「え、死んじゃったの」

だれかが素頓狂な声を出した。

「まさか」

別のだれかが否定した。

「卒業した年に別れたんだってさ」

「えー」という驚きがみなの口からあがった。

松丸君というのは、一人の名前ではない。

松宮という男子学生と、丸山という女子学生の名前を併せた通称で、こと程左様に二人は一心同体の間柄であった。

いつ頃からかは、はっきりしないが、気がついた時には、クラスの中でその二人は学校にいる間中、常に並んで行動していた。別々の行動は、それこそトイレに行く時だけだったろう。初めの中は、いつも肩をくっつけ合って坐っている二人の存在が気になって仕方がなかったが、誰れ言うとなく松丸君という通称が通用する頃には、二人で一人と見なす習慣がクラス全員についていた。

或る試験の時に、

「君達ね、いつも一緒にいるのは構わないが、頼むから試験の時だけは少し離れてくれないか」

と教授に言われたとか、二人の存在は教授連の間でも話題になっていたのだろう。

二人だけの殻に籠って、他の学生との交流は努めて避けるようにしていたので、二人の事情を詳しく知る者もなく、卒業後は互いに就職し、当然結婚して以前にも増して仲良く暮しているものとばかり思っていた。

「どうしてクラス会に出て来ないんだって聞いたらね、恥しくってみなに会わす顔がないって言うんだ。学生時代の自分の行動を想い出すと、恥しくて恥しくて、冷や汗が出るそうだよ。どうしてあんな風に、たった一人の相手しか見えなかったのか、いや、見ようともしなかったのか、今考えると、何か催眠術にかけられていたような気がするって。クラスのみんなには随分迷惑をかけたろう、不愉快な想いをさせたろう、もっと自由な学生生活を送ればよかった、って後悔しない日はなかったそうだ」

「そうかな、俺なんか一緒にいたくてもいる相手もいなくてさ、羨しくって仕様がなかったけど」

隣りの八木沢が言った。
「いいじゃないか、今隣りにいるんだから、ねえ」
石田に同意を求められて、茜は戸惑った。
「え、何の事」
「あれ、茜さん、知らないの」
「こいつ、酒癖が悪いんだから、止せよ」
八木沢の手が伸びて石田の肩を摑んだ。
「判った、判った、言わないよ」
自分に集中した一座の視線を振り払うように八木沢が言った。
「卒業してすぐ別れたって、どういう事なんだろう」
「四年間も、ああぴったり一日中くっついていたら、たいがい飽きちゃうよな」
向いの席の中藤が答えた。
「卒業して就職したら、別の世界が見えたって事だろう」
井原が締め括るように言うと、みな納得した顔で頷いた。
新しく運ばれて来た料理を取り分けて八木沢の前へ置きながら茜は、
「お互いに、何もなくてよかったわね」
と八木沢に笑いかけた。
八木沢は手にしていたコップを置いた。
「それどういう意味」
茜には八木沢の視線が、妙にからみつく様に思えた。
「どういう意味って、だって、学生時代に誰れかと何かあったら、今こうやって懐しがってみんなと会えないじゃない」
「みんなとなんか会えなくたって、何かあった方がいい。俺の四年間は、本当に何もなかったもんな」
目の前のコップに紹興酒をビシャビシャと注ぎ込み、八木沢は一気に飲み干した。
「いやだ、そんなに飲んで」
波打ち始めた八木沢の感情が茜を不安にした。隣りの石田は、敏感にそれを感じとり、席を立って八木沢の肩を後から抱えこんだ。
「ほら、茜さんがびっくりしてるぞ。もっとゆっくり飲まなきゃ駄目じゃないか」
右手に握ったままの八木沢のコップに、石田はビールを注いだ。
「悪いけど、茜さん、席を替ってよ」
石田は八木沢の隣りに体を滑り込ませた。
「どうしちゃったの、八木沢さん」
八木沢の顔を覗き込もうとした茜の耳に口を近付けて石田が囁いた。
「八木沢はね、学生の頃からずっとずっと、茜さんが好きだったんだよ」
八木沢は目立たない学生だった。さして勉強が好きで

もなく、単位を落さない程度に出席し勉強し、卒業すると中堅どころの商社に就職した。東南アジアや南米へ何度か転勤しクラス会に顔を出さない時期が長かった。茜も卒業後は出版社に就職し、結婚し、育児にかまけて出席出来ない何年かがあった。ようやく子供が高校生と中学生になった頃に、夫が癌で世を去った。夫の看病、それに続く舅の看病で又クラス会欠席の何年かがあった。
夫の死後は、それまで内職程度に続けていた翻訳の仕事を本業として働き、舅の残してくれた不動産の収入と併せて、姑と子供二人の生活を支えて来た。
クラス会に八木沢がいる時は、気がつくと茜は八木沢の隣りの席にいた。そこしか空いてない事が多かったし、他にも空席がある時は、八木沢の誘導で隣りに坐る様になっていた。クラスの何人かは、石田のように八木沢の茜に対する気持ちを知っていて、それとなく協力していたのかもしれない。案外、知らなかったのは、茜本人だけだったのではないか。
茜は八木沢を「いい人」とは思っていたが、、好きとか嫌いとかの対象として意識した事はなかった。八木沢も又、はっきりした意志表示をした事はなく、いや、それも茜が気が付かなかっただけの事で、八木沢はそれとない意志表示をしていたのかもしれない。
記憶の中から、八木沢と自分の接点を見つけ出そうと茜は思った。四年間一緒の教室で過したのだから、何も接点がなかったとは思えない。
まだ戦後のフイルムも不足がちな時代であったから、アルバムに残っている写真はいくらもない。背中に「大学」と書いた紙が張られた薄いアルバム一冊に、八木沢と茜の四年間が確かな存在として封じ込められている筈だと思う。
入学式の後、クラス全員が並んで写っている写真、女子学生四人が、大事に包みこまれるように中央にしゃがんでいる。おかっぱ頭、白いブラウスに紺サージのジャンパースカート姿の茜がいる。八木沢は後列の端に学生服姿を見せている。外にはクラス全員でハイキングに行った写真、卒業式後に全員で写した写真、八木沢の顔は、クラス全員の写真の中にしか見出せなかった。
もう一度初めから頁をくくっていて、茜は一階の校舎の窓に、自分も含めて十二、三人の顔が重なっている写真を見つけた。その時、茜の記憶のレンズがピタッと合って、鮮やかに八木沢の姿を浮び上がらせた。
八木沢は逆立ちをしている。
授業が終り、教師が教室から立去ると同時に、八木沢は窓から庭に飛び下りた。八木沢の身のこなしは軽かった。短い草の生えている庭に両手をつくと、白い運動靴の両足がすっと舞上って一直線になった。それから八木沢はゆっくりゆっくり手を運んで庭を歩き出した。天を向いたつま先はゆるぎもせず、体は一本の棒のように安

定していた。窓にはクラス全員が集っていた。一人二人と続いて飛び出す者もいたが、じきに体がぐらぐらと揺れて倒れこんでしまう。八木沢は庭を一巡して、最後に揃えた両足に弾みをつけ、きれいな孤を描いてすっと立った。期せずして拍手が起きた。上気した顔を窓に向けて、八木沢は一礼した。それから暫くクラスでは逆立ちが流行した。だが高校時代に体操をやっていたという八木沢に敵う者はいなかった。逆立ちしたまま片手を横に伸したり、とんぼを切ってみせたりしている時の八木沢は、教室では見せた事のない自信と得意に満ちた、活々したいい顔をしていた。

「お前進む道を間違えたんじゃないのか」

とからかう者がいた。

窓に並んだ顔の中に、八木沢の顔はない。多分庭で逆立ちをしていたのだろう。

三年程前、区の広報紙に癌検診のお知らせが載っていた。夫を癌で亡くしてから、癌に対する恐れは常に消えなかったから、目にとめたのを倖いに茜は指定された癌検診センターへ足を運んだ。その時、子宮筋腫を指摘され、専門医に相談するように言われた。

婦人科を訪れると、

「かなり大きくなっています。これ以上大きくなると、種々の障害が出て来ますから、手術して摘出した方がいいのですが、もう少し様子を見ましょう」

という事で、半年に一度の割で検診に通っていた。

今年になって、生理時の出血が次第に増え、そのため生理後の疲労が激しくて床についていなければならない日もあった。

いよいよ限界に来たな、という予感があった。果して六月の検診で、

「そろそろ取った方がいいようですね」

と宣告され、入院は夏休み中の八月と決めた。

「入院心得をお話ししますから、どうぞ」

と婦長らしい帽子に黒い線が三本入った看護婦に別室へ案内された。持物・費用・面会時間などの規則を書いたパンフレットを示した後で

「子宮は全摘しますが、卵巣はホルモンの関係で片方残します。子宮はなくなっても、あちらの方は何ら支障はありませんから、心配なさる事はありません」

婦長は言い慣れた言葉を事務的に言っているにすぎないのだろうが、茜は顔を上げられずにいた。茜に返す積りで婦長は保険証を取上げ確認していたが、

「あら」と大きな声を出した。

「御主人いらっしゃらないのね」

「はい、亡くなりました」

「まあ、そう。じゃ、もう必要のないものだから、早く手術してさっぱりした方がいいわね」

入院は八月一日、二週間入院して十五日頃に退院すれば、学校が始まるまでに半月はあるから、体は十分回復するだろう。

入院までの一か月の間に、茜は仕事に一応のけりをつけておかねばならなかった。今やりかけの仕事は、専門用語の多い技術書の翻訳で、日本語の専門書を参照しなければならないので、なかなか渉らなかった。

最後となる生理の時が来た。

子を産み了え、又夫を失った今は、婦長が言うようにその存在意義は消滅したかもしれない。取去っても、その後に幼児の拳大（こぶし）ほどの空間が残るだけで、体には何の障害も残らないかもしれない。しかし、子宮は女の同義語、例え外から見えないものであっても、体の内部から女を支える原泉に違いないと茜は思う。だからこそ、摘出という運命が決った今、茜の子宮はその存在を主張し、声高に助けを求めて叫び始めた。茜にはその叫びが聞える。静まりかえった部屋で一人机に向っていると、ドックンドックンと子宮が収縮し拡張する度に体外に流れ出る赤い涙が、茜の感情を昂らせ思考を止める。

夫との事が、まだ新鮮だった頃の記憶が体に甦り、思わず茜はペンを投げ出し、両手で火照った頬を挟んだ。

もう一度、一度でいい。女を失う前に、鮮かな思い出を残したい。女であった事の思い出を、くっきりと刻みつけて葬ョてやりたい。

その願いは日を追うにつれ切実なものになった。

幾度か夫と体を重ねる夢を見た。夫と思っていた顔が、八木沢のものであったのに気が付いて、茜は慌てた。意識の下で、いつから八木沢を夫の位置に坐らせていたのだろう。

二十年余の間、ずっと自分を愛しいと思い続けてくれた八木沢なら、それも許されていいと思った。八木沢しかいない、と思った。

茜は賭けた。

八月一日までの間に、土曜日はもう一度しかない。その土曜日の夜、八木沢と逢う事が出来たら、現実に八木沢を夫の位置に坐らせよう。そう決めてしまうと、心が落着いた。

例え八木沢と逢ったとしても、たった一度きりの事だ。それ程おろおろする事はない。

茜は受話器を取上げ、名簿を見ながら八木沢の会社へ電話した。

八木沢は席にいた。

「一寸お話ししたい事があるんですけど、明後日の土曜日にお時間いただけませんか」

「茜さんから呼出しがかかるなんて、今日は何ていい日なんだろう」

「何時ならよろしいでしょうか」
「四時頃には出られると思うけど」
「どこでお待ちしましょうか」
「じゃ、判りいいように、ソニービルの前にしよう。五時でいいかな」
「はい。お待ちしています」

薄いピンクの地に白いストライプの入ったシャツブラウスに紺のスカート、アクセサリーはパールで揃えた。なるべく若く学生っぽい服装がしたかった。

いつもは束ねたり編んだりしている長い髪を、後ろに流してパールの髪飾りで止めた。

「帰りに印刷屋へ廻らなければならないので、少し遅くなるかもしれません」

姑に言って家を出た。もう迷いはなかった。

自分を待って頬を上気させ落着かなく人の流れを見ている八木沢の姿だけを思い描いて待合せ場所へ急いだ。

ソニービル前の人混みの中に八木沢の顔を見つけた時、茜は息苦しさに大きく口を開けて息を吸った。

「やあ」

八木沢の差出した手に茜はすがりついた。

「どうしたの。何かあったの」

八木沢はもう片方の手で、茜の手を軽く叩いた。

「今日は飲みましょう」

頭の中で渦巻き始めた色々な思惑を振り払うように、茜は頭を左右に強く振ってから真直ぐ歩き出した。

「知ってる店があるの」

「一軒だけ、知ってるの」

「凄いんだね、銀座なんかでしょっ中飲んでるんだ」

「飲む訳ないでしょう、一家の主婦が。小学校の同級生がやってる店よ」

北さんの店は並木通りに面したビルの地下にある。小学校のクラス会の流れで何度か行った事のあるその店は、十人も並べば一杯になってしまうカウンターがあるだけの細長い店だ。まだ時間が早いせいで、客は一人もいなかった。北さんが一人で仕込みをしていた。

「おや珍らしい、今日はなあに、まさかクラス会じゃないよね」

と言いながら茜の後ろに立っている八木沢を見て、

「いらっしゃい。どうぞ」

右手で奥の席を指差した。

「今日はね、仕事の話。外に知ってるとこないから」

「ずっと仕事続けてるの、偉いね」

「だって、あたし未亡人だもの、働かなきゃ子供を食べさせていけないわ」

「ああ、そうだったね。つまんない事言っちゃった。御免ね」

言葉を交しながらも北さんはコップやつまみの皿を並べ、ビールの栓を抜いた。

「北さん、いつもの二つ作って」

「はい」

北さんはもうバーテンの顔に戻っていた。

何からどう話すか、考えて来た積りだったが、いざとなると茜はどぎまぎして言葉が出なかった。黙ってビールを飲んだ。

「何か話があったんだろう。なにさ」

北さんが作ったカクテルを一口飲んで八木沢は、

「甘いよ、これ」と言った。

「あら、おいしいのよ、これ。わたし大好き」

茜は半分ほどを一気に飲んだ。

「北さん、これじゃ甘すぎるんですって、こちらに辛いの作って」

「水割りでいいですよ」

北さんは笑顔で水割りを持って来た。

「アルコールが入らなきゃ、言えないこと」

茜の顔を覗きこんで八木沢が言った。

「そう、酔わなきゃ言えないの。だから飲むの」

「ますます楽しみだね」

コップに残ったカクテルを茜は一気に飲み干した。

「大丈夫かい茜さん、あんまり強い方じゃないんだろう」

「そう、あたし弱いの、弱いけど大丈夫なの、今日は」

「どうして今日は大丈夫なんだ」

「大事な話をしなきゃならないから」

「だから、何だって言うの」

「まあ、いいから、そうせかさないで」

わざとらしくゆっくりと茜は皿の豆をつまみ、クラッカーを食べた。

「八木沢さん、逆立ちが好きだったわね」

白い運動靴が、きれいな弧を残して空に向った。

「逆立ちばかりしてたじゃない、本当に好きだったのね」

「そんなに好きだった訳じゃないよ」

「どうして、好きだったから、あんなに毎日やっていたんでしょう」

「違うよ。逆立ちすると、茜さんが喜ぶからやっていたんだよ。いつも真先に窓から顔を出して見てくれたじゃないか」

「え、そうだったの。わたしのためだったの」

「そうだよ。気がつかないんだから全く嫌になっちゃう」

「そうなの、わたしのためだったの」

「そうだよ」

「それ程、わたしの事、好きだったの」

「酔ったな、もう」

「大丈夫、石田さんが八木沢さんは学生の頃からずっとずっとわたしの事好きだったんだ、って言ってたけど、本当」

「本当だよ」
「今でも好き」
「好きだよ」
「そう、わかったわ。じゃ、出ましょう」
「何言ってんだよ。話はまだ聞いてないよ」
「いいの、いいの。北さん、後で来るわね。御馳走さま」
後から入って来た客の背をすり抜けて二人は外へ出た。
八木沢の腕に、茜は腕を通した。
「お願いがあるの」
正面を向いたまま茜は言った。八木沢は頷いた。
「一緒にルナホテルへ行って下さい」
「本気にするよ」
「本気です」
「いいんだね」
八木沢は茜の手を握りしめ、強い力で引張って歩き出した。
大きすぎるホテルは眩しすぎて入るのにためらいが出そうだった。と言って、少さすぎるホテルは惨めな気分になりそうだった。
茜が選んだルナホテルは、裏通りに面した地味な造りながら、品のいい行き届いた感じのするホテルであった。たまたまその前を通った事があって、受けた印象がよかった事から思いついて予約をとった。
「ここで待ってて」
自分が行くという八木沢を押し止め、茜はフロントへ行った。フロントで記名する時、茜は夫の名と自分の名を書いた。
キーを受取り、エレベーターで七階に上り、廊下を歩いて七〇八号室に入るまで、二人はぎこちなく沈黙を続けた。口に出す言葉が見つからなかった。北さんの店では、あんなに軽く口をついて出ていた言葉が、喉にへばりついてしまった。
ドアを開けて入ると、右側にバス、トイレ、洗面台の三点セットがあり、左側に衣裳戸棚があった。ツインのベットが二つ、窓際にテーブルと椅子、ドレッサーが並んでいる。
八木沢は椅子に座って煙草を吸い出した。
一本、二本。煙草はすぐ短くなる。短くなった煙草を灰皿になすりつけ、すぐ又新しい一本を取出す。茜は窓に寄って、ガラスに掌を当てた。冷房の利いた部屋のガラスは、快い冷たさを掌に与えた。その掌で、茜は後ろから八木沢の首筋を押えた。
「そんなに煙草ばかり吸ってると、肺癌になっちゃうぞ」
煙草を揉み消してから、八木沢は茜の手を取った。
「冷めたい手をしてるんだね」
「心が暖かいからよ」
八木沢は茜の手の甲に唇を当てた。
女の手が暖かいのはいけません。握った時ぞくっとく

る程冷たいと、いとしさが溢れるように湧いて来るものです——　いつか読んだ或る女形の芸談は、本当だったと、茜は八木沢の力を感じながら思った。このまま一気に突っ走ってもいい。茜は目をつぶった。八木沢の深い息遣いが頬に近付いた。茜の体は女を感じ始めていた。
茜には長く感じられた沈黙の後、八木沢は急に手の力を抜き、鋭い溜息をついた。
「無理だよ茜さん。あんまり急で、気持ちの整理がつかないよ」
茜は首を振った。
「何があったの、言って御覧よ」
八木沢は茜の手を引張ってベットに並んで座らせた。
「学生の時と違って、二十年の間にいろんな物を背負い過ぎた。矢張り何にもしない方がいい。又会える方がいい」
茜の体の中で、膨らみかけていた女が、大きな穴をあけられて急速にしぼんだ。
「何があったのさ」
「ううん、何でもない」
「言って見なよ」
「もういい、もういいの」
八木沢に与えられた衝撃は、茜の子宮に鮮烈な刻印を残した、と思った。これでいい。これでよかったのだと、茜は自分に言いきかせた。
家を出る時から、ずっと張りつめていた気が弛んで、茜は深い疲労感を覚えた。目頭が熱くなったと思うと、熱い涙が溢れ落ちた。
「泣くなよ、茜さん。ね、逆立ちしてやるから」
立上って腕まくりすると、八木沢は靴を脱ぎ床に両手をついて「やっ」と声をかけ、両足を蹴った。黒い足が薄暗い空間にゆるやかな弧を描いて止った。

「まんじ」季刊発行のための内規
作家群同人
～～～

（小説）

近藤富蔵の生涯（十四）

第一章　八丈流人近藤富蔵

三、風浪望郷の歳月

金子正義

（六）

回心後の富蔵は身を切る望郷の念は消え、天保六年長男守一を得てからはもう全く島抜けなどは考えもしなかった。

だが、天保九年五月に七島廻島の羽倉簡堂が八丈視察の一夜、末吉村名主沖山市十郎屋敷の離れに富蔵を呼んで、父重蔵の縁故を以って流人としてでなく旗本三百石の士として存分に懇談したので、心の緩んだ富蔵は里心が呼び戻されて、或いは特別の恩赦があるやも知れずと動揺し、夜の夢にも忘れていた江戸の街や浪速の女が出てくる有様となった。

富蔵はこの煩悩を打ち消そうと我が家の裏山の尾端観音堂に籠って読経などに勤めたが、却って悶々とするばかりであった。

そんな折から、八丈配流で同船の流人・上総木更津村の百姓久兵衛がやって来て濁酒を呑み乍ら半ば冗談のように

「珍しく、ここんところ海が凪いで、俺らにも、こんな魚が釣れるようじゃア、またぞろ島抜けなど、悪けことけんげえるあんべえあるだが、気がつかねえか」

などと何に気なく洩したので、久兵衛が手慰みの丁半仲間や、無宿者の茂八、常太郎、下総香取郡の佐原の喜三郎などの天保七年流罪の博徒達と近頃親しくなっていると聞いたが、同じ上総、下総仲間なので或いは悪巧みに組しているか、と久兵衛が帰ってから気になり出した。

密かに陰謀がすすめられているとしても、武士として同じ流人としても確証の無い裡に陣屋に知らせる訳にもゆくまい、とこれも憂悶の種となって夜の悪夢に悩まされていた。

富蔵はそうした情念を吹っ消そうと、七月に入ると三世の罪障消滅を祈願すると逸に伝え、観音堂に参籠して光明真言十万返の誦経に明け暮れていた。

普通、流人の身を以って観音堂に籠るなど許されることでなく、流人は特別に身に業や技術を持つ者は別として、三根村預かりの流人の多くは船人夫として働いていた。船の出入の無い時にも夏は道路造り、冬は山仕事や農家の手助に忙しく、冬の北風も弱まり、春から夏になって子丑寅（北北東）の風が吹くと官船が入り、商い船も来て陸揚げ仕事が忙しくなり、真夏の強い巽（南東）風も弱まって、午巳の風（南風）が程よく吹くと、国地に帰る便船、商船の出港の船積に流人総出となって忙しく働くのが常であった。

富蔵も始めの年には小屋がけ流人としてそうした労務に服したが、逸を娶り宇喜多一門に連がる沖山の親類となったので労役は軽減され、地役人組頭の推薦もあって陣屋の書記扱いとなり、夜は村の子供に読み書きを教え、旧家の子息に漢籍素読などを指導し、陣屋の書記の他にも寺社の仏具、神具の修理や旧家の古文書の判読や整理を依頼され、次第に父祖伝来の考証記述の探求心が高まって、鳴山の家に居ても古文書を調べたり筆を執ることが多く、狭い家では文かく机の置き場も無いので、富蔵が度々参籠する観音寺の救世堂を書院のようにしていた。

富蔵が迷いや苦しみが出ると観音堂に籠り、観音菩薩に死者の冥福と己れの罪障消滅を祈願したり、仏道修業の為に参籠坐禅するのを、村人は女人の忌日の山籠りと同じように異とせず、寧ろ富蔵の堂籠りを畏敬の念で見守っていた。

八丈では昔から女の天癸（ジキ）の節（タビ）や出産（コウメ）の節（タビ）には村を離れた片里で、山中に小屋をつくり家人と別居した、本土でも月の穢れは忌まれ家人と同火を使うことを嫌う習俗があったが、八丈では年貢の織物を穢してはならぬと、特に汚血を忌み生み月の妊婦は、産舎屋（コウメヤカタ）へ、月の汚れには月経舎屋に篭るように村ごとに小屋を造って、次々とそうした女達が来て寝起きしていた。

それはまた、日頃男以上に働き続ける女達の休養所でもあり、社交や情報交換の場でもあった。年を経た女などは飛魚の塩辛や蕃椒などを肴に酒を呑み乍ら、年頃の娘に堕胎や間引の手だて迄口述していた。

富蔵の頃は穢れ血の女が家人と同じ竈の火を使うことを嫌う程度であったので家構えの主屋の横や裏手に別棟の産小屋月経小屋を建てて煮焚を別にする程度になっていた。

だが、富蔵とて数日の参籠に只管打坐、心身脱落の心境になっている訳ではなく、心身清浄の澄んだ気力となると、長楽寺や宗福寺から借りた古文書や、文献を読む読書三昧の数刻を過すが、疲れてうとうとと睡ると忽ち夢の世界に遊離して京や浪速の女が幻の如くに浮かび、

り、小屋持ちを許されると、花鳥は水汲女宜しく夫婦気取りとなって入り、いつしか喜三郎の小屋が博徒仲間の遊び場になっていたのだ。

喜三郎は佐原村の百姓の身であるが、家は代々土地柄の水運交易によって富み栄え、香取郡切っての裕福な家柄であった。父武右衛門は村役を勤めたこともあり、近郷十数村で人望があった。喜三郎は幼児より利発で何事も器用に熟し、読み書き手習い塾は勿論書道、珠算塾などで直ぐ同年輩の頭となった。

好奇心旺盛で知識欲も各方面に広かったが、淡白で何事も深のりせず。同じ佐原の醸造業出身の伊能忠敬が、幼少の頃よりの学問好きを貫き通して地理天文測量に抜んじて、日本全国地図を完成したのとは違って、喜三郎は多才有能の天分を遊芸、放蕩の方面に向け、佐原新町に伊呂波屋なる料亭を経んだり、浅草茅町の普化宗寺に身を寄せて朝日象現などと称したが、いつしか博徒の胴元として博奕の罪に問われ捕えられるに至ったのである。

喜三郎は天成の頭脳の良さと遊蕩無懶の中で鍛えた洞察力、直観力によって僅か一年程の流人生活で、八丈の地理、海流、漁村船管理や、村役人の動き等を知り抜いて、島抜けは島人の怖れる黒瀬の流の弱まる秋口、台風の季節の前を脱島の好機と判断した。

亦、佐原在住の頃より上総下総の浜の漁師から、琉球島の方向より北の蝦夷千島の辺まで流れ行く黒潮の大海流のあることを聞いていた。秋口乞吹く坤の風に房総の浜には吹き流される多くの漂流船のあることも知っていた。

喜三郎はこの坤風に乗って島抜けを考え、八丈の浜に陸干しされている漁船を盗み船出する仲間五、六人を密かに選んで、干飯、鰹節、火縄、真水を入れる竹筒、予備の帆柱、舵櫂までも集め、小屋の床、天井、壁囲の中に匿して機会を待っての決行であった。

先頃巡察の羽倉簡堂が、島役人一同に、北方及び東海にも異国船の渡航頻りにつき、異国船漂着の扱いや異国人押渡りたる時の心得を申し伝え、海防の石積（砲台）銃炮などを厳しく点検していったので、海防担当の山下平治平は、流人共の島抜けの時こそ銃炮を実際に使う良き訓練となると、組頭政五郎に命じて各村に組織してある非常防禦鉄炮隊の召集出動を命じた。

一方山下儀十郎は非常防禦五十人組の若者や、船出入村割人夫などを集めて追捕探索隊を編成し、十数艘に分乗させ、平鎗、鉄炮などを持って馳せ参じた鉄炮隊の若者を各船に二名ずつ乗り込ませて探索に押し出した。

漁船や、島抜け船が沖に出て黒瀬の急潮に押し返されて漂流して来るのは底土の湾より神湊、垂戸の辺りであるので、探索船は先ず、底土の湾より太平潟、神湊、垂

胸を熱くして目覚めては暁の薄明りの中で紙筆硯を手繰り寄せて、

君思ふ枕の下のなみだ川　渡りかねたる夢の浮はし

春の夜のさめぬふりの夢路にも見はてぬ末は有明の月

などと書きとどめては思い入るのであった。

そうした七月四日朝、慌しく観音堂の扉を叩いて逸が転がり込み、

「旦那サマ！大変ダ、三根割流人ガ船サ盗ンデ島抜ケダア、マミママミ（早よう）小宮山屋敷へオジャレ！」

と告げた。

富蔵は暁の一刻の夢路の恍惚も忽ち消えて、さてこそ不吉な予感は当ったか、と急いで三根村名主の小宮山屋敷へ駆けつけると、既に三根村割の三十一軒の小屋持流人、二十五軒の家持流人へは五人組が触れ廻ったので、粗方、流人は集っていて村役人沖山金右衛門、組頭元蔵などが、各番五人組ごとに一々首改めをして流人点呼をしていた。

艫て島抜けしたのは上総望陀郡木更津の百姓久兵衛、下野の村上無宿の万吉、下総香取郡佐原村新田の百姓喜三郎、下総の大倉村無宿の茂八、上総の大網村無宿の常太郎、常陸の上吉田村無宿の九兵衛、新吉原の宇兵衛抱遊女の花鳥の七人と判った。

その裡大賀郷の八丈陣屋から島取締役の高橋長左衛門始め、山下平治平、山下儀十郎等の島役人が駆け付けた。

五月十日より六月十日の間八丈を巡察した御代官羽倉外記簡堂様がご廻島の村々でわざわざ流人を集め、喧嘩賭博、島抜け非道あるまじき、と説諭、訓戒されたばかりの島抜けなので島役人一同の憤りは激しかった。

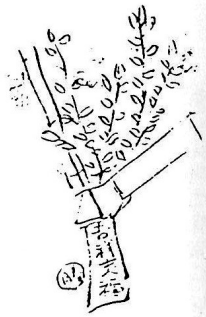
特に慈悲深い三根村名主の小宮山善右衛門は、日頃流人達の身を案じて何にかと面倒を見てやっていたので、島抜け七名が三根村割当ばかりなので怒るよりも甚しく落胆して、流人扱いが甘かったのかと悔いていた。

島抜け流人の中でも木更津の久兵衛は文政十年入島の十一年も経た小屋持流人で村人とも良く馴染んでいたのにどうしたことか、元々木更津在の百姓であったが、上総下総辺の博徒仲間に入っていたので、天保七年入島の喜三郎、茂八、常太郎が、喜三郎を胴元とする、博徒仲間や、天保二年入島の下野の博徒万吉等に引き込まれたのであろう。常陸上吉田村の九兵衛は未だ昨年六月に入島したばかりだったが、国地の博徒仲間ではいっぱしの顔役だったのだ。と推察し迂闊だったと残念がった。

女流人花鳥は文政十一年、遊女を嫌っての火付放火の罪で流されて来たのが僅か十五才なので、同じ放火の罪で文政四年に同じく十五才で流されて来た遊女豊菊の小屋へ預けたのであったが、八年後に流されて来た佐原の喜三郎の男伊達に惹かれ、豊菊と媚を競っていたが、喜三郎の親元より見届物の多い喜三郎が早くも棟割長屋よ

戸の海岸近くを二日間交替で探索し続けた。
別動隊は、神湊を出て海岸沿いに北東に船を進め、八丈最北端の泳ぎ戸の鼻を廻って大越根の鼻辺りを探索した。
今迄にも島抜け流人が底土の湾から船を盗んで島抜けし、夜通し漕ぎ通して夜が明けたら未だ大越根の辺りであった。いくら漕いでも黒瀬の潮流に撥ね返されて行きつ戻りつしている裡に追手の船に捕えられることが度々だった。
だが今度は四日、五日と探索船が巡って待ったが底土が湾より垂戸湾の八丈西岸沖にも大越根にも、島抜けに盗まれた島持船は見えなかった。その裡海は時化模様となって危険なので追捕船は諦めて引き上げて来た。
七月六日夜半より海上は大時化となったので島抜け流人は海の藻屑となったろうと探索は打ち切られた。
鉄炮の稽古になると勇んで出動した政五郎以下の鉄炮隊も空騒ぎとなって、残念げに持ち出した鉄炮、平鎗などを陣屋の銃架台に納めて解散した。

喜三郎等の島抜け流人は、奇蹟的に時速二十粁の黒瀬の急潮を乗り切って三日目には三宅と大島の間まで帆走したが、強風に逢って帆柱は吹き流され、利八、久兵衛常太郎が次々に波に呑まれ、万吉は漂流中疲労し切って船中で死んだ。漂流五日目に船は銚子沖に漂い出て出漁の常陸国鹿嶋郡浦の漁師岩吉に助けられ、夜釣を楽しんでいて時化に流されたと偽って岩吉宅の仮小屋に二日程休養して、常陸上吉田無宿の九兵衛と別れた喜三郎と花鳥は十三日夜佐倉に入った。
土地の徒世仲間の手引で老父武右衛門にも会い、花鳥を親許のいる浜町に送りに江戸に入って逮捕された。
花鳥は江戸引き廻しの上斬首された。二十五才の惨めな短かい生涯であった。
喜三郎は入牢七年天保十五年辰五月九日「江戸十里四方追放」の沙汰で出獄したが、弘化二年六月三日没した四十才であった。
乗り切れる筈の無い八丈黒瀬の急潮を越え本土に漂着したことは僥倖としても、島抜けは死罪であるに拘らず放逐処分で済んだのは、地元佐原を始め近在近郷の地主を含めての連署による釈放嘆願に依るものであったが、処刑の不平等であり、後日此れを知った女流人豊菊や坂本茂三郎等の八丈流人の島抜けを誘発するもととなるのであった。



有院家の人々（四）

第七章　伊香保別邸にて

大和禎人

ロバート・アルウィンは自適を楽しみ、伊香保にしばしば長く滞在した。かれは狩猟をはなはだ好みにしていて、滞在中はよくそのために山野を駆けた。
かれのハンター姿はかなり有名であった。銃はスナイダーの二連発銃でよく手入れの行き届いたものを担い、ズッシリと重い弾丸ベルトをしめ、乗馬ズボンに革脚絆という身装で、また鳥打ち帽のよく似合うダンディ姿で知られた。
二連発銃の選択は一発で獲物を倒し得ぬ場合、二発目では必ず倒すハンターとしての心得でもあったが、かれの慎重な性格を多分に表わしていた。
「またお出かけですか、殺生はいいかげんになさいまし、ベラが悲しみますよ」
イキは二人の間に授かった幼女をダシにして、止めさせようとした。
「セッショウ、それなに、ホワイ」
「いけません、いけません」
イキは鉄砲を構える真似をし、手を振った。
「ホワイ」
「なぜでもいけません、お止めなさい」
イキはもう一度手を振った。（ホワイ）はロバートの日頃の常用語になっていて、しばしば口をつく言葉だった。イキは承知していて自分の意志は手振りで用を足すのであった。多年連れ添いながら奇妙でも、そういう日常だった。
「ズドン、撃つぞ」
かれはこのとき冗談ともつかぬ怒りを示し、銃口をイキに向けた。片言にせよ（撃つ）ぐらいの言葉はかれも解していた。

「撃てるものなら、お撃ちなさい」
イキはキリッと眉をつりあげ、かれを睨んだ。
「オオ、ごめんなさい」
慌てたロバートはそう和みを示し、イキの恐わ持てに辟易したが、狩猟だけは止めなかった。かれは遠く榛名まで足をのばすのがつねであった。ポインターがそのために何匹か飼われており、あるじの供をするのだった。

かれは日本人以上に温泉を愛していたようだ。そのために、この別荘では特別の浴室をしつらえさせている。檜の香の匂いに噎せるほどの和風の湯舟がかれのここでの生活を豊かにし、はじめは鉄分の多いこの地の温泉の泥水に似る濁りが気になったりしたが、慣れるとともにかえって温浴効果もわかり、すこぶる満足したようであった。

ただ、遺憾なことはイキがその入浴をかれと共にしないことであった。

狩猟を決して止めようとしないかれ、そして入浴を共にできない日本婦人イキとの慣習上の距離は、この後何年も保たれ変わらなかった。

当温泉場は海面より高きこと三千尺にして、空気の清きと眺望の良きとは他に比類なし。殊に夏期は清涼にして極暑にても八十二度を超えず。かつて蚊帳を用いざる夏知らずの避暑地なり。温泉の主成分は硫酸曹達、塩化ナトリウムにして、多量の鉄気を含み精気を増すの奇効あり。（中略）

道筋は東京上野より上州前橋まで鉄道の便あり（此の汽車賃八十三銭三時間半を費やす）前橋より渋川まで鉄道馬車あり（此の馬車賃十五銭一時間を費やす）。渋川より伊香保まで二里近く、此の間馬車人力車（此の賃四十銭一時間）自在なれば、僅に一円三十八銭にて東京を発し、半日にして到着をするを得べく、道筋危険の心配なく御婦人方のみにても差支えなし。（後略）

これは明治二十六年七月二十六日の「東京日日新聞」と「都新聞」に伊香保温泉改良取締所なる一種の組合が載せた広告の抜粋である。鉄道の普及と西南戦争後の好況が消費を刺激して西の熱海、箱根など湯治客誘致の広告をポツポツを出しはじめ、十一年には箱根宮の下に外人客専門の富士屋ホテルの開業を見るなどの賑いに呼応して、草津や伊香保もまた負けじと新聞広告を出していたが、この場合の（改良取締所）とあるいささかの異様は同地の木暮武太夫らを中心に結成して、とくに悪徳旅館を一掃しようと粛清を鮮明にするための広告だった。

（温泉宿中往々不正者ありて、休息茶屋、車夫、馬丁等に金銀を与え、来客を誘引する悪幣これ有り、不慣れの来客には迷惑を掛くること少なからず、来浴者は彼らの狡猾手段に欺かれぬ注意ありたし）

と、PR広告としては少しく変わったものになっているところが面白い。客の誘致にやっきのさまが良心的な旅館経営者の間に見受けられるものだ。

（酷暑にても八十二度を超えず）とあるのはもちろん華氏の温度であり、摂氏では二十七度強である。（C＝F－32×5／9）という数式から答えが導かれる。東京日日新聞は今の毎日新聞、都新聞は東京新聞の前身である。有院家が武智イキ名儀で取得し、伊香保に別邸をもうけたのは明治二十四年のことであるから、ほぼこの広告記事に照らすような交通事情を伺える。往復に要した時間、旅費などを参考として知ることができる。

少しくここで余談になるけれども、伊香保にかかわりこの地の自然を愛し親しむことのあった三人の人物について触れないわけにはいかない。

その一人は文人徳富芦花であり、他の一人は画家であり詩人でもあった竹久夢二であり、さらには外国人ベルツである。

徳富芦花が伊香保にはじめて来町したのは明治三十一年五月のことで、千明仁泉亭に長期投宿し「不如帰」の執筆にあたり、十一月から国民新聞に連載をはじめている。多少の前後はあるがロバート・アルウィンが伊香保に別邸をもうけた時期とさほど隔たりがない。

今日、有院家別邸の遺構にほど近く千明旅館があり、坂を下った道路の反対側には芦花記念会館がある。昭和二年九月十八日、六十歳を一期として芦花が終焉を迎えた仁泉亭をそのまま移し、愛用した籐椅子や死床となったベッドまで保存されている。片岡孝夫演ずる「不如帰」の武男など現代の舞台写真など展示される資料のなかに「榛名湖畔にて四天カゴに乗る芦花」という一葉の写真がある。病弱のかれが人々に担がれて遊覧した時のスナップである。カンカン帽子やヘルメット姿の男性たちの一人はかれを手厚く庇護した千明旅館の主人であろうし、パラソルを手に五、六人の婦人もつき従っていて背景に榛名富士の山容が見えるというものだ。

ここで注目すべきは「四天カゴ」である。（乗る人かつぐ人）のたとえがあるように、身分、貧富の差そのまま、駕籠には種類が多いとしても芦花の乗り、かつがれているのはほとんど神輿か川渡しの輦台に似たものである。この写真を見るかぎり芦花はすでに文壇知名の地位を得ていたから歓迎され、厚遇をうけたものと想像される。芦花は病弱だったからこれに乗ったであろうが、ひょっとしたら、貴族趣味を多分にもったわがロバート・アルウィンもこれに乗ったかもしれないと考えると、な

にやらふさわしいことに思われる。千明旅館と有院の宅は指呼の距離にある。芦花が「不如帰」執筆中時には杖をひき散歩することもあったであろう。ロバートのほうは気づかぬこととしても芦花は卑しからぬ外国紳士と出会うことで、その人の身分を千明から聞いたことであろう。

少なくとも「不如帰」を書きつつあった芦花の目にも映じることがあったとして不思議ではない。もちろん実際は互いにそれとない関係であったに相違ないとしても……。

二人は年齢も一つ違い、洋を異に生を享け互いにもっとも人生の壮期にあった。

伊香保と榛名の湖に魂を奪われたもう一人の日本人、竹久夢二が伊香保をはじめて訪れたのは大正八年六月末から七月へかけてであった。その後有島生馬とも携えて訪れることもあって、やがて榛名湖畔に居を定め、湖畔に住むよろこびを友人に伝えたりするのである。

さためなく鳥やゆくらむ
　青のさひしさかきりなければ

その死後、湖畔に石のような歌碑が「夢二会」の有志により建てられた。

かれは「青山河」、「榛名山賦」などの名作を残している。

山は歩いて
来ない。
やがて私は
帰るだろう。
榛名山に寄す
千九百三十二年九月九日
欧州にたつ前夜
坂井詞兄に
謹呈　夢生

坂井米夫氏に贈った枕屏風「青山河」にはこんな言葉書きを残し、また外遊先からの書信には

（早くハルナの山へ帰りたく存じ候、榛名の山も今は初秋の風、梢をならして居るべく……）

と記し、望郷ともいうべき慕情を同氏に寄せている。

かれの外遊は昭和六年、「青山河」は滞米中の翌七年裏書きして贈られたものである。

伊香保をこよなく愛した夢二。画家、挿絵画家、浮世絵師、グラフデザイナー、詩人、童謡・童話作家、人形作家、行くとして可ならざるはない多才、しかもどの分野にも才能を発揮した夢二であったが、そのかれが最後に目指した壮大な夢は「榛名山美術研究所」であった。その資金調達の目的をかねる外遊なのであった。

アメリカ、欧州をめぐり、翌年帰国し体調の悪いまま台湾へ旅行し病状を悪化させ、ほぼ一年後の昭和九年九

月一日、長野県富士見高原療養所で五十一歳を一期として永眠している。榛名湖畔の前記歌碑はその一周忌にあたる翌年命日の建碑である。

かれのためには郷里岡山市の記念美術館の一方に瀟洒な「竹久夢二記念館」が昭和五十六年伊香保に開館されている。そのいわれこそはこの地に深く結ばれるかかわりによるものだ。

夢二が初めて伊香保、榛名を訪れたのは大正八年、かれ三十六才の六月末から七月へかけてである。この頃のロバートはすでに大正五年には台湾製糖相談役を辞任しているから、その晩年にあたっており、伊香保へは繁々出かけているはずである。直接あい見える機会はなくとも。その往時、ともに伊香保に滞在した時期に重なりがあり、その自然を愛し親しむことのあったことからいえば、無関係と言えないものがある。あの狭い石段の町をたがいに行き交い、その風貌姿勢を見交わすことがあったと考えることは許されていいであろう。

もう一人、明治九年から三十八年にわたり長く滞日したドイツ人のベルツ（1844－1913）のことを漏らすわけにはいかない。

かれは東京医学校（東大）に招かれて医学の教鞭をとり、多く日本人医学者を育てるとともに、また研究、診療にあたり、明治開化期を支えたいわゆる「お雇い外国人」の一人であった。ベルツ処方の「ベルツ水」は化粧水で知られ、ドイツ医学をわが国に伝えるかたわら、草津、伊香保などの温泉を調べ、ひろく温泉浴の効果を紹介、普及した人である。草津、伊香保の両温泉地にかれの胸像を見るのはこれを顕彰するためだ。ロバートが伊香保を別荘地として選んだ根拠に間接の影響を考えられるし、ベルツ、ロバートともに国籍こそ違ったが、やはり同世代の人である。深く日本にかかわる外国人であることで貴重をひとしくする。「ベルツの日記」は当時の日本の世相を批判するものとして知られている。

第八章　伊香保のベラさま

ソフィィア・アルベラ・アルウィンの誕生はロバートとイキ夫妻に限りない光りを与えた。長崎時代に初子を喪ってから十二年も子宝を恵まれなかったことが嘘のようであった。二人の婚姻の事実が幾多の困難を経てようやく晴れて認められた、その時を待っていたような出産だったから、いみじきことと言わねばなるまい。

「ベリハピー、ナイス、イキさんありがとうね、ベリハピー、……ベリ、グッド」

ロバートの喜びようはたとえようもないほどで、イキ

もまたかれのさしのべる握手に応じた。産褥の中のかの女の頬に歓喜の涙が一杯こぼれ落ちた。

（こんどこそはしっかり、この子を育てなければならない）

イキ女はそうした決意を漲らせ、夫の手を強く握りかえした。

そして、夫妻はその後も相次いで子女を授かるのである。

アルベラに次いで、
次女　メリー、
長男　ロバート・ジュニア（通称バブ）
三女　メリオン（通称イキ）
次男　リチャード（通称アキラ）
四女　アグネス（通称アイちゃん）

すべて二男四女を数える。子福この上なく、それぞれの愛称もまた微笑しく、和やかで賑やかな一家が想像される。

だが、いまここではソフィア・アルベラについて多く語らねばならない。

長子であるかの女はとりわけ両親の愛を一身にうけ、期待をかけられて育った。ロバートにとって、またイキにとっても、かの女こそは終生変わることなく、いちばん身近かな存在となるのであった。それはかの女だけが生涯独身を通したからである。だが、そのことはいささかも人生上の陰りとなるものではなく、むしろその一生を神に捧げ、崇高な精神に生き、幼児教育の世界に全霊を傾け、悔いることのない敬虔な生涯を貫いているのである。両親への孝養を尽くし得た背景はここにあった。一方に言うならば、ロバート夫妻の深い理解と後援なくしてはやがてかの女が理想をもって創立するに至る保育専門学校の経営は成り立たなかったであろう。

とくにイキ女の場合は九十歳の高齢を保ち、昭和十五年八月十七日に亡くなるのだが、その晩年に至るまでつねにかの女とは生活をともにしており、この母娘の双方はたがいに能う限りの庇護に心を砕いて変わることがなかった。

（伊香保の子どもたちが私の目をひらいてくれました。私は幼稚園の先生になって、子どもと一緒にいたいのです。私は一生懸命に子どものための専門の勉強をして、よい先生に、最良の先生になりたいのです。そして子どもに神様を知らせ、子どもを通してその親御さんたちにも神様の存在を知らせたいのです。）

かの女はこう述懐している。そしてこの思いを母に告げ、二度目のアメリカへの留学を願い、かの女の結婚を強く願っていたイキを嘆かせた。

（なぜ、適当な結婚をして母を安心させておくれでないか、あなたは母を見捨てるのですか）

イキ女は落胆し嘆き悲しんだ。なんとしても、アルベラを翻意させようとこの時ばかりは必死になった。

当時アルウィン家では子どもたちのほとんどがアメリカへ留学中であった。弟のバブもアキラもブリジストン大学へ、次妹のメリオンもボストンの学校に在学していて、長妹のメリーと末妹のアイちゃんだけが残っていたのである。ロバートの経済的負担は大勢子どもたちを留学させることで、莫大なものがあった。

けれども、アルベラの決心は固く、母の哀訴にも、涙にも、またおどしにも心を動かさなかった。

はじめに父のロバートが折れた。母ほどのショックはなかった。かれの姉妹たちが母国では女子教育に携わっているということもあって、

（女性であっても、生涯の仕事をもつことは大変良いことだ、この娘の願いは向上心をもってきわめて貴重なものだ、むしろ褒めて上げるべきだ）

かれはかれ流の男の判断に立ったのだった。

（だが、イキも言うとおり、ほんとうの幸せは結婚でなければならない）

一方ではかれとて思いは変わらぬままの承諾だった。

私はしばらく結婚のことは考えたくありません。（母があまりにも気の毒でしたからこう言ったのでした、いちおうあいまいな形にしておいたのです。長女である私の結婚問題は弟妹たちのためにも先立つ例になるからに違いありませんでした。）悪いことでしたが、私は母に苦しい嘘を言ったのです。

これが偽りない後日の述懐になっている。

「私はママをすてません、この私の命あるかぎり、私は誓ってママをすてたりはいたしません、私は一生ママと一緒にいますよ、いまママにこんなお願いをするのは勉強をしっかりと身につける間だけなのですよ、一生懸命にできるだけ短い時間で、知識や技術をマスターして帰ってきます、そして今度帰ってきたら、その時こそ永久にママのおそばにいることになるでしょう、わかってください」

幾日、幾夜を母子は話しあったことだろう。とうとう娘の決心のなみなみのものでないことを悟ったイキはその願いを受け入れざるを得なくなった。

（早く別れれば、それだけ早く逢う日も早く来る、私はまだ、まだ元気でいるのだから……）

イキはそう悟ると、今度は娘のためにあれこれ旅立ちの準備を心配し、支度を手伝うのだった。

支度は簡素、船も二等でということにした。父母の負担をできるだけ少なくしたい、アルベラはそうした配慮をしたのだ。

フィラデルフィアに向かってかの女が出帆したのは明

治三十年（一九〇六年）十一月五日であった。

アルベラはすでに十二歳の時、父に伴われ渡米し、十九歳までの留学を体験していた。かの女はフィラデルフィア在住の祖母ソフィア・アルベラ・ベイチの膝下にあって手厚い薫陶をうけ、愛が注がれ、限りない影響を受けた。いみじくも自分の名を冠した孫娘とあって祖母の溺愛をうけたのである。この祖母の許への最初の渡米は父ロバートに伴われての渡米だった。ロバートはかの女に対し母国での正規な女子教育を希望したためであった。この時の渡米は再度の単身とは異なり一等船室であり、父娘二人の水入らずの旅であった。

かの女は五歳の時、幼児洗礼を日本キリスト一致教会の戸田忠厚牧師からうけ、やがて築地の語学校（後の雙葉学園小学部）に入学し、ここで当時の小学課程と同時に英語、フランス語を学んだ。

かの女の家庭では母イキが英語を話さないので日常会話はすべて日本語であり、使用人も公使館直属の館員以外はほとんど日本人であったから、家庭生活の様式、礼儀作法、習慣、伝統の行事はみな日本流で、父だけが英語で話しかけたのであった。

かの女は築地語学校で英語の基礎を習い、父ロバートとは正しい英語で話し合うことにしてきた。そのことを父は大変よろこんだ。英語で書かれた物語や詩の本を父は本国から取り寄せてかの女に読ませ、また唱歌を教えては一緒に歌った。ロバートはそうした時、感動に胸をふるわせて唱和したものであった。

父はまた英字新聞をかの女に読ませ、記事のさまざまな内容や、母国の大統領が議会でどんなスピーチをしたとか、カリフォルニアの小麦の作柄の善し悪し、大西洋岸いま時分の気候はどう、霧が濃いとか、父と娘は一枚の新聞を手に、はてしなく話題を英語で話しあうのであった。それは二人だけが共有することのできる幸福な時間であった。

ところで、ソフィア・アルベラ・アルウィンを略して幼児からかの女は両親や弟妹、また知人から「ベラ」の愛称で呼ばれていたことを紹介しておかねばなるまい。使用人たちもみな「ベラさま」と呼んでいたのである。後々、日本の国の教え子たちもみな「ベラ先生」と尊称して親しんだ。かの女が外国留学中のアメリカでも、またドイツやイタリアでも「ベラ」の呼び名で終始した。

「マイ、ディア、ベラ」

かの女を膝元において育み、限りない愛情をもって影響を及ぼした祖母ソフィア・アルベラ・ベイチ・アルウィンも孫娘を「ベラ」と呼んで慈しみ、米国の親戚や知己にも紹介している。かの女を教えた恩師たちもみな「ベラ」と呼ぶことで親愛を表わしたのである。

「ベラ」は一生の通り名になった。

父の母国へは当時のことだから二度とも船旅で一か月以上を要したのであったが、はじめの旅路ではハワイ公使の父とともにハワイでは王家を訪問し、美しい島々を周遊し、親子で泳ぎも楽しんだことだった。

父の故郷フィラデルフィアにようやくの思いでたどり着いた。はじめて会った父の肉親たち、それは年老いた祖母ばかりでなく、伯父、叔母たち、従兄弟たちであった。ベラはこの時、

（自分には二つの祖国があった）

ということを理解した。肌でそれを実感したのであった。

この時の留学は足かけ七年、満五年九ヶ月におよび、ベラは少女から淑女に成長を遂げて帰国するのである。

母イキはベラの留学中、毎日のようにベラに宛てる手紙を書いている。嘉永五年生れのかの女だから、巻き紙に毛筆、候文、変体仮名で書くのであった。第一回留学中の明治二十八年から三十四年までの五十余通、それ以後、第二回留学中その他の三十余通、切れ切れのものを交えると約百通近いものが現存している。一通の長さは二メートルぐらいをごく当り前とし、五メートルにおよぶものもあった。ここにその一例を写すことで、イキその人の、人となりを見事にクローズアップできる。少々長いが全文を写しておきたいと思う。

（ママの手がみは五日にて）

これはみずからの手紙を五目飯のようにゴチャゴチャであるという意味で言った言葉だが、どうしてなかなか興味深い文章である。

七月四日と十一日の御文、確かに拝見致し候処おまへ様ますます御元気よくお暮しの様子、先ずは安堵いたし候、この方にても皆々変わることなく打ち揃い暑さ凌ぎおり候故御安心下されたく、まったお手紙にて承知いたし候おまへ様、カビネスと（カビネス＝家庭教師）メゼ叔母様の別荘においでとの事大慶に存じ上げ候、この方まっこと不順の時候にて今は土用にてよほどの暑さなるはずなれどこの四、五日前より袷せを着る様なる時候に候故しのぎ良く候へども又田畑の作物悪しきかと案ぜられ候なれどいずれは暑くなる事と存じ候、その地はべつ段に暑さも強いとの御事、くれぐれ暑さあたりなどなされぬ様お気づかひなされたく、たびたびの申し条なれども、髪はたびたび洗い、何時もきれいになさるべく、不精になるはきたなき虫など涌くこと候へば人々に嫌われぬ様お気づかいの事願ひ候。ぜいたくやおごりの事などよくなき事なればお忘れなくお守り願ひ候。なれど、なくてはならぬものや、たって欲しきものは遠慮なく、メゼ叔母に話しお求めあるべく、パパ

からは沢山のお金そなたの為に、おばば様もとにおあずけあるよし、必ず入用のものは不自由なさるまじく候、そなたは身体お丈夫故よほど安心いたしおり候へど、のどは弱い故よくよく気をつけ少しにても白きものがついておるなればすぐお医者におかかりなさるべく、その他何事にてもかくさず診たて頂くべく何事も少しの中に養生なさるべく必ず必ずこの条お忘れなさるまじく候、パパもママも沢山の子供の中にても殊におまへは長女故たのみまいらせおり、この事よく覚えて親の申す事おき下さるべく候。毎日毎晩、パパとママは二人しておまへの事を話しおり候。かたときもおまへの事忘れず候、毎晩おまへの為に神に祈りおり陰膳は絶やさず候。いまでもミイ（猫）は子供に乳のませおり候、子も飲みたくなるとミイを探ねおり候。この夏はまだ多摩川（別荘）には参らずちかいところにたぶんこの二十日時分伊香保にゆくつもりにて候　おまえ様のほしきもの、例のねずみ半紙まだおあり候や、まったおまえ様の秋の服は四組もある事故今は十分と存じ候、なれど夏服たらぬ様なればメゼ叔母様に頼み急ぎおこしらへなさるべく候。秋口になりたならば冬服のおしたくなさるべくぜいたくな品は入用なきも、そちらの風をよくみてよきようにおたのみなさること。今年はこなたはおまへの為にたくさんに芝居を見物いたし候。そのわけはおまへがいなくなってより何につけかにつけ思い出し気がふさぎて心地わるく病気でも出るかと思う程いやな心が時々する故芝居見ることを皆みなにすすめられ候わけにていままでに見た数は十八度に候。パパがずっとお留守故（ベラに伴う渡米中）このようなこともでき候。おともはキクとはるで（武智キク、西村はる）おなごたちは（女中達）はくじびきにてつれて参り候。おまへのおかげにて一生にいちどのような思いをいたしおり候、はじめは芝居をみても面白くもおかしくもなく候間やめにいたす時もあり、けれどもようやっとこの節は見るくどく（功徳）もあり候。今月はかぶき座にて団十郎と菊五郎にて忠臣蔵をしてたいそうの大入りにて候。同封の猫のさしん（写真）は向って右に居る方が家にのこしてあり候、左の方浜町に縁付けいたし、まん中の黒ぶちは多摩川（別荘）にやり候、このさしん（写真）うつす折にミイがいやがり逃げようといたす故頭を張り申し候故それで目つむっているにて候。ながくなり候故またつぎ便にて書き申すべく　先は　あらあらかしこ

七月十四日
恋しきベラへ　　ママより

追伸
折角暑さお凌ぎなさるべくメゼ叔母さま叔父さまにくれぐれよろしく、おばば様の御かいほう願ひ上げ候、人とあらそいごとなさるまじく、したもの（下着）一日ごとにとりかへなさるべく候、耳のうしろなぞは洗い忘れる所故よくよく気をつけて、いつも身ぎれいになさるべくお気にとめおき候ことなり……

綿々と尽きることのない母の愛情である。（おまへ様）がいつか（おまへ）という語りかけになり、こと細かく子猫のことにふれるかと思うと、追伸におよんでついに耳のうらのことまで、恐れ入るほかない繊細さである。変体仮名で書かれたこの明治調の手紙をベラはどれだけ理解できたのであろうか。

書簡の中に拾える（ママの手紙は五目にて）に類するしゃれにはまだ次のようなものがある。

（いまさらおそまきの唐辛子にて候）
（お茶漬サラサラお香こポリポリ）
（目の毒、気の毒、お身の毒）
（うちあけるなら、膝とも談合、お気やみは水に流すべし）

イキ女の生家林はもとは信州伊那、飯田の商家ながらかの女の父金三郎が江戸に出て木挽町に店があり、イキはそこで生れ、また養家は江戸橋場町とあり江戸前の気性でサラリとしたユーモアを持ち合せていたのである。

ベラ、すなわちソフィア・アルベラが最初の留学で学んだ学校はハミルトンストリートNo.351のマダム・サトンの経営する女子寄宿学校であった。サトンはベラにとっては従姉にあたる人で、この学校はアメリカの上、中流家庭の女子に一般教養を授ける日本の当時の高等女学校にあたる全寮制の学校であった。

かの女の成績は五ヶ年間席次一番を下らなかった。さまざまなハンディキャップをのり越え一心不乱の勉強の成果だった。白人優位の観念の前にかの女は友人たちから不当な蔑視をうけることも少なくなかったから、この成績は必死の努力の結果だった。

ベラは外見上は父の肌色と瞳を受け継いでいてあまり母には似ていなかったが、容貌にどことない東洋的な面影を宿していて、一般の白人との差異は明らかだったのだ。寄宿舎生活ではそのために言われない疎外をうけることが多く、耐えねばならなかった。

（ベラにとって日本もアメリカも、どちらも真実あなたの国なのです、なんと豊かなことではありませんか、ベラはママを愛し、ママの日本を大好きなはずですね、

それと同じようにパパやわたしの国のアメリカを大好きにならなければ、ベラの身体の中のアメリカが悲しむはずです。二つの国をもって生れたことを誇りに思いなさい、神に感謝しなければいけません）

祖母ソフィア・アルベラ・ベイチ・アルウィンは孫娘をこう諭し、ともにひざまづいて神に感謝の祈りを捧げるのであった。

ベイチの曽祖父がベンジャミン・フランクリンであることはさきにふれたとおりで、この時の祖母は八十歳であったがまだ元気で、フランクリンがどんなに独立力行の人であったか、科学に興味をもち、また社会の改良に心を使い、神への信仰のもとに隣人のためにどんなに骨身を惜しまず働き、奮闘したかをベラに語り聞かせた。

（神様、あなたは何と言う不思議なところに、そしてこんなにみなにあからさまなところに、電気をかくしておかれたのでしょう）

フランクリンは電気と雷の同一性を発見した時にまず叫んで神を賛美したという話、そしてまた、

（人間は受けた自分の生命に対して神への返礼として何かをしなければならない）

というかれの信条など。祖母の言葉は深くベラの胸に刻みこまれた。とくにイキの手紙にも出てくる叔母メゼの湖畔の別荘に祖母ともども過ごした朝夕はかの女の心身に大きな安らぎを与え、とくに心の成長を促した。どんなことにも動じない平静さ、不平を訴えず、人を批判せず、自分のことでは何一つ欲望を持たず、ひたすら優しく柔和な態度。ベラはこの祖母に肉親というつながり以上の尊敬を捧げ、感化を強く受けると同時に、きびしい清教徒の校風に学び、さらにこの祖母によって徹底したキリスト教への深い教化をも受けたのであった。

ベラは幼いころから伊香保の自然に親しみ、また山野を歩く間に別荘の近隣のこどもたちとも交渉をもち、遊び仲間をいつか作り、別荘の広い庭で鬼ごったや陣とりをするようになり、かねて弟妹たちの面倒見の良さから喧嘩の仲裁までするようになった。

「ベラちゃん、あそぼう」

とこどもたちが三々五々別荘にやってきて親しげに声をかけるまでになった。

「ベラお嬢様、今日は、お早いなぁ」

散歩をするかの女に土地の大人たちも会釈をした。

「伊香保にパパが別荘をもったこと、それがわたしに対しての神の愛のご計画だったのです。伊香保のこどもたち、親切な町の人たち、美しい自然、神様の恵みでなくて何でしょう、伊香保はわたしの第二の誕生地です」

ベラの二度目の留学はそうした根拠に立つものであった。

（三・一二・尽）

（本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。）

修羅の銀行（「金融山脈」改題）（六）

三戸岡道夫

九月の決算月が近づいていた。桜川が目黒支店長になって、最初の決算月である。預金目標の達成状況が、そろそろ心配になる。

昭和四十年代初期の頃の銀行の決算は、一年に二回あった。九月と三月である。

都市銀行同志は預金のランクを激しく競いあっていたから、どの銀行でも支店への、預金目標達成の要請はきびしかった。極端に言えば、支店長の合格、不合格は、預金ノルマの達成状況によって決まるといっても過言ではなかった。帝都銀行においても、その事情は変わらなかった。

とくに桜川にとっては、この九月は支店長になって最初の決算月である。この九月末の預金目標達成如何で、桜川の、支店長としての最初の評価が決まる。だが、それが、あまり芳しくないのであった。

この上期の目黒支店の預金増加目標は十億であるのに、八月末では五億五千万円しか増加していなかった。それも、八月は帝都銀行の創業七十周年記念月に当り、そのご祝儀預金を取引先に特別頼んでの、この数字である。一体どうしたというのだろう。そうすると、この九月は一ヵ月で、四億五千万円も集めなくてはならないわけで、そんなことは絶対に無理であった。

九月一日。

桜川はさっそく、預金増強打合会を開いた。

昼間の仕事が終ると、関係者を二階の会議室へ集合させた。窓の外には、まだ暮れなずんだ夏の空が、明るく光っていた。むし暑い。生ビールでもぐっと一杯引っかけたいところである。だが、そんな余裕はない。

会議室の中央に座った桜川支店長の顔は、やや不気嫌にいら立っていた。集ったメンバーも緊張した面持ちで、仲丸渉外係長が黒板へ書きこんでいく数字を、息をころして見つめていた。仲丸係長は数字を書き終ると、

「この表を見てもすぐわかりますように、当支店の預金不振の原因は、結局、Y電気にあり、ということになります」

と、三月末と八月末の預金の数字を比較しながら、

「四月から八月までの五ヵ月で、Y電気の預金が約二億五千万円減っております。ですから、当支店の預金は八月末で五億五千万円しか増加しておりませんが、もしY電気の預金が減っていなければ、これに二億五千万円をプラスして、八億円の増加になっているわけです。したがって、目標にあと二億円ですから、これなら九月一ヵ月でなんとか集められる金額です。今期の目標は達成できるはずです。なんといっても問題は、Y電気の預金二億五千万円の減少ということになりますね」

こうはっきり数字で説明されると、桜川は、うーんと、うならざるをえなかった。

Y電気の預金が、毎月じりじり減っていることは、桜川も気にしていた。六月の預金が減少するときも、藤巻経理部長からの説明では、

「今月は輸出が減るのです。アメリカ向けの船積みが遅れているものですから、入金がずれて、預金がどうしても落ちてしまいます。これは帝都銀行さんだけではなく、他の銀行さんも同じです」

ということであった。しかし、更に、

「七月の輸出もあまり芳しくないのです」

七月の預金減少も、そうした説明で終ったのであった。帝都銀行ファンの藤巻経理部長の説明だから、嘘はなかろうと思った。仲丸渉外係長や宮本貸付係長に聞いても、

「Y電気の輸出はどうしても夏場は落ちます。輸出が盛り返すのは、クリスマス景気を見込んだ十月頃からというのが、大体のパターンですね」

という返事であった。そして、八月も引続き、

「帝都銀行さんの創業記念月だというのに、ご協力出来なくて申し訳ありません」

と預金は減ったのである。だが、その時になって、

（これは少しおかしい）

と、桜川は直観したのである。過去の数字を調べてみると、Y電気の預金は、桜川が目黒支店長として赴任したのを境にして、急速に減りはじめていたのであった。ということは、松橋常務がY電気に入社して以来、減りはじめたということでもある。

「Y電気の預金は、九月も更に減るといっております」

仲丸係長が半ば絶望的な口調でそう言った。

「九月も減るんだって？　そんな馬鹿な。決算月だというのに」

桜川は思わず声を荒らげた。

「でも、松橋常務がそう言っているそうです」

「うちの銀行だけが、減らされているのじゃないのかな」

桜川が鋭く指摘した。桜川の中で、松橋常務に対する不信の黒雲が、一挙にひろがっていった。仲丸係長の顔はすこし青ざめ、

「ええ、わたくしもそれが心配だったので、藤巻経理部長にそっと聞いてみたのです。すると、アメリカ向けの船積みの目途も立ったし、国内販売の回収も一応順調のようで、九月の入金は、八月よりは増加するというのです」

「それなら、九月の預金は、八月よりふえていいはずだ」

「そうなんです」

「それが、どうして、うちの銀行だけが減るのかね」

「それは、松橋常務からひそかに、そう指示されているんだと、藤巻部長が言っておりました」

やはりそうなんだと、桜川は思った。

「藤巻部長の力で、なんとか出来ないものかなあ」

「以前はよく協力してくれたんですが、最近は、自分のところでは、まったくどうにもならないんだって、藤巻部長がこぼしていました。昔だったら藤巻部長が配分権を握っていて、決算月には、預金の半分は主力取引銀行である帝都銀行の口座へ置いてくれ、あとの半分を、その他の銀行へ配分というように、調整してくれたんです。それが、最近では、小切手帳も松橋常務が取り上げてしまって、松橋常務が自分ではんこを押す。預金の配分表なども、松橋常務が自分で作ってしまって、もう藤巻部長の出る幕はないのだと、淋しそうに言っていました」

いつの間にそんなふうになってしまったのかと、桜川は暗澹たる気持にかられた。

「でも、藤巻部長はよくそこまで経理の実権を、松橋常務に渡してしまったものだねえ」

「それは、藤巻部長が夏風邪をひいて、二、三日、会社を休んだことがあったんです。そのとき、松橋常務が小切手帳とはんこを預り、藤巻部長が会社に出てきても、返してよこさない、そのまま、ずるずるっと、ということらしいんです。相手が常務なんですから、部長の立場の藤巻部長としては、仕方がないのでしょうね」

「へえーっ、松橋常務もついにそんな汚いことまで、やるようになったのか」

桜川は、帝都銀行時代の、重役室にふんぞり返って威厳にみちていた松橋常務と比較してみて、なんだか、わびしい気持に襲われた。

それにしても、今まで頼りにしていた藤巻部長が、こうも早く松橋常務の手にかかって、骨抜きにされてしまうとは思いもよらなかっただけに、桜川のショックは大きかった。

すると、仲丸係長が、

「松橋常務は何かを計画しているようですよ」

と言った。
「計画？」
「そうです」
「なんの計画？」
「内容はよくわからないんです。でも、藤巻部長がこっそり教えてくれたんです。何かを計画しているって。だから、気をつけろって」
計画とは何だろう。どうせ帝都銀行にとって、いい事であるはずはない。急に不吉な不安が、桜川の中へ拡っていった。それは、帝都銀行の預金が減ることと、関係があるのにちがいない。とにかく、至急松橋常務と会わなければならないと桜川は思った。

翌日、桜川は松橋常務を訪れた。
肥満した松橋常務は暑がりなので、換気扇が音を立てて廻っている部屋の中で、扇風機をかけ、扇子で身体をあおいでいた。
寺本社長の主義で、工場は冷房完備なのに、本社事務所へは冷房を入れてないのであった。工場優先の思想の現われである。松橋常務は暑さでぐったりした身体を、ソファーに投げ出しながら、
「暑くてかなわないね。工場優先も結構だが、人間も優先してくれないとね。もっとも、社長は始終出歩いていて、本社にはいないから、本人は痛痒を感じていないのかもしれないがね」
と、相変らず寺本社長への毒舌が飛んで、
「ところで、ちょうどいいところへ来てくれたよ。桜川君へ、言おう、言おう、と思っていたところだが」
と、機を見るに敏な松橋常務は、桜川が口を開かない前に、機先を制した。
「なんでしょうか」
「桜川君、これからは、メリットの分散をやるよ」
松橋常務は事務的に、そして突き放すように、そう言った。
メリットとは、一口に言えば、銀行が企業に融資している見返りに得ている利益のことで、預金とか、手数料とか、外国為替の取扱いとか、その他いろいろとあったが、その最大なものは、もちろん預金であった。
「これからは、メリットを融資シェアー（比率）に応じて、各銀行へ配分していこうと思うのだよ。その方が、公平だろう。メリットの配分はどの銀行へも公平でないといかんと、わたしは思うのだ。今までのように、帝都銀行にばかり集中するのは、よくないと思う」
桜川の頭からすーっと血が退いていった。これは明らかに、合法的な帝都銀行の預金減少作戦といっていい。
どの銀行の支店長も、貸出先の預金獲得に血眼になるのは当然であって、貸出先に対する支店長の大きい仕事は、金を貸すのもさることながら、預金分捕り合戦に勝

つことであった。だから、どの企業の経理担当者も、この預金合戦には頭を悩ませている。ある銀行に多くやれば、他の銀行から文句が出る。それで、そちらの銀行を多くすれば、今度は減らされた銀行から、また文句がくる、といった工合で、果てしがない。そこで考えたのが、それぞれの融資シェアーに比例した預金配分、という方法であった。たくさん金を貸している銀行へは、たくさん預金をし、貸金が少い銀行は、預金も少い。貸出金の残高に比例した預金配分であるから、どの銀行からも文句は出ないというわけであった。
ところが、これまでY電気の預金配分は融資シェアーに応じたものではなかった。預金の半分を主力銀行である帝都銀行に配分し、残りをその他の銀行へ配分する、というのが、長年にわたって藤巻部長がとってきた、やり方なのであった。
もちろん、それにはそれなりの理由があってのことである。終戦直後の丸焼けのY電気に金を貸して、工場を復興させたのは帝都銀行であり、また、昭和三十年代の不況時に、倒産寸前のY電気を救ったのも、帝都銀行であった。
いわば帝都銀行はY電気にとって、取引銀行などというものではなくて、命の恩人なのである。預金の半分が行くぐらいは、当然のことであった。言ってみれば帝都銀行に対しては、預金の配分という考えではなくて、恩返しなのである。
それを松橋常務は崩そうとしているのである。
（そんなことになったら大変だ。Y電気の預金はさらに減りつづけて、半分以下になってしまうであろう）
桜川の背中を、恐怖の戦慄が走った。桜川は必死の面持で、
「でも、今までは預金の半分は帝都銀行へ頂いておりました。それで、他の銀行も納得しておりましたし、とくに問題もなかったと思います。ですから、今後も従来通りにお願いいたします」
そう頭を下げたが、松橋常務は、
「その帝都銀行に、預金の片寄りすぎていたのが、問題なんだよ。わたしは不公平なことは嫌いでね。桜川君がもし他の銀行の支店長だったとしたら、そんな不公平な預金配分を承服できるかね」
そうはっきり正面から言われると、桜川には返す言葉がなかった。
「……」
唇を噛んでいると、
「わたしはガラス張りの経理で行きたいんだよ。そうでないと、これから借入金をふやすのに、他の銀行がついてこないからね。こうした点が、まったく藤巻君にはわかっていないのさ。時代遅れだね」
明解な論理で、松橋常務は藤巻経理部長の存在を否定

するのであった。

こうして目黒支店における、Y電気の預金は、徐々に、徐々に、減っていった。

桜川は心配で、毎日のように松橋常務のところへ日参したが、効果はなかった。

「お金がないから、駄目だね」

松橋常務の返事はきまっていた。

「でも、昨日、Y重工から、代金回収の振込金が入ったではありませんか」

「あれは他に使い途がある。とにかく、帝都銀行へ廻す預金はないよ。ないどころか、今でも帝都銀行の預金は、融資シェアーを上廻っている。まだ、多すぎるのだよ。だから、月末には、帝都銀行の預金を他の銀行へ移す予定だから、そのつもりでいてくれ給え」

とりつく島がなかった。交渉すればするほど、松橋常務の神経を刺戟して、よけい預金の減少スピードが早まるばかりであった。

気落ちして帰っていく桜川と入れ違いに、他の銀行の支店長がやってきて、松橋常務の手から小切手を受取っていく場面にぶつかることも、しばしばあった。

こうして九月の半ばを過ぎても、Y電気の預金減少が足を引っぱって、目黒支店の預金は予定したような増加を見せなかった。桜川の心は次第にいらだち、

「いよいよ、本部から応援に来てもらわなくては駄目だな」

と思った。

三月、九月の決算月とか、十二月の年末、それに八月の創業記念月などの、預金増強の月には、本部の役員が支店の要請を受けて、応援に出掛けてくるのが、ならわしになっていた。応援というのは、役員が支店長といっしょに、重要な取引先へ預金依頼の挨拶に廻るのである。すると取引先の方も、本部の偉いさんがわざわざ来てくれたということで、なにがしかの預金のプラス・アルファーを、してくれるのである。

その役員の応援を、桜川はすでに八月の終りに、秘書室の方へ申し込んでおいた。どの役員が、何時来るかは、秘書室の方から通知があることになっているが、まだその連絡が来ていなかった。念のために、他の支店へ聞いてみると、ほとんどの支店ですでに役員の取引先訪問が始っており、すでに終了した支店もあった。

「おかしいな。どうしてなんだろう」

秘書役へ問い合わせの電話を入れてみると、

「目黒支店へ行く役員さんは、まだきまっておりません」

という返事ではないか。

「どうして目黒支店だけが、決っていないんです。おかしいじゃありませんか」

「でも、訪問計画はわたしの方で一方的に組むわけにはいかないのです。役員さんの方から、何時、どこの支店へ行くよ、とおっしゃるのを、わたしの方が支店の方へ取り次いでいるだけですから」

「それなら、役員がもし言い出さなければ、その支店へは誰も役員が応援に来ないというわけですか」

「まあ、そういうことになりますねえ」

秘書役はまるで他人事のように、そう言った。桜川はすこし腹が立ってきた。

「それは、おかしいじゃありませんか。期末月は本店支店が協力して、預金増強に当る月なんでしょう。そんなばらつきが出るなんて、不公平です。とにかく目黒支店へも、早く誰か役員が来てほしいんです。なんといっても、松橋常務のいるY電気を抱えていますからね。早急に秘書役の方から、どなたか役員に頼んで、きめて下さい」

「でも、役員さんの方もいろいろと用事があって、仕事の合間を縫っての支店応援ですからね」

秘書役の返事は奥歯にものが挟ったようで、熱意が感じられなかった。

「もう、九月も半ばをすぎました。ぐずぐずしているわけにはいきません。なんとかお願いします」

「じゃあ、一応どなたかにお願いしてみましょう。その結果、また連絡いたします」

そう言って、秘書役の方から電話を切った。

（どうして目黒支店だけが、役員応援のスケジュールが決まらないのだろう）

桜川は首をひねった。でも、誰でもいい、ぜひ来てもらわなくては困る。誰でもいいから本部の役員の力を借りて、Y電気の預金が落ちるのを、食い止めなくてはならない。

しかし、それから二日たっても、三日たっても、秘書役からの連絡は入らなかった。

しびれを切らした桜川が、四日目に秘書役へ催促の電話を入れると、明らかに秘書役は迷惑そうな声で、

「やっと決まりました。江間常務が行ってくれることになりました」

相手が松橋常務であるから、常務クラスではなく、専務以上の役員に来てほしかった、欲を言えば審査部担当の保川専務が一番いいと思ったが、それ以上の注文をつけるわけにはいかなかった。

「それで、何日でしょうか」

「九月二十六日だと言っていました」

ちょっと遅すぎるなとは思ったが、桜川は、

「ありがとうございました」

礼を言って電話を切った。肩の荷が、すこし下りた感じだった。

しかし、その二十六日の前日になって、秘書役から電

話が入った。

「明日、臨時取締役会が急に開かれることになりました。それが終ると、江間常務はすぐ大阪へ出張されますので、目黒支店への応援は中止となりました」

（冗談じゃないよ。さんざん待たせておいて、これじゃまるで詐欺じゃないか。役員なんて勝手なものだ）

と桜川はむかっ腹が立ったが、一介の支店長が役員と喧嘩をするわけにもいかなかった。桜川の声には力がなく、

「仕方がないですね。その代わり、年末の応援は、絶対に目黒支店優先のスケジュールを、お願いしますよ」

そう頼んで、電話を切った。

その時であった。

仲丸渉外係長があたふたとやってきて、

「支店長、支店長、いま江間常務は五反田支店へ応援に来ていますよ」

と報告した。五反田支店といえば、目黒支店の隣りの支店である。

「えっ、そんなに近くまで来ておりながら、どうして目黒支店へは来てくれないのか」

桜川はあわてて、もう一度、秘書役へ電話を入れた。

「今日、江間常務は五反田支店へ来ておられますね。五反田から目黒までは、すぐです。だから序に、目黒支店の方へも廻ってもらうように、江間常務の方へ頼んでもらえませんでしょうか」

秘書役は不気嫌な声で、

「それは無理でしょうね。もう、今日の五反田支店の取引先の訪問スケジュールは決っているでしょうから、それを変えるのは無理ですよ」

「いえ、わたしの方はぜいたくは言いません。Y電気だけ一社、ちょっと顔を出していただければ、それでいいんです」

「そこまで言うのなら、支店長の方で五反田支店へ電話して、直接、江間常務へ頼まれたらどうですか。それが一番早道ですよ」

くそっ、と思って、桜川は電話を切った。

桜川は五反田支店へ電話を入れた。

ちょうど江間常務は昼食を終えて、午後からの訪問予定のために、支店長といっしょに、車へ乗ろうとしているところであった。

電話に出たのは支店長であった。桜川は用件を手短かに話して、

「そういうわけだから、江間常務へ頼んでみてくれないか。頼むよ」

「じゃあ、折返し電話する」

電話はいったん切れて、しばらく待っていると、返事の電話がかかってきた。しかし、答えは、

「悪いけど、駄目なんだ。予定がつまっているから、

目黒支店の方まで廻る時間がないって、江間常務はおっしゃるんだよ」

「困ったな。どうしても時間がないのなら、Y電気だけでいいんですよ。松橋常務が行っている先ですからね、ここだけは外すわけにはいかないんですよ。時間がなければ、一分でも、二分でも、いいんです。申し訳ないけど、もう一度頼んでみてくれませんか」

桜川は電話器にすがりつくようにして言った。すると、五反田支店長は声を落して、

「桜川さん、大きな声では言えないが、そのY電気こそが問題なんじゃないのかな」

「えっ…」

「もっとはっきり言えば、松橋常務だよ。江間常務は松橋常務のところへ、行きたくないんだよ」

その一言で桜川は、はっ、となった。頭の上から崖が崩れて落下してきたように感じた。

「わかりました」

静かに電話器を置くと、桜川はため息をついた。

（結局、誰もが松橋常務のところへは行きたくないので、逃げまわっているんだ）

役員が目黒支店に誰も来ない理由が、はっきりわかった。役員たちは目黒支店に来たくないのではなくて、Y電気へ行きたくない、松橋常務と逢いたくないのである。

（役員なんて勝手なものだ）

もう一度桜川は、吐きすてるように、そう言った。

（預金、預金と、ハッパだけはかけておいて、自分が嫌なところへは応援にも来ない）

事情を知らない桜川だけが、結局、一人相撲をとっていたわけであった。

（つづく）

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。

「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

※同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

千三百年目の仇討ち（三）

佐々木一郎

六

台風二十一号が接近してきているせいか、この数日来冷たい小糠雨が一日中降りつづいている。あの九月末の熱帯夜は、いったいどこにいってしまったのだろうか。

里見警察署の捜査員たちの服装にも、だんだん上着姿が目立つようになってきた。そういえば、いつの間にか署の庭にも、夏の草の中に混じって、コスモスや萩の花が咲いている。

今日の捜査会議では、へき頭に、吉原刑事課長の「竜造寺芳胤殺害事件」の報告がおこなわれた。これは、先日警視庁から送られてきた関係資料をもとにして、里見警察署の所見をまとめたもので、結局、芳胤の死因は、彼が東京駅到着直前に飲んだ常用薬の中に混入されていた、青酸性毒物死と断定された。この薬は、芳胤の主治医が処方している胃潰瘍予防のテルペン系抗潰瘍剤の一種で、一日三回食後に飲むカプセル剤だった。多忙な芳胤は、時々飲み忘れて、思いついた時に服用する習慣があったので、このような下車間際の変死が発生したのである。

「これを見ると、出張の前日に医者から薬を受け取っていますね」

青山刑事が、薬用袋の日付けを見てつぶやいた。

「十カプセル入りのメタルパックの端の一錠が切り取られて、二列四行半にしてあるわけだな……。おや、なぜ八回目のカプセルに毒を入れたんだろう？」

「それがどうした？」

これも、同じ若手刑事の穴山がたずねた。

「だって、芳胤がどっち側から飲み出すのか、予測できないじゃあないか。もし、メタルパックの反対側から使い出したとしたら、毒入りカプセルの順序は二番目になって、芳胤は、自宅か会社で倒れることになる。そうなると、カプセルをすり替えることのできる容疑者の名

前が特定されてきてしまう。少なくとも、今度のように容疑者が広範囲にまたがって、警察を混乱させるようなことはできなくなる……」

「さすがは青山刑事！　よいところに気がついた。じつは、われわれも、この件についてはずいぶん調べたんですよ」

須田警部が、ほほ笑みながらしゃべり出した。

「そして、芳胤がいつも端数から飲み出す習慣があることを突き止めました。彼は、まず一つだけ残されているカプセルを最初に飲んでしまって、その部分のメタルパックを折って捨て、次の二個並んだカプセルも飲み終わるとまた折って捨てて、だんだんメタルパックを小さくしていく癖があった。まあ、典型的なA型傾向です。だから、ホシ（犯人）は、その癖を知っている、芳胤のまわりにいる人物に、絞り込んで見てもいいんじゃないかと思うんですよ」

「あ、そういうことになっていたんですか……」

青山は、大きくうなづいた。

吉原刑事課長がその言葉の終わるのを待って

「それじゃ、いよいよ本題に入ります。あ、署長、はじめになにか？」

「うん、特にはないのだが、先日、井上信也宅から芳胤振出しの一千万円の小切手が発見されたとき、芳栄、芳胤両家のガサ入れ（家宅捜査）をおこなった。その際、日頃の指示通り、名家に対する礼儀が守られたことは大変結構だったと思う。また、現在行方不明になっている井上信也も、まだ容疑者ではないのだから、そのつもりで慎重に捜査にあたってほしい……」

思わず署員たちは、顔を見合わせた。吉原は続いて、

「竜造寺芳栄、芳胤殺人事件、太洋新聞記者井上信也行方不明事件は、一応関連のある連続事件と考えられるのだが、その協議に入る前に、整理の意味で、まず金子、田村両刑事から捜査結果のあらましを説明してくれ」

「はあ。まず井上の件ですが、その自宅から小切手が発見されたことによって、彼が芳胤に対して恐喝をおこなっていた疑いが出てきた。その内容が何なのか、はたして今回の失踪と関係があるのかは目下調査中です」

続いて、田村部長刑事が口を開いた。

「長男芳胤、長女里江の夫森永振一郎、次女敬子の夫斎藤道雄のアリバイについては自分から報告いたします。

まず芳胤でありますが、芳栄が殺害された時刻には栃木県宇都宮市にある竜造寺デパート宇都宮支店応接室で午後五時から十時頃まで重役会を主宰しておりました。

証人には、これに出席した全重役と、接待の総務課員たちがいますから、まず、シロと見ていいでしょう」

「森永振一郎と斎藤道雄の方は？」

「森永は、犯行時間には、東京にいたことがほぼ判明しました。全国ホテル業協会の総会で上京していたよう

です……」
「それは、俺から説明しよう」
金子警部補が後を引き取った。
「森永振一郎は、会議のあと、神田の書店街で買い物をして、午後八時頃、駿河台下の三省堂近くの電話ボックスから竜造寺邸へ電話しているんだ。ひさえ夫人が応対したようだったが……」
「どんな用件でしたか？」
折茂刑事がボールペン片手に、たずねた。配布された資料には大分書き込みがしてある。
「いや、彼は出張すると、かならず家に電話をしていたようだな。仕事の関係上、急に泊まることになったり、来客を連れて帰ることがあったから……」
「それじゃ、なぜ自宅の方に掛けなかったのですか？」
「いや、里江夫人が実家に戻っていたらしいんだね。それに、ひさえ夫人からも本を頼まれていたらしい。なんでも、『バイロン詩集』の豪華本を頼まれて、散々さがしたのだけれどもなかったので、普及版ではいかがでしょうと言上したら、叱りつけられたそうだ」
「ハハハハ、それはそうだろう。この世の中は、華族と平民きりいないと信じているお方様だからなあ」
平石警部補が、思わず笑い出した。
「しかし、この電話が、森永とひさえ夫人の芝居だったということも考えられませんか？」
青山刑事が勢い込んで言った。さっき須田警部にほめられたせいか、なかなか張り切っている。
「ええっ、あの夫人がかい？　それは、いくら何でも無理だと思うな……。それにね。気になったから、女中たちからも事情聴取してあるしね。
結局、二人は、厳然とした姑と娘婿の間柄だった」
「ハハハハ……。そうかい。やっぱりねえ。それじゃあ、それは一応措いて置いて貰って、ちょっと念を押しておきたいんだが、この電話はまちがいなく東京の三省堂近くの電話ボックスからだね？」
平石警部補の質問に、金子警部補がうなづいた。
「うん。それを確認できるちょいとしたアクシデントがあってね……。森永が電話をし終えて、ひょいとボックスの隅を見ると小さな黒い革カバンが置いてあったんだ。彼の前に掛けた者の忘れ物にちがいないと、あわてて外へ飛び出してあたりを見たが、それらしい人影がない。当惑していると、偶然、巡回の巡査が来たので、事情を話して預かってもらったと言うんだな……。神田警察署が近いので立ち寄るように言われたけれど、列車の都合があるからと名刺を渡して、上野駅に向かった。巡査は、吉川君というのだが、仮預かり証を出した……」
「うーん、なるほど……」
「おやじさん。それはちょっと、話ができ過ぎてやしませんか？」
今度は、穴山刑事が、異論をとなえた。
「うん。実はね。私と田村君とは、課長の命令で、その証言をたしかめるために、翌日神田署まで飛んだのさ……。ちょうど吉川巡査も居合わせて、いろいろ話を聞くことができた。彼は森永が事件の参考人とは知らなかったものだから、びっくりしていてね……。
森永の名刺も保存してあったし、日誌にも記録されていた。また、こっちの持参した森永の写真を見て、少し薄暗い場所だったけれども、たぶん、この男にまちがいないと証言してくれた」
「たぶん、ですか？」
「いやいや、ちょっと待ってくれよ。穴山君。それに、落とし主もすぐ現れたそうだ。中野徹二（三十一歳）で、内神田三丁目の飛鳥建設の社員だった。落とした日時、場所、カバンの中身も合っていた。第一、合鍵も持っていたので、一札取って品物は返してやったそうだ」
「その男の身元はたしかなんでしょうね？」
「そのことも、課長や須田警部から指示されて、その会社にまで出向いて中野青年に会って来たんだ。神田署には内しょでね。……　まちがいなく落とし主だったよ」
「……そうですか」
穴山は、釈然としない顔でうなづいた。
「森永については、まだいくつか疑問な点があるので、当分尾行をつけることにした。また、神田署にも、事情を話して、中野青年の監視を依頼してある」
吉原刑事課長が、締めくくった。
「斎藤道雄のアリバイの方はどうなんですの？」
紅一点の林警部補が質問した。
「斎藤ですか？　こいつも結局はシロだったんですが、一度、われわれをだましにかかりましてね……」
金子警部補は、いまいましそうな顔をして答えた。
「どんな？」
「はじめ、ちょうど芳栄が殺害された時間には、新宿の歌舞伎町二丁目にあるバー「助六」で飲んでいたと、そこの女将が証言したんです。しかし、どうも不審な点があるのでだんだん問いつめていったところ、女将が偽証していたことがわかったんですよ」
「あら、じゃあ斎藤が犯行を？」
「いやいや、そうじゃないんです。奴は、二年前からデキている染千代という芸者と一しょに、三丁目にあるラブホテルにしけこんでいてね……。それを、細君に知られたくないばっかりに、嘘のアリバイを作ったわけですわ……。これも全部ウラを取ってあります」
須田警部は、うなづきながら聞いていたが、
「金子警部補。この森永振一郎は里江夫人より二十二歳も年上ですね。しかも、当時中学一年生の連れ子まで

いた四十三歳の中年の男性。それにくらべて花嫁は二十一歳の女子大生。いくら大蔵省のエリート官僚だからって、ちょっと、常軌を逸しているとは思いませんか？」

「いや、それは、当時、高度経済成長期のひずみのなかで、苦境にあえいでいた竜造寺家を、なんとか立てなおそうと、芳栄が打った乾坤一擲の縁組だったのですよ」

「たしかに、森永が竜造寺一族に加わってから、目に見えて業績が伸びてきたそうであります」

田村部長刑事も、口を添えた。しかし、林警部補が、すかさず反撃した。

「大蔵省の現役の課長を役員に据えたのですから、そのくらいの見返りはあたりまえでしょう！　しかし、あたくしは、人道的見地から言って、やっぱり、常識では考えられない行為だったと思いますわ」

「でも、今なお夫婦円満なのだから、いいんじゃないですか？　また、こういう形で四百年来の家訓を守って、竜造寺家は永らえてきたんですから……」

「田村君。君が有吉執事に共鳴することは自由だけれどね。林さんの女性としての嫌悪感まで、そういう前近代的な考え方で否定しようとするのはどうかな」

穏健な吉田部長刑事がやんわりとたしなめた。

署長が来客で退席すると、休憩となった。若手刑事たちが茶を飲みながらさかんに議論を続けている。

再開直後、須田警部から、森永の経歴について、さらにくわしい説明が求められた。

「それでは、自分から……」

と、田村部長刑事が説明に立った。

「森永振一郎は、先ほども申しましたが、三十三歳で課長補佐となり、四十歳で課長、四十二歳で……」

「いや、そこはいいんだ。私の知りたいのは、東大に入る前なんです」

「は？　そういうと、小学生あたりから？」

「県立中学校を卒業してから旧制高校に入る前に一年間代用教員をしてますね。そのあたりを……」

「はい。昭和十九年三月、深川中学校を卒業してから、深川五代小学校に一年間つとめています」

このとき、若い池田刑事が挙手をした。

「その、代用教員てのはなんですか？　やっぱり、小使いさんのような……」

「ちがう、ちがう」

吉原刑事課長が大声を出した。

「れっきとした先生だよ！　戦争でおおぜいの先生たちが戦死したり抑留されてしまった。先生がいなくちゃ授業にならないから、当時の中学校、女学校の卒業生をどんどん採用した。この無資格の若い先生が代用教員だ」

「じゃ、毎日、学校に？」

「あたり前じゃないか。俺などは、小学校卒業までに

三人のこういう先生に教わったよ。な、おやじさん」

「ええ、私などは、どちらかというと、こういう先生の方が好きでしたね。若いし、明るいし、いつでも一しょになって遊んでくれたし……」

「私は戦後生まれなので、当然、その経験はないのですが、その先生たちの勤務はどうでしたか？」

須田は、なかなかこの問題から下りようとしない。

「そりゃあ、今の若い熱心な先生と同じですよ。土曜の午後も日曜日も学校に出て来てくれて……」

「じゃあ、森永振一郎もそうだったんですね？」

「ええ、ただし、われわれは戦後だし、森永が勤めたのは戦時中ですよ。それに、その当時は、代用教員をやりながら受験勉強をした人が多かったようです。予備校なんてない時代ですからね。彼は、その口でしょう」

「彼が、昭和十九年四月から二十年三月まで勤務したという証拠は、本人の所持する辞令だけでしたね」

「ええ、昭和二十年三月十日の東京大空襲で、本所、深川、浅草、城東は全滅したんです。記録どころか、人も建物も、みんななくなっちゃったんです。

警部の命令であのあたりをずいぶん探して廻りましたが、もう、問題になりませんでしたねえ……」

「あ、僕も、二、三日前にテレビで見たんですけど、昭和二十三年でしたか、そういう地域では大分苦心して戸籍を作り直したそうじゃないですか？」

戦後十五年たって生まれた池田刑事が叫んだ。

須田警部は、大きくうなづきながら、メモを整理していたが、ふと、気がついたように、

「それじゃあ、教え子の線からたどるというわけにはいきませんか？　教員の場合は、それぞれ何十名かの受け持ちの子がいるのでしょう？」

「うーん。それは、ふだんの場合でしてね……。

森永が代用教員を勤めていた昭和十九年七月には、学童の集団疎開といって、三年生以上のこどもは全員親の手元を離れて全国各地に分散させられたんです。もちろん、これは、こどもたちを空襲から守るためです。

彼は、一年生の担任だったから。東京に残ったそうだが、その学校も、毎日のようにある空襲警報や警戒警報で、授業どころではなかったようです。休業の連続だったようです。そのうえ、二部授業といって、食料難で、弁当を持って行くことができなくなったため、昼食時を避けて、クラスを午前組、午後組にわけたんです。もう、日本中、大混乱の時代だったんですよ……」

「いや、そうでしたか……。わかりました」

「あの、斎藤道雄の方なら……」

「結構です。こっちは資料があるから……」

七

須田警部は、署長室で、野口署長と対峙していた。

「野口警視！」

須田は、野口署長と二人だけで対話するときはこう呼ぶ。野口は、県警時代の先輩だった。

「どうですか。もうそろそろ手の内を明かしていただけませんか？」

「うん？……」

「県警時代、鬼警部として県下に名を轟かせたあなたが、なぜ、こんなに竜造寺家に気をつかうのですか？　このあいだの捜査会議の席上でもいろいろな意見が出ましたが、若い連中はそろそろ警視の捜査方針に疑問を持ちはじめています……。もし、マスコミにでも嗅ぎつけられたらどうなさるんですか？」

「……そうか」

「警視！　四十年前、リキとの恋に破れて、死に場所を求めて渡欧した芳栄は、一体どこに行ったのですか？　あの殺害事件の夜、芳栄は、なぜ、あんな時刻に、あんな寂しい場所に出向いたのでしょう？　しかもあの暑いのに上着まで着て……。それに、サハラ砂漠の砂をつめたペンダントの意味するものとは何か？　警視！」

「……」

「野口警視！　芳栄邸のガサ入れのとき、書斎の手文庫は警視と吉原課長の二人だけで調べて、その内容を公表なさらなかったそうですね？　金子警部補や田村部長刑事は不審を抱いています。あの中に、これらの謎を解くなにかが入っていたのではあるまいか、と……。

警視！　これは、殺人事件ですぞ。部下の不信を招いてまで竜造寺家の秘密を守る理由はなになのですかっ？」

「ま、待ってくれ。須田警部！」

吉原が、たまりかねたように叫んだ。夜が更けてきたせいか、室内は冷え冷えしてきた。

「あの中には、リキの恋文の束が入っていたんだ。ひさえ夫人のことを考えて、公表しないでおこうと、署長と相談してきめたことなんだ。ほんとうに、事件とはなんの関係のない品物だったんだよ……。須田警部」

「……須田君。今から三十五年前、一人の大学生がいたと思ってくれたまえ……」

突然、野口が、低い声で話し出した。

「その学生は、アルバイトからアルバイトへと、走り廻って働かなければならないほど、貧乏だった。それは、年老いた、病弱な母親をかかえていたからだった。

しかし、彼は、一度でも仕事を嫌だと思ったことはなかった。それは、深く母を愛していたからだった。

ある日、たいへんな不幸がこの親子を襲った。母の病名が癌であり、一日も早く入院させる必要があると医師に宣告されたことだった……。その学生は、死にもの狂いになって働き、また、金策のために、親戚知人の間を、いく度となく走り廻った。そして、すべてが徒労に帰したと知ったとき、この母と子は死を決意した。

そこへ、突然、激励の手紙とともに潤沢な入院費を同封した匿名の手紙が送られてきた。それを受け取った親子は、喜びのあまり手を取り合って泣いた。

そして、彼は、自分の一生をついやしてもこの大恩人を見つけ出し、必ず、この恩に報いることを神に誓った。むろん、それは、母の遺言でもあった……」

須田と吉原は、驚いて顔を見合わせた。

「……。野口警視。それが芳栄氏ですか？」

野口は、ゆっくりと首を振った。

「いや、芳栄氏は、とうとう、名のってはくださらなかった。しかし、否定もなさらなかった。儂は、ほかから、儂以外にも、あの方によって救われた人がいることを知って、この方にちがいないと確信したんだ」

「……。わかりました。警視。

しかし、それなら、なおさら、犯人を一こくも早くあげることが恩返しになるのではありませんか？」

「うん……」

「だからさっき、署長のかわりに俺が言ったじゃないか！　恋文だって……」

「いや、吉原さん。手文庫の中身は、それだけではなかったはずです。

野口警視！　恋文の束のほかに、フランス陸軍外人部隊（傭兵隊）の階級章、任用証、表彰状、軍人手帳、地図などが入っていたのではありませんか？　ことによると、サハラ砂漠の砂の入ったペンダントも……」

それを聞くと、野口の顔色がサッと変わった。

「須田君！　君はどうしてそれを？」

こんどは、吉原刑事課長の顔色も変わった。

「署長。あなたは恋文の束だけだと私に……」

「すまなかった。吉原君……。

君にそう答えてから、私は、毎日が、まるで針のむしろにすわっているような思いだった……。あの方への恩返しと警察官としての良心との板ばさみで……」

須田警部が、少し不審な顔をして、野口にたずねた。

「野口警視。芳栄氏がフランス陸軍外人部隊に入っていたことが、そんなに重い罪になるのですか？　それも、四十年も昔のことだというのに……」

「いや、そこが君たち戦後派と私たち戦中派の教育を受けた者との違うところなんだよ……。儂が警察官の職をなげうってもこの秘密を守ろうとしたのは――けっきょくは君の慧眼に見破られてしまったが――、芳栄氏がフランス軍に身を投じたことが問題だったのだ。

昭和十九年という年は、日本がアメリカ、イギリス、フランスなどの、いわゆる連合軍と戦っていた最中だ。

つまり、芳栄氏は敵国の軍人になってしまったことになる。分かって貰えるだろうか……。

実際は、ドゴールの臨時政府の傭兵として、アルジェリア動乱軍と戦っただけで、けして日本に矢を向けたわ

けでもないのに、母国を裏切って敵国側についた、と誤解されるおそれがあった。

当時のことばで、これを〝売国奴〟と呼んでね。人殺しよりも醜い行為とされていたんだよ……。

私は、今こそ、この恩人に報いるときがきたと思った。たとえ、警察界を追われても、この人の名誉だけは固く守ろうと決心したんだ。もちろん、私の心の中に生き続けている母とも、よくよく相談のうえでね……」

「……」

「……そうだったのですか」

須田は大きくため息をつくと、あらためて野口の顔を見た。涙もろい吉原などは目をしばだたいて、横を向いている。

「それにしても、須田君。よくここまで割り出してきたものだね。切れる男だとは知っていたが……」

「いえいえ、むかし、野口先輩から教えていただいた消去法の原理を応用したのに過ぎないのですよ……。じつは、これらの事件の背景については、こっそり県警に応援を頼んで徹底的に調べてもらいました。そして、竜造寺家一族以外はすべてシロとなったんです。

そこで、あらためて昭和十九年のヨーロッパを眺めてみると、ドイツ軍のパリ占領放棄、ドゴール将軍のフランス臨時政府樹立、アルジリア動乱の頻発、外人部隊の強化、死に場所を求めてヨーロッパをさまよい歩く芳栄青年、そして、サハラ砂漠の砂をつめたペンダント、と、これだけそろえば、だれだって『芳栄氏のフランス陸軍外人部隊入隊』を連想しますよ」

「成程なあ。それで、儂に鎌をかけたのか？」

「はあ、どうも申しわけありません……。そのかわり警視！　芳栄氏のフランス外人部隊入隊は、断じて売国奴的行為ではなかったことを、責任をもって上申いたします」

「……そうか。ありがとう」

「須田警部。捜査会議のときには、さかんに森永振一郎の代用教員時代のことを聞いておられましたな？」

吉原が、遠慮がちにたずねた。さきほどからの須田の鋭い舌鋒に、すっかり圧倒されてしまっている。

「ええ。この芳栄氏殺人事件は、芳栄氏の外人部隊在任中に端を発しています。ですから、当時、芳栄青年とともに傭兵だったと思われる人物を探索しました。これは大変な仕事でしたが、お陰で、外人部隊傭兵募集の極秘ルートの存在も突き止められましたし、その募集要項の内容もわかりました。そして、この条件に合い、応募が可能だった者が一人いることにも気づいたのです。

それが、森永振一郎なのです。

有吉執事は出征していましたし、斎藤道雄や秘書課長の大野正はまだ幼児でした。森永だけは、県立中学校を

卒業して十六歳になっていました。今の十六歳はまだ子供ですが、戦時中の十六歳はりっぱな大人です。

十二歳で入学する陸軍幼年学校生徒、十三歳で入隊する海軍飛行予科練習生、十五歳で就学する陸軍士官学校生徒、海軍兵学校生徒を始め、そのほか、いわゆる少年兵制度が数多く設けられ、りっぱに国防の第一線に立っていたのです」

「しかし、森永は、一年間、深川五代小学校の代用教員をしているんですよ」

「私は、そのうちの何か月かは、アルジリアの戦線に参加していたと考えているんですよ」

「だって、四月一日付けの辞令がある……」

「それは、いくらでも細工できたと思います。捜査会議で金子警部補たちから教えられて、私は、ずっと図書館通いをして、当時の資料を徹底的に読み漁りました。

そして、現在では想像もできないほど、わが国が乱れていたことを知りました……」

「それじゃ、あなたは、これからどうやって切り込んで行くつもりですか？」

吉原の問いに、須田警部は、無造作に答えた。

「森永の密出国の証拠を押えることが困難ならば、芳栄氏殺人事件の容疑者として逮捕します」

「だって、それは……」

「いや、証拠は金子警部補と田村部長刑事に固めさせます。あのコンビの捜査は堅実です。私は、十分信頼していますよ。ただ、時々ヒントを与えてやる必要があるのが欠点ですがね……。ハハハハ」

「うーん……。しかし、あれだけしっかりしているアリバイが崩せるものでしょうかなあ」

「崩せます。今日、芳栄氏の外人部隊入隊の確証を得ましたので、一度に霧が晴れてきました。まず、ひさえ夫人やその元恋人の線あたりから探ってみましょう」

「な、なんですって！　ひさえ夫人の恋人だって！」

八

「やあ、このあいだは長電話をしてすまなかったな」

「いやあ、しかし、大分、捜査が進展しているようだね。君の身辺も危なくなってきたんじゃないのか？」

「心配ない。準備はできている」

「しかし、考えたより、あの須田警部は手ごわいな」

「それだけに、張り合いがあるとも言える……」

「里江夫人や子供さんたちは？」

「だいじょうぶだ。絶対に累を及ぼすことはない。いや、弱音に聞こえると困るが、俺にとっては、里江はかけがえのない恋女房だ。また、子供もそうだ。

世間では、芳栄が俺に三顧の礼をとって婿に迎えたように言っているらしいが、事実は逆だ。俺が芳栄を脅迫して入り婿になったのだ。それだけに、犠牲になった里

江を、これ以上泣かせるようなことはしたくない」

「うん。尊敬する横田公彦少尉の半身不随のお姿に接して、君は決断したのだったな……。将来は次官、政界、大臣の椅子を約束されていたような君が、惜しげもなくその将来を捨てて、竜造寺家のなかに飛びこんだのだった……」

「横田さんのようなお人は、現在の日本にはいない。ああいう方は、一朝有事の際にきり現れない方なのかも知れない……。その横田さんを死に追いこんだ者は、だれであっても、俺は断じて許すことはできないんだ。それでなくても、俺は、二度も命を救われた恩義がある」

「いや、森永。君ばかりではない。僕も、死んだ松本も笛木も石井も助けられている。本当に、あの方は不死身だった。竜造寺芳栄の裏切りさえなければ……」

「そのことに、本人の芳栄が気が付いていないだけに、なお、いっそう、腹が立つのだ」

「いや、本人ばかりでなく、この際、芳栄を育てた名望家などという封建的な因習を全部叩き壊してしまわなければ気が済まん」

「……それにしても、東大名誉教授の嵯峨博士の協力がなければ、この計画は実現しなかった」

「うん。その通りだ。博士は、横田さんの大学以来の無二の親友だそうだ。すべて、あの方の人徳なのだよ」

「しかも、嵯峨博士が、竜造寺ひさえ夫人のかっての恋人だった人とはね……」

「運命の皮肉というものだよ……」

「しかし、数年前、瑞鳳寺跡の発掘調査に来られた博士とひさえ夫人の再会が、この計画実施の引き金になったのだから、分からないものだ。君の力作の脅迫状も、こうして作られたわけだ……」

「ハハハハ……。いや、冷やかさないでくれ」

「この再会を目撃した井上信也記者が、芳胤をゆすって一千万円を脅し取った。あの華々しい『千三百年目の仇討ち』の記事は、芳胤へのデモストレーションだったのだ」

「素直に出さないと、書くぞ、と、いうね。ところで、この井上記者はどうなったのだ？」

「ま、このあたりの細々とした報告をかねて、一度集まらないか？」

「うん。一月十九日が横田さんの命日になる。この日でどうだ。駿河台の横田邸だ」

「いいだろう。しかし、安全とは思うが、神田署の目もあることだし、くれぐれも気を許すなよ。中野」

「分かっている。それより、君の方だ。まさか、盗聴器が取り付けられているなどとは……」

「それは、大丈夫だ。これでも傭兵あがりだからね。君と電話する日は、必ず点検している」

（続く）

編集子のメモ

◆賀春開歳「まんじ」十一歳・五十号を目指して。と月報（「まんじ」だより）の方に書き記した。

恵方とは文路をたどすすむこと

右のような歳子句をしたためられた賀状にも接した。年頭の所感それぞれに心機一転を期することは大切に違いない。「まんじ」いっそうの頑張りを誓いたい。

◆三戸岡が書き下ろし長編第四作「凄腕人事部長」を、金子は本誌連載の長編「ハイラル挽歌」を、大和は短編集「桃李庵のアルバム」を相次いで刊本とし世に問うた。「まんじ」の文運隆昌を喜びたい。近く合同出版記念会の予定である。

◆今号の目次は青木昭成の詩編をトップに飾った。「まんじ」の新風として詩編の掲載はこの詩人を迎えてすでに恒例となった。ともすると詩作にあっては往々にして他の観賞を退ける独善が認められる場合がありがちだが、この作者にはそれがなく爽やかさをもって共感を誘われる。

◆某誌にワープロの登場が戦後の高度情報化時代に日本語の乗り遅れる危機を救ったという所論があった。ささやかなわれわれ文学活動は遅々及ばずといえども期すべき目途を見失ってはなるまい。

（お）

「まんじ」第四十三号

平成四年二月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区三崎町一ー一ー一
升本ビル　升本内
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと
郵便振替口座　東京二ー一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三ー十一
☎（三二六一）五七四三

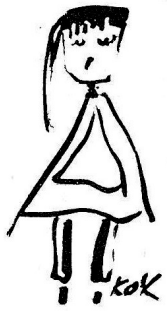
目　次

沖縄からの手紙……西之谷秋成　1
さくらさく……井上二三男　8
「風のふしぎ」（詩三編）……青木昭成　14
【連載】
修羅の銀行（七）……三戸岡道夫　17
千三百年目の仇討（四）……佐々木一郎　28
有院家の人々（五）……大和禎人　38
近藤富蔵の生涯（十五）……金子正義　49
編集子のメモ……57

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

沖縄からの手紙

西之谷秋成



ことさらに「沖縄からの」と、固有の地名をあげて修飾したことに、とりわけて理屈があるわけではない。

ただ、妻の径子が「手紙」を沖縄から受けとった経緯から、こうした場合、彼女がその内容にどう反応し、どう応答するだろうかという興味が、受信の直後から、私には一種の期待としてあって、顛末を記録してみようと思いたってみると、表題はしぜんに「沖縄からの」となってしまった。

考えてみると私は、径子の職業に対してはつねに、傍観者の位置を占めてきた。いや、或いは彼女にはむしろ喧しい野次馬の一人だったかもしれぬ。ピアノを専攻するとともに、その指導者でもありたいと精進してきた彼女には、どちらかといえば気楽な素人の夫でいさせてもらった。それだけに訊ねられれば、こだわるほどの立場もないゆえ、勝手な意見を開陳する羽目にもなるが、それがまた、どれだけ役立ったかとなれば、たいへん怪しいものだ。

ところで、何時でもそうなんだが、径子はこうした手紙には、傍でうけとる以上に、真剣に思い悩む。なぜなら、ピアノ指導の多様性は、他の教育や学習の指導と比べても、ある工夫が唯一絶対の技術とはいいきれず、平準化のできないもの、個性的なもの、口述し、記述するには限界があるものの、と承知しているからのようだ。

しかし、実際の教育では、指導者はつねに唯一の方法を選択する必要に迫られる。音楽の約束ごと、つまりはそう一口に呼んでいいものであれば、楽理を学ばせることに間違いや齟齬が当然あってはならない。だが、レッスンには音楽の本質に根ざした確かな視点と、それを多様な場面に当意即妙に生かしうる鋭い感覚が要求されている、と私には推察される。

また、こうも言えないだろうか。音符をよみ、それをどういう音に変え、どういう自分の音楽として表現する

か。生徒の家庭での練習を、すべてそこに集中させるべく導くのが、指導者の最高の仕事ではないか。

「たとえば、f〔フォルテ〕に例をとれば、自らの感性で音符から音をとりだし、音楽を創りだす気持ちがなければ、指の動きだけが先に走ってしまい、音色はかたく平板で冴えないものとなり、テンポだけがむやみに速くなってしまう。」と径子は言う。面白くも、楽しくもない音楽の出来あがりが、そこにあるとするのだ。

つい数日まえにも、彼女はいかにも安堵した表情で、こんな説明をしてくれた。

小学校六年生になる明日香、この子は「この頃なぜか集中力が欠けている。以前には、自宅でのおさらいも正確で、熱心だった。レッスン中の反応も、この二・三カ月なんとなく歯痒く、それまでのシャープさが見られない。」と感じ、不審に思いつつ日を過ごして来た。

だが最近、すでに大学四回生に在学する美砂さんの既往のケースがふと、思いを過ったので、次回のレッスンでは、早速、つぎのような会話を交わすことになった、とのことである。

「あなた、眼が悪いでしょう」

「はい」

「眼鏡ないの」

「持っています」

「でも、どうして掛けないのかな」

「気分がわるくなるし、頭も痛くなって……」

やはり、推測はあたっていた。明日香ちゃんは眼が悪いのに眼鏡を使わない、使わないから音符が読みにくい。勉強もすすまない。だが、事情を訴えないから、深刻な不都合を周囲はだれも気づいてあげなかった。

情況は、これもすぐれた生徒である美砂さんの場合と、まったく似通っていたようだ。

思春期に移ろうとしている時期の少女には、眼鏡を避けたいとする切ない心理が、何処かにあるのかもしれない。だが、二人の場合はそれとは別に、度数のあわない眼鏡自体に原因があったと考えられる。家庭の日常のなかにはその発見がなくて、週わずか一時間に満たない接触のピアノ教師が、それに気づいたことに大きな意味があると、ここでは強調しておこう。それを知って、むしろ母親は恐縮し、翌週にはしっかりとおさらいを済ませた明日香ちゃんが、新しい眼鏡を持って、元気よくやって来たことは言うまでもない。

径子はレッスン室の中での、こうした生徒との実際の遣り取りを「言わば、企業秘密だ」と表現する。もとより営利を目的とする企業のように、あくまで厳秘としなければならない指導上の方法や秘密の事柄なぞ、あろう筈はない。ただ、言ってみれば、そこまで我が手の内をひけらかして良いものか、おこがましくも、と自戒しているようにみえる。だから、今まで彼女は、指導に係わる技術でもエピソードでも、機会あるごとに記事とすることで公開してきたが、その文章が果たして、自分の意図しているところを、誤解なく伝達してくれているかどうか、また、その行為自体が他に滑稽なものと映りはしないか、と頻りに取り越し苦労をしている。多分、こうした危惧は、径子の「手紙」への返事をかなり臆病なものにするに違いない、と私は私なりに考えた。

さて、径子にとって沖縄は、私の感覚以上に、地理不案内な土地である。この地域のいずこをも旅する機会を持たなかったことでは、その地名は、国外にあるのに等しいほど、いかにもはるかな距離にあった。それに手紙の内容は、「あるピアノ教師からの質問」であると同時に「地方に住むピアノの先生の訴え」と言いかえてもよいほど、極めて複雑な心境の吐露でもあった。この場合、敢えて「地方」と表現したのは、手紙の主の住所の地理的条件が、どうしてもその訴えと不可分であるように推察できるからである。

数日を逡巡したのち、やっと纏めおえた返信にも、径子はどうも納得のいかない様子であった。二・三日投函を引き延ばし、思い切って速達で送った後も、なお、こだわりを残していた。発送が遅れたことは確かなことながら、何故わざわざ速達にしたのか、それには封書の宛先を書く段にいたって気づいた、彼女なりの判断があったようである。

「手紙」は、正月の松過ぎ、一月十二日にとどいたのだった。

まだ日を措い続いている年賀ハガキの往来の間に、珍しい毛筆の封書が混じっていたことも、径子が、この手紙の受信につよい印象を与えられる結果ともなった。だが、差出人の女性名に一瞬、記憶はなかった。それが、開封して初めて、大変迂闊なことと気づくのだが、ほぼ十年を遡って「沖縄」の若い女の先生との、ただ一度の交流がすぐ思い出されたという。

「気持ちは良く分るけど、どう答えてあげたらいいのか、難しいわねえ。」、それが径子の私に対する、この書簡についての独り言とも、問い掛けともつかない第一声である。自身の内部の混乱を整理し、ヒントを私から得るための彼女の、いつもの手である。そして、音楽に関しては、ずぶの素人である私は、その手にいつも嬉々として乗ってしまい、好奇心が蠢きだす。

炬燵を挟んで向かいあった私にも、差出人の名前はもちろん、覚えがなかった。しかし、もうかなり以前になるのだが、沖縄の若いピアノの先生から、土地の名物であろう海産物が送られてきた。地元では恐らくよく知れた海の幸であったろう。当時の私たちには、その値打ちをじっくり味わうことが出来るほど、気持ちに余裕がなかった。妙に、その事実だけがはっきり、私の脳裏にも焼きついていた。贈り物は当時、径子が編著し出版し

たばかりの「バイエルをつかって移調のれんしゅう」が、その地では入手しにくい、との便りを貰って急送してあげたことへの返礼であった。

住所は沖縄県平良市とあった。この漢字の「平良」が読みは「ひらら」で、沖縄本島から更に南西に三百キロほど離れた宮古島に所在する市であることは、郵便番号を確かめ、本棚の古い日本地図を開いて、やっと再確認された。急速によみがえって来たとはいいながら、ただ一度の記憶は、それほど希薄なものとなって、肝心の差出人の住所も氏名も、あらたな出会いとしてしか、私たちには映らなかった。

それを慮ってか、手紙の冒頭は突然の便りの詫びと、かって、本を送って貰った「沖縄県宮古島に住む一レスナーです」との説明で始められていた。これも、径子はもうすっかり忘れていたが「その節は、ブルグミュラー、バッハ二声についての解釈をご親切に書いていただき」とまで続いていた。だが、径子はまず、冒頭の「一レスナーです」との自己紹介の言葉に、少なからず違和感を覚えたらしく、そのまえに書かれていた宮古島の所在については、すっかり脳裏から消えてしまったらしい。

「こういう呼び方はあるみたい、だけど、わたしは使いたくない。周りの人が使うのも、聞いたことがない。」径子がいう周りの人とは、親友U女史をはじめとする同職、同学の友人達のことである。だが、思いあぐねると「Mに訊いてみよう……」と彼女はよく呟く。Mとは U女史の名前である。女性が自分のしたしい仲間を呼びあうように、径子もまた彼女の名前を呼びすてにして憚らない。それは一方では、U女史の博識と強記に畏敬のねんを禁じえないからだと私はおもう。そして、そのMも自分たちのことを、「レスナーと呼んでほしくない、まして自分からは使いたくないわ」と言う。

なる程、径子はピアノ・レッスンを生業としている。だから、ピアノ教育者であろう。彼女はそのことに、何のためらいも持っていない。だが、すすんでリサイタルやオーケストラとの共演を実現してきた彼女は、自分が「単なるピアノ教育者」であることには、我慢ならないらしい。どんなに自認していても、他からそう呼ばれることは、いたく彼女のプライドを傷つける。傍観者ではあるが、共同生活者でもある私には、径子たちのその矜持が、おぼろげながら納得できる気がする。

道理はいとも簡単だ。それは径子たちが、なぜあんなにまで、と私が呆れるまで「音楽」が好きで、何よりも「ピアノ」が好きだからだ。また同時に、よい音楽を創造できる音楽家、つまり径子たちにとってはピアニスト、でありたいと希求している日常を知っているからだ。

そのために、彼女たちが費やしているエネルギーは大したものだ。決して、揶揄からこう説明するのではない。彼女たちの、譬えばアナリーゼに関する学習の、足跡を

たどってみるだけでも、趣味や道楽としてでは、とうてい推し量れない音楽に対する絶対の情熱をみることができる。また、さまざまな種類の音楽、それがオペラであったり、バイオリンのコンツェルトやシンフォニーであったりするのだが、時間と経済のゆるす範囲で、音楽会には飽きることもなく、どんどん出掛ける。

「よい音楽、とくに生の音楽に接することは、じゅうぶん練習を重ねることと同様、音楽を専攻する者にはぜったいに必要な要件だ」と径子は言いきる。つまり、音に対する感性を失わないためだ、とする。

こうした心構えは、もう、おそらく資質とか才能とか呼ぶ性格のものとは異なる範疇に属するだろう。レッスン室の中で生徒たちに相対する時の、たゆまない根気や勇気も、おそらくこうした姿勢から生まれて来るにちがいない。それだけに、音楽が琴線にふれれば、手放しで感動し「生きている幸せをおぼえる」といい、精進を欠くものには強い反発をあらわにする。それは凡そ、世の商業主義とは無縁な感覚である。

とは申せ、こんな大袈裟な言い回しを、私は本意としたくない。ただ径子には、その音楽で、職を食んでいるという、矛盾はつきまとう。いや、このんで矛盾とは言うまい。根っから音楽ずきの、ひとりの人間の生き方がそこにこそあるとしよう。そして、径子の「沖縄」への返信の内容を、承知してしまっている私は、その回答を先取りして、こんな理屈にもならない分析を途中に挟んで考えてみている。

「手紙」には、「十年になるピアノ指導に、一向に自信が持てないこと」「特に最近、少ないながら音楽コースをめざす生徒が出てきたが、音大にいれてあげる自信がないこと」「実際に昨秋、ピアノ科への進学を希望している生徒を、他の教室へお願いしたこと」などの背景が、近況と共に述べられていた。だが、その主題は「その後淋しくて、自分で最後まで責任の持てる指導ができたら、という思いで一杯」の自分はどうしたらよいか、との訴えであった。

さらに、「私のような者でも受験指導はできるのでありましょうか？。又、この仕事をやめるべきでありましょうか？」とも書かれている。

一読して、野次馬の私には、到底答えられる性格の問題ではない、と判断した。「よきアドバイスを頂けたら」と言っているが、直接私にだけ向けられた質問なら、お手上げだ、と言うほかない。

径子の返信は、ふつうの挨拶に続いて、次のように認められていた。

「今日では、各地で音楽教育がひろく普及し、さまざまな方法論が評価され、実践されていることはお便りのとおりです。しかし、それが果たして、日本の音楽の将来、個々の子供の教育に、どれだけプラスとなっている

かを判断することは、誠に難しい問題です。また、わたくしにとっても、一般論として音楽また教育問題を申し述べることは、比較的容易ですが、個々の先生方の指導について、適切なアドバイスをさせて頂くことは、決して容易ではありません。」としたうえで、ぢかに問答が出来ない以上径子の返事は「結局、一般論にならざるを得ないかも知れません。」と断りをいっている。

止むをえぬ仕儀かなと私も頷いたが、しかし、径子は「手紙」の第一の問いである「私のような者でも、受験指導はできるのか」に対しては、自分の元でピアノ教育の課程を通過していった生徒たちは、これまで数百名を数える、と説明しながら

「どの年令にかかわらず、最初から受験を目標としている子供と、そうでない子供との二通りの入門者がいます。しかし、わたしはこの二通りの生徒のレッスンに決して区別はつけません。ただ、違いがあるとすれば、子供の意欲の違いによって進度が異なるだけです。どんな子供にもピアノ〔音楽〕の基礎をしっかり身につけさせること、音楽的な感性を充分に育てることを心掛けています。」

この辺の論旨になると、もう何時もの彼女だと私にも分かる。径子は、日常のレッスンのなかで、この基本をまもっていれば、子供によっては自然に、「受験してみたい、音楽の道に進みたい」という希望が具体的になってくる、とする。

それ以後の教育は皆さんと、それほど相違するところがない、としながら、こうした日々のなかで自戒していることが二つあると、次の二点をあげた。

「その第一は、自分自身が日々勉強を怠らないこと。その第二は、良い音楽にできるだけ接すること。こうして、かなり抽象的な表現に、若干の補足を加えて返信は綴られ、それでも、書簡は便箋で八枚にもなってしまった。

「だから、貴女への最高のアドバイスは〔生涯音楽の勉強を忘れないこと〕です。」「わたしも、子供を二人育てました。貴女もそろそろお子様から手が離れる年令です。沖縄にも恐らくよい先生がいらっしゃるでしょう。先ずピアノのレッスンを受けることから始めてみませんか。」

これは、「手紙」の第一の問いに対する回答であると同時に、第二の問いに対する結論であると、径子は書簡の最後にしたためた。不安の対策や、自信の回復のための特効薬は、勉強すること以外にない、と彼女は主張したいのだろう。もっとも、その上で本当は、どんな場であってもよいから、自分の演奏を聴衆のまえで披露する機会を持ちなさい、と径子は付け加えたかったに相違ない。なぜなら、その緊張感が自分の音楽に対する、また、その教育に対する情熱の源泉になっている、と言うのが

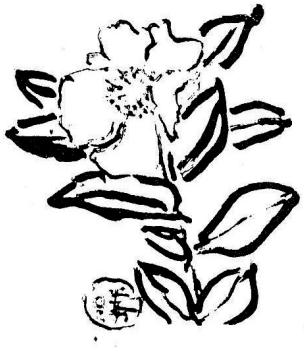
日頃の彼女の持論だからだ。

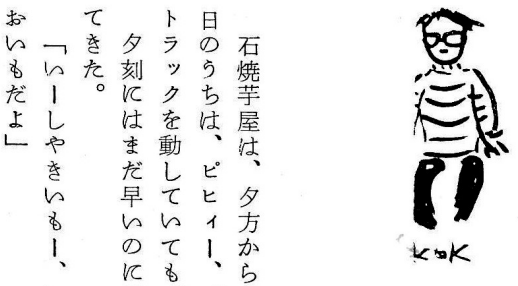
確かに、回答は一面、不親切の観を免れないかもしれない。だが、手塩にかけた生徒を、進学のために手放さなければならない情況は、つねに、あらゆる環境で起こっている事実である。その、ふと心が虚ろになるような淋しさは、径子もさんざんに経験してきた寂寥に違いない。そして真実、「音楽が好き」でなければ、これに耐えることは、なかなか叶わないであろう。

さらに、進んで受験生を引受られる技術は、ただ単なる技術としては存在しないだろう、と考えながら、その一方で「手紙」の主の置かれた地理的条件には、径子が応える術を持たないのも、止むを得ないのかな、と私は思う。

五月十五日には、沖縄が本土に復帰して二十周年をむかえる。いっけん、政治の世界は音楽の世界になんの係わりもみせない。だが、このしだいに平穏で、しだいに豊かな社会の出現が、ピアノ教育や音楽の享受に、どんなあたらしい流れをうみ、価値観をあたえてくれるだろうか。私にもたいへん気になるところである。

「完」





さくらさく

井上二三男

石焼芋屋は、夕方から夜半にかけてが商売で、午後の日のうちは、ピヒィー、ピィピィと蒸気笛を鳴らして軽トラックを動していても、客はなかなかつかない。

夕刻にはまだ早いのに空模様がどうも怪しく暗くなってきた。

「いーしやきいもー、いーしやきいもー、やきたての、おいもだよ」

テープに吹き込んである自分の声を軽トラックの屋根に据え付けたスピーカーから流しながら、今日は、客の動静に気を配るのもうわの空である。

今日は、娘の美恵子の大学の合格発表がある日なのだ。

貧しい農家の三男坊に生まれた啓太は、中学を終えるとすぐに街の蕎麦屋に住み込んだのだが、近頃は、土地は高いのに、あちこちに酒落た造りの大きな蕎麦屋ができて、家の構えも客を引くのに凝った工夫がいるとか、昔のように暖簾を分けてもらうことなど見込みにないと諦めて、配管工や塗装工など時節柄引く手数多の職人暮らしをしていたのだが、この冬場は、美恵子の大学進学資金を稼ぎ出すため、荷台に芋を焼く竈を組み込んだ軽トラックを路地に転がす石焼芋屋をしている。

美恵子は子供の時からどことなく利発で、学校に行くようになってからも他の子供たちと一緒になって遊び廻っているのに通知表の評価の良さは啓太をびっくりさせたものだった。

中学三年生の時、学校で進路についての三者面接というのがあって妻が美恵子と担任の教師と話をしてきたことがある。

「とうちゃん、先生がね、美恵子を普通高校へあげないかだって」

「なにい、普通高校？……」

啓太は娘の進学のことを特に考えたことがない。長兄や次兄のところでは中学を終えると農業に従事させたり、自動車工場に働きに出していた。それでも末の方は県立の農業高校や工業高校に行っている。それだって男の子だ。そういえば、一人、市立の家政科へ行っている姪がいる。正直、普通高校へ行くというのがどういうことなのか啓太にはぴんとこない。

「そりゃ、どこだ」

「ほら、いま、田島に大きな学校ができるじゃない。あすこだってさ。来年から生徒を入れるんだってよ」

「なんだ、あすこかい。なら近くていいじゃないか。だけど、金の方は大丈夫かねえ」

「県立はそんなにかからないってよ」

まあ、人並みに高校くらいは出してやろうと啓太も考えた。

高校へ通うようになるとやはり中学とは違って、隣の四畳半の子供二人の部屋は、夜遅くまで灯が点いていることが多くなった。時には弟が明るくて眠れないと文句をいっている。

美恵子は高校でも成績は良く、教師の間でも眼をつけられているようであった。高校三年になったとき、今度は、大学進学の話が出た。啓太は、全く考えてもいなかったことなので

「そりゃあ駄目だ」

とんでもないことだと、眼をむいた。

美恵子も、家の収入のことを考えれば、そんな希望をもてる筈はないと考えているのだろう、特に固執する様子はなかった。

その夏休みの一日、啓太は美恵子の担任の教師に呼ばれて初めて高校の門をくぐった。三階建ての白亜の校舎に啓太は圧倒され、廊下を行くと啓太の背丈を超える若者が走り廻っていて、自分が小さな存在に思えた。

「お忙しいところをお呼びたてして申し訳ありません。実は、美恵子さんの将来のことについてお父さんにお話をと思いまして」

と前置きして、担任の教師は、美恵子が将来小学校の教師になりたいと思っていること、しかし、大学への進学は家の収入からは無理だと考えているらしいこと、そして、美恵子の成績は、国立大学の教育学部それも難関といわれるM大学やJ大学にも入れると考えられること、経済的な事情ならば、奨学金の制度や授業料免除の特待生の制度もあることなどを話すのであった。

「そういうことで今日は、お母さんでなくてお父さんにおいで願った訳なのです」

大学の制度や内容などは啓太には知ることがない世界であったが、新設高等学校の第一回の卒業生になる美恵子には学校側の期待も高いことが担任の教師の言動から伝わってくるのであった。そして、あれ以後、家では大

学のことを一言も口にしない美恵子がいじらしく思えた。
弟の和男も来年は中学である。同じ部屋にいて、美恵子に文句を付けていることが多くなったようにも思う。二人とも難しい年頃になってきているのであろう。
「大学へ行けば勉強も難しくなるでしょうが、家ではなかなか勉強する場所もないし……」
啓太が口籠ると、担任は、それこそというように
「J大には寮もあります。寮費は食事の実費程度です。いかがでしょう……」
わが子が大学へ行くようになるのかという予想もしなかった思いと希望を持ちながらそれをいわずにじっと耐えている美恵子のいじらしさが啓太の胸を熱くした。
「わかりました。先生。なんとか頑張ってみます」
「そうですか、お父さん。ありがとうございます」
担任は、立ち上がると啓太に深く頭を下げた。啓太も目頭を押さえて頭を下げた。
学校から帰りながら、啓太は石焼芋屋をやろう、それしかないと考えた。七、八年前にも啓太は少しでも収入を得ようと、昼間の作業の後、石焼芋屋を始めたことがあった。しかし、ピヒィピィと笛を鳴らして、父親が軽トラックに竈を積んで焼芋を売って行く姿は、少女の美恵子にとっては堪え難いものだったのであろう、「ださい」という言葉が流行って、同級の男子から「いも、いも」とからかわれて泣いて帰ったことがあり、啓太は、石焼芋の道具を物置の奥に匿してしまったのであった。
その夜、啓太は、美恵子にいった。
「美恵子、大学に行ってもいいぞ。そのかわり、とうさんは、夜、焼芋屋をやるよ。いいか」
啓太の前に座っていた美恵子は、眼を大きく見開き、
「ほんと、ありがとう」
と畳に手をついた。そして、肩を震わし、畳に涙が落ちるのであった。
盛りを過ぎたとはいえ、まだ暑さが残る秋の彼岸、啓太は、市の霊園の駐車場に石焼芋の竈を積んだ軽トラックを停めた。ピヒー、ピィーと尾を引く笛の音色を懐かしく思う人もいて、多少の売れ行きがあり、啓太は気を良くした。
配管の仕事も、啓太の手を抜かぬ間違いのない仕事振りが工務店の信用にもなって、建設ブームに乗って結構仕事も多く、夜の焼芋屋の方も笛の音が人に知られて順調であった。
美恵子もそんな啓太の健康を気遣いながらも大学受験の目標に打ち込んでいるようであった。
二月、美恵子はJ大学を受験した。同級生の多くは、何箇所かを受験するようだったが、私大の受験料はばかにならない金額であるし、その後の経費も考えて美恵子

は国立一本に絞っていた。それだけに、合否の行方が気になって落ち着かない。
今日は、いよいよその発表の日である。
美恵子は、電車賃を掛けて発表を見に行くことはできないと考え、試験当日、在学生がアルバイトにしている合否の電報を頼んできていた。また、美恵子は、一緒に受験した友人の聡子が発表を見に行くというので、分かったら電話をくれるよう頼んであった。
空は、どんよりと重く、彼岸に近いというのに何か薄ら寒い。家中が落ち着かず、十時に発表と聞いていたのに、聡子から電話がないのは悪い結果なので電話をしかねているのかもと、家中の不安が増幅されて行くのであった。啓太も工務店の仕事がなかったので家にいたが、どうにも落ち着かず、昼飯を食べると軽トラックに芋を仕込んで出てきてしまったのである。時刻はまだそんなにならないのに、空は灰色になっている。中途半端な時刻のため、焼芋を買う客もない。啓太の気持ちも落ち着かない。
灰色の空からは、ついに、白いものが舞い降り始めた。
啓太は引き返すことにした。時刻はまだ三時にならない。
「どうだった？」
家に帰るなり、啓太は、家の中に声をかけた。
「だめだったのね、きっと。聡子は自分が受かって、あたしが落ちたのをいいずらくて困っているんじゃないかしら」
美恵子は、もう駄目だったものと心に決めて、それよりも、電話をよこせないでいる友人の気持ちを気遣っている。家の外も中も暗い。
「まだ分かるものか。電報は、落ちたときにもくるんだろう？」
「そう、さくらちるってね」
「じゃ、まだその電報がきたわけじゃないんだ、あきらめるな」
その時、電話のベルが鳴った。啓太は、受話器に飛びついた。
「こちら、電話局ですが、斉藤さんですね。美恵子さんに電報が入っています。雪模様なので配達が遅れますので、取り敢えず電話でお知らせします。よいでしょうか」
「は、はい、どうぞ、どうぞ」
啓太は、受話器を一瞬口元から離して声を張り上げた。
「電報だ！」
電話の中の声は続けた。
「さくらさく、がくせいいいんかい、です」
「さくらさくですね！さくらさくですね！」
「はいそうです。それでは、よろしいでしょうか。ことによると配達は明日になるかも知れませんが……」

「ああ、いいですよ」
美恵子は啓太が「さくらさく」に念を押していたことから、合格を察して、
「おとうさん、さくらさくね！」
「そうだ！やったね、美恵子、おめでとう」
後は声にならなかった。
「やった！」
「やったな！」
「よかったね、美恵子、頑張ったものね」
妻は、眼を擦っている。
そこへ、また、電話である。美恵子が出る。
「はい、えっ！そうですか。はい、でも、はい、ほんとうに……そうですか。ありがとうございました」
声の調子が沈んでいる。啓太も妻も、何事かと美恵子を見守る。さっきの電報は間違いであったのか。
「聡子はだめだったんだって、聡子のお母さんからよ。さっき、聡子から電話があって、わたしは受かったけれど、聡子は……落ちたんだって」
沸き上がった空気が、急にまっ白になった。
立場を異にすることになった友人のことを思えば合格の喜びに沸き立てばかりいられない。
美恵子は、友人の聡子のこともあってか、自分自身のことがまだ信じられないようである。啓太に促されて担任の教師に合格の報告の電話をいれた。
「まだ、電報も見てませんし、正式なものは何もないので……本当かどうか……ええ、合格したようです」
信じられない、夢見心地での電話報告である。
家中が何か夢の世界に誘い込まれてしまったような空気になった。
「そうか……聡子ちゃんは気の毒にね。でも、どこか他も受けているんだろう」
「そう、聡子は早稲田やとんじょ（東京女子大）があるけれど、でもね」
ともども喜び合えることの期待が外れて美恵子は喜びと落胆の狭間にいる。
雪のせいか外は静かである。
啓太の心に美恵子の大学合格を我が家には出来すぎの大きな出来事として嬉しさの輪が広がって行く。
家の前に、ボ、ブ、ブ、ブとバイクの音がして、人の気配が玄関の戸を開ける。
「斉藤さん、斉藤美恵子さん、電報です」
美恵子が走って出る。
「合格の電報か？」
「そう」
「おっ、ちょっと待ってもらえ！」
啓太はサイドボードから白紙を引き抜き、それに千円紙幣を包むと玄関で何ごとかと驚き
「いや、それは困ります。いや、いや」

と断る電報配達員にその包みを押しつけ
「この電報は、娘の大学合格の電報なんで、雪の中をこうして届けてくれたお礼というわけじゃなくて、これは合格の内祝いなんだよ。嬉しい気持ちをとっておいておくれ」
「そうですか、いやー、おめでとうございます。でも、困ったな。……じゃあ」
一時静まり返った空気がこれで明るさを取り戻した。
「どれどれ、とおさんに電報を見せな。ふーん、さくらさく、さくらさく、か」
《さくらさく》嬉しい言葉だと思う。厳しい冬の終わりに梅も咲き、桃も花をつけるけれども、それは、冬の佇まいの中にそこはかとなく春が近いことを思わせるが、冬は去ったぞ！春だぞ！と明るい空を唄うのは何といっても爛漫の桜だと思う。《さくらさく》、試練の末の喜びを言い表すのにこれ以上の表現はないのではないか。
啓太の胸はじーんと鳴った。
美恵子も電報を見て、どうやら夢が少し現実に近くなったようである。顔が明るくなった。
啓太は、立ち上がって、ガラス越しに外を見る。
舞い降りる雪のひらひらは大きいが、もう春の雪である。物陰には白い覆いが広がっているが、道に落ちる雪片は、路上の溜まり水にすぐ溶けて、積もることはないようだ。外は薄暮の墨色が濃くなるのに家のなかは明るい。それぞれは平常の動きをしながらも興奮の余韻を引いている。啓太も余韻が吐息になって出る。
「美恵子、明日は、学校にちゃんと報告しな。先生方が皆心配してくださっているんだ」
啓太は、自分にいい聞かせるようにいって床に就いたが、周囲が静まると興奮の残り火が赤みを増し、また燃えてくるのであった。啓太にとって、いや、斉藤家にとって娘の大学進学は思いがけない出来事である。そして、美恵子は教師への道を選ぶという。思えば心が昂ぶる。それにしても、美恵子の今日の大学合格に啓太は親として何程の力を尽くしたであろうかと考える。教育なんてことには特別のことをしたことは何もない。やれることは石焼き芋を焼くことだ、これからも焼かなきゃいけないと思う。そして、学校の先生方のことを考える。美恵子の大学進学についての担任教師との面接の折、啓太の〈頑張ってみる〉という答えに〈ありがとうございます〉と頭を下げた担任の様子が思い浮かんでくる。そうして、学校の先生方への感謝がふつふつと湧いてくるのだった。
啓太は、そうだ、明日は、高等学校に石焼芋の竈を持って行こう、焼きたてのうまい焼芋を先生方に沢山食べてもらおう、そう思った。

（一九九二・三・二八）

「風のふしぎ」ほか二編

青木昭成

風のふしぎ

産卵の音響
このふっと心が空になる庭園
どんなに眼をこらしてもみんな木賊の
あきれたつまらなさに見えてくる
花壇のへりは扇形になっていて
老人の器にもられた夢のよう
砂にこぼれおちている蜜蜂の
死んだ頭は褐色でグロテスク

人は腕のわずかに蒼い血管を押さえ
人の生命の時間を測る
思惟を止めてしまって
四角いフレームのガラス窓の外に佇むと
すっかりは奥行きが透けとおらないで

そういわれても仕方がないほど気安く
木の間がくれの空洞から空洞へと
ながし目を使うように彷徨ってしまう
浮くともなく沈むともなくやわらかい風に
首すじをさする風におくれ毛のように
とけそうな風に見送られて晩春の
まぶしい風のふしぎ

ジキタリス咲く果樹園の門が丸い石で
なっていて崩れそうになっていた
若い竹の根をやがて裸にする深いあの溝
あの葛が蔦色にはびこる辺りから天国へ
たとえば路傍をよぎる穏やかさ
この夕日がにじむレンガの堆肥小屋の
かげで女が苺の株を分けているのに逢うと
眼をそらしたくなる

シャベルを担いだ男が帰ってきた
その偶然にうろたえて会釈し
いつとはなしに息を殺して
コロナのようでまばゆい西の山に
右手の挨拶をする
果てしなく永遠のすみかを求めて
靄のなかへ思わず帽子を投げいれる

風のふしぎ

内外ともに映しているこの謎は
風のふしぎ

赤楝蛇がでている芝生のみやこ草
いぬ柘植の垣根の白波よせる花の
破れを抜けて男も女も口ごもる
染色工場の物干しがそびえている下では
ものほしげな世界に手をかざすのだ
この正午の見えない悲鳴

へちまの畑でてんとう虫を見つけた
緋いマニキュアみたいに鮮やかな艶と
茶色の斑紋を背中にせおっていた
しかし新緑をくぐるとき
人間の魂はしだいに剥脱する

〔デュエット〕より二題

酒と壺

きみはぼくの壺である
ぼくはきみの酒である
きみにとってぼくが単に酩酊
の如き存在であるときも
ぼくにとってきみは一個の智恵である
だけどこの実際の
窓辺をよぎる風に震えるぼくに
どうしてきみが
限りある青磁の姿であるのだろう

真昼の月の下を
蒼白な酒よ
おまえに酔いしれて一人の男が
どこまでもさまよう
赤土の粘道でよろめく彼の
鞄のかた隅にころがって

彼の肩から吊り下がっている壷よ
だがきみがある処でぼくはつきない
しかし　きみが砕けた処では
ぼくの影だけがただよう

「はじめ」の「おわり」

肩をくんで青葉の翳りにいる二人の
足跡はすべて虹である
ここに「はじめ」があって
にもかかわらず「おわり」があって

ぼくらは一個の蝸牛
これ以上孤立することのないほど
身をかばいあい
これ以上落ちることのないほど
沈黙を深める

いつの間にか位置をなくし
視野をなくしてしまって
なおも通りぬけねばならぬ生と
憂愁とをもたない

君の周囲の空洞にすべりこむと
ぼくは限りなく無口な質となる
ぼくの内部の混迷にまじると
君は果てしない

もはや立ち去ることしか
ぼくと君の飽満にはない

修羅の銀行（七）

三戸岡道夫

だが、おかしいのは預金だけではなかった。Y電気の貸出金にも変な現象が起きはじめていた。

九月の三十日であった。貸付の宮本係長が桜川のところへやってきて、

「Y電気は、今月の貸出増額を、要らないと言っておりますが」

首をかしげながら、そう報告した。

「要らない？　どうして。Y電気へは今月、五千万円の貸出増額を予定しているんだろう」

「そうです。月初にその返事は、Y電気へしてあります。経理担当者の方からは、是非お願いしたいと言われていたんですが、今日になって急に断わってきたのです」

「理由は？」

「お金はいくらあっても足らないが、松橋常務の指示で断わってきたらしいのです」

また松橋常務かと、桜川はうんざりした。だが、次の瞬間、いったい松橋常務は何を考えているのだろう、何かあるなと、桜川は思った。

現在は金融引締めの最中である。企業が銀行から金を借りるのは、なかなかの難事といってよかった。Y電気といえども、例外ではない。四月から九月までの上期中に、Y電気は十億円の借入増額を取引銀行に申込んでいるが、申込み通りの金額に応ずる銀行は、半分以下であった。帝都銀行への申込金額は三億円で、すでに二億五千万円は貸出し済みである。九月に残りの五千万円を出せば、百パーセントの達成になるわけで、まっ先に帝都銀行へは、

（よく全額出してくれました。さすがは主力取引銀行だけのことはある）

と、ほめられても然るべきなのに、それを断ってくるとは、どういう神経なのかと、桜川が首をかしげていると、宮本係長も、

「わたしもおかしいと思いまして、さっき藤巻部長をちょっと喫茶店に引っぱり出して、コーヒーを飲みながら聞いてみたんです。すると驚いたことに、松橋常務が陽光銀行から、余分に借りる交渉をしているらしいんです」

「陽光銀行から？　ふーん」

桜川の中に、不安のさざ波が起きた。

「だから、その分だけ、うちの銀行からの借入れが、減ったというわけか」

松橋常務なら、やりかねないな。預金だけでなく、借り入れも、減らそうとしているのだ。

借入金残高の多寡は、企業と銀行との、取引親密度のバロメーターである。

桜川は直ちにY電気へかけつけた。そして松橋常務へ、

「今月の五千万円の増額はご必要ないというように、貸付係の方では聞いておりますが、本当なんでしょうか」

最初はそう柔らかく切り出した。すると、松橋常務は、

「ああ、借りると金利がかかるからね」

せせら笑うように、そう答えるのであった。いくら見下した言い方をするとはいえ、もう少しなんとか言いようはないものかと、桜川はむかっ腹が立った。

（それなら、陽光銀行から借りる金には、金利はつかないのですか）

そう言ってやりたかった。だが、そんな子供だましの喧嘩をするわけにもいかないので、

「そんな冗談はおっしゃらないで下さい。とにかく、お申出通り出させていただくように、月初から用意しておりますから、予定通り貸出しをさせてください。お願いいたします」

「いや、折角だが、今月はもう金が要らないんだよ」

「すると、陽光銀行さんや、他の銀行さんからの借り入れ増額も、中止なさるのですか」

桜川は一歩踏みこんだ。このまま帰ったのでは、部下に説明が出来ない。陽光銀行の名前を出せば、すこしは動揺するかと思ったが、松橋常務は平静そのもので、

「いや、陽光銀行は別だよ。陽光銀行からは、予定通り借りる。いや、予定を上廻って借りようと考えている」

「陽光銀行だけ、どうしてなんですか」

「桜川君、陽光銀行は熱心だよ。それに、大変積極的なんだ。銀行の資金事情が苦しくても、こちらからは何も言わないのに、もっと是非借りてほしいと頼んでくるんだよ。さすが一流銀行は違うね。感心したよ。その熱心さに感心して、借りることにした」

明らかに帝都銀行への嫌味であった。だが、どこまでが本当で、どこまでがフィクションなのか、わからない。

「でも、わたくしたちも一生懸命やっております。どうか、陽光銀行さんの上積み分は中止して、帝都銀行から借りてください。お願いします」

「いや、陽光銀行とはもう約束してしまった、とり止めるわけにはいかない。借り入れ手形も渡してある。それに、陽光銀行は本部から、朝倉常務がわざわざ挨拶に来てくれたからねえ」

桜川は瞬間、ドキンとなり、嫌な話題になったなと思った。

「そう言えば、陽光銀行だけでなく、東山銀行の深見常務も、大海銀行の望月専務も来たよ。西山銀行なんかは、副頭取の石岡さんが挨拶に来た。どの銀行も、決算月は熱心だ。本部から常務が挨拶に来ないのは、主力取引銀行だけだな」

桜川の中で、五反田支店まで来ていながら、Y電気へは来ようともしなかった江間常務の顔が、稲妻のように明滅した。

こうして、とうとうY電気は、帝都銀行からの九月の五千万円の借り入れをしなかった。

Y電気の取引銀行は二十行ほどあったが、一応の水準以上の借り入れがある銀行は、七行である。その借入金額は、八月末で総額で六十億円になっていた。内訳をみると、主力取引銀行の帝都銀行が十六億円、準主力取引銀行の陽光銀行が十億円、その下の東山銀行、大海銀行、西山銀行など五行で二十億、その他に長期信用銀行などからの借り入れが十四億円ほどあった。

帝都銀行と陽光銀行との差は、六億円である。

ところが、帝都銀行からは九月予定の五千万円は借りず、逆に陽光銀行からは予定の四千万円に加えて、三千万円を上積みして借りた結果、帝都銀行と陽光銀行との差は、六億円から、五億三千万円に縮まったのであった。

もちろん、これで帝都銀行と陽光銀行との立場が逆転したわけではないのだから、それほど大騒ぎする必要はないのかもしれない。しかし、このようなことは、これまでのY電気との歴史において、なかったことである。

桜川としては、放置しておくわけにはいかなかった。

十月に入ると、桜川は直ちに松橋常務を訪れた。そして、九月の中止となった五千万円を、ぜひ借りてほしいと懇願した。すると、松橋常務は、

「今期からは借入計画を、少し変えようと思っている」

と、桜川をどきりとさせるようなことを、平気で言った。

「と、言いますと、どのように変わるのでしょうか」

そう聞き返す桜川の心配げな顔を、松橋常務は心地よげに眺めながら、

「まだ、あまり細かく詰めてはないがね、考え方だけを言っておこう。要はだね、借入銀行の層をもっと厚くしようということだ」

「具体的に聞かせてください」

「簡単に言えば、どの銀行からもたくさん借りるには、

どうしたらいいか、ということになるかな。もっとはっきり言えば、これからは帝都銀行以外の銀行から、たくさん借りることにしようと思う」

「えっ！」

桜川は絶句に近い声をあげた。

「そう驚かなくてもいいよ、桜川君。そんなこと、当り前のことじゃないか。金融の常道、資金調達の定石さ。Y電気に入って、わたしも四ヵ月たつがね、いろいろ反省してみると、どう考えてもY電気は、銀行借り入れが下手なんだな。それは、あまりにも主力取引銀行だけに頼りすぎているからだと、いうことがわかってきた。藤巻なんていう爺さんが、古い感覚で、十年一日のごとくやっていたのだから、仕方がないがね。借入金も、預金も、メリットの配分も、なんでも帝都銀行が多ければいいと思っている。爺さんの老いの一徹という奴だな。それが、桜川君、大間違いなのさ」

「でも、それはそれなりに、理由があってのことではありませんか。Y電気が危機に陥ったとき、他の銀行が金を貸さないのに、帝都銀行は貸した。その恩義を感じて…」

桜川の言うことを、松橋常務は終りまで言わせないで、

「そんなことなら、わたしも知っている。だから、これまでは、それでよかったかもしれない。だが、これからは、そんな義理人情ではいかないよ。Y電気も大きくなった。これからは半期で、金が十五億、二十億と要るようになる。そうなると、主力取引銀行だけを頼りにしていたのでは、思うように資金が調達できないよ。取引銀行全体の協力を得ないとね。主力取引銀行ばかりを大切にしていると、他の銀行がついてこない。そうだろう、桜川君」

「……」

桜川は返事につまった。理論としては、たしかにそうに違いない。松橋常務はまちがったことを、言ってはいない。しかし、被害を受ける帝都銀行の立場はどうなるのだ。

桜川は無念の唇をかみしめた。

「その上、主力取引銀行が頼りにならない銀行ときてはねえ。桜川君、言い訳をしたって駄目だよ。それはわたしが一番よく知っているんだから。大蔵省出身の、商売のやり方を知らない頭取や常務が、わがもの顔で振舞っているようではね。それに、あの、おべっか専務の保川君が審査部担当だっていうじゃあないか」

「ええ」

「あんな、へなちょこ専務が審査の担当じゃ駄目だよ。そんな銀行なんて、危くて信用できないね。安心して、頼っていられない」

松橋常務は保川専務の名前を、にが虫でもかみつぶすような口調で言った。

かって保川は松橋とは、帝都銀行の双璧と言われ、ライバルであった。それが、保川は円城寺頭取に功妙に取り入ったばかりに専務に昇進し、将来の頭取とまで言われた松橋の方は、円城寺頭取に反抗したばかりに、常務のまま銀行から追放されたのである。その仇を、Y電気で討とう、というのであろうか。

「だから、今期からは、たくさんの銀行から、たくさん借りることにしたわけだ。そのためにも、預金を主力取引銀行にばかり集めておいたのでは、他の銀行が承知しないからね。これからは、帝都銀行の預金はもっと減らすし、その他のメリットも、どんどん他の銀行へ分散するつもりだよ。経理はガラス張り、それがわたしの方針だ」

陰ではこっそり陽光銀行と連絡をとりながら、ガラス張りも、へちまもないではないかと、喉まで声が出かかったが、桜川はぐっと我慢した。そこまで言ってしまっては、終りである。こうなってくると、陰で連絡をとっているのは、陽光銀行だけではないのかもしれない。東山銀行とも、大海銀行とも、同じように裏でやっているのを、桜川が知らないだけなのかもしれなかった。

「もう、古い感覚では駄目なんだよ、桜川君。経理の近代化が必要だと、つくづくこの頃思っている。藤巻の爺さんでは駄目だね。爺さんも、限界だよ」

限界とは、具体的にどういう意味なのか。松橋常務はそろそろ藤巻部長の、追放を考えているのかもしれないと桜川は思った。

こうして十月に入り、期が変っても、Y電気への貸出しはふえなかった。

陽光銀行をはじめ、東山銀行、大海銀行と、他の銀行の貸出額は増えていくのに、帝都銀行の貸出だけは、横這いであった。

もちろん、帝都銀行の貸出金は一番多かったから、他の銀行が少しぐらい増えたからといって、すぐ追い抜かれる心配はなかった。しかし、他の銀行との差が、じりじり縮まってくるのは、ちょうど水位が刻々と上ってくる水牢に投げ入れられた感じで、うす気味が悪く、不安であった。

とくに陽光銀行とは、松橋常務がどこで、どんな話しあいをしているのかわからないだけに、油断ができなかった。とりわけ陽光銀行の貸出金増加のスピードは、他の銀行よりも早く、明らかに意図的なものが感じられた。帝都銀行の主力取引銀行としての立場が、脅やかされ始めていた。

（やはり松橋常務は、陽光銀行へ主力取引銀行の逆転を狙っている）

そう思うと、主力取引銀行の立場は死守しなければならない義務感、責任感から、桜川の気持ちは緊張した。

さらに桜川を苦しめたのは、預金や種々のメリットも、急速に他の銀行へ分散されていくことだった。藤巻経理部長の頃には帝都銀行へ集中していたものが、今度は逆流しはじめたのである。

反対によろこんでいるのは、他の銀行の支店長たちであった。甘味に密集する蟻のように、彼等はせっせと松橋常務の許に足を運んでは、預金をもらって帰る。それを松橋常務は、わざと桜川の見えるところでやるのであった。桜川が経理部の応接セットに腰掛けて待っていると、後から入ってきた陽光銀行の支店長を、松橋常務はわざわざ手招きで呼び寄せ、

「陽光銀行さんは先月も貸出を増やしてくれたから、はい、今月の預金だよ」

そう言って、小切手をひらひらさせながら渡し、

「月末に勘定を締めてみて、金があまったら、またあげるから、もう一度おいでなさい」

「いつもご配慮ありがとうございます」

陽光銀行の支店長は、膝まで届きそうな頭を下げて、

「常務さんのおかげで、今月の預金目標も達成できそうです。ほんとうに、常務さんの方へは足を向けて寝られません」

「貸出金のふえない銀行へは、預金をやるわけにはいかないが、ふやしてくれた銀行へは、やらないといけないからね。わたしはこう見えても、義理堅いんだよ」

桜川へ聞こえるように、松橋常務はわざとそんな言い方をした。すると陽光銀行の支店長が、

「常務さん、その義理堅いところに甘えさせていただいて、もう一つ、お願いしてよろしいでしょうか」

「ああ、なんでも、甘えていいよ」

「ありがとうございます。実は、前からお願いしております、アメリカ向け輸出の外国為替の取り扱いです。これまではわたしどもでは、一妻もお取扱いさせていただいておりませんが、この辺でぜひお願いしたいと思いまして」

「ああ、それならば、今月から陽光銀行へもあげようと思ってね、もうY電気貿易の方へ言ってあるから、そちらへ貰いに行くといい」

Y電気の輸出部門は、Y電気貿易という別会社で運営されていた。

「ご配慮ほんとうにありがとうございます。きっと朝倉常務もよろこぶと思います」

大袈裟によろこぶその姿を、松橋常務はくわえ煙草で、満足そうに眺めていた。それはちょうど、松橋常務が帝都銀行在任中に、常務室の椅子にふん反り返り、集ってくる支店長に、貸出の承認を与えていい気持になっていた、その姿を髣髴させるものがあった。

陽光銀行の支店長が帰っても、桜川へ声はかからなかった。かからないままに、後から来た他の銀行の支店長

たちが尾を振って、松橋常務のデスクへと寄っていく。その姿を横目に見ながら、桜川は唇をかみしめた。

桜川は支店長として、帝都銀行の主力取引銀行としての座を、なにがなんでも死守しなければならなかった。長い時間をかけて築いてきた主力取引銀行の立場が、その主力取引銀行出身の人間の手によって、崩されようとしているのである。こんな矛盾が許されていいのであろうか。

しかし、難関なのは、松橋常務が、Y電気の資金調達力の強化という、錦の御旗を正面に据えて攻めて来ている、その作戦の巧みさであった。

企業が必要な資金をいかにスムーズに調達するか、これが経理担当役員の最も重要な任務である。従来のY電気にこの戦略が欠けていたことは、否めなかった。主力取引銀行のみを肩入れする結果、他の銀行があまり協力しないきらいがたしかにあった。

飛躍的な拡大をつづけているY電気は、毎期、大量の資金を必要としていた。そのために、いま松橋常務が考えているのが、ばらばらに取引している主要な七つの銀行を、一つの融資団に結成し、七つの銀行が協力して金を貸す、という資金調達強化策であった。従来のように、経理部長がそれぞれの銀行へ、ぺこぺこ頭を下げて頼みこむのでは、間に合わないのである。そのために、

「今年の冬の年末資金借り入れからは、協調融資の形をとりたいと考えている」

と、松橋常務は言い出していた。

これまでY電気が、協調融資を組むようなことは、かってなかった。Y電気にとって画期的なことと言わねばならない。

協調融資というのは、戦後の資金不足を背景に考え出された銀行からの借り入れ方式で、昭和二十年代、三十年代、四十年代と続き、主として大企業が多額の資金を借り入れする場合に使われた方式であった。個々の銀行とばらばらに交渉していたのでは、らちがあかない。そこで取引銀行で協調融資銀行団というものを結成し、そこから足並みをそろえて、資金を調達をするのである。個々の銀行へは、その融資シェア（比率）から割り出した金額が、割り当てられるのが普通である。

協調融資銀行団の中から幹事銀行が選定される。その幹事銀行が中心になって、各銀行の貸出を促進していくから、貸出しがスムーズに行われるわけであり、幹事銀行には、主力取引銀行がなるのが一般のならわしであった。

「どうだい、いい考えだろう」

松橋常務は、来る支店長、来る支店長に、そう言って同意を求めた。

「さすが松橋常務さんの考えられることは違いますね。

先手、先手と手を打たれて、わたしたちの出る幕がありません」

どの銀行の支店長も追従に余念がなかった。

「主力取引銀行が頼りにならないからね。会社の方で知恵を絞らなくてはならないんだよ」

考えてみれば、Y電気の資金調達力が強化されるのは、結構なことである。Y電気の経理部にとっても一つの革命であった。だから、松橋常務から、

「どうかね、わたしの考えは」

と問われれば、桜川としても、

「結構なお考えですね」

と答えざるをえなかった。だが、そう答えるすぐ後から、桜川の中には、

(だが、狙いは本当にそれだけなのか)

という黒い疑惑が、頭を抬げてくるのであった。

(協調融資構想の底に、主力取引銀行転覆の陰謀が、ひそんでいるのにちがいない)

協調融資の仮面の下で、陽光銀行の貸出金のウエイトを高めていき、いつの日か、射程距離に入った段階で、陽光銀行が一挙に帝都銀行を追い抜いて、主力取引銀行の座に躍り出るということは、十分考えられることであった。

寺本社長の母親が、八十七才の高令で死亡したのは、ちょうどそんな頃であった。

親孝行をもって知られる寺本社長の悲しみは深く、通夜の席で、

「来年が八十八の、米寿の祝いでしたので、盛大にやろうと家族でたのしみにしていたのに、残念でした。そのために、赤いちゃんちゃんこもそろそろ注文しなくてはね、なんて話していたところだったんですよ。ええ、倒れたのは突然でした。前の日までは、テレビなど見て元気だったんですが、急に心臓に来まして…」

寺本社長は来る人ごとに、眼をまっ赤にさせながら、訴えるように喋った。

十畳と八畳の日本間をつなぎ合せた大広間に続けて臨時に庭に張り出した広縁も接続してあったので、かなり広々とした通夜の席が設けられていた。その中で、Y電気の社員たちが、こまめに走り廻って働いていた。

顔の広い寺本社長の母堂の通夜ということで、弔問の客はひきもきらず、焼香を終えた客たちが、広間のあちこちに座って、精進落しの料理をつまんでいた。Y電気の役員たちがその接待の役につき、松橋常務も当然それに混っていた。

桜川が、次長と、貸付係長、渉外係長の三人をつれて駆けつけると、陽光銀行の支店長以下はすでに来ていて、祭壇の右側の席に座っていた。

桜川が寺本社長にくやみを述べ、焼香をすませると、

藤巻経理部長が寄ってきて、

「さあ、どうぞ、どうぞ、こちらへ来て、一杯やってください」

空いている席へ案内した。そこは祭壇を挟んで陽光銀行のグループと、左右の位置であった。桜川は陽光銀行の支店長と眼が合ったので、軽く会釈した。その横に松橋常務の後姿が見えた。

「さあ、さあ、支店長さん、召し上ってください、遠慮なく」

藤巻部長はビールをコップに注ぎ、桜川の方へは盛んに気を使うのだが、陽光銀行の方は意識的に無視しているところがあった。桜川は、こちらに背を向けてビールを飲んでいる松橋常務の後姿が、妙に気になった。松橋常務の背中には、帝都銀行の連中など眼中にないといった態度が、ありありと見えるのである。その桜川の様子に気付いた藤巻部長は、

「あちらさんは、あちらさんで、やっていますから、いいんですよ」

と、老いた顔をすこし曲げて、にべもなく言った。

松橋常務は煙草をのみ、ビールを飲みながら、前に座った朝倉常務に、さかんに話しかけていた。陽光銀行では本部の重役と、支店長たちとが、一緒に来ているのだった。道理で人数が多いはずだ。こちらは四人なのに、向うは少くとも七、八名はいる。その桜川の心の動揺を察したのか、藤巻部長が、

「あの朝倉常務さんは、松橋さんとは大学の同期ですってね」

と教えてくれた。

「審査部担当なんでしょう」

「そうです。ぞから、松橋さん、陽光銀行の本部へ、あの朝倉常務さんに会いによく行くんですよ。肝心の帝都銀行の本部へは、ちっとも顔を出さないくせに」

藤巻部長の口調には、毒があった。それは、最近、協調融資の導入によって、経理部の実権が完全に松橋常務の手に移ってしまい、次第に遠ざけられてしまった藤巻部長の、怨念によるものだった。

「ねえ、支店長さん、松橋さんがああまでして陽光銀行に接近したがる下心を、用心しないといけませんよ。松橋さんって、頭のいい人です。腹の中で何を考えているか、わかったものじゃありません。わたしなんぞ、とってもついていけませんよ。『古くて駄目だ、近代的センスがない』と、二こと目には松橋さんから言われています。わたしなど、もう要らないから、出ていけ、といわんばかりの態度ですよ。でも、その態度は許せませんよ。それはたしかに仕事の力量は、松橋さんの方が上です。そのことは、わたしも認めます。そこまで、わたしだって馬鹿ではありません。でも、わたしは、Y電気の創立者の一人ですよ。寺本社長と、小神常務と、このわ

たしの三人が、福島の山の奥から出て来て、敗戦の焼跡の中から、Y電気を作り上げたのです。その苦労も知らずに、途中からぽっと入ってきて、好き勝手なことをやっている、絶対許せません」

藤巻部長の話は、いつしか怒りと愚痴の、混合したものになっていくのだった。

その時、人口の方にざわめきが起きたかと思うと、三、四人の人間が入ってきた。その気配いをいち早く察した藤巻部長は、首を廻して、

「あっ、支店長さんのところの、保川専務さんがおいで下さいました」

入ってきたのは保川専務と、横大路審査部長、それに秘書室のメンバーであった。さきほどから、本部の役員はどうしたのかと、気をもんでいた桜川はほっとした。

保川専務が寺本社長におくやみをのべ、焼香が終ると、藤巻部長がするするといった感じで、その方に寄っていた。普通であれば、主力取引銀行の専務が来たのであるから、経理担当の松橋常務がまっ先に迎えに出るべきである。しかし、松橋常務は陽光銀行のグループの中に腰を落着けたままで、動こうとはしなかった。その分をカバーするように、藤巻部長が、

「さあ、さあ、どうぞ、こちらへ」

と立ちまわって、保川専務たちを桜川のいる席の方へ案内した。

その時、保川専務と朝倉常務との、視線が合った。もちろん二人は、銀行間の付き合いで、顔見知りである。儀礼的な会釈をした。

しかし、松橋常務は保川専務が来たのを知っていながら、知らん顔で、背を向けたままであった。

保川専務の来場で、藤巻部長は急に活気づき、ちょこまかと世話女房のように動きながら、

「さあ、さあ、専務さん、どうぞ、ごゆっくり召し上ってください。ビールにいたしましょうか、それとも、お酒…」

やっと援軍来たるといった感じで顔をほころばせ、自分も一口ビールを飲んだ。

松橋常務と保川専務とは、つい目と鼻の先にいながら、一言も口をきこうとはしなかった。二人はつい最近まで、同じ銀行で机を並べて仕事をしていた間柄である。普通ならば、互いに、

（やあ、やあ、お久しぶり）

（いや、こちらこそ、ご無沙汰ばかりで、どうですか、一杯）

と、たちまち肩を並べて酒を注ぎあい、近況を語りあうのが当然である。それなのに、二人の間には、そのような気配りはまったく感じられないのであった。事情を知らない人々からは、

（なぜ二人は一言も喋らないのか）

と、疑惑の視線が投げかけられているのだが、二人ともそれを無視しつづけていた。

（せめて保川専務の方からでも、ちょっと声をかけてくれるといいのだが）

と、桜川は、落着かなかったが、保川専務の方にもそれを期待するのは、無理のようであった。

やがて、陽光銀行グループの方に、動きが起きた。帰り仕度に入ったのである。一行が玄関の方へ出ていくと、松橋常務もそれを送って、広間から出ていった。

それを見ていた藤巻部長の顔が、一瞬、けわしくなった。たまりかねた藤巻部長は、松橋常務を追って、玄関の方へ駆けていった。

しばらくすると、藤巻部長が決死の形相で、松橋常務を捕縛するようにして、保川専務の前へ、連れ戻してきた。玄関先で二人が激しく言い争った跡が、そのまま二人の固い表情に残っていた。が、松橋常務も保川専務も、顔を合わすと、

「やあ」

「やあ」

と、いっせいに声をあげて、如才なくお互いの肩をたたきあった。もちろん、いずれも世間態としての、大袈裟なゼスチャーにすぎないのは言うまでもない。だから、

「お元気で…」

「ああ、おかげで」

短い言葉を投げあっているだけで、『まあ、座ろうよ』とか、『どう、一杯』というような雰囲気へは、進展していかなかった。落着かない松橋常務の視界に、その時、一人の客の姿が映った。それを機会に、

「じゃあ、また。ちょっと客が来たものだから」

そそくさと松橋常務は、新しい客の方へ行ってしまった。その後姿を眼で追いながら、藤巻部長は、

「松橋さんがお相手しなければならないような、大事なお客でもないんですよ」

にがにがしげに言った。

それを機会に、保川専務も桜川も帰途についた。

（つづく）

千三百年目の仇討ち（四）

佐々木一郎

九

地球の地表の約二十五パーセントをおおうアフリカ大陸は、優に、ヨーロッパ大陸、アメリカ合衆国、中国の三大陸をあわせた広さの面積をもっている。

十九世紀末から二十世紀にかけて、ヨーロッパの列強は、このアフリカを武力で分割・占有した。

アルジェリアは、フランスの植民地として、このとき以来約百五十年間、屈辱的な日々を送るようになったが、ほかのアフリカの民族と同じく、絶え間なくゼネストやゲリラ抗争を繰り返してきた。特に、第二次世界大戦で、ドイツ軍が侵入してきたときなどは、「北アフリカの星」運動をはじめ、今までにない激しさで抵抗した。

フランス陸軍は、その対策として、外人部隊（傭兵隊）の兵力を増強して、アルジェリアの弾圧に当たった。

恋人リキとの仲を割かれ、死に場所を求めてヨーロッパを放浪していた竜造寺芳栄（よしひで）青年が、この部隊の門を叩いたのは、ちょうどこのような時期であった。

十

レジョン・エトランジェール（フランス陸軍外人部隊）の司令部は、アルジェリア第二の近代都市オランから、南に七十キロメートルほど奥地にあるシジ・ベル・アッベス町にあった。

強烈なアフリカの太陽を背いっぱいに受けて、緑の植え込みの間に黄色い建物が散在する広大な敷地が、司令部だった。主棟は、右手に聳える三階建てのビルである。厳重な鉄門の傍らにあるボックスで立哨している歩哨に「外人部隊隊員採用通知」を提出すると、

「レジョネール（外人部隊）？」

「そうです」

うなづくと、奥の歩哨詰め所に入って行き、やがて一人の男を伴って出て来た。たぶん、担当官なのであろう。

「それなら、この男の後について、隣の適性検査会場で検査を受けてから兵舎まで行ってください」

案内に立ったレジョネール（隊員）の体つきを見て、芳栄は思わずたじろいだ。背は芳栄とさして変わらないメートル七十五センチ前後なのだが、体が筋肉の塊のようだ。それが、坊主頭と妙にマッチして、恐ろしいほどの威圧感を与える。芳栄にしても、長い放浪生活で、体の筋肉は引き締まり、黒く焼けた顔からは慧々（けいけい）とした眼光を覗かせる風体にはなっていたが、とても太刀打ちできそうもない。（この男と三十分間のデス・マッチをやらせられたら、私は、確実に殺されるな……）

適性検査会場は、二階建ての、広いグラウンド付きの体育館ふうな建物だったが、検査は長く、厳しかった。

ふつうの検査場と違って、ここの検査目的は、戦場で敵と直面したとき、はたして相手を倒す能力があるかどうかを、判定することであった。戦場では、わずか一秒の差が生死を分けるという。〇・一の視力の差が小隊の全滅を救うことになる。

そのかわり、国籍や前歴は、あまり問わなかった。

白いケピ帽を被った隊員たちと一緒に、兵舎に向かった。兵舎は、敷地の一番奥の緑色の屋根の建物だったが、隊長室、会議室、応接室などのほか、食堂、バスシャワー室、寝室、倉庫、トイレなどが完備しており、一応、このアルジェリア、モロッコ界隈では、中流ホテル・クラスの設備という。

すでに、先着者が八人来ていたので、最後の芳栄の到着を待って、早速、結成式が行われた。

「私が、フランス陸軍外人部隊アルジェリア第二中隊第一小隊長横田公彦だ。ほかに、フランス人戦闘教官のクルーセル中尉がいるのだが、今年は、私が教官資格を取ったので、多分、あまり顔を見せないのではないかと思う……。それから、諸君のほかにあと四人隊員がいるが、昨年の生き残りでもあり、傭兵のプロでもあるので、明後日まで休暇を許されている」

芳栄は、自分とほぼ同年配に見える、この若い小隊長の落ち着いた、爽やかな話声に、なぜかほっとした。

（彼は、明日にでも直面しなければならない〝死〟の恐怖が、頭にこびりついて離れないのだった）

横田少尉は、浅黒く引き締まった、気品のある顔立ちの青年だった。それでいながら、少しも冷ややかさを感じさせない雰囲気をもった、すくなくとも、芳栄が今までに出会ったことのないタイプの人物だった。

横田は、芳栄の方を向くと、

「竜造寺芳栄君だったね。君の名前は、ことによると、本名ではないのか？」

「はい。本名です。あの、仮名の方がよろしかったのでしょうか？」

「いやいや、そういう意味で言ったのではない。ここでは、名前なんかは、単なる符丁にしか過ぎないということを言いたかったのだ……。

先着の諸君には話したが、我々レジョネールは、死んでも、一円の弔慰金も貰えないし、階級も上がらない。戦闘中重傷を負った場合は、近くにいる隊員が射殺するか、本人が自決しなければならないのだから……。

生き残れば、俸給も上がるし、階級も上がる。つまり、生きた戦力でいる限り、普通の軍人と全く変わらない。

それから、脱走はご法度だ。射殺する。ほかの軍人のように、裁判や営倉は一切ない」

話がこの辺りまでくると、さすがに、隊員たちの顔付きもこわばってきた。むりもない。いくら志願して来たとはいえ、ここでは、人間として扱われないのだ。

「それから、部隊の構成について説明しておく。

諸君が正門から眺めた三階建てのビルが司令棟だ。司令官は、ヴェイガン準将。我々の所属する第二中隊長はピカール大尉。二メートル近い長身の上に、赤ら顔で垂れ下がったような鷲鼻だ。初めて会った者は、皆びっくりするが、本当は、話のわかる人物だ。

現在の小隊は、大体、国ごとに編成されている。人員は秘密だが、この小隊は隊長以下十二名だ」

横田の話が終わると、それぞれの自己紹介や兵舎生活の質疑応答が行われた。芳栄は、失恋から外人部隊を希望するようになったと正直に話したが、ここでは、誰も、それを冷笑する者もなかった。大部分の者は複雑な事情のある出稼ぎ者で、皆、無事任務を終えて、家庭に戻るつもりのようだった。横田小隊隊員であることを示す、ソビエト製小銃弾丸を細工したペンダントも配られた。

解散して、部屋に戻るとき、芳栄は、思わず廊下に立ち止まった。そこには、ヨーロッパでは見られなかった、真っ青なアフリカの空があった。

十一

横田は、隊長室で物思いに耽っていた。

明日の出陣に際して、司令部から受けた命令に釈然としないものを感じたからだった。

現在の戦況は、ドイツ軍に侵入されていたころよりも、ゲリラの動きは静かになっているはずだった。連合軍諸国の考えが、第二次大戦終了を機に、植民地解放に踏み切る気配が濃厚になってきていたからである。

ド・ゴール将軍も、インドシナとアルジェリアの二つの植民地問題を抱えて、しだいに、アルジェリアの独立容認に傾いているはずだった。それなのに、意外にも、ヴェイガン司令官の命令は、まるで戦線拡大にも等しい、

サハラ砂漠のオアシス、アバネーベルへの進駐だった。

横田は、小隊副長の中野軍曹を呼んだ。

中野は、進駐命令を聞くと、びっくりした顔で

「これは、驚きましたな。小隊長殿。去年は、たしかアルジェ市のカスパの警備が主でしたのに……」

カスパとは、元来は、アラビアや北アフリカの要塞都市の意味で、粘土瓦で作った四角い塔や要塞には二百年来の銃眼がいまだに残されている。現在は、アラビア人などの原住民が、市街地とは別に集落を作って住んでいるのだが、丘のうえにつらなる建物群の内部は迷路のようになっていて、アルジェリア独立運動の指導者たちの隠れ家に使われることが多い。

「それとも、最近大掛かりな軍事基地を設置したといわれるオラン市、コンスタンチーヌ市、ボーネ市周辺の防備に当たるとか……」

「レジョン・エトランジェールに対する信頼にひびが入ったのかな？」

中野は、レジョネール三年兵である。最初の一年目はインドシナ戦線で実戦を経験したが、その成績が優れていたので、上等兵に抜擢され、今年になって、軍曹に昇進し、小隊副長に任ぜられた。

「やはり、ド・ゴール将軍とヴェイガン司令官の対立は、本当だったのですな」

彼は、二十六才。沈着で、考え方が公正。横田の頼りにしている部下である。

「政府の戦線縮小命令に、現地軍司令部が従わないケースは、日本と同じだなあ……」

横田は、現在横暴を極めている、故国日本の軍閥のことを、チラッと頭に浮かべた。

「はあ……」

「……」

「ところで、小隊長殿。大変失礼なことをお聞きしますが、ことによると、あなたの御本名は、西園寺様ではございませんか？」

「……」

「……いえ、もし、ご不快でしたら、この質問は直ちに撤回いたします」

「いや、中野軍曹。その遠慮は止めてくれ。君も私も、明日にも戦死するかも知れない身だ。隠しておく気はないよ。たしかに、私は、西園寺ゆかりの者だ……」

「……」

「もっとも、私自身が、西園寺公彦を自分から名乗ったことはない。母も、死ぬまで、私に、父親の名を明かしてくれなかったし、周囲の人も同じだった。ただ、私が住んでいた家が西園寺公望（さいおんじきんもち）公爵の別邸の一つだったし、成人してから、興津の『坐漁荘』へ伺ったとき、女中頭のお滝さんから『あなたは、西園寺家のお血筋の方ですよ』と言われたことが、一度

あったぐらいかな……」

「いえ、そのくらいで結構であります」

「東京の大学を出るまでは、そこにいたが、ソルボンヌ（パリ大学文学部）に留学してからは、パリに住んで、一度も日本に帰っていない……」

「なにしろ、西園寺公望公と言えば、人臣第一位のお偉い方でしたからなあ」

「政変が起きて内閣総理大臣が辞表を提出すると、すぐ天皇のご下問に答えて、次の首相を推薦する元老であられたようだね……」

九十才を越えた西園寺は、元老の任を近衛文麿に譲ったが、結局、軍部の台頭は著しく、西園寺の国葬の翌年の昭和十六年、ついに、日本は戦争に突入した。

西園寺の養子には毛利公爵家の八郎が入り、その長子公一（きんかず）は、ロンドンのケンブリッヂ大学に留学した。公一とあまり年齢の違わなかった公彦は、公一を兄のように慕ったが、公一が学者の道を進んだのに対して、何を思ったのか、彼は、レジョン・エトランジェール入りしてしまった。もっとも、このころとなると、日本の国情が大きく変わって、自由主義者と目された公彦の身辺にも憲兵の魔手が迫っているのを察知したからでもあったが……。

「ところで、軍曹。その情報をどこで手に入れた？」

「はあ、マレー半島のランクーンあたりで、また聞きでありました。帝大のなんとかという学生さんが、フランスあたりで行方不明になっている西園寺公彦さんという方を探しているという……」

「何だって！　その探していた男の名は？」

「さあ、なんでも、帝大で、考古学とかを専攻している嵯峨博通さんとか、言ってましたな」

「うーん、やっぱり、嵯峨か！」

「ご存じの方でありますか？」

「ご存じどころか、大親友だ！」

公彦には、公一が兄ならば、嵯峨博通は刎頸の友だった。名前を呟くだけで、頬が緩んでくるほど懐かしい。

「あいつ、まだ考古学を続けることができたのか。今に、日本を代表する考古学者になる男だよ……。しかし、あの、婚約したとか恋愛中などとぬかして、我々同級生たちを散々悩ませおった、白鳥子爵令嬢ひさえさんとの仲はどうなっているのかなあ？」

十二

フランス陸軍外人部隊アルジェリア第二中隊第一小隊は、四週間の研修を終えて、駐屯地アバネーベルへむけて出発した。ここは、地中海に面した海岸地方とサハラ砂漠との中間にあるアトラス山地のふもとの村である。

モロッコからアルジェリアにかけて二千メートル級の山々のつらなるアトラス山地は、二重の山脈で、その間に湖沼の多いショッツ台地をはさんでいる。気候の面でわけると、海岸地方は地中海式気候で、ショッツ台地は気温差の大きい乾燥地帯、そして砂漠となる。

アバネーベルまでは徒歩で十七八時間。

横田小隊長は、途中、カラボー峠で小休止を命じると「休みながら聞いてくれ。まず、前方の説明だが、正面に見えるのが地中海、その向こうの陸地がスペイン、フランス、ポルトガルだ……。

それから、この山脈の先が隣国のモロッコ、そして、この方角に首府のカサブランカ、その先が有名なジブラルタル海峡だ。

このアトラス山地を下りきると、いよいよサハラ砂漠の入り口だ。ここでは今、大体三十七、八度だが、アバネーベルは多分四十度を越すものと覚悟していてくれ。サハラ砂漠に隣接するマリの首府のトンブクトウでは、数日前に六十度に達したという話だ」

新兵の間にどよめきが起こった。現在の三十七、八度でさえ、ほとんど経験したことのない猛暑だ。立っているだけで目の前がくらくらして、話を聞いているのが精いっぱいなのである。

「ハハハハ……。心配するな。ただし、この砂漠の中へ不用意な格好で出て行くと、迷子になって、三日で倒れるぞ。そして、次の三日間で白骨になり、そして、一週間もたてば、骨が崩れて粉々になって、それこそ、シロッコ（砂嵐）が一度でも吹けば、パッと四方に飛び散って、砂漠の一部になってしまう……」

彼は、ここで言葉を改めると

「さて、このあたりで、私の本音を話しておく。

兵舎で訓練中話した、『司令部命令』には、私は背くつもりでいる。例えば、『戦闘中に重傷を負った者は打ち捨てて前進せよ』という命令には服さない。そのときには、全員で協力して救助活動に挺身する。

地の果てまで一緒に来ている日本人同士だ。お互い助け合って、全員一緒に帰国しようじゃないか。

もう一つは、戦闘に際して、敵兵を殺さないことだ」

「えっ！」

いっせいに、驚いた目が、小隊長に注がれた。

「この説明の代わりに、一つの情報を提供しよう。

このアフリカの土地はいうまでもなく、原住民である二百余種の民族のものだった。それを、十九世紀末にイギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、ポルトガル、スペイン、イタリアの七大国が、武力によって分割し、植民地にしてしまった。そして、二十世紀はじめまでの二十年間に、一千万人の黒人を奴隷としてアメリカ南部、西インド諸島、南アメリカに輸出した。また、三千万人の奴隷を殺害した。

まさに、人間のする仕業ではなかった。

私は、これを聞いて、怒りで体が震えた。といって、私も事情がある身だから、今更、アルジェリア独立戦線側に加盟することもできないし……。そこで、絶対に、原住民殺りゃくには手を貸すまいと決心した」

十四

歩哨は、中野京三軍曹と森永振一郎二等兵だった。

二人は、銃を傍らの岩に立てかけると、自分たちも寄りかかって楽な姿勢を取った。

なるほど、砂漠も夜はしのぎよくなる。小隊の兵士たちは、寝袋に入って熟睡している。

オアシスといっても、このアベネーベルは、砂地に、屋根のないドロや草でかこったの家々が散らばっている程度で、周囲をナツメ椰子を植えた土地に、二百人ほどの多種族の原住民たちが散在しているだけだった。

森永は、はじめて見た夕刻の、市場の雑踏を思い出していた。裸電球の下で開かれている露店商たちの店には、どこから集まって来たのか、多彩な民族の者たち、ベルベル人、アラビア人、ユダヤ人、トゥアレグ人、ニグロ、さらには、真っ黒な顔に奴隷の印の焼き印を押されたスーダン人までが、原色の赤、青、緑、黄色など思い思いの服装で賑やかに群がっていた。

地面に敷いた布の上に並べられた品物は、玉ねぎ、豆、いわしの缶詰、ナツメ椰子、塩、砂糖、水、雑貨、服、化粧品など、かなり豊富だった。しかし、どの品物にも真っ黒にハエがたかっていたのには閉口した。

ふと、星空を眺めた。話には聞いていたが、まさに、満天の星であった。真っ黒い巨大なシルエットをつくっているアトラス山地を囲む空には、何千何万という星が光り輝いている。森永は、じっと眺めているうちに、自分の体が空に吸い込まれるような錯覚をおこした。

「おい、森永。お前、二十歳なんて申告しているが、本当はもっと若いんだろう？」

中野軍曹が、銃を置き替えながらたずねた。

「申し訳ありません、本当は十七歳であります」

「そうか、若いんだなあ。なぜその若さで？　いやいや、聞くのは止そう。ここじゃあ、ご法度だ」

「いえ、話します……。自分は、高等学校受験のため、ある小学校の代用教員になりました。けれども、あまりにもでたらめな軍国教育を強いられるので、嫌になって止めてしまいました。そこへ、この募集がありましたので……」

「そうか。しかし、突然姿を消したのでは、家の方はびっくりされただろう？」

「いえ、私には、家族はおりません。それに、今の日本は、軍曹殿がお考えのような日本と違って、鉄道やバスの大幅徴用で、国中大混乱になっていますから、行方不明者なんかは数え切れないほどいるんです……」

「そうなのか。私は、三年前に、友達と応募した。残念ながら、その友達は戦死してしまったがね……」

「あの、小隊長殿のお話しの中に、生存者四名という言葉がありましたが、八名の人が戦死したのですか？」

「いやいや、そんなことはないよ。戦死一名、戦病死一名、あとは除隊だよ……。戦病死した男などは、それこそ、小隊挙げて看護に当たったが、とうとう死なせてしまった。小隊長殿のお嘆きも大きかった……」

「横田少尉殿は、お優しい方なんですね」

「いや、そういう個人的なことではなくて、外人部隊には、経験した者でなければ分からない深い友情がある、ということだ。文字どおり、十二名全員にね……」

特に、こういう地の果てで、何とか助け合いながら任務を遂行したりすると、どうしても、親子兄弟以上の情が湧いてくるんだよ。普通の軍隊と違って、隣の小隊は、意志の通わない外国人の部隊だからね。病気の看護にしても、正規の軍隊とは少し違うんだ。うまく表現できないが、看護をしながらも、味方は自分たちきりなのだという孤独感みたいなものが滲み出るんだ」

「それは、今、看病してくれている人たちは、自分と同じく、明日にでも戦死するかもしれない人たちなのだ、という一体感みたいなものでありますか？」

「うん、それもある。しかし、それだけじゃない。尊敬する上司への信頼もある……」

「尊敬する上司とは、横田小隊長殿のことでありますか？　どうも、一種のカリスマ的なものを感じますね」

「お前、なかなか難しいことを言うな……。うん、そんな面もある。しかし、それ以上に、あたたかく、安心できるものなのだ……。まあ、例えて言えば、小隊長殿は、不死身なのだよ」

「不死身、でありますか？」

「そうだ、少なくとも、我々は不死身だと信じているのだよ。偶然かも知れんが、あの方に弾丸が当たったという話を聞いたことがない……。それでいて、いつも、あの戦闘教官の技術を生かして、我々部下を庇ってくださる。もちろん我々も小隊長を守るが……」

「それは、一種の戦場心理というやつではありませんでしょうか？　そう思い込むことで、自分自身に内在する恐怖心を押さえるという……」

森永は、このとき、よもや後日、自分が、横田小隊長に心酔するあまり、「瑞鳳寺跡殺人事件」の主犯になろうとは、夢にも考えていなかったのである。

「うーむ、お前は、そう考えるのか……。ま、いいだろう。そのうち、わかってくることだ……」

「あ、軍曹殿。一つ質問してよろしいでしょうか？」

「何だ」

「戦闘配置につくといっても、なぜこんな辺鄙な村に進駐しているのでありますか？」

「ああ、そのことか。それは、ここから約八十キロばかり離れたベシャールという要塞村落（オアシス）を監視するためなんだ。そこには、オランから鉄道も通じているし、飛行場もあるんだ」

「そこで、大きな戦闘でもあったんですか？」

「うん、ＭＴＬＤ（民主自由のための運動）と、フランス・アルジェリア騎兵隊、歩兵隊、外人部隊が激戦の末大勢の死傷者を出した。そして、廃墟となった要塞村落は、今、再築中らしい」

「あっ、軍曹殿！　今、砂漠の真ん中の方で何か光りました。あれは、敵の斥候か何かでは？」

「ハハハハ。違う違う。あれは自動車のヘッド・ライトだ。このグラン・デゼール（大砂漠）の中央には長い道路が敷かれている。夏は、炎暑で、日中車を走らせるのは大変だから、夜を待って動き出すんだ。それが、距離からすると考えられないことだが、多分、空気が澄んでいるせいか、時々、光って見えるのさ」

「……。どうも、自分は、砂漠の妖気を感じます」

「ハハハハ……」

十五

それから数日後。

アバネーベルを出立して、ベシャールへ向かった。

サハラは、平坦な砂原ではない。大洋のうねりのように起伏している。道は、長い長いスロープである。あの頂上まで行けば、あとは、なだらかな下りが待っているのだ、と勝手に期待して、息をはずませてやっと登り切ると、また、前とそっくり同じスロープが出現する。つまり、行けども行けども同じスロープに当面する。

砂漠の中で、テントを張って小休止をしているとき、敵襲に会った。ちょうど、クスクス（粟飯）を食べ、大きなゲルバ（ヤギ革の水筒）から冷たい水を廻し飲みしていたときだった。

古兵は、さすがに経験を積んでいるので、たちまちのうちに散開して、配置についたが、新兵たちは驚きあわてて、瞬時ウロウロしていたが、古兵の怒鳴り声にハッと我に返ると、銃を片手にテントから飛び出した。

しばらく、銃撃戦が続き、たがいに相手の戦力をさぐり合っていたが、やがて、横田小隊長の合図で、散開したまま砂漠の上を匍伏前進し始めた。

竜造寺芳栄二等兵は、銃を両手で支えながら懸命に前進を続けたが、突如、右ひざに激痛を覚え、思わず背を丸めてしまった。そのとたん、敵の集中砲火が起こり、彼の体は空中に投げ出された。

このとき、飛鳥のように、二つの黒い影が竜造寺に駆け寄り、恐ろしいほどの力で抱き上げると、砂陰目がけて疾風のように駆け降りた。

砂陰に近づいた森永は、そこに、懸命に外科手当を施している横田と中野の姿を見て、思わず息をのんだ。

（中野軍曹の言ったのは、このことだったのか）

頃合いを見て、藤城伍長の指揮で、擲弾筒から手榴弾が敵陣地の左右後方に打ち上げられた。物凄い爆発音がしばらく続くと、敵は算を乱して逃走した。それを追って敵陣地まで駆け上がると、もう彼らの影はなく、ベルギー製の小銃が数丁、砂の中に置き捨ててあった。敵もどうやら、十名内外の少数部隊だったらしい。

ベシャール要塞村落は、荒廃から回復しつつあった。

高台には、低い練り土の壁と大きな扉の方形堡があり、その内部には資材や石の山が雑然と置いてあった。

中庭には、粗末な小屋があり、フランス政府アルジェリア騎兵隊の兵士たちが、馬の鞍に頭を乗せ、銃を傍らに置いて、横になって冗談を言っている。

横田小隊は、その反対側の、作りかけのムーア式カフェの小屋の中に陣取った。外庭では、緑や黒の安っぽい金ぴか衣装を着たユダヤ人たちがぼろテントを張っている。小さなかまどに火を起こしていた。

農園の、生い茂ったザクロとイチジクの陰にはナツメ椰子のアーチが連なっており、露天灌漑用水路がチョロチョロと流れる草の陰から、ヒキガエルが数匹姿を見せた。

この小隊に異変が起きたのは、要塞村落勤務が二か月ほど続いたある日のことだった。

突然、司令官のヴェイガン準将が、ピカール中隊長を従えてやってきた。出迎えた横田小隊長に、司令官は、いとも無造作に、「竜造寺芳栄二等兵を中尉に任命し、司令部勤務を命ずる」と告げた。驚いた芳栄は、頑強に残留を望んだが、なぜか彼らは、ほとんど強制的に機内に連れ込んでしまった。

騒ぐ隊員たちを制して、横田は、にこやかに、司令官機に向って敬礼した。

彼は、西園寺ルートの情報網を通じて、いつかこの日のくるのを予期していたのだった。芳栄の父が、保守党の実力者であり、軍閥と同調した国家主義者であり、竜造寺家保持のためならどんな手段も選ばない利己主義者であることを承知していたからだった。

この日を境に、横田小隊に対する食料・武器の補給が止まった。

風聞では、ド・ゴール将軍と外人部隊の接触に疑惑をもっていたヴェイガン準将が、巧みな誘導尋問で、竜造寺中尉から横田小隊の情報を嗅ぎ出したためという。

（続く）

有院家の人々（五）

大和禎人

第九章　白き一筋の道

「ねぇ、ベラ、あなたがずっとわたしのそばにいてくれるといいのだけれど、……ええ、それはもう、そうはいかないことはわかっていますよ、でも、こんどあなたを母さまの国へ帰したらもう会えない気するの、悲しいことですね」

「おばぁさま、そんなことを……、ベラの心はずっとおばぁさまのおそばを離れはいたしません」

ベラの祖母ベイチは最初の留学した頃はまだ元気であった。ベラを日本に帰さないで、いつまでも自分の手もとに置きたいと日増しに思い、自分の老後を託すものとして息子の代わりに、とうてい不可能と知りつつ切実に願っていた。

「きっと、きっと近いうちにおばぁ様のところへ戻ってきます、その時にはママを連れてきます」

「いいのよ、ベラ、今度あなたが来て下さるなら、その時はあなたが全身、全霊で愛することのできる男性と結ばれ、二人して幸福な姿をわたしに見せてくれるのですよ、わが骨の骨、わが肉の肉、と神様が教えて下さったように、心から愛する人を見つけて来てわたしを喜ばして下さい、み聖旨（みこころ）ならば、きっとその日までわたしは生きていて、この目でベラの幸福な姿を見ます、その時を楽しみにしていまあなたのママのところへ帰すのですよ」

そして、

「神様を一刻も見失ってはなりませんよ」

と祖母ベイチはこんな言葉をベラに与えている。

再度の留学のいまをさかのぼる五年前、明治三十四年（一九〇一年）六月六日、ベラはマダム・サトンの経営するあの女子寄宿学校を首席で卒業している。父ロバート・アルウィンはこの時の卒業式に列席するため、また老母を見舞うため渡米している。母イキはベラのために学友たちへ心をこめた贈り物をロバートに託している。

……人様にあげるに都合よいように、ねだん書きのついたまま差し上ぐ故、そのつもりにてなされ候よう……布地のきんちゃく二つ、ライデンボック（筆入れ）三つ、紅ちりめんサァシ（帯）一本、桃色ちりめんのサァシ二本、なふだ入れ五つ、さしんばさみ（写真アルバム）四つ、人がら絹地の絵（浮世絵の風呂敷）四枚、鶴亀のピン二本（べっ甲の髪かざり）、福寿の書いてある銀の帯どめ一つ、寿の彫ってある銀のブローチ四つ、金のもの一つ、このほかにメリーより十六むさし、六歌仙のクリスマスのための品々、こうし手あみの名札……

当時の日本人の母親が外国の若い娘友達にどんなものを贈ったものか、興味をもってイキ女のくだくだしい手紙から写すとこんなふうである。

ベラ自身のための卒業祝いには父ロバート・アルウィンの異母兄で東洋艦隊司令長官だったアンクル・ジョンは立派な真珠の首飾りを贈ってくれた。祖母のベイチからは金のロケットをもらった。大勢の人たちの祝福と賞賛のうちに卒業式は終了したのである。

日本に帰るベラのために親しい友人たちは次々にベラを自分の家に招きパーティを開いてくれた。

祖母とベラ、祖母とロバートとの別離の時が遠慮なくやってきた。いかに離れ難くとも、どうしても別れなければならなかった。

ロバートはベラを連れて、アメリカ各地を見物させてくれた。同時にまた、それにともなって各地に住むアルウィン家の親戚まわりもした。そのあまりにも多い親戚について日本の母イキは後日、手紙の中で驚いてこんなふうに書いている。

官員さん（上院議員）、ほんや（印刷業）、ちちや（牧場主）、公事や（弁護士）、仕立てや（洋服店）、せんせい（学校教師）、ぼうさま（牧師）など。

かの女の伝えてくれている、職業の多様さはそのまま、さすが個性を尊重する自由の国がらを物語るものであった。

父の姉妹のアグネスとソフィアはともにペンシルバニアのピッツバーグで女学校を経営していた。父にともなわれてこの学校を皮切りにして訪問の旅は重ねられた。

ナイヤガラの瀑布、ミシシッピ河の周航、ヨセミテの渓谷、東海岸から汽車で大陸を横断して、時には駅馬車で、時には馬の背に乗り広大な砂漠地帯を、カリフォルニアに向かい太平洋まで出た。ロングビーチの海辺に遊び、やがてサンフランシスコで幾日か船待ちをして、母の待つ懐かしい日本へ船出したのである。それはすでに触れているように、明治三十四年の七月の終りのことであった。日本を出て足かけ七年、満五年と九ヶ月におよぶ最初のアメリカ留学だった。

いま、再度留学に向かう長い船旅にあって、走馬灯のようにこれらの回想は止めどなく、佗しさをかこつ独り旅のベラの脳裏をなお次々駆け巡るのである……。

最初の留学最大の収穫はなんといっても祖母やマダム・サトンによってキリスト教の信仰を深く植えつけられたことである。十二歳で渡米した少女は天地の差ほどの変身を遂げて帰国したのである。帰国後、ベラはまず母イキを熱心に説いて、入信に導くことに成功した。父のロバートは築地のカトリック教会の信徒であり、母娘はプロテスタントの信仰に立つことになったが、（信仰は自由である）として父は寛大に了承したばかりか、ベラが母をキリスト教に導いてくれたことを終生のよろこびとし、教会に行くことを心から励ましたのであった。

イキの人生観、処世観は娘の帰国からキリスト教への帰依を契機として、百八十度の転換を遂げた。外国人と結婚する勇気のある進歩的な女性であったイキだが、かの女の人生はそれだけに、また反面わずらいや苦しみも多く、忍耐を強いられることが多かった。かの女はこの入信によってそれらによく耐え、善意を持ち続けて、感謝と祈りの中にその生涯を歩むことができたのである。

ベラは帰国中、日本婦人としての教養をイキに奨められ、また自らもすすんで驚くばかり多様な嗜みを身につけている。

作法は小笠原流、茶の湯は表千家、華道は遠州流奥伝、箏曲は鶴見多賀社中の裏奥伝ならびに看板。書道は手塚酔翁に学び号北窓暸月、日本画を兼重暗紅（梅子）に師事して、号玉山。

よくもまぁ、と思うばかりだが、かの女の教養のレパートリーはこれらにとどまることなく、日本文学を塚本はま子女史、二階堂とくよ女史に学び、芳賀矢一博士、紀平正美博士などの講義を聞き、また池田亀鑑氏ともなんらかの折に交流があったようである。だれからか日本古典文学に対する啓蒙も強くうけたらしく、大要だけかも知れないが研究したこともたしかである。

「源氏物語」はもちろん、「竹取物語」「落窪物語」「堤中納言物語」「今昔物語」などは、後日、保育学校の教え子たちに面白おかしく話したものであった。ギリシャ神話と古事記を比較したり、「デカメロン」は「今昔物語」に似ているなどと話しては生徒を煙に巻いたり

したのである。

ベラはまた日本の短詩「和歌」に親しんで、三十一文字（みそひともじ）という言葉が大好きであった。万葉集をほとんど神聖視するほど大切に考え、古今集、新古今集などの相聞の歌を美しいと感じ、重ね言葉のリズムをよろこんで口ずさんだ。

母の感化もあって百人一首の遊びも好きであった。だが、ベラの日本趣味の中でもっとも特筆すべきは囲碁であった。最初は親戚の人から教えてもらったのであるが上達し、定石の研究にも熱心でたちまち半プロの腕前にまでなり、人が舌をまくほどであった。

一瞬の無駄もない勉強の合間にもベラは教会に出席してS・S（日曜学校）の手伝いもするようになった。一方家庭にあっては母をよく助けて、弟妹の面倒をよくし、とくに父ロバートに対しては他の弟妹が到底及ばない孝養を尽くしたのである。

ロバートにとってベラは自分の懐かしい生母の俤をうけ、また自分とは同じアメリカの地で教育を受けた「仲間」であった。かれは社会的には日本人の色々な階級の人たちと親しく交際し、各種の事業にも加わり活躍していたが、家庭にあってはつねに「異邦人」としての寂しさを心のどこかに覚えていたのである。

ベラの帰国はかれにとって唯一の話し相手が出来たのである。

同じ言葉で、同じ思い出の地について、同じ懐かしい人たちについて、心おきなく話し合い、意見を述べあえたことはロバートにとって無上のよろこびであった。

このような明け暮れの間に、妙齢に達したベラについて当然のこととして結婚問題を考えなければならない時が訪れた。各方面からの話も寄せられ、ロバート、イキの夫妻ともども心を悩ませることが多くなった。そしてベラ自身は周囲のそうしたざわめきには少しも関わりない忙しさに身をおき、しかも快活を保つかに見うけられた。

だが、父ロバートが心の奥にたえず「異邦人」の寂しさを秘めていた以上に、ベラもまたさりげない振る舞いをしながら、実は自分のおかれている身上について深刻な心事を抱いていたのである。

（言いあらわすことのできないコンプレックスが私の心にありました。私は日本にいても純粋な日本人でいられないし、アメリカにいてもやはり純粋なアメリカ人ではいられなかったのですよ、どっちにも属さない不安定な感じと戦うのに、時々私は疲れ果てました。私の祈りはそんな時に、果てしない、愚痴と嘆きの繰り返しなのでしたよ。キリストを知らなかったら、多分私は自殺したかも知れません。）

後日、ベラはとくに再度の留学時代の心境を淡々とこう語っている。

ベラは心ひそかに悩み苦しんでいた。結婚問題を契機に、自分の人生をどう生きたらよいか、このまま富裕な上流社会の子女として、安楽な日々を過ごし、なりゆきにまかせて生き、広い家に住み、沢山の使用人にかしづかれ、美しい衣服をまとい、美味しいものを食べ、パーティに、物見遊山に、旅行にと明け暮れていく生活に自分は満足していてよいのか、なんども、なんども、その胸に問い、冷めて心の中を直視するような日が次第に多くなっていた。

この帰国中、日露戦争が勃発する。大国のロシアを相手とする戦端であった。日清戦争からわずかに十年である。日本に住み、日本人を母にもつベラはベラ自身の信仰や、思想はまずおいて、愛する母の祖国のために、憂慮し、協力する立場に立ったのだった。

たくさんの日本人が傷つき殪れ、その兵士たちの家族の苦難を見てはベラはじっとしていられなかった。赤十字の篤志看護婦を志願して、外国籍のために戦地への従軍は許されなかったが、内地の陸軍病院に配属された。主として東京の赤十字病院で傷病兵の看護にあたったのであった。

このことはかの女のキリスト信仰に立つ崇高な信念にもとずいた行為として特筆に値する出来事であった。

明治十六年（一八八三年）生まれのベラは二十一歳、女性としてもっとも輝き、また多感のさ中にあった。

「パパ、なぜでしょう、なぜ同じ人間同士が殺しあわねばいけないのでしょう」

「……」

ロバートは答えなかった。答えに窮したのだ。

かれはこの年六十歳である。十年前の日清役の時はいまだ壮年で、熱心に手がけてきたハワイへの官約移民を二九、三三九人まで渡航させて終止符を打ち、かわって政府移民保護規則が成立し、民間移民に譲った年にあたっている。

もちろん、かれもかれなりに愛する日本のために憂慮をしたものであったが、あれからわずかに十年で再び戦端をひらき、しかも大国を相手とした戦いだから、少なからず心を痛めていたのである。

「ベラ、あなたは心配しなくてもいいのよ」

「どうして、ママ、どうしていいの」

イキも五十一歳になっていた。祖国日本の運命を案ずる点ではもちろん夫ロバート以上であった。

「パパは外国の人でも、長く住んでいるお国のことを心配しないはずはありません、言いようもないので黙っているだけですよ」

「いいえ、戦争に勝つとか負けるとかではないの、なぜおたがいが血を流さなければならないのか、そういうことがベラはたまらないのです」

母と娘の会話をロバートは黙ったまま聞いていた。

（いまの場合、外国人であるわたしにはなにも言えない、だが、ベラはわたしの血を享け、同時に母である日本人イキの血をも享けている、そして、この娘の心には間違いなく神が宿っているのだ）

という感動を抱いたのだった。

ベラの属する教会の知人や友人、また伊香保の方の知り人、使用人たち、さらにその縁故者からもたくさんの出征兵士が出ていた。

日本国民全体が乃木大将麾下の第三軍による二〇三高地での死闘に一喜一憂している三十七年暮、フィラデルフィアの祖母ソフィア・アルベラ・ベイチが逝去したという報せが太平洋の彼方から届けられた。八十九歳の高齢であった。

父のロバートはもとより、ベラの悲嘆は限りないものがあった。

そして、この祖母の死がベラの心に一つの転機をもたらしたことは容易に想像できる。父母をのぞいて熱心にベラの結婚による幸せを望んでいたのは祖母であった。秘かに芽生え、根ざそうとしていたベラの心の奥の志向に対し負担となっていた大きな重石が無くなったのだ。敬愛してやまなかった祖母が天に召されたことはもとより深い悲しみであったが、その死にあがなわれでもするように、かの女は自分の人生の行く手になにやら雲を払うように、はっきりと白い一筋の道を見出したような気がしたのである。

木石ならぬ身、ベラにも実は恋に燃えた一時期があった。そのことは後の章にゆずるとして、ベラはすべての凡脳から去ろうとして伊香保の別邸へ逃れるように出かけることが多かった。

伊香保には将来への素地として培ってきた実績があった。安心して心の憩う場所があった。東京の教会でS・Sの仕事を手伝うにつけても、自分には授かりものとさえ思える純粋で汚れない伊香保のこどもたちのことが念頭を離れなかった。無垢なこどもたちに接することで憩いを与えられ、傷ついた心を癒されもし、なによりもベラ自身が温かい抱擁を受けるのであった。

第十章　使命まつ国へ

とうとう、ベラは再留学の途についた。幼時教育のプロフェショナルを志す旅路であった。明治三十九年（一九〇六年）十一月五日、横浜出帆の日本郵船天洋丸の発船に際してのドラをベラは気丈にたった一人で聞いた。身のひきしまる思いであった。

だが、この時、発船のドラをベラとともに聞き、しかし、人影にかくれて埠頭に立ちつくしていた一人の青年があったことをベラは気づいていなかった。

日露戦争のすんだ頃、ベラさんに色々な結婚問題が起こっていた。ある有名な考古学者某氏もその中の一人であった。ベラさんがぜひ嫁ぎたいと申し出たのかどうか自分は知らない。しかし、先方では矢張り混血児では困るというような反対がご本人以外の周囲にあって、その話は中止となったようだ。三田綱町の邸に出入りした外交官を拝命したばかりのS氏も幾度も来ていた。外交官は外国籍の女性とは結婚できないために結婚は沙汰止みなった。……

これはアルウィン家に書生のようにして住み、長年イキ夫人の世話になり、学費を助けられ語学校に通っていた野村良太郎（昭和五十年没）氏の談話で、

たしかにこの人とベラさんとの間にロマンスがあったとは言い切れない。万一公表されるような場合には氏名は頭文字でかんべんして頂きたい。

という、こうした一つの証言がある。

社交の本場のフィラデルフィアで磨かれ、日本女性のしとやかさを加えたベラは社交界の花形であった。そして、ここにいうS氏とは華族出の青年外交官であったようだ。娘自慢のロバートはかの女を社交の場に伴いながら、日本の社会の複雑さを、自らの体験を通して知っていたので、ベラがアメリカ人と結婚することを望んでいた。しかし、父のそうした意向にかかわらずベラ自身は社交馴れのしたアメリカの男性の明るさ、大らかさには共感をもちつつも、どことなく控え目で情のこまやかな日本の男性に、むしろ心を魅かれていたのであった。

だが、かれは古い家柄を誇る家族の混血に対する嫌悪と偏見に会い、また、外務省の外交官は外国人との結婚を禁じる、という規則を前にしそれと戦わなければならなかった。苦悩するかれ、痛々しいほどの懊悩する姿を見てベラは日本人社会の深層にふれ、混血ゆえに自分のおかれている立場をはっきりと悟らねばならなかった。ほとんど絶望的なまでに心に傷をうけたのである。

二人があえて結婚に踏み切ることはかれを社会的な破滅に導くばかりか、家族からも引き離さねばならぬことを思い、かの女の方で身をひく以外なかったのである。

いらい、自分の部屋に閉じ篭りがちになったかの女だったが、ひたすら神に祈りを捧げるその耳にかつての祖母の声を聞いたのである。

（ベラにとって日本もアメリカも、真実あなたの国なのです、なんと豊かなことではありませんか、ベラはママを愛し、ママの日本大好きなはずですね、それと同じ

ようにパパやわたしの国のアメリカを大好きにならなければ、ベラの身体の中のアメリカが悲しむはずです、二つの国をもって生れたことを誇りに思いなさい、神に感謝しなければいけません）

あの言葉だった。

伊香保のこどもたちの顔が次々に浮かんできた。

「そうだ、わたしは日本の幼児教育のため一生を捧げよう、結婚を断念しよう」

こうしてベラはあらためて幼児教育を本格的に勉強するための再渡米を心に決めたのだった。

さて、再留学の船旅にあるベラは回想にばかり耽ってはいられない。アメリカに上陸した後の取るべき道、なにをどのように学ぶべきか、計画したり、考えたりで船中の毎日をはりつめた思いで過ごしていた。はじめての留学は父に伴われ、まだ見ぬ父の国に胸ふくらませ旅をした楽しかった船の日々、そして卒業し帰国に際して迎えに来てくれた父とともに母の待つ日本に急いだ晴れがましい船旅、それにひきかえいまは人に言えない傷を心に負って、女性の幸福、生存の価値であるべき結婚を永久に断念して、生涯を賭ける仕事のため必死の思いで旅立ってきたのと、なんという相違であろうか、……ベラは二等船室の中で、ひたすら祈り、考えて暮した。

最初の寄港地ホノルルでは、アメリカの快速郵便船が運んでくれた母や親類、それに伊香保の人たちの手紙が待っていた。

母の手紙を抄録しておこう。

……私の存じた通りお発ちの時にはとても真面目においとま致すことできないと存じた故少しばかり手紙を船に上げましたがその通りでした。馬車が出ました後はまるで火の消えたようであちらでもこちらでもメソメソはじまりました。きてやが来て一緒に泣き、そのうち電気をつけないのに心づき窓を見ると、それはそれはまん丸なよい月で昼間のように照り輝きそれでまた感じました。さぞベラも船にてこの月を見て思うているであろう家のことも考え出しておいでと思い、知らず知らず賛美歌を歌う心になり、又お祈りもいたしましたが、ただとまらぬは何につけても先に涙が出るので弱りました……

この頃になると、イキは言文一致の口語体の手紙を書くようになっている。別離の辛さを避けて埠頭への見送りしなかった母は未練を手紙に託し、綿々後追いの心情を語りかける内容であった。

ベラを思う母、その嘆きがよくわかる。けれどもいまは覚悟を決めたベラだったから、涙を流したけれどもますます目的へ向って前進を思うのであった。

アメリカに近づくにつれ、こんどは亡き祖母に対する

思いが胸をしめつけるように迫って、

「おばぁさまさえ生きておいでだったら」

と自分の心の損失の大きさ、深さを思うのであった。

人生の重大な岐路に立ついま、かけがえのない大切な人、信仰と愛情と叡智でつねに自分を助け励まし、ともに祈り、一緒に考えてくれた、その人の面影を追いもとめ、なろうことなら天国から救いの手をさしのべて欲しいと思うのであった。

サンフランシスコに上陸、煩わしい手続きの一切を自分でやらなければならないことから、ベラの厳しい現実が始まった。汽車で大陸を横断してニューヨークまで、そしてフィラデルフィアの叔母ソフィアの家に辿り着いた時、ベラはげっそりと疲れ果てていた。伯叔母たちははるばる再遊したベラを心から温かく迎えてくれた。

ベラはその後、ほぼ五年間を目的の勉強に専念した。大学課程の個人教授を受ける資格を取得し、心理学、英語、体育学、音楽を学び、フィラデルフィア市のドルクス化学栄養学校で幼児の栄養、一般化学、組織学、家政学を、さらに同市カロライン・ハート女史の経営する幼児教育専門学校に籍をおき、ここではじめて「フレーベルの教育学」の講義を聞いた。それはかの女の将来にとって特筆すべき出会いになるのであった。

また、教育心理学、教育史、文学史、美術史、人類学史、博物学、植物学、生物学、聖書学、衛生学、社会衛生学を学び、童話史、童話考察、童話創作など講座から幼児教育に不可欠な童話への興味をもった。

かの女自身も童話の創作を試み、数多い作品を残しており、童話についての一家言をもっていた。たとえばアンデルセンの「絵のない絵本」の世界は大人のものではないか？とか、日本の童話にしても、桃太郎、カチカチ山、猿かに合戦など侵略、覇権の物語として斥ける意見をもっていた。後年、保育専門学校の経営に際しては往時の日本童話界の重鎮、久留島武彦氏を講師に迎えてとくにこの人の優れた話術を生徒に学ばせているのである。

留学中、実習としてはセンターセツルメントのあったスラム街の施設に従事し、雑多な種族の幼児たちに接する機会をもち、看護婦、栄養士、保母をかねるような忙しい仕事によく耐え、何事によらず究め尽くそうとする熱心さで教師たちの注目をうけた。

そうこうするうち、ヨーロッパへの旅に恵まれる、またとない機会を与えられた。イタリアのローマに開かれた世界S・S学校大会への参加がそれであった。

明治四十三年（一九一〇）、夏期休暇を利用し全米のS・S関係の団体に友人と一緒に加わったのである。

大西洋を横断し、イギリスのポーツマスに寄港、ドーバーの白い崖を左手に眺めながらフランスのルアーブルに到着し、さらに船を乗り継いでポルトガルのリスボンへ、リスボンからはスペイン沿岸を南下し、ジブラルタル海峡を通過した後、アフリカ大陸のタンジールに寄港し、酷暑のアフリカの異国情緒を満喫した。

次いで地中海を通りフランスのマルセイユに入港、さらにはイエール諸島の間を通って目指すイタリアのフローレンスに入港できた。そこからは鉄道でローマに達したのである。

航空機の発達した今の時代では考えられない約四週間にわたる長途の船旅であった。ベラにとってはじめてのヨーロッパの旅であった。

この大会に参加したことで、ベラはアメリカと異なったヨーロッパの歴史と伝統の基盤に立つ重厚な雰囲気に触れることができた。

参加者の中には有名な教育者がたくさんいた。その一人であるモンテッソーリ女史にも会うことができた。またベラが心酔して研究を志しているフレーベルのフランクフルト・アン・マインの「ベスタロッチ、フレーベル学園」の教師たちや、マリエンタール・フレーベル学園の研究グループの学生たちとも、交流した。日本からも勿論いく人かのクリスチャンが出席していた。後に日本救世軍の父と呼ばれた山室軍平氏や若い熱狂的伝道者の木村清治氏などの顔が見えた。かの女はたくさんの人たちと知己になったが、とくにモンテッソーリ女史に深く傾倒した。医学を学んでいた女史が実習の病院でたまたま見た精薄児の現状を見て、黙視するに忍びず転向して「教育的治療学」を研究し、かれらのために感覚教育玩具を一生懸命考案していることを知り、同時に女史は広く一般の児童教育のためにも心を向けていることを知ったのである。幸いなことには、若くひたむきなベラの態度に女史のほうで心を動かし一緒に勉強するようにと誘ってくれたのであった。ベラは心をおどらせ、いつの日にかきっと女史のもとに来て研究しようと決心したのである。

学問的に、また精神的にも素晴らしい恩恵を受けることの多かった旅から戻ると、訓練期間をコロンビア大学特別聴講生として出向させてもらいたいと願い出た。叔母アグネスの口添えもあり、成績優秀なかの女だったから、この願いは聞き届けられた。約一か月（五週間タイム）の間ベラは大学女子寮に起居を許されフレーベル研究講座の聴講を許されたのである。

ベラは特別出向の研究を終了し、名誉ある賞状とメダルを受けて帰ると、ミス・ハートもたいへん喜んでくれた。一九一一年（明治四十四年）六月一日ベラはミス・ハート・トレーニングスクールを優等賞を受けて卒業した。自分に誓い、父や母に約束したことを果たしたのである。ベラが心に期して幼児教育に携わろうとする念願

に対し公な資格が認可されたのであった。
すでに老境にある父や母の待ちわびる日本への帰心が矢のように、にわかな高まりをもった。
すでにかの女は一つの構想を描きつづけてきた。言うまでもないことだが、それは父の別荘である伊香保のことであった。別荘の改築、もしくは増築をし、広い庭園の樹木の移動によって空地を作り、幼稚園や託児所を作る、最初は小さくとも、将来は幼児教育のメッカとなるような教育センターを建てたい。という大きな夢を膨らませていたのである。
父は必ず自分の願いを聞き届けてくれるであろう、とベラは確信していた。父がどんなに日本が好きかをベラは知っていた。どんな犠牲でも払うであろう、少しも心配はいらないはずであった。榛名山麓全体の町や村がキリストの教えにつつまれ、幼児たちがその中で教育され成長していったならば、伊香保は日本の中の「地の塩」の役割を果たすであろう、と思うのだった。

一九一一年六月十日、かの女はフィラデルフィアを去り帰国の途についた。大陸を横断する旅行の途次はいくつかの幼稚園経営の実際を先輩たちのつてを頼り、とくに田舎の施設を参観しながらサンフランシスコに達し、いよいよ天洋丸船上の人となったのは六月二十一日のことであった。（四・三・二九）

（本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。）

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

※同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

（小説）

近藤富蔵の生涯（十五）

第一章　八丈流人近藤富蔵

三　風浪望郷の歳月

金子正義

（七）

八丈島五ヶ村の旧家に伝えられてきた鉄炮は、天正年間小田原から北条支配の代官として渡り来った菊池右馬之助武信が、其の子孫一門に伝えたもので、後に江戸幕府の治下となる頃より、長戸路、高橋、服部、浅沼、奥山等の旧家は苗字帯刀を許される折、甲冑弓長刀と共に鎗、鉄炮も許され、県令、代官職としての交替の折に、武器所持願を出して許可状が交付される重々しさとなっていた。然し世は泰平であり、鉄炮は旧式の火縄銃で殆んど使用されなかった。

文化初年より北辺に露国船出没し本土周辺の海も不穏な情勢となったので、文化五戊辰年（一八〇八）幕命に依り海防の為に港に石積場（砲台）を築き、其の支配に来た御勘定方役人橘爪頼助、御鷹場方湯本弥平次が新たに鉄砲を備えて行った。

同年四月砲術指範として土屋弥一高暢が来島して二ヶ月程陣屋に泊って島役人に稽古をつけて帰った。

此の新式銃も其の後北辺は小康状態となったので陣屋や名主屋敷の飾物となっていたが、羽倉代官の廻島巡視で慌てて埃を払って手入などをした次第だった。

島人は元々殺人を忌み嫌う上に八丈織物が穢れると血を見ることすら避けるので死罪なども行なわなかった。

処が次第に島抜け等の重罪を犯す者が多くなって、どうしても死刑を執行するようになったが、その場合でも丸太に手足を挟み結えて地上に立て餓死を待つ磔刑か、八丈富士や三原山の火口に突き落したり、三根村の宇衛門岳や海岸より海へ落したり、或いはテッポー場（牛角力）で力自慢の流人に首に縄をかけさせて絞殺させるなど、成可く穢血を見ないようにして刑死させた。

だが抜舟逃亡の方法が巧妙になり、徒党を組んでの島抜けが出るようになってから、海防の訓練を兼ねて島役人が手の者に鉄砲を使わせ始め、舟抜処罪にも使うようになった。

鉄砲が海防でなく、流人を撃つ為に使用されたのは、八丈小島宇津木の流人無宿入墨者の御薬金次郎が始めであった。

金次郎は江戸神田の薬種問屋の小僧上がりの手代で、漢方医や、医師、薬種店などに薬を卸して歩く裡に商売の道を覚えたが、本業よりも悪事を身につけ詐欺横領、女犯等を重ねて喧嘩出入で人を傷つけての遠島となった。文化十五戊寅年四月十九才の若さであった。入島後数年間は神妙で、小才が利いて愛相も良く島の生活用品の調達や交換に走り廻って便利がられ何んとか商売らしき道で暮しが立つようになった。

普通の島人は正月や祝い事の有る時以外は米を食べられないが、島の神職とか旧家は常時麦飯を食べるので金次郎が米を探してきて売り、その妻女達には薬や小間物等を売って重宝がられた。地役人や舟役人船頭達にも巧みに取り入ってその女房達には化粧品等を贈って、御薬金次郎と目をかけられるようになった。

近藤富蔵が入島した文政十年五月、富蔵が父に代って抱屋敷横領の塚本半之助一家四名を斬殺し、使用人等三名に重傷を負わせた罪で終身流刑となったと伝え聞いて、親近感を覚え、旗本であれ同じ江戸ッ子の流人同志と、金次郎の村預かり中之郷より富蔵の大賀郷の流人小屋に時々米袋などを持って顔を見せ、江戸の様子等を話し合っては入島早々で気の滅入る富蔵を励ましていた。

金次郎は流人生活を経るうちに次第に地金を露わして、米麦の仲継売買も阿漕な遣り方で利を貪り、島会所の公定取引で紬一反一両、米にして京桝四斗二升入一俵であるのに、黄八丈を島人から受けて島桝三升（京桝一斗五合）しか渡さず三倍もの利を得た。

盆、正月ぐらいしか米飯を食べられない島の百姓に米を売り渡し、其の代金が溜ると高利貸しの如く証文を取って紬や生糸のみならず家財や衣類まで取り上げ、更に流人の身で金次郎が島人の借金不払いの訴えを村役人に出して家屋すら追い立てる有様だった。

一年中汗水垂らし山や海に働き尽めで粟や稗が僅かに入った芋雑炊しか食べられない島の百姓が、偶に一合二合の半粥米を食べる為に金次郎への借りが積り重なり家すら追い立てられ、流人の金次郎が米飯を鱈腹食ってブラブラ遊び暮しているとは何んとしたことか、その不合理な仕儀にも思い及ばぬ素朴善良な島人は却って借りを重ねた自分が悪いと謝るばかりだった。

八丈では男共は朝早く畑仕事や海山の働き場に出て、働き者の機織女は共同機場に行き、家には老人か女子供ばかりであった。稀に機織女房が家にいると男共の居な

いのを幸いと、借金取り立てを口実に女房に言い寄ったり、女子供までに乱暴狼藉し傷害恐喝にも及ぶのだった。

斯うした積み重なる金次郎の横暴に思い余った末吉村の名主沖山市十郎が、天保四癸巳年（一八三三）大賀郷陣屋に金次郎の乱暴狼藉の数々を記録して訴えた。

即刻捕縛された金次郎は悪辣な手段で掻き集めた金品悉く没収され着のみ着のまゝ、元の無一物で八丈小島へ島替となった。

（八）

八丈小島は海上に突出した海抜六一六米の太平山を頂点とするピラミッドのような小島で、陸地は山頂より急斜面となって断崖絶壁の海へ落ち込み、周囲四粁の海岸は全て海蝕崖となって船の寄せ場も無い、僅かに東端の横瀬根の岩の割れ目に船寄の足掛りがあり、西の鳥打ち浜は小島の小舟が潮の流れの合間にしか出入できない。

火山礫火山灰土の山畑より僅かの穀類、芋類、山菜等と、荒海の穏やかな時に採る海産物、鰹、鰹、飛魚、等で、宇津木村三十戸、二百二十人、鳥打村五十戸二百八十名が必死に働き、辛じて生きている。勿も、毎年春先黒潮海流に乗って鰹の大群が横瀬根の海の色を真青に変え押し合い寄せ合って北上する。此の時ばかりは島中総出で狭い横瀬根の岩場で鰹の収獲に大童となる。船を出す港施設が無いが岩場で男女が釣り上げるだけで一面鰹の銀鱗が跳ね溢れ、女子供も素手で摑んで磯籠に投げ込む。回游期の鰹は無尽蔵であっても島人は一年分の鰹節と、一瓶の塩辛が出来れば後は採らない。

江戸、大坂等、商品経済が発達しもう直ぐ商業資本の世となろうと云うのに八丈島はその圏外にあり、まして小島は昔の儘の別天地である。従って余所者を迷惑がる傾向がある、ましてや八丈本島で流罪の身に罪を重ねての島替である金次郎には、疫病神がやって来たと誰もが邪魔物扱いにして慈悲などかける者はいなかった。

小島第一の権力者八郎明神の神職菊池長門は、鎮西八郎為朝の霊を慰める者として絶えず肩衣、長袴に小刀を腰に帯して金次郎に神妙に働かざれば一食のアシタバ粥も与えず、と農家の下働きや岩場の魚拾いに追い立て、いくらか小島に馴れたところで名主の平蔵に身柄を預けた。平蔵は村外れの荒れ果てた流人小屋に金次郎を入れ小島第一の頑固物の百姓権三の畑仕事の手伝いで食を恵んで貰えと命じた。

金次郎は火山礫土の畑の草挽りで素手の指は擦り切れて血が流れ、跣の皮は罅割れて痛む苦しい作業の毎日であった。食う物は朝と昼が一緒に薩摩薯が二、三本だけ夕食にやっと里芋とくさやの入ったアシタバ雑炊で、疲れ果てて流人小屋の藁屑の中に潜って死んだように睡るのであった。

本島では入島直後の流人生活に順れない金次郎に同情

して食物を恵んで呉れるメナラベもいたり、商売上手になった金次郎を歓んで迎えるゴケもいて食欲と並んで人一倍貧婪な性欲も何んとか宥めていたのが、小島では満足に畑仕事も出来ず、魚も釣れない金次郎など穀潰しの厄介者と誰も相手にして呉れなかった。

どうやら一年程過ごし飢にも耐えられるようになると淫欲が頭を抬げ出した。海で夫を失なったゴケの年増が宇津木のマワリヤドをしていると感付いて忍び込むと、大声でこのドンゴメ（ばか者）と足蹴にされて追い出され、八郎明神にメナラベの頃より仕えて未通の儘年を経て狂った巫女の忍は、金次郎見る度にこのズニン・ワレにアケコトしたと喚き立て、青竹を振って金次郎を追い回わし、早よ捕えて桎小屋さ入れてマブレよ、と叫ぶ始末だった。

小島で一番の機織女おささは、ウマズメで夫の竹松が鈍重なのを良いことに仲々のヒヤッペンモン（淫ら女）であると聞いて、竹松が野良仕事に出たあとに何度か空腹を訴えて残り物を貰いに行った。おささは噂通り魅惑的で他の女のように金次郎を疫病神扱いにしなかった。或る日機織作業で機台に掛けているおささの腰が動く度に着物の裾が乱れるのを、軒下で恵まれた甘藷を噛り乍ら覗き見していた金次郎が堪らず、何にか手伝わせてくれ、と上り込むと、

「ズニンめ、何にを言うか、情をかければ付け上がって下肥ダレ、そんなコンゴ（腰曲）でチンコにヘジもあんめいが、テメイなんかとカコム（性交）かよオッピジケルな」

と啖呵を浴びせ箆竹を取って金次郎を縁から叩き落した。余りのことに金次郎は怒り立ったが、食うや食わずの躰ではこの気象の激しい女に太刀打ち出来まいと、柳眉を逆立て豊満な胸を張って毅然と縁に立つささの姿に恐れ入って悄悄と立ち去ったのだった。

小島中の者より邪魔者扱いにされ畑仕事や漁場の手伝で僅かの食物を乞食のように投げ与えられて星空の見える九尺二間の茅葺掘立小屋に半裸体で寝る惨めな暮しも一年有半の歳月が流れた、その間にも哀れな金次郎の生活を見続けていた近くの百姓藤左衛門の妹ワカがいた。

ワカは若くして象皮病を病み、色白で黒髪の美人の多い八丈の女の中で目立つ醜くさと自分で思い込んで未婚で通し、己れを忌む島人の差別や肉親の者の冷たさを知る身から金次郎に同情し、時折り我が家の余った雑炊をアガレヤと持って行った、時にはイモツキ（里芋の親芋と海草とを混ぜ突いて団子とした）等もシッカリカミヤレと届けては慰めた。

それを物陰から見た狂巫女の忍が髪振り乱して大声をあげ、金次郎とワカがヨメンナルして島の血を汚した、と島中に告げ歩いた。

激怒した兄の藤右衛門は妹ワカを激しく打擲して以後

流人小屋に近寄ることを厳禁した。

ワカは兄や島人の蔑みに苦しみ乍らも四十に手の届く迄味わえなかった恋の苦しみと女の歓びを知った仕合せを密かに噛みしめていた。

金次郎は此の世の邪魔者扱いにした島人への憎しみに耐え抜いていたが、狂巫女忍のように発狂して思いの様島人に復讐したかった。

（九）

天保六乙未年九月十九日、金次郎の願い叶って錯乱暴発して狂態乱舞の限りを演じ、島役人の妻女達を殺し追捕役人の包囲銃火を浴び民家二十一軒を焼き払って其の火焔の中で自殺した。

金次郎在島十八年の流人暮しは本島・小島を通して異常なことが多かったが、悪業を重ねた流人とは云え一介の薬種商人の所業としては単に狂乱に依るものとは思えない暴動振りであった。

金次郎は兼てから日頃の流人扱いの恨みを晴さんと折りを待っていたが、錯乱暴発の此の日小島の主だつ役人達は秋の船便で八丈本島より江戸表へ出府中で、男衆は山畑などに働きに出て家は女子供だけとなっていた。

金次郎は先ず、八郎明神社務所へ暴れ込んだ、神主菊池長門の妻フミが女共を集めて織物寄合をしていると見たからである。

血相変えた飛び込んできた金次郎を見て、何事かと驚きの目を向けたフミの脳天を山斧で割り、続いて悲鳴をあげて立ち上った百姓清蔵の妻フク、腰を抜かした甚蔵の妻松を殺害し、百姓権助の娘ノエが逃げ出そうとしたのを戸口で肩を傷つけて気絶させ、神主の屋敷の居宅に入って村の亀縄・漁の釣縄などを集め、戸口に畳を立ち寄せ、集めた縄で括り付け防ぎ固めてから隣りの名主平蔵屋敷に押し入って、留守番に来ていた年寄役兼之丞の娘ヨシと藤右衛門の妹ワカが居たので、囲倉を打ち破って米二俵を取り出し、籾米を抜き出してヨシとワカに飯を炊く間が無いから急いで煎米を作れと命じ、ヨシとワカが震える手で煎る米を次々と口に投げ入れて噛み砕き、瓶の生水で呑み込んで腹拵えをすると、二人に外に出るなと睨付け、日頃より遺恨に思う年寄兼之丞の伜鶴之丞の宅へ入り込み、居室にある衣類を引き裂き、鍋釜まで叩き潰し、押入れの衣類の入った柳行季を雪隠の糞便壺に突込むなどの狂態を演じて、直ぐ隣りの百姓七蔵宅にも入り込んで同じような乱暴狼藉をして再び名主宅に取って返した。

ヨシとワカが逃げ出す力も無く抱き合って震えているのを見た金次郎は、ワカだけは助けてやろうと、囲倉から投げ出した米俵を二人に抱えさせて、早く逃げてアツパにやれと押し出した。

二人を外に出すと、村用貯水の大甕を打ち破り、書院

の公用文書や書籍を庭に投げ出して椿油を打ちかけて火を付けた、忽ち文書紙類は燃え上って黒煙が濛々と上った。

山畑にいた男達は名主宅より燃え上る煙を見て何事か変事が起きたと大慌てに駆けつけると、狂乱の金次郎が名主宅の屋根に上って持ち出した名主の鉄砲を構え、

「近寄って見ろ、下に人質にした女子供がいるぞ、片っ端から撃ち殺すぞ」と

大声あげて喚いているのでどうしたら良いかと唯見守るばかりだったが、百姓増蔵が、太平山を越える一里の山坂道を駆け通して西の鳥打村の名主治左衛門に息急き込んで注進した。

変事を知った治左衛門は早船を仕立て鳥打の浜より、八丈本島八重根港までの海上二里半を選抜きの若者が漕ぎに漕いで大賀郷陣屋へ急報した。

見渡しの利く宇津木より海上を急ぐ早船を見た金次郎は、本島より役人が捕縛に押し寄せると察知して、宇津木の部落に入る横瀬根の船寄場より岸壁の割れ目の登り道に架けた吊上げ橋の吊縄を切り落し、切り通し道に山車を倒し込んで径を塞ぎ、切り通しの山頂に鉄砲を構えて寄せ手を待ち、日頃より非常な島人や役人輩に怨念を晴らしてやるぞと四方を睥睨していた。

後日此れを聞いた近藤富蔵は、金次郎は伝え聞いた鎮西八郎為朝が、此の八丈小島の太平山頂より追手の軍船を見下し乍ら梓弓を手にからませて卯の花を賞で乍ら、敵を待ったとの故事に肖ったのであろうと推察した。

保元の乱に破れて大島へ流された為朝は、一時は三宅、新嶋、神津、利島、御蔵の島々を打ち従え、数十艘の船を造くらせて島々を往還してその勢力国司と異ならずと云う羽振りで、大島の代官三郎太夫忠重も娘を差出す有様だった、為朝は更に黒瀬の急流を乗り切って八丈女護島に渡り来った、と伝えられる。

『保元物語』では嘉応二年（一一七〇）伊豆の狩野茂児の軍船に依って攻められ大島で討死したことになっているが、島伝いに逃れ八丈小島に追い詰められて、宇津木の里で自刃した、時に承安三年（一一七三）八月十五日為朝三十五才であると伝えられていた。

金次郎も亦、為朝が卯の花枝を折った此の宇津木の里で島役人共を懲しめて華々しく死んでやるぞ、と眦を決したのだった。

金次郎が待つ裡に早船の注進を受けた本島から漁船三艘に分乗した捕方役人が、地役人高橋長左衛門の指揮で大賀郷組頭藤左衛門、三根村組頭喜作が非常防禦隊の若者に拾五挺の鉄砲を持たせて乗り込んだ。漸く船寄場に乗り付けたが、足掛り場の橋が落されて村に入れず、山頂から金次郎が鉄砲を撃ちかけるので切り立つ岩壁伝い

に北に漕ぎ寄せ、鳥打村の船寄場より上陸して一緒に島に戻った名主平蔵と村人の案内で山伝いに宇津木に向った。

此れを知った金次郎は村に戻って菊池長門の社宅に立て籠って寄せ来った捕方に鉄砲を撃ちかけた。寄せ手の捕方は近くの農家や牛小屋等を盾に包囲の輪を縮めた。金次郎は近づく捕方を見ては激しく鉄砲を撃ち込んだ。

兼之丞の娘ヨシと藤右衛門の妹ワカは、名主宅を出るとき他の室に隠れていた女子供も連れ出し、神主社宅より這い出した手負いの権助の娘ノエを助けて、金次郎が宇津木湊の吊橋を落しに行っている間に村外れの林の中に逃げ込んだ。

捕方は包囲の輪を更に縮めた、名主平蔵は金次郎の鉄砲が自分の屋敷のものと気付いて、あの鉄砲は破れ筒で具合が器くそのうち撃てなくなると言った、寄せ手は勇み立ち菊池長門の社宅の隣家の由右衛門屋敷付近迄囲み寄った。

名主平蔵、地役人高橋長左衛門が交々に大声で、

「無駄な乱妨を止めて尋常に縄にかかれ」

と叫んだが返答が無いので十五挺の鉄砲を筒先揃えて一斉に撃ち込んだ、金次郎の反撃は跡絶えて静まり返っている。観念して出て来るかと待ち構えていると屋内から煙が立ち昇った、さては火を付けて煙に紛れて逃走する気か、と逃口を手別けして塞ぎ廻っている間に屋敷内の蚕小屋に火が付き、更に下男久作の家や蔵迄燃え拡がり、折からの南風に煽られ火は更に燃え上り忽ち茅葺家屋の付近の家々に飛火して見る間に二十一軒の家屋と付属の倉庫、小屋、牛小屋等を焼き尽した。

鎮火後金次郎が籠った菊池長門の社宅跡から金次郎の焼死体が発見された。その状況から火焔の中に焼け籠り首縊って死んだものと推定された、三十七歳の悲惨な末路だった。

金次郎の最後を知った近藤富蔵は、己れが犯した殺人の大罪も金次郎と同じく物の怪に憑かれた狂気の行動で、得体の知れない悪霊の仕業のような気がした。

同じ宇津木で寄手の軍勢を睨み据えて悠々自刃した為朝も、金次郎や富蔵とは比較にならぬ多勢の武者共を殺し女達を犯したであろうが、それも鬼神が為朝に乗り移っての仕業のように思えた。華々しい源平の戦さでの為朝の剛勇無双の武者振りに、今でも憧憬して明神の神に祀る島人の心の奥にも、得体の知れない悪魔が棲んでいるのであろうと想った。

己れや金次郎為朝ばかりでなく、生きとし生けるものには神と悪魔が共存し、全宇宙万物は悉く得体の知れない怪神乱魔に操られ、それを見た者は狂巫女の忍や金次郎のように狂い出すのであろうと惟い怖れた。

ともあれ、たった一人の流人が引き起した暴動は八丈陣屋の役人達に大きな衝撃を与え、此れが口実となって

流人の島抜け追捕や集団謀議、徒党の逮捕より死刑の執行にも躊躇せず鉄砲を使うようになった。

それは直ぐ実行された弘化二乙巳年（一八四五）六月十一日の夜半神奏の船付場から漁船で堂々島抜した一団があった。元御家人の坂本茂三郎、浅草山宗林寺の女犯僧宝禅、横曽古新田無宿の与七、下総前林村の百姓金蔵溝呂木村無宿の十太郎、新吉原の京町二丁目伊八店の遊女豊菊であった。

流人共は代り変り艪を漕ぎ続け、もう三宅島辺りに来たろうと思ったが、夜通し荒潮と格闘し漕ぎに漕いだが黒瀬の潮に押し返されて元の八丈に戻って大越根、立根の沖であった。疲れ果てて漂う裡に追手の船より鉄砲撃ちかけられて次々と海に飛び込んだ、与七、坂本茂三郎は溺死、十太郎は助けられたが捕えられ吟味中十九日に死亡した。船に残って捕えられた宝禅、金蔵、伊八は前後して獄死した。

豊菊は海中から助けられ衰弱していたので処刑を延ばしていたが、流罪人への見せしめの為に六月廿二日テッポー場で銃殺された、豊菊は銃口を前にして、

「アタシが死んだら毒虫になって島の作物をのこらず食い荒してやる」

と毒づき喚き脳天撃ち貫かれて死んだが、其の年の秋は凶作となった。翌年より伊豆諸島は凶作続きで多くの餓死者を出した。近藤富蔵の長男守一も江戸よりの帰途飢饉で悪疫流行中の大島に船が寄港中上陸して感染し、僅か十一歳で病没した。終身流刑の近藤富蔵がせめて我が子に江戸の土を踏ませ、将来の為に何事かを学ばせんと知人に托し一時出府させたことが徒となった。

其の頃八丈では大風が吹き荒れ、豊菊の処刑されたテッポー場の古木が吹き倒され、作物は潮害を受けて飢饉となった。八丈の人々は其の後も凶作だったり害虫が多発すると、銃殺刑となった豊菊に悪魔が乗り移ってお豊虫となっての仕業であると怖れた。

続く

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～

目　次

相聞歌の女流……大和禎人　1
Gone are the days……山根三枝子　11
詩「やまもも」ほか五編……青木昭成　22
お母さん会社へ行かないで……三戸岡道夫　31
【連載】
千三百年目の仇討（五）完結……佐々木一郎　44
有院家の人々（六）……大和禎人　54
近藤富蔵の生涯（十六）……金子正義　65
編集子のメモ……76

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

相聞歌の女流

大和禎人

歌誌「曼陀羅」は近ごろ誌名を「まんだら」とひらがな書きにあらためた。

時世時節ということであろうか、横文字にしなかったのがせめてものことであったろう。もっとも横文字の歌誌なぞさすが例はないが、世情は社名変更なぞしきりで、固陋な三十一文字の世界にしても影響されないとは限らないのである。戦後は新旧の対立激しく新傾向を誇り、旧套を脱しようという結社も現に存在するのだ。だが、「まんだら」はどちらかと言えば正統派を任じ、旧かなさえ固執する結社だった。

「まんだら」の主宰者名取有也は今日も自ら選をしながら根をつめていて、一つの相聞歌に出会うことになった。またしてもという思いである。

（あの人だな）

と思うと胸の底にあるまじきある情念をもって封を切ったのである。ホワイトを消し字に使い、投函するまでを迷いに迷い提出されたものであることが一見して分かるいつもの歌稿だ。男の手跡かと紛う雄渾の筆だ。この人の勁い性格が覗けるようだ。名取は期待に胸の戦くのを覚えながら披見した。

相聞歌という類いの歌はこの結社では稀れであった。いや稀れどころかこれまでの誌歴にもほとんど覚えのないジャンルの歌だった。

赤き薔薇を
君に寄する思ひを繋ぐひた心赤き薔薇をわが夢に置く
熱き言葉うちに繰りつつ密やかに君棲まはせておのづ
溺るる
いとしよとささやく君の声の如熱きうなじを撫づる夕
風
宿の朝結ぶ博多帯の衣響りを愛しくきけりかたはらに
君
湯の宿のわれを覗きしあきあかね夕づく川の瀬を越え

てゆく
終りなき愛執かとも怖れつつ女の果てぬ夢の夜がたり

これは先月号に選んだ六首である。「宿の朝――」の一首はとくに艶やかである。（衣響り）は（きぬなり）と訓じとくにルビをつけているあたり、心憎ささえ感じる。湯宿の情緒も纏綿（てんめん）としての男女息づかいまで伝わるようである。

どういう詠み手であろうか、彗星のように登場してきて、いまは歌会の評判をさらい、寄るとさわるとなく囁き声になって、名取の耳に入ることが多くなっている。

「これは相聞歌の範疇に入るもの、どなたもそうお思いかと……、なかなかの手慣れた技量を感じさせる歌です」

と、つとめて平静に披講し、

「こうした歌作の境地はなかなか、……」

と言って、あとを濁したのだった。

「なかなか、どうなんでございましょう」

名取は心持ち顔を赧めて、首を振った。それ以上のことは遠慮したいとでもいえる仕草に見えた。

「先生は紳士でいらっしゃるから」

幹事役の女性がとりなすように言った。

「よろしいんですことよ、浮世のさがに触れるこうしたお歌を先生はどうお捉えになるのか、お聞きしたかったのです、失礼いたしました、お立場上おっしゃれませんよね」

明らかに皮肉と受けとれる発言であると同時に、作者にむけて妬みに近い感情を含む語調だった。

歌会の席と限らず、女性の誌友、同人は圧倒的に数が多いのである。この場合作者が女性であるだけに、厄介なのであった。

先々月号に載った同じ作者の詠はこんなふうで、やはり濃厚な恋の歌であった。

駅に君待つ
裡に棲む哀しみひとつ消ゆるまでま澄める空の寒月仰ぐ
枷多きわが生きなりき独り居の外の面静かに春の雪降る
着く駅に君待ちをらむ長旅の車窓にうつして紅ひきなほす
疑ひのよどみ質さむ思ひもてど雪降ることを言ひて止みたり
幽かなる韻に降れるささめ雪傘にききつつ身を寄せ歩む
哭く声と聞きしはシャッター降りる音君を帰せし夜の凍て道
とくに（ささめ雪傘にききつつ）が素晴らしい。

選歌編集の仕事は一応は編集同人ということになっているが、名取が決定していることが多い。この詠者は同列の中でも群を抜いており、同人クラスを脅かす才能であった。誌面の配列でもこのところつねに上位に抜擢している。

夢見て芒洋
ひそやかに抱かれし夢見てし夜芒洋としてあとさきもなし
ふとかろき妬み湧ききてわが四肢が君には辛き柵をめぐらす
相触れて帰りし夕べ秘めごとを暴くが如くいかづちふるふ
狂い咲く桜とならば安からむ仰ぎつつ燃ゆる思ひに佇てり
言にいはず互みに愛を育て来つ心の脆さ密か打ち消し
別れきてなほ点りゐる裡なる灯いつくしみつつ見る茜空

これはやはり最近、ランク中の最上位に選んだ六首だった。会員数において全国十一位、やがて千名に達しようとする隆昌を見ているから、選歌の仕事はかなりの労力を必要とする。しかも配列となると頭を痛める。

（あれは戦争の直後だったが、桑原武夫さんの俳句第二芸術論は俳句の世界に衝撃を与えたが、それは短歌の世界にもあてはまることではないか、短詩型にはとうてい近代社会の思想、感情の現実は盛り込める容器ではないが、同好者が集まって特殊社会をつくって楽しむ芸事だと皮肉られたが、たしかにそのとおりではないか、一句一首だけでは素人、玄人の区別はつきかねる、これもほんとうだ）

つくづくそんな思いが名取の胸を掠めることがある。歌歴五十年、歌人の列にいるかれにしてなお思わざるを得ない反省である。

作品の配列はあらましの序列に違いないが、一位、二位という差がはっきりあるわけではない。「まんだら」のランクは作品三の初心からはじまって、作品二、作品一B、作品一A、作品という順に上位へ逐次の昇欄をさせる仕組で、会費負担はランクを昇るに従い多くなる。昇欄は毎年定期におこなうが、臨時特昇もあり得る。という内規になっている。また、投稿は毎月十首以内、雑誌発行の前々月十日までとし、歌稿は旧かな遣いとする。取捨は編集部一任とする。

といった投稿規定である。雑誌掲載は作品三は三首、作品二で四首、作品一Bは五首（ただし上位は六首）、作品一Aは六首（上位は七首）といった不文律のようなものがある。上位に採り上げられ、一首多く掲載された詠み手は昇欄近い候補者ということになる。昇進の早いものはそれだけの才の持ち主である。話題の女流は作品一Bのランクである。

多数の会員を擁していても、掲載基準を守る限りは散

文の歌論、エッセーなどを入れても百頁余に収まるのが通例である。経営面は楽とは言えないが、さして苦しくもない。という実態である。海外一を含める十二支社。全国大会も回を重ねて第三十四回という歴史を記録している。今年の開催地は松山と決まっている。

ところで、この作者にはまだまだ次のような作品を拾えるのだ。ひた押し、ひたすらの毎月の秀歌である。名取は自分の鑑賞眼が甘いとは思えない。推すべきは推すつもりでいる。だが、このところ毎号になるので、べつだん気をかねる必要はさらさらないはずだが、月例の歌会に出るとやはりこの作者についての言わば楽屋雀の囁きが気になるのであった。作者は歌会に出るには少しく遠くに住む人である。詠者は氏名の頭に地名を付してあり、結城市となっていた。どういう縁があっての加入であったか、名取も知っていない。大方は出席不可能ぐらいに歌会に出る常連は承知しているのだ。顔を見ない作者だから、よけいにあて推量が飛び交いがちなのだ。

「すこし　異常じゃありませんこと」

「そうですよ」

そうした噂の種になったのは次のような作品の載った号だった。

月例歌会では別に一首ずつ詠草があらかじめ提出されていて、それらについて互いに感想や意見を述べあうのが通例で、雑誌の作品についてはとくに主催者が採りあげて披講するのでなければ話題にならないはずだった。あえて、批判に上ったのは「女の運命」という小題にも刺激をうけたものだったようだ。

女の運命

いつしらに胸の奥処に棲まふ君棲みいます故つつる苦しみ

女とふ運命かなしく夜を居り胸乳に寄する波の如き音

時わかず心の底に燃ゆる炎を堰止めがたくみ姿の顕つ

雪女の撒きちらしゐる風花かひたむきに追う街の灯の下

割箸を裂かむ手をとめ考えぬ逢へる日いつと君言問ふに

こだはれば悲しみしきり湧き出づる諍(いさか)ひし侭君を置き来て

（雪女の撒き散らしゐる風花か）

（胸乳に寄する波の如き音）

前の表現は巧み、後者は肉感迫る妖しさを覚えるものになっている。そう思って選を了えた作品だった。

「先生の日頃おっしゃる心に沁み入るような歌とはこういうものを指すのでしょうか」

「先生に聞こえますわよ、もっと声を小さく」

「かまうもんですか、先生のお好みかも知れないけれど、もうこのところ毎月ですよ」

「そうよ、あちらさんのおっしゃるとおりですよ」

「不潔じゃありませんこと」

「色キチかも知れない、これはないしょよ」

なんとも姦しいことだ。歌会としては終わっているのだが、いつものことで雑談の時を婦人会員たちは楽しむのである。サッと名取が引き揚げてしまうようでは融和は保てない。何人かの男性会員、といって、きわめて少ない数だが、世話人の筆頭格の塚本などを交える四、五人が名取を囲んでいる。

「どうも、アチラまたしても例の相聞歌論議らしいですな、いやはや、これほど近ごろ話題を呼んだ作者はありませんな」

と塚本が言えば、

「さようですな、してやったりじゃありませんか、ある意味では、少々カンフルの利きすぎですかな」

「両性の感性の違いですよ、わたしはそう思う」

「しかし、作者は憎いですな、手管も凝っているが、技巧もしたたかですよ」

「おや、きみ、それどういうこと」

そこで爆笑が起こった。

もの静かな名取だが、微笑が浮かんだ。

「ま、よろしいではありませんか、短歌は一人称の文学ですから」

「先生、それはどういうことですかな」

「ええ、しょせん短歌は一人称の文学、主観性の濃い性格のものではありませんか、それ以上のところは……、さ、そろそろ行きましょうや」

（歌壇といい、また俳壇というところにしても同じようだが、とかく格式や序列のうるさいところだ、師匠だの、弟子だのと小うるさいことだ、もっと自由になれないものか）

名取はうんざりしている。先代の死去にともない、年功上推された立場にいるのを苦痛に思うことがある。

名取は酒は嗜まないから、二次会がそれからということもなく、散会したのである。

（花鳥風月を詠ずるも良し、人間あるがままの姿を題材にするも良し、それでよろしいのでは）

名取は玄関まで見送られながら心に呟き、土間に置いていたステッキを取り上げた。

かれはすでに傘寿を超える老齢であったが、そんな呟きをもつことで自らの胸に殉教者にも似る熱い血を蘇らせていた。

（あの作者はわたしにある意味では回春の機会を与えてくれたように思う、貴重な共感を与えてくれた、わたしはまだ老いぬ）

妻女を失って孤愁に生きる身だが、歌道にささげる熱意はまだまだ失ってはいない。

すでに来月の号の選は終えていた。

するのである。会を果てると、いつもの雑談である。
やはり噂にならずにはすまなかった。
「あのかた、ほら、相聞歌の……、意外だったわねぇ、相手の方予科練だったんですねぇ、お可哀想、わたしもらい泣きしちゃったわ、だって可哀想ですもの」
「そうねぇ、意外だったわねぇ、ほんとうに意外よ」
「でも未婚だったのかしら」
「たぶん形式の上ではね、ね、そうだわよね」
「そうよ、あれだけ熱烈なんですもの」
「素晴らしいロマンじゃない」
「ホントよねぇー、ほんと」
「ね、予科練って、なぁに」
「あーら、ごぞんじないの、海軍予科飛行練習生ですよ、七つボタンに桜に錨の、あれですよ、お若いから知らないのね、オドロキね」
(困りましたな、みなさん皮相を撫で回わして、本当のところをお気付きではないようだ)
名取に聞こえてきたものは女性の声ばかりではない。
「予科練の特攻ですな、気の毒に、知らなかった、申し訳ないことをした」
「手が混んでいても、女性ですな、ほんとうは刹那の恋だった、戦争悲劇の傷は深い、哀れですよ」
むしろ同情に迎えられ、好意の眼に変わっている。注目をうけ、嫉妬さえされ、「まんだら」社中にとってかつてない論議のブームを持ち込んだ詠者だった、その人に向けられていた風向きが変わったのである。とりわけ激しかった女性会員間の意識がコロリと方向を転換したのだった。「予科練」を知らなかった世代までが、「戦争」という背景の異常さに気を奪われ、訳もない同調をしたのである。
男性会員にしても同じだった。こちらはいっそう単純粗笨を免れない豹変ぶりであった。
歌詠みの心の襞はしかく単純であってよいものだろうか、名取は失望を禁じえないのであった。
念のためかれは
(房のそよ風若草を吹く)
(春日影やうやく傾く岩井野の君の墓処)
というこの女流独自の巧みを地図の上で検証を試みたが、岩井野はついに探し得なかった。房州にあり、(こどもの海)で知られる岩井は平群村を合併し、現在富山町である。南総里見八犬伝で知られた富山にちなんだ命名とか、遠い昔、名取も一、二度遊んだ所だ。寡聞なのかも知れないが岩井野の地名は覚えになく、地図上でもついに発見出来なかった。
かれの執心がそれほどであるのも、かつてないことであった。社中に彗星のように登場し、たちまち話題をさらい、なみなみならぬ歌才をもって大輪の花を咲かせたこの女流への期待は場合によっては「まんだら」の旧套

を破る星になる可能性さえ期待したことだった。名取の「老いらく」にほのかな灯火を点じ、そのための関心があったことも否むつもりはないが、より以上のもっと大切なものが失われたように思うのであった。
「先生、例の女性については感想はまちまちですが、結局のところ、底が割れてみると、いまどき陳腐でしたな」
あの塚本はこう囁いた。
「え、塚本さん、あなたはあの人の作品を陳腐だとおっしゃるのですか、そう決めるのはどうかな」
誌名を「曼陀羅」から「まんだら」に変更した経緯にはこの塚本の強い提案があった。いずれは名取のあと襲う有力者と目されているかれである。名取より十歳以上若いかれは社中の人気を収攬しようとする政治性の持ち主でもあった。作風の上でも名取とは対照的であった。
(弱りましたな)
名取は深刻に内心の言葉を繰り返すばかりだ。作歌の本質が問われ、また姿勢に関わる問題でもある。真実こそが人の心をうち、感動を誘う、名取の信条とする
(しみじみ心に沁み入る歌)
はそういうものでなければならないのであった。
そのかれは雑誌の運営についてはつねに人に助けられてここまできた。塚本のように目先の利く才覚はないことを誰よりも自分自身が承知していた。だが、歌道に打ち込む姿勢だけは崩すことはできない。なにが新しく、なにが古いのか、どういうことが陳腐なのか、ともかく幹部としてはこの際は軽々とものを言うべきではない。塚本の言葉に激しい怒りを覚えた。
「おたがい歌よみ仲間を大切にしようじゃありませんか、労わりをもってともに歩みましょうよ、あの人のこれからを見守ってあげたいですな」
塚本にこの言葉はどう響いたものか、言ってしまうと名取は別れを告げ、淡々とした足どりで歩み去った。

埋れ火

身をめぐる妖しくさわぐ血ぞ哀なし水注げども消えぬ埋れ火
埋れ火を重く背に負ひ今日も生く女といふは常に哀しはや六十路いやまだ六十路煌(かがや)きて生きたし裡に焔たたしめ
窓越しにシャンペン色の雲のゆく一途に思ふ逢ひたき人を
十字路を渡り此方へ歩み来る違ふことなしシルエットは君
恋ひつつも裏腹ごころ捌きかね詮なきことを闇に問ひつつ
それから間もなく届いた投稿歌を見て名取はある納得に辿り着いた。例の見事な手跡の歌稿である。

（やはり想像したとおりだった）

七つボタンの海軍さんはこの女流にとって少なくとも初恋の人だったのだろう。

（妖しくさわぐ血ぞ哀し）

なぜに妖しの血はさわぐのであろう。そして哀なしとそれを表現するのはなぜであろう。

（埋れ火を重く背に負ひ今日も生く）

なぞらえて「埋れ火」とする心の奥にある真実はどうしたものであろう。

（はや六十路煌きて生きたし裡に焔たたしめ）

（煌きて生きたし）、名取はこの一首があって実はホッとしたのである。そして作者は己が齢を六十路と告白している。相聞歌の主人公、それも女性の身がなんと潔よいことではないか。名取のホッとしたとする感懐はこの点から生まれる。共感の出来る心事としてうけとったのである。

（あなたはもしかしたら架空恋愛を楽しまれる傾向をお持ちなのかも知れない、そして作歌の上で恋のはかなさ、時には歓びを歌い上げられるまで、高揚される技巧をお持ちであった。たとえそれが絵空事であろうとも、あなたの心に抱くお人への真剣な心入れであったろう。そう思えばこれを鑑賞する立場ではなんとも申しようがない。余人の立ち入るべき境地ではない）

松山に会場をおく全国大会の予定が迫っている。この年の昇欄者を決めねばならない時期である。

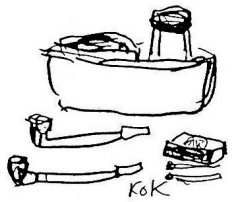
（よし、この人に決めよう、作品一Aの昇欄者にはこの相聞歌の作者こそ当然であろう、塚本くんがまたぞろなにか言うかも知れんがこの案でわたしはいく、だれがなんと言おうとこれでいきます）

名取はそう心決めするとなにやら晴れ晴れする気持ちになった。

（このお人、ついに会わなかったことが良かった）

名取はそう思い、久々に心慰めたことだった。

（四・六・二八）



Gone are the Days

山根三枝子

九月に東京に戻って来てからは何かと忙しい日日が続いた。それで日記が大分ぬけてしまった。思い出しながらメモ程度に簡単に書きとめる。

振り返ってみると帰舎早そうに被服廠での勤労奉仕。それが済むと一週間の燈火管制訓練。やっと暗幕がわりのものを取りはずしてもよいことになりホッとすると待ち受けていたように前期定期試験の準備。

九月二十六日には音楽部が企画したコンサートがあった。ピアノ独奏とミス・チャペル指導のコーラス部の合唱、それにヴァイオリン独奏。頼まれたので先度五月の演奏会のためによく練習したローデの協奏曲八番の一楽章をひくことにした。伴奏は展ちゃんにお願いした。ヴァイオリンの譜とは違ってピアノ伴奏の譜の方は頁数も大へん多くなっているし複雑で難しそうに見える。だがあっさり引受けてくれた。さすが万事に優秀な展ちゃんのことと頼もしくもあり感心もした。定期試験が近づいて忙しいし練習のための日数もあまりないというのによく引受けてくれた。

もっと別の曲で演奏者もラクに奏することが出来て聞く人も楽しめるものがあった筈なのにあんな曲を選んだ朝子にはやはり若気の無鉄砲さと未経験さがあったんだなと思われた。しかし聴衆である学生達も驚くべき忍耐心と行儀よさでジッと終るまで耳を傾けていてくれたことを思うと一寸ばかりおかしいやら済まないやらだ。

展ちゃんは当時若手の新進ピアニストである永井進先生に師事していた。彼はやがて芸大教授となり時折演奏会を開いたり又放送に出演したりして新聞や雑誌などに彼の名前が見かけられる時代もあった。最近はもうずっと彼の名前は消えてしまっているが健在であられるかどうか……。

当時未だ独身であった永井進先生は能力ある展ちゃん

を認めて張り合いのある弟子の一人として接しおられたようだ。いつか何かの折に朝子がそのことを指摘して

「あーらそれなら屹度先生は展ちゃんのこと気に入ってるのよ。そうよ、そうに違いないわ」

と軽い意味で冷やかした。すると彼女はいつもの赤ら顔を一段と真赤にして嬉しそうに笑って大きな手を振りかざし今にも朝子のことをぶちそうなかまえをした。

あの展ちゃんはもう二十年位前に此の世から去っている。厚木の奥の七沢にある病院、あのリハビリテイションで有名な病院に友人達数人と何回か彼女を見舞った。ケーキや大阪寿司などを持参して皆で共に食事をしお喋りをして彼女を慰めた。丁度西寮時代に戻ったようにして。その朝子達もあの頃に比べると何んと年を取ってしまったことか。最近、同じ場所を見舞のため時折訪れることがあるがつくづくそれを感じその頃のことも思い出すのである。

その演奏会の翌日のことに話は戻る。ミス・チャペルのリーディングの授業が終って廊下に出た時であった。学生達でゴッタ返している中をミス・チャペルが掻き分けるようにして朝子に近付いて来た。そして昨日の演奏を大変appriciateしたと言った。そして朝子のヴァイオリンに対する日日の努力や挑戦をよく理解して認めることが出来るというようなことを言って賞めてくれた。

授業中はあまり目立つことのない存在であった朝子の異なった面を彼女は見出したのであった。四十才台も半ばを過ぎる頃までずっと独身を通して外国の女子学生達に英語を教えていた彼女。その単調な月日の生活にとって何か気分転換になるような新鮮な喜びをローデの協奏曲が与えたことは確かに読みとれた。

彼女は一九二九年から一九六一年まで津田塾で教師を勤め（戦時中に一時帰国）五十年代には現皇太后陛下の英語教師にもなった。老後はカナダのトロントに帰り老人ホームで暮し一九八九年二月に九十八歳で昇天した。千駄谷の津田ホールで同年五月、同窓会の折に彼女の追悼式も行なわれた。列席した朝子は appriciate と言って下さった半世紀も昔の彼女の声を決して忘れてはいなかった。

十月八日から二十日までが定期試験。途中に中休みがあった。

十月二十一日から二十五日までが秋休み。

休み中にM君が送ってくれたローレンスの「チャタレー夫人の恋人」を読まねばならなかった。

お茶の水駅からバスに乗り、赤門近くの「農学部前」というバス停で下車するとすぐ近くにYMCAの追分寮があった。朝子は上京した最初の二年間だけは大学生の

兄と在京の時が重なっていたので何度か其所に兄を訪ねて行ったことがあった。M君はその時其所で紹介された人であった。真偽の程は確実と断言出来ぬかも知れないが兄は次のように話してくれた。彼は京都生れの京都育ちで小学生時代に大変成績がよくて二学年のとび級をしたそうだ。中学校四年修了で旧制三高にパスして京大の文学部を卒業した時は年令が若すぎたので更に東大の法学部に入学してきたという経歴の持主であった。

一度だけ兄が志賀高原にスキーに連れて行ってくれた時に彼や工学部のT君、そして女は朝子一人ではいやだったので展ちゃんも誘った。気軽にすぐ行くことをOKする人は展ちゃん位だと思ったので。

明日スキーに出かけるという日に展ちゃんと兄のいる追分寮を訪ねた。朝子はズボンを持っていなかったので兄のを借りたり又やはり借りもののスキー靴だの厚手の靴下だのが足に合うかどうかも試してみたりした。寮の兄の室は割に広いが正方形でも短形でもない一部が凸出したような形をしていた。床は油のたっぷりついたモップでよく拭き込んであるらしく黒光りしていた。その凸出部にあるあまり大きくない縦長の窓からは冬の光線がずっと奥の方まで差し込んで来ていた。そしてその光は建物がもう新しくはないことを照らし出していた。ベッドにはこんもりした掛ぶとんがかぶせてあり、その上に腰掛けるには腰かけにくい感じがした。

その寮のパーラーの床もやはり油のしみ込んだ木製で隅の方にピアノが一台おいてあった。

「あーら、ピアノがあるわ」と展ちゃんが言った。

M君はすぐに其所にあった楽譜を開いてショパンの作品――それは聞き覚えのある魅力的な曲であったが――を弾いた。初体面の展ちゃんも彼のあとをすぐ引き継ぐようにしてショパンのポロネーズを弾いた。二人は一言の言葉も交わしてないのにとても気が合ったように楽しそうな顔をしていた。朝子はその時一寸苦しいような気がした。

夜おそく出る夜行列車に乗り翌日一日の行程を歩いて志賀高原の熊の湯にやっとたどりついたのは夕方近くだったように記憶している。途中丸池という所に寄ったことを覚えているだけだ。

スキー場でも京城育ちでスケートの上手な展ちゃんはスキーも適当にコナしていてM君と一緒に滑ることが出来た。その日、兄は他の人達と横手方面の山スキーに出かけて行ってしまい居なかった。熊の湯近辺に、M君とT君、展ちゃんと朝子は残って滑ることを楽しんだわけだがT君は朝子の下手なスキーに手をやきながらもつき合ってくれたり助けてくれたりしたがM君と展ちゃんは其所でも気分を合わせてドンドン先に滑って行ってしまったりした。あんなことこんなことから朝子は多少意気消沈してM君は展ちゃんの方に気をひかれているんだな

と幾ばくかの劣等意識を懐いてしまったことであった。

熊の湯にあった多分一軒屋の古い木造の宿は入口から入った所にスキーやその他、ぬれたものなどを乾かす場所が広くとってあった。あの宿では夜は皆で足先の方をコタツに入れて放射線のように円形をなして床についた。明け方早く宿の人が赤あかとおきた炭火を入れに来て布団を足もとの所でめくったので驚いて目覚めたことなど思い出す。

最初の夜は前夜、夜行列車で眠れなかった上に一日中歩いたため夕食後からあたりかまわず眠りこんでしまった朝子であった。

次の夜はM君や兄達はロシヤ文学について盛んに話合っていた。展ちゃんもロシヤ文学を多少は読んでいたので仲間入り出来たが朝子は全くといってよい位仲間入り出来ずたゞ皆んなのお話に耳を傾けるだけであった。

あの時ふとしたことから死刑廃止の是非ということに就いて話しはじめた。朝子はやっと自分も何か喋れると思って強く死刑反対の意見を述べた。その理由はというとどんな極悪非道な悪人であっても人間が人間を裁いてその人の命を断つということは更に罪を重ねることになるという風に感じているからということであった。その時M君はそれなら被害者側の損失や悲しみはどう解決出来るのかと被害者側のことを強く主張してきた。その時彼の反論の理論的な立派さに感心させられた朝子であった。

それからかなりの日数が過ぎてからのことである。朝子はボーイフレンドのドンから結婚を申込まれてその問題の根本的な所で悩み更にそれは人生の不可解にもつながる悩みでもあった。誰かに相談したいと思っていた時にM君の存在を思い出した。彼からなら屹度よい助言其の他沢山のヒントが得られるに違いない。

志賀高原のスキー行があった後間もなく兄は卒業して東京から離れたがM君は未だ在学していて時たま朝子にはがきなどで便りをくれていた。それ等は中支に出征して連絡がとれなくなっている兄の宛先名など問い合わせるものであったり、又兄からスキー道具など預かったままだがどうしたらよいかというようなことを問い合わせるものであった。又用事がなくても彼は谷川岳の山荘に来ているとかいってはがきをくれたり又ある時は八丈島に休養のため来ているとか言って便りをくれていた。その時には椿油をお土産に送ってくれたりしていた。それで朝子は彼に対して劣等意識は持っていたとしても彼に質問のはがきを思いきって出すだけの勇気は培われていた。

朝子の書いた質問の手紙にすぐに答えてくれたのが彼の送ってくれたローレンス作の「チャタレー夫人の恋人」であった。それには手紙が添えられていた。

「……これは入手出来難い伏字なしの完本

でありしたがってレイディの持っているべき本ではないから一週間だけしか貸してあげられません。読んだらすぐに返送して下さい。読後感も書いて……」そして最後の所に一行おいて

「僕は何んだか淋しい」とも書いてあった。

その本は少し古びた可成りの厚さのあるもので頁の紙もザクザクとなってしまった感じで黄ばみかけてもいた。バラバラめくってみてもどうも難しそうだ。辞書をひかねばならぬ単語も結構沢山だ。あの時、正直に自分の語学力の足りなさをさらけ出して何が何んだか分からなかったとはっきり言ったとしても彼は朝子のことを軽べつはしなかったであろう。しかし朝子は当時、素直にそう言うことの出来ない弱い人間であった。彼の知性に目が眩んでいたようであったし夢とあこがれの人物から相手にされなくなることが恐かったのである。

彼のくれる手紙にはよくフランス語が一行か二行位は書いてあった。仏語を選択課目にとっていない朝子は友人達の中で仏語を学んでいるSさんにこれは何んて意味なの？などと尋ねたりした。そんな折、彼女は大抵キャーッと娘らしい大げさな叫び声を挙げて笑い、朝子のことを冷やかしたりした。自分の名前のサインの前に je suis votre esclave（私はあなたの奴れい）なんて言う言葉をつけてもそれは儀礼的な手紙の形式であったのではないだろうか、英語の手紙では yours Sincere ly と書いたりするように。でも朝子はとても嬉しくてその手紙を心のうちに抱きしめるのであった。

朝子はその本を読みこなせないことを彼には恥ずかしくて告げることが出来なかった。若しそう言ったら彼はもう朝子のことを相手にしてくれなくなるかも知れない。それにひきかえどんな馬鹿気た事をさらけ出しても何時も善意と好意に満ちて大目に包容してくれるドンと比べてみたりするのであった。

それにしてもM君の手紙は何んと文学的で乙女心の夢を満たしてくれるものであったことか。そしてドンからの手紙はM君からのものに比べると何んと平凡でつまらなく見えたことであったか。

「偉大なるロマンティスト!!　ローレンス」とM君の手紙に書いてあったが、朝子は未だに彼のこの感嘆文に同感出来るようなチャンスに残念ながらめぐり会っていない。

M君はあまり健康体ではないように察しられていたが其の後どのような人生を送ったことか。もう八十才位のおじいちゃんになっているか或いは天国にか。朝子のことを思い出してくれたことがあったかどうか……。

ずっと以前に「フランケンシュタイン」の何んとやらと言う映画を見た時にM君のことを連想作用で思い出した。何故かと言うとM君もその画面に出て来る超人的怪物に何処か似通っていておでこが広いことが容貌の特性

であったので。それ以外の彼の容姿はもう思い出せない。朝子にとっては若き日の知性に対する夢と憧れの具象であったM君。

十月二十五日

秋休みの最後の一日。秋の遠足は体育部が主催することになっているので踏査をした。場所は瀧山丘陵。中島先生と田村、松本、中村さん達と出かけた。教育実習の教案が用意出来ていないことを気に懸けながら。休み中ずっと取り組んでいたローレンスの「チャタレー夫人の恋人」のおかげで頭を使い過ぎて疲労していたせいかボヤッとしていて省線電車の中に大事なお弁当を置き忘れてしまった。しかしすぐに駅員さんが取戻してくれた。

国分寺——立川——南拝島——拝島渡し——南拝島——東秋留——橋を渡って金穴——瀧山城跡——八王子という道順であった。

(あゝ、この通りの道順を又たどってみたい。若き日日の楽しさでもって)

帰途中央線で新宿に出て中島先生について庄田恒子(姉の友人)宅を訪問。彼女のチャーミングな妹にも会えた。夜は中島先生の所で河瀬先生も加わってブリッヂをやり十二時頃に就寝。秋休みなんてまるでなかったように短かく思われた。

十月二十六日

二学期が始まる。漢口の一部を日本軍が占領した。

成績発表。相変らず良くもなし悪くもなしと言ったところらしい。注意されることもないし賞められることもない。有頂天になることもなし悲しくて憂うつになることもなし。有難いことだ。

夕方まで教育実習の準備。同じ教材で一緒に準備をする他の四人の人達が呑気に構えているので少々イライラした。

夜、パーラーが空いていたので其所でヴァイオリンの練習(指だけ)。

消燈間際にお洗濯場に大急ぎで降りて行って粉石けんをお湯で溶かして洗濯ものを漬けた。

大塚さんに借りた「風と共に去りぬ」を読みはじめた。評判通り面白そう。みんなが読んでいる。英語で読む人も日本語で読む人も。教室内では休み時間などにその本の貸し借りの風景が見られる。

十月二十七日

授授が始まった。学校が始まるとどうしてこんなに忙しくて時間がふさがってしまうんだろう。朝起きてお洗濯、食事、室の掃除、学校へ。お昼休みには星野先生が教授法の実習に関して今までに済ませた人達の批評も兼ねた注意を下さった。一時から講演会。三時から運動部の委員会。帰寮してからはアメちゃんと相談して今夜の寄宿舎の委員の改選の用意。

夜の自習時間は訳読の予習。近日中の教育実習に備えて教案の暗記。日誌をつける。

十一月一日

初めて教師の役割を試みた日。

当惑するような失敗——これを一番心配していたのだが——はなかったがあまり活発な授業は出来ていなかったと思う。何しろクラスメイトや星野塾長が見張っている中なのでどうしても堅くなってしまう。生徒の役割をする予科生達はおとなし過ぎて困る位だったし先生役の方も教案に忠実に縛りつけられ過ぎていたようだ。

十一月三日 明治節

小講堂で明治の時代や明治天皇をしのんでの式が行なわれそのあとで又講演会。

寄宿舎では昼食時に祝日とお誕生日祝会も兼ねた御馳走が出された。

食後にレコードコンサート。久しぶりで第九交響曲を聞くことが出来て嬉しかった。

寝るまで「風と共に去りぬ」を読みつづけた。

此の頃生活が少したるんでいるみたいだ。

十一月四日

先日踏査した瀧山丘陵へのハイキング。きょうは運動部の委員が先達という責任を持っている。何んといっても好天気に恵まれたことがとても嬉しかった。秋川の川原では砂利のゴロゴロした川辺に腰をおろしてお尻が少し痛いと思いながら流れを見ながら休憩。それから金穴に行く。此所で案外手間どったことに気付き急がねばと一寸心配。きょうのハイキングは従来のとは少し変わって委員の命令によって規則正しく整頓して歩くようつとめた。瀧山城趾での見晴しはとてもよく(ああ今、又行ってみたい。いやいや今はもう美しくないだろう)昼食後、学年別に集まって写真を撮った。

山道を下って拝島の渡しに出たが多摩川の方にとひろびろ開らけた景色は良かった。渡し舟はバスさえも乗せることが出来るという程安全なもので心配は不要であった。日吉神社の所をぐるっと回わって南拝島駅に出た。丁度、来合わせた電車に皆乗ることが出来て帰途についた。

学生時代最後の遠足。責任があったので幾らかの束縛はあったが楽しいハイキングであった。

十一月五日

朝はおね坊してしまった。朝食後練習してから蜂谷先生宅に行く。自分ではそんなにつめて練習したとも思わないのだが近頃手があがったと賞めていたゞいた。おかしいな。一年生の時、実験心理学で学んだ練習曲線のことを思い出した。それによると或る時、一定期間練習を停止していてもその間に練習効果を表わす曲線が上昇し続けていたことが分かるというような実験結果のこと。

帰途、務台理作(文理大教授)氏宅を訪問。彼はもと台北帝大の教授で自宅の近くに住んでいた。同郷出身で

父母達が親しくしていた。朝子が卒業して台北に戻る前に是非一度訪ねてくれと誘われていた。結婚して十年余りもたって赤ん坊が生れたということがビッグニュースであったので、犬っころの玩具を持って行った。理作氏も客間に出て来て愛想よくお話相手をして下さった。三時すぎ、おいとまして帰寮。

夜中の十二時過ぎまで「風と共に去りぬ」を読んだ。

十一月六日

今まで何んと忙しい毎日を過ごしたんだろう。日記もつけていない。朝起きてから寝るまで追いまくられどうし。

しかしきょうは久しぶりに落付いたのんびりした気分でお部屋のお掃除をしたりスカートのすそをまつったり出来た。夏休み前からほってあったハンカチーフのお洗濯も出来た。「風と共に去りぬ」を読んだり日記のため書きも出来た。

十一月九日

新響の演奏会を聞きに日比谷公会堂に行く。

十一月十一日

「風と共に去りぬ」をやっと終りまで読んだ。最後の所で「……明日という日がある」と結んだしたたかなスカーレットの言葉が心に残った。バトラーやスカーレットの言動は私にとても影響を与えたと思う。

十一月十二日

蜂谷先生宅に行く。近頃、先生は少したるんでいるみたい。先のように燃えるような厳しさや熱情を示さない。それはすぐ生徒にひびく。私も幾分サボり勝ちな練習しかして行かない。先生はきっと私のような者に教えることに飽きがきたのかも知れない。実際のところ今私は壁につきあたっている。一つの音符を二つづつに分け、絃の上で弓をバウンドさせながら軽ろやかに音を走らせるテクニックが中々仕上がらない。もう三ヶ月近くもこのテクニックのエチュードだけはバス出来ない。

帰途、日比谷劇場で展ちゃん、岩淵さんと待合わせて映画「鷺」と「若い人」を見た。モナミで食事中、水谷八重子に出会わした。モナミの食事はおいしかった。

十一月十三日

ドンがお散歩にやって来た。

午後、展ちゃんと色んなこと話した。

十一月十六日

津田の創立記念日。下級生達は運動会。三年生は横浜の共立学園に出かけて英語の new method による教授法の授業を見学。帰途、フェリス学園にも立寄って学園内を見学した。

十一月十七日

夜、寮の三階の南側ウィングの住人達だけでお列会をした。(同じ列にお部屋のある人達で上級下級生の別なく行なう親睦会) 例によってすき焼を食べて食後はゲ

ームをした。

十一月十八日

お休み。秋の文学祭。

午後から James Barrie 作〝Quality Street〟のプレイを見る。夜は鏡子さんとお茶を飲みつつ秋の夜長を消燈まで過ごした。

十一月十九日

朝、練習をして散髪屋に寄って髪をカットして貰ってから蜂谷先生の所に行った。帰途、新宿に出て三越で足袋と手袋と下駄を買った。デパートで色んな品物を見物するのは面白い。買いたいものが沢山。でもお金がないから買えない。

次に自作の英詩が書いてある。がオミットしよう。永久に葬られる私の詩。傑作なのか馬鹿気たものなのか分からない代もの。

それはあまりにも素直に人を愛してしまった故に傷つきとても苦しむ者が自分の意志で今度は強くなって傷つくことがないように出来る人間になる。でもそうなったために今度は人を素直に愛せなくなる悩みというものをうたっている。十四、五才の頃のほんわかとしたプラトニックな同性愛。

十一月二十日

ブラリと過ごしてしまった。

十一月二十一日

放課後あるタイプの課外授業をサボってヴァイオリンの練習をした。

夜はモン子とお喋り。此のカレッジライフに対する不満や愚痴のこぼし合いみたいなもの。もとを正すと英作の宿題がうまくはかどらないことで苦しんでいるのが原因。

十一月二十二日

放課後、第二回目のティーチングの教材を星野先生のところに貰いに行く。四時から五時迄タイプ練習。食事入浴が済んでから寮の委員会を開らくことでアメちゃんと相談。八時から九時までせまい大工部屋でヴァイオリンの練習。その部屋に夜になると取りこんであった鳥篭の中で時ならぬ明るさとヴァイオリンの音のために数羽の小鳥達が盛んに鳴いたりあばれたりしていた。かわいそうだったかな。

寝るまで「青年時代」を読んだ。

十一月二十三日

新嘗祭なので学校はお休み。

昼食後、椿、阿部、井上さん達とテニスをした。そのあと本館前のきれいな芝生の上に皆でねころんで軽い疲れを休めていた。皆、黙ってそれぞれの思いで秋をそして自分の春をかみしめていた。空はぬけたように蒼い。宇宙の果てまでも透してその暗い所まで見せているので

はないかと思われる位の蒼さだ。辺りの林の木々の葉はそれぞれの色合いに色づき季節の移ろいを教えてくれている。息がつまりそうに美しい秋。厳然たる美しさ。じっと静かなひと時が過ぎゆく時であった。こんな素晴らしい日だというのに四人ともお財布が軽くなっていて外出することも出来ず芝生にただ寝ころんでいる他ないことをこぼし合いはじめた。

その時だった。急に阿部さんが跳び上がるようにして立ちあがった。

「あっ、拾円あったあー」と叫んでポケットから出したお札を皆に見せた。拾円あれば何んとか皆で遊べる。大喜びの四人はすぐに新宿にスケートをやりに出かけた。四時から五時迄滑った。二度ばかり誰かに衝突してすってんころりんとやった。いつものことながら下着にまで滲み通った氷水のため外に出ると寒かったが我慢。中村屋でお汁粉とハンバーグサンドイッチ（こんなもの半世紀も前からあったんだな。自筆の日記による証拠）を食べた時はとってもおいしかった。

国分寺駅に帰り着いたのは七時少し前。吉川幹事に駅でお会いしてタクシーに一緒に詰め込んで乗せて戴き帰寮。

十一月二十四日

放課後、荒久保、遠藤、増川さんが私の室に来て四人で教案を作った。夜の自習時間には増川さんと一緒に生徒に質問するクエスチョンを沢山作り答も書いて清書した。消燈までお喋り。増川さんは

「学生の身分でありながら恋愛に夢中になるなんて少し変態だと思うわ。もっとほかの学問とかいったものに熱中するのがほんとぢゃあない？」とドンの事を批判して私に警告を与えてくれた。

十一月二十五日

夜は寄宿舎だけで自主的に燈火管制の訓練をした。そのあと鏡子さんとお茶を飲みながら喋る。今度の冬休みに福岡の彼女の家に来て一緒に過ごさないかと盛んに誘われた。一寸気を引かれるがどうしようかな。交通費も要ることだし。

十一月二十六日

朝食後、練習。勘違いしてバスが一台おくれたので増川さんと一緒になってしまった。先生宅に着いたのは十一時位で練習は十二時に済んだ。きょうは芹沢さんがお休み。気分が悪くて練習が出来なかったのでと先生への伝言を伝えた。更に彼女が此の頃とても憂鬱そうにしていることも報告した。先生は黙っていた。でも心に受止めていることが顔付きでよく分った。

蜂谷先生はやっぱり大好きだ。ほんとに先生の弾き方や音色は立派で美しい。私のことを無視していないから好きだ。

通学生であるためいつもはあまり遊ぶことのないEさんだけど誘われていたので帰途目白の彼女の家に行った。

お昼を御馳走になり二人でピアノとヴァイオリンの合奏をした。彼女の父親は内閣書記官長だ。赤い色合のじゅうたんを敷いた室でお昼を食べたのだがその時室の入口に近い所で十五、六才位の新米と見える女中さんがお盆を両手で膝のあたりに行儀よくさげて目は下だけを見つめてつゝましく立っていた。

食後、勉強机が室の中央においてある彼女の室に行った。其所にも赤いじゅうたんが敷いてあった。彼女のお姉さんがおしゃれした恰好で一寸だけ私達の所をのぞきに来てすぐに何処かに出かけた。とても華やかな人に見えた。

国分寺駅で粕谷先生、蟹江先生、宮村先生とゾロゾロ先生方に会ってしまった。夜は本物の燈火管制が発令され一度空襲警報が出た。ほんとに来襲したのかな。

十一月二十七日

浅田さんと一緒に温室の花屋さんに行きお花を買い立川の陸軍病院に西寮の代表としてお見舞に行った。帰途飛行場で飛行機が発着するのが面白いのでしばらく見物していた。国分寺に戻りおそば屋さんでおうどんを食べていたらバスが出てしまい歩いて帰る。好天気であったので気持よかった。夜も又管制。

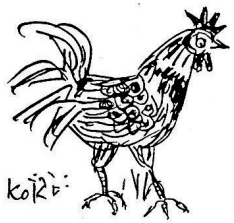
十二月三日

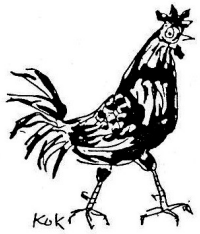
企画部委員長が大久保の陸軍第一病院外科に連れて行ってくれた。私達は二十二号室を見舞った。其所の看護婦長は原ろくと云う人でもう一人後藤美代という人がいた。後藤さんは日赤の方からの委託生として津田塾に来て勉強し卒業した人であった。病院内を一通り全部回わった後二人の兵隊さんに付きそってお喋り相手をした。一人は教養もありおとなしそうな人でもう一人はまるで子供のような感じの人であった。戦争についての話や何所で戦傷したとかいうような話は一切なかったし何んの感銘もうけずお話するにも一寸苦心を要した。

とにかく五十人近くの若い男達がもう大体元気になっているように見受けられるのに病院からは出して貰えず、ウズウズして大きな一室にとじ込められていた。そして一種の人間臭をたゞよわせてゴチャゴチャといるのは実にアブノーマルな気がした。彼等はすごく退屈しているかそれを通り越して無気力になっているかだ。

四時頃までいて帰途についた。

（未完）





「やまももも」ほか五編

青木昭成

やまももも

はだか麦が誕生する昼
わたしの心はいつしか均衡をなくした
躰がゆらぐたびに景色がゆらぎ
積み上げられた麦わらの束から
いろとりどりの蛾が這いでて
また麦わらの束へもぐり込んでゆく

紅黯くもりあがるやまももの実と
やまももの葉っぱのすきまから空へ
やっと首をつきだし　眼下を望みみるのだ
南国はどこか花びらみたいな触覚があって
へんに神妙なやまももの匂いが鼻にくる
すこし黒松の味もする数粒づつを
むやみに頬ばりながら　ただ
いくらセンチメンタルに生きようと考えても
やっぱり　冒険心をくすぐられて駄目だ

そう考えるひと時　地球の芯に向かって　ぼろり
ぼろり　ひそかな音を残して落ちてゆくのは何か
見下ろす野良で鋤の先がするどく光る
姿なく笑うかなたの人物の声をきけば
心がきゅうに騒ぎはじめる
わたしはもはや幹からずり落ちて急がねばならぬ
昨日おこったことが今日もおこり
明日も必ずおこると　誰も考えないとは言いながら

道端にナイフの鞘が落ちていた
そうか　なにか雑草の影だったのか
女竹の葉っぱのうえを虻が徘徊している
そして　わたしの心はいつしか仲間のところへ
帰る時刻を気にしはじめている

いくら待ってもバスはこない
旅人も　迷い犬も通らない
午后を散策するわたしは独り言をやめて
道すがらギシギシの花をちぎって歩く
丘のやまももの木へ取りつくと
ひっそり　幹を攀じのぼるのだ

てっぺんに着けばしぜんに身がちぢむ

薄雲がたなびき　ゆっくり移ってゆく

クレヨン

レモンの蕾がほころびた
人に同感の念がかけるころだ
にわかに躰がゆるむ
ゆるやかに丘をのぼる村道で
耕うん機のキャタピラーが錆びついている
万年塀にへだてられた屋敷に
シャボンで洗ったばかりの
あおいキャンバスの「つなぎ」が干してある
しかし　製粉工場は少女の家の向こうがわに
眠っている　砂の唇を見せて
と　とつぜん怒鳴ってみてもしかたがない
今ごろはたくさんな眠気をあつめて
せんだんの若葉が小学校の屋根を
しずかに掃いている
人がすべての誤解をとくころ
少年のクレヨンが折れた

胞子

地下で
死人も泣くのでしょうか
どくうつぎの実の膨らむころ
それとも嗟嘆からさめるのでしょうか
路傍の茶店で乞食が
ラムネをもらって飲むのを見ると
いかにも髯が鳴っています
ながい楽器のような
なんと光るあの手つきでしょう
いや　中空がかすんでみえる
人々のこころがゆるみます
その不明な歓びに
身ぶるいするのは生物の性です
人がもぎった椎茸から胞子がおちて
あらかじめ白く生命を宿していたものが
ふっと消えたとしか思えぬ風がふきます
そこここに空白が残され
気泡の美の限りないむなしさ
いくらたびたび初夏の半裸の
丘をめぐっても何も見かけません

雨がふり

この朝
尖って簇生している真麻蘭の
畑に雨がふりそそいでいる
このやさしい眩暈

「むしょうに恋しい恋人もいない」
そう語るのはわかい友だち
えくぼがあり　すこし故障のある
道化人形を踊らせてみせてくれた

時報がなって
街路を少女たちが流れている絵のまえで
土のつまった土偶のバランスについて
語りあった

麩のようにやわらかい椅子にもたれ
黙っていても一寸もわびしくない
ただカクテルがむしょうに飲みたい

なにか現実というものはこう時々
弾みあわないで徒労におわっているように
思えていけないことがある
庭のオリーブの葉について話した折りも

呂律がひどくものうく感じた

その武者ぶるいの短さ
それから雨をついて出てゆく
陸橋のある駅の方へ二キロ

雑草のファンタジー

問いは発したところからすでに
答えになっているのか
さあ　ゆりかごを裏返したように
飴いろのこうもり傘をひらいて
扉のそとに立とう

（ゆめみる少年がらいらくに
ゴムなが靴を鳴らして
歩くように歩け）

ある人の座右の銘に
「寝ていて他人を起こすなかれ」
とある

これは田園の　とある夏の陽ざし

男も女も放心しているむなしさ
山羊が鳴く小屋の庇をはなれて
まっすぐ稲田の真ん中をゆき
炎天に古墳の群れをたずねてみる

習性のように土にうずくまるのは誰か
仰々しい雑草の穂にはバッタの脚
いつもいたずらに露命を
無常の風に任せたふりをしている

アルタミラの洞の外　カプリの島中
北京の空のしたを旅した人や
いにしえの記憶に沈む人のこころを
焦がすのはこの地熱

流れる汗と歴史とを感ずるのはゆかい
「生きている」と洩らすのはもの思い

何かわからぬものを予感すると
ひとしれず辛く耐えがたい
この時を迎え　つぎの時を迎え
あやしく黙りこむ人は吐息せねばならぬ
割るように
稲田をゆけば禿山へつきあたる
ひきかえせば地割れに影坊主が落ちる

ひるむしろの葉はスプーンに似ている
ふといは密かに身もだえる
かるくファンシーを切断し

陽炎のゆらめく辺りに近づくと
すいせんの球根がぶんけつしている

この昼に涙をもらすものはいない
あけはなたれた窓の
ところてんを売っている店で休んで
跫音もなくたち去るあの人のふくらはぎ

ネルのポケット

あの人がひとりで
ネルのポケットをひろげると
一点　ひばりが空へかけあがる

告白したいことのある足どりで
だが　現実はしだいに目のまえの現実に
埋もれてゆくものだ

どこにも沈痛な空気はない

いそいでも　いそがなくても
せりが繁げる小川の縁にいたる
思いがけなく　二つに割れた落花生の
殻と浮き草がいっしょに流れている

ゆっくり語りあいながら
しかし　蟻の眼のように小さく
とおい野のはてへ消えてゆくのか

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

お母さん会社へ行かないで

三戸岡道夫

学校から帰ると、エツ子は、

「ただいま」

わざと元気な声で、玄関のドアを開けた。

しかし、家の中は森閑としている。誰もいない。父は会社、母も会社。中学三年生の兄も、まだ学校から帰っていない。来年の高校受験を控えて、塾の勉強に忙しいからだ。三人とも夜遅くならないと、帰ってこなかった。

一番先に帰るのは母なのだが、それも慢性的な会社の残業で、家に着くのは毎晩八時前後である。忙しい時には、夜の十時をすぎる時もある。

エツ子はランドセルを机の上に置くと、冷蔵庫の中から牛乳を出して飲み、テレビのスイッチを入れたが、子供向けの番組ははじまっていなかった。

まだ、外は明かるい。

エツ子は牛乳を飲みながら、窓のガラス越しに、明かるい空を見た。暮れる前の西の空は、半透明にかすんで静まりかえっていた。そのどこまでも明かるい空を見ていると、エツ子はその明かるさの中へ吸いこまれてしまいそうな淋しさに襲われて、

（お母さん、会社へなんか行かなければいいのに）

と思った。会社へ行かなければ、エツ子が学校から帰ってくれば、毎日家で待っていてくれる。

母は、エツ子がもの心ついた時から、もう働いていた。いや、エツ子の生れる前から、働いていたのにちがいない。いつか母がひとりごとのように、

（そろそろ会社へ行くの、やめようかと思うのだけれど…、家を建てて…、住宅ローンがあるのでねえ）

と言っているのを、エツ子は聞いたことがあった。その時、

（そうすると、お母さんがこの家を建てたのか）

と思ったことをエツ子は記憶している。

エツ子は最後の牛乳を飲みながら、あらためて家の中

を見廻してみた。
（住宅ローンがあるんだから、仕方がないか）
エツ子は夜になるのが待ち遠しくて、ちょっと首をかしげて、腕時計を見た。
（なんだ、まだ四時前だ。はやく五時にならないかな）
エツ子はまだ小学校三年生なのに、腕時計を持っていた。腕時計といっても安物で、いつか母といっしょにディスカウント・ストアーへ行ったとき、買ってもらった三千円ばかりのものだったが、中の機械は本物のようで、正確に動いていた。
夕方の五時になると、母の勤めている銀行へ電話するのが、エツ子の日課になっていた。
その時間を正確に知るために、腕時計が必要なのである。外で友だちと遊んでいるときでも、家で一人で遊んでいるときでも、腕時計が五時になると、近くの電話器にかけ寄って、母のところへ電話をする。そういう意味で、脇時計とテレホンカードは、小学生とはいえ、エツ子の必需品なのだった。
夕方五時の銀行は、勘定の締め間際で忙しい。エツ子が電話をすると、母がすぐ電話口へ出るときもあるし、別の人間が出て、取りついでくれることもある。が、母が直接出てくれたときが、一番うれしかった。
いつも、エツ子がプッシュホンを押すと、
ルルル、ルルル、ルルル……
と呼び出し音がして、しばらくすると、
「はい、明治銀行新宿支店でございます」
母が電話に出たときは、声だけですぐ母とわかるので、もう、エツ子は甘え声になってしまって、
「お母さーん」
と呼んでしまうのである。
「今日一日、おりこうさんだった」
「おりこうだった」
「何も変ったこと、なかった」
「うん」
毎日、定期便としてかける電話だから、それほど用事があるわけではない。要するにエツ子は電話で母の声を聞いて、
（お母さんといっしょなんだ）
という安心感に浸たれるだけでいいのだった。
電話の母の声は、日によってやさしい時もあれば、忙しそうなときもあり、気嫌のいい声もあれば、不気嫌な声もあった。不気嫌なときは、きっと仕事が忙しいのだろうと、エツ子は子供心に思った。
別の人間が電話に出たときは、
「ちょっと、待っててね」
と、母に取りついでくれる。やさしいお姉さんの声のときが多いのだが、時には男の声の時もあった。男の太い声で、

「ちょっとお待ちください」
と言われると、エツ子は、忙しい職場へ、かけてはいけない電話をしているようで、気おくれがした。
時には母がいない時もあった。それは、ちょっとした用事で外に出掛けているか、あるいは地下の書庫へ書類でも探しに行っているとかで、たいして遠い所へ行っているわけではなかったが、エツ子は、
（どうしたのだろう）
と、母が突然蒸発でもしてしまったかのように、心配になるのだった。
電話でエツ子が母と、とりとめのないおしゃべりを、二言、三言したあと、最後にエツ子が言うのが、
「今夜、帰るの、早い？」
という極り文句であった。
「今日は、早いわよ」
という返事ならば、
「わーい、やったぁ…」
と、受話器の前でとび上り、
「今夜はちょっと、おそいわね」
と言われれば、
「つまんない」
最後に母の方から、
「じゃあ、お母さん、まだ忙しいから、これで…」
と言われて、エツ子はやっと、
「じゃあ、お母さん、早く帰ってきてね」
それで、ガチャンと、電話は終りになるのであった。
今日もエツ子は牛乳を飲み終ると、テレビのアニメ番組を見て、あとは、それにつづくコマーシャルをぼんやり見ていると、もう五時だった。
（さあ、五時だ、五時だ）
エツ子は電話器へかけ寄った。
プッシュホンを押す。
ルルル、ルルル、ルルルル
（今日もお母さんが直接出てくれますように）
祈るような気持で耳を澄ませていると、
「はい、明治銀行新宿支店でございます」
応待したのは、若い男の声だった。エツ子は全身を緊張させて、
「もしもし、町田です。母をお願いします」
エツ子はよそ行きの声を出した。
「ちょっとお待ちください」
エツ子の気のせいか、早口でそう言う男の声は、
（この忙しいのに、こんな電話がかかってきて…）
と、ちょっと不気嫌そうな声だった。
その頃、町田佳子は、貸出資料の調査に忙しく手を動かしながら、
（そろそろエッちゃんから電話が入るころだ）

と思って、ちらっと壁の時計を見上げていた。時計の針は、まもなく五時であった。

佳子は夕方の五時になると、壁の時計をなんとなく見上げるのが、癖になってしまっていた。

（そろそろエツ子から電話がかかってくる時間だ）

という期待からである。しかし、もう毎日のことであるから、期待というよりも、習慣といった方がよかったかもしれない。

夕方五時のエツ子からの電話は、最初は母の帰宅の催促が目的であった。

明治銀行新宿支店の貸付係に配属されている佳子の帰宅は、どうしても慢性的残業で遅くなりがちであった。

（だらだら残業に、いつまでも付きあっていなければいいじゃないか）

と、夫の邦介は言うのだけれども、同僚の男子行員が、九時、十時まで仕事をしているのに、佳子だけが五時になったからといって、さっさと帰ってしまうわけにはいかないのだった。だから、帰宅のタイミングを捉えるのがむつかしかった。

それで、夕方、エツ子から電話をかけさせたらどうかと、最初考えたのは佳子であった。そうすれば、

（子供が家で待っていますから）

という職場へのデモストレーションになり、すこしでも早く帰宅できる雰囲気作りになるのではと、考えたのである。

この考えには、家で母の帰りを待ちわびているエツ子も大賛成だった。

（エッチャンが銀行へ電話をしてもいいの。うれしいな。そうすれば、毎日電話でお母さんとお話しができるもの）

ということで、夕方五時になると、エツ子から電話が入るようになったのである。

最初のうちは、その電話の内容を察知した課長や同僚たちが、

「町田さん、子供さんが待っているんだろう。早く帰んなよ」

なんて声をかけてくれて、多少の効果はあったが、度重なるとそんな声も次第にかからなくなってしまって、また、元の木阿弥になってしまった。だが、エツ子からの電話は、夕方の母と子の会話として続いているのであった。

月末が近い貸付係は忙しかった。

男子行員は貸出稟議書の作成に忙殺され、きりきり舞いをさせられている。最近のように日本経済のバブルがはじけてからは、不動産を担保にとった大口の貸出が減って、中小企業や個人向けの貸出がふえている。だから貸出件数が多い。

加えて、貸出の健全性が急に強調され出したので、作

成しなければならない関係書類も多くなり、万事にわたり、複雑、面倒になっていた。

事務手続だけを担当している若い女子行員たちは、その日の勘定が合ってしまえば、さっさと帰ってしまうのだが、貸出稟議書作成のアシスタントをしている佳子は、そうはいかなかった。

信用調査書の作成、取引状態調の整備などと、いろいろな関係書類を、コンピューターから出てくる資料を整備して、貸出先の会社ごとに揃えなければならないのである。

（今夜の帰りは、何時ごろになりそうかな）

再び壁の時計に眼をやった佳子の視界に、さっきから貸付係の応接セットに腰掛けて、なにやら貸付担当者と熱心に打合せをしている、渉外係の池田弘の姿が眼に映った。

佳子は、ふっと嫌な予感にかられた。

池田は仕事熱心な、渉外担当者である。今日も渉外から帰ってきて、訪問先から受けてきた貸出の打合せをしているのにちがいない。しかし、困るのは、池田は仕事熱心なあまり、仕事を急がせるのである。必ず、

（明日の朝までにやっといてくれ）

とくるのである。すると、そのしわ寄せが佳子の方に寄り、資料作りで残業が遅くなるのである。今夜も、なんとなくそんなキナ臭い匂いがする。要警戒といった、感じであった。

エツ子からの電話がかかってきたのは、ちょうど、そんな時であった。

（エツ子からだ）

だが、佳子はちょうど端末器にむかって、資料調査のオペレーションをしている最中で、手が放せなかった。そこで電話に出たのが、尾上健介という若い男子行員であった。

「町田さん、電話ですよ」

佳子を呼ぶ尾上の声がした。が、その声にちょっと険悪なものを佳子は感じた。

「はい、どうもすみません」

佳子が急いでデスクに戻ると、尾上は、誰からの電話と、相手の名前も言わず、電話器を音をたてて投げつけるように、佳子の机の上に抛ってよこした。佳子が受話器を取ると、

「お母さーん」

エツ子の声がいきなり、とびこんできた。

「エッちゃん、今日もお利怜さんだった」

「うん。さっき電話に出たおじさん、こわい人だった」

「あら、そうでもないわよ」

「お母さん、今日、帰るの、早い？」

佳子は、渉外係の池田の姿を眼で追いながら、

「今日はちょっと、遅くなりそうね」

「おそいの？　エッちゃん、つまんない」
「でも、今日はお父さんの帰りが早いかもしれないわよ」
「ふーん」
と、いくぶん不満げなエツ子の返事のあと、
「でも、お母さん、できるだけ早く帰ってきてね」
そこで、ガシャンと、電話は切れた。
実をいうと、尾上がエツ子の電話を取りついだとき、尾上は最悪の状態にいたといってよかった。というのは、忙しくてばたばたしているところへ、一度に三本も電話がかかってきたからである。その中の一本が、エツ子からの電話だったのである。
まず、面倒な電話が取引先からかかってきて、いらいらと対応している最中に、エツ子からの電話器が鳴ったのである。周囲には誰もいず、尾上しか電話に出る人間がいなかった。尾上は中腰で立ち上って電話器を取ると、左の耳で自分の電話を聞きながら、右の耳で、エツ子の電話を受けた。
すると、その時、運悪く、課長の電話器も鳴ったのである。課長も席にいなかった。
（ちぇっ、忙しい時にかぎって…）
あわてて尾上はエツ子の電話器を、
「町田さん、電話ですよ」
と佳子の方に投げつけると、自分の電話も、
「ちょっと、お待ちください」
と待たせておいて、課長の電話に出たのである。課長の電話は、折よく戻ってきた課長へ直ちに引きついだので、一応の対応は出来たのであるが、課長の電話への対応がすこし遅れたことは事実であった。エツ子からの電話がそんな状態のときだっただけに、尾上の態度が多少つっけんどんだったのは、やむをえないことだったかもしれなかった。
佳子がエツ子との話が終って電話を切ると、それを待っていたかのように、尾上がつかつかと佳子の方に寄ってきて、
「夕方の忙しい時に、変な電話、かけないようにしてほしいですね」
切口上でそう言った。
尾上が佳子に対して強硬な態度に出たのには、理由があった。それは、課長がさっき電話の客から、
（君の銀行は電話に出るのが、遅いねえ。そんなことで、商売になるのかい）
と、嫌味を言われた。そのとばっちりで、課長から、
「いいかい。わたしの電話が鳴ったときは、すぐ出てくれよ」
と注意されたからであった。
尾上の頭の中には、あの時、（お母さーん…）なんて

電話がなければ、すぐ、課長の電話に対応できたのにという思いが、むくむくと頭をもたげてきた。
（電話にすぐ出られなかったのは、俺のせいではない。あの甘ったれ電話のせいだ）
だが、そんな言い訳を課長の前でするわけにもいかず、その反動が、佳子の方へ来たわけであった。
もともと、尾上は感情の動きの激しい男であった。怒ると、すぐ表にそれが出る。顔をまっ赤に硬直させ、不気嫌に唇をとんがらして佳子に迫る尾上には、その本性がもろに出た感じであった。
しかし、同時に佳子の方にも、尾上に対する不快感が、黒くくすぶっていた。いくら忙しいとはいえ、佳子の机に電話器が投げつけられてきたとき、佳子は、
（まあ、失礼ね！）
と、神経が逆なぜされる思いにかられた。それが尾上の、
（変な電話…）
という言葉で、佳子の方も爆発したのであった。
「変な電話って、どういう意味ですの」
佳子の方も挑戦的になった。
「どういう意味って…、変な電話だから、変だって、言ったんだよ」
「どうして変なんですか。子供からの電話を、変な電話だなんて言われて、わたし、だまっていられないわ。どういう意味なのか、はっきり言ってください」
佳子は、ちょっと言いすぎたかなと思ったが、行きがかり上、もう後へ引けなかった。
「じゃあ、はっきり言ってやる。子供を使って、毎晩、毎晩、電話をかけさせて、職場への嫌がらせじゃないか」
「あら、嫌がらせだなんて、とんでもない。そんなつもりは、ちっともないわ。ただ、子供は夜一人で淋しいから、電話をかけてくる、ただ、それだけよ」
「ふーん。でも、忙しい時にそんな電話を取りつぐ身にもなってほしいね」
「それは、わたしも申し訳ないと思っているわ。でもね、子供は、夕方の電話一本を心の頼りに、留守番の淋しさに堪えているのよ。いわば、この電話は子供の命綱なのよ。そのぐらいのことが、この職場では許されないの。あなたは独身だから、まだわからないのよ」
電話口のエツ子の姿を思い浮かべると、母親としての佳子の口調は強くなった。
「でも、そんなこと、個人の生活の問題でしょう。そんなこと言ったら、誰にだっていろんな事情は山ほどあるよ。あまり個人の問題を職場に持ちこんでほしくないんだな。公私混同だね」
尾上も容易に後へ退かなかった。こうなると、佳子も負けていられない。
「そう、公私混同だっていうのね。それなら尾上さん

のところへも、時々、恋人だか、なんだか知らないけど、それこそ変な電話がかかってくるじゃないの」
「なにが変な電話だよ」
「子供からの電話が変な電話なら、恋人からの電話だって、変な電話じゃないかしら」
「そんなこと、関係ないだろ！」
尾上は大声をあげた。尾上のまわりから、
「もう、よせよ」
と同僚が制止した。大声を聞きとがめた課長が、ちらっと不審げな顔を、こちらへ向けたのである。この辺が潮時と見た佳子は、
「じゃあ、これからはお互いに、公私混同しないようにしましょうね」
尾上の視線を振り払うようにして、残りの仕事にとりかかった。

こうして佳子と尾上との冷戦が始った。
口論の行きがかり上とはいえ、
（公私混同のないようにしましょうね）
と言った以上、エツ子からの電話を、万が一にも尾上に取りつがせるようなことがあってはならなかった。百パーセント佳子自身が受けなければならない。
夕方五時近くになると、佳子は自分の席を離れないようにして、これまで以上に自分の電話器に全神経を集中させた。そのため、エツ子からは、
「この頃の電話は、いつもお母さんが出るので、うれしい」
などとよろこばれて、佳子が苦笑する一幕もあったりした。
そんなある日のこと。
昼の休みの時間であった。みんな昼食に出掛けて、人が手薄だった。そんな時、尾上のところへ電話がかかってきて、それを佳子が受けたのである。
「もし、もし、尾上さんをお願いします」
いつもかかってくる、若い女性の声だった。これまでにも佳子が二、三回、取りついだことがある。突き放すような言い方のくせに、妙に甘ったるい、変な喋り方の女性であった。佳子の中で、
（公私混同…）
というシグナルが明滅した。
「ただいま、食事に行っておりますが…」
佳子は、わざと冷ややかな口調で、そう返事した。
「食堂ですか、それとも、外ですか」
（そんなこと、知るものか）
という感情が、佳子の中を走った。
「失礼ですが、お仕事のお話でしょうか」
佳子はわざと聞いた。
「お仕事のことでないと、いけませんの」

「公私混同はしないようにと、尾上さんから言われておりますので」
そう言うと、佳子はいきなり電話を切った。佳子の頭の中が、瞬間、まっ白になった。
翌日。
隣席に座っている同僚の男子行員が、
「町田さん、昨日、尾上君の電話で凄いこと言ったんだってね」
低い声で、そうささやいた。
「あら、わたし、尾上さんと約束したように言っただけですわ」
尾上は昨夜のデートのとき、佳子の失礼な電話のことで、恋人からさんざん、とっちめられたのに違いない。
「でもさ、仕事がいろいろやりにくくなるからさ、いい加減にしておいた方がいいじゃないのかな」
「それは、わかっています」
でも、エツ子のことが絡んでいるだけに、佳子には尾上の態度にはどうしても許せないものがあるのだった。
その日を境にして、佳子に対する尾上の態度も一段と険悪なものになっていった。

佳子の仕事は、貸出稟議書作成の補助であるが、補助といっても単なる補助ではなくて、佳子の作成する信用調査書や銀行取引状況表は、貸出稟議書の一部分を構成するものであり、いわば担当者との共同作業とでもいうべきものだった。
それには、コンピューターからデーターを取り出す端末器の操作とか、必要部分のコピーとか、かなり複雑な作業が必要になるので、もし担当者がそれを自分でやるとなると、かなり大変な作業になるのであった。だから、毎日、佳子のところへは、
「今日は、この会社とこの会社、頼むね」
「この会社の信用調査書、午前中に作ってよ」
「これ、五部ずつ、コピーして」
次から次へと、仕事が舞い込んでくる。
だが、尾上からの仕事は、ばったりなくなっていた。なくなったというよりも、尾上は佳子へ頼みにくくなっているのである。
仕方なく、尾上は自分で端末器の前へ座って手を動かしたり、資料ファイルの中をかきまわしたりしていた。佳子の方もそれを横目で見ながら、わざと知らん顔をしていた。
しかし、仕事が最盛期を迎えると、それでは尾上の仕事は追いつかなくなってきた。
ある日、佳子が昼食から席へ戻ると、机の上に、尾上からの作成依頼の書類がのっているではないか。
（いよいよ困ってきたな）
と佳子は思った。しかし、

（黙って机へのせておけば、わたしがやるとでも思っているのかしら。わたしは機械じゃないわよ）

困っているくせに、依然と意地を張って、一言も依頼の言葉のない尾上の態度が、更に佳子の気持を屈折させた。だから、その日、佳子は尾上の書類には手をつけなかった。

翌日になっても、佳子はその書類に手をつけなかった。そして、夕方になった。

七時をすぎ、佳子が帰ろうとして、机の上を片付けていると、たまりかねた尾上がつかつかと佳子のところへやってきた。

「あの書類、やってくれた？」

声はつとめて隠やかにしていたが、声の奥には怒りが盛り上っていた。

「あの書類って、なんのこと」

「その書類だよ。明日の稟議書にどうしても要るんだ」

尾上は、佳子の机の上に放置されている、自分の書類を指さして言った。

「ああ、このこと…。でも、わたし、なんにも聞いていないから、知らないわ」

「だって、昨日、そこにのせておいたじゃないか」

「変なものが机の上にのっていると、仕事の邪魔になって困るわ」

佳子はあくまで応戦の構えを崩さなかった。尾上の怒りが爆発した。

「変なものとは、なんだ」

「あら、あなただって、自分の大事なものを、変なものって言われれば、怒るのね」

「他の人には作ってやるのに、どうして僕のだけは、やってくれないんだよ」

「他の人は、他の人。尾上さんは、尾上さんよ。わたし別に尾上さんに個人的に雇われているんじゃないから、公私混同しないでよ」

「公私混同だって！　銀行の仕事をするのが、どうして公私混同なんだよ」

「どうしてもやれって言うのなら、課長さんから業務指令書をもらってきてください。そうしたら、やるわ」

「そんなものが、もらって来れるかよ」

「じゃあ、知らないわ」

「やるべき仕事もやらないで、家に帰るなんて、職務怠慢だ」

早口でまくしたてる尾上の言葉を聞き流しながら、佳子は手早く後片付けをした。そして、急ぎ足にロッカー室へ駆けこむと、着がえを終えて、帰途についた。

その夜。

家に帰ると、佳子はエッ子に言った。

「エッちゃんの夕方の電話ねえ」

「うん」

「明日からは、五時になったら、お母さんの方から電話することにするわ」

「なぜ」

「なぜって…、エッちゃんから電話がかかってきても、お母さん、席にいない時もあるから」

「お母さんがいないと、こわいおじさんが電話に出るから？」

「そうよ」

「お母さん、あのおじさんと、喧嘩したの？」

「ううん、そうでもないけど…」

「大人の世界にも、いろいろ事情があるのね」

エッ子はませた口調で、そう言った。

それから、二、三日して。

食堂で佳子が一人おそい昼食をとっていると、突然、尾上が入ってきた。佳子がすこし身構えて、顔をあげると、

「これ、エッちゃんにあげてください」

尾上はそう言って、デパートの包装紙の小さい包みを差し出した。

「なんなの、これ」

佳子は警戒心で身を固めた。

「ちょっとした、おもちゃです」

「……」

「この間のことは、すみませんでした。僕がかっとなって、つい言いすぎたんです、僕って怒りっぽいものだから。あやまります。許してください」

尾上があんまり率直に頭を下げるので、佳子の方も、

「あら、いいのよ、そんなこと。わたしの方こそついて意地を張ってしまって、ごめんなさい。でも、なんですの、これ…？」

佳子はデパートの包みを、まるで謎の物体でも見るように見た。

「かわいいお人形さんです」

「なぜ…？　課長さんにでも、なにか言われたの」

「ええ、それもありますけど…、実は、僕も子供の頃は母親が会社に勤めていて、いわば鍵っ子っていうんですか、そういう子供でした。だから、学校から家に帰ってきても、母親はいつもいない。とても淋しかったですね。でも、僕は男の子だから、負けてはならないと思って、『淋しくない、淋しくない』と、一生懸命自分にそう言いきかせて、頑張ってきたんです。そんな思いがあったものですから、あのエッちゃんの電話があったとき、『この甘ったれめ！』って、つい思ってしまったんです。それで、つい、かっとなってしまって。電話が三つも重なったものだから、気が立っていたんですね」

「そうだったの。やっぱり、何かあると思っていたけど」

佳子がはじめて聞く、尾上の身の上であった。
「ええ、必死に、『僕は男の子だ、淋しくない、淋しくない』と、我慢していたのだけれども、でも、本当はすごく淋しかったんです。だから、あの後、電話口のエッちゃんの姿を想像したとき、その上に昔の自分の姿が重なって、『あんなこと言って、すまなかった』と思ったんです。でも、ちょっと引っこみがつかなくなって、つい、ずるずると今日まで…」
「わかったわ。尾上さんの気持…」
「それで、僕、町田さんにあやまると同時に、エッちゃんにもおわびしたいと思って、この人形を持ってきたんです」
「ありがとう。いただいておきます。きっとエツ子もよろこびますわ。ほら、コレクションマニアっていうのかしら、子供には何でも夢中になって、いろんなものを集める時期があるでしょう。エツ子がちょうど、それなの。お人形さんなんか、いっぱい集めているの」

その夜、家に帰ると、佳子は、
「はい、おみやげ」
尾上からの人形をエツ子へ差し出した。
「わー、かわいいお人形さん、ありがとう。お母さんが買ってくれたの」
「電話のおじさんが、エッちゃんにって」
「あの、こわいおじさん？」
「こわくなんか、ないわよ」
「なぜ、お人形さんくれたの。やっぱり、大人の事情？」
「そう、そんなとこね」
「ふーん、大人の事情って、むつかしいんだね」
「それに明日からは、また、電話、エッちゃんの方からかけてきてもいいのよ」
「えっ、ほんと。よかった。うれしいな。これも、大人の事情ね、お母さん」

翌日。
夕方、五時。
エツ子は、いそいそと電話器をとった。
ボタンを押す。
ルルルル　ルルルル　ルルルル
「はい、明治銀行新宿支店でございます」
男の声だった。
（あっ、お人形のおじさんだ）
エツ子は夢中で、
「お人形さん、ありがとう」
と言った。すると、おじさんは、
「あっ、いや…、気に入るといいなと思っていたんだけど…、いま、お母さんを呼びますから」

しばらく待っていると、
「はい、お母さんよ」
「いま、お人形のおじさんだったわ」
「お礼言った」
「言った」
「今日は早く帰れそうよ」
「わー、うれしい。じゃあ、晩ごはん食べないで待っているから、お母さん、早く帰ってきてね」
ガチャン、電話が切れた。
（お母さんが早く帰ってくる、早く帰ってくる！）
エツ子は小犬のように、部屋の中を走りまわった。

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～

千三百年目の仇討ち（完）

佐々木一郎

十六

一月十九日は、生憎、小雪まじりの雨となった。しかし、駿河台の横田邸には、定刻どおり予定した顔触れがそろい、簡素な法要が営まれた。

法要後、離れに席を移して密談に入った。そこには清めの酒が用意されていたが、さすがに盃を重ねる者はいない。顔触れは、チアマン格の森永振一郎のほかに、元陸上自衛隊一佐中野京三、その長男で飛島建設社員徹二、劇団「暁」俳優徳野博の四名である。

森永が、中野徹二に向かって、ほほえみながら

「徹二君。電話ボックスに鞄を忘れた男の役目、ご苦労さん……。多分、君のお父上のことだ。事情も話さないで頼んだのだろうから、今日は、君にも話を聞いてもらおうと思ってね……」

「いえ、森永のおじさん。僕は、子供のころから父を尊敬しているんです……。ですから、父に頼まれたことなら、どんなことでも喜んでしますよ。……」

「え、なんだって！　君は、そんなに……。おいおい、中野。お前、いい息子さんを持ったじゃないか」

「うん？　うん。まあな……」

中野宗三は、ちょっと照れたような顔になった。

「ハハハハ……。それじゃあ、早速、経過報告といくか。あ、そうだそうだ。徹二君は、徳野とは初対面だったかな？」

「はい。もし、僕が小さいころ家にお出でになったのなら……」

「いやいや、君の家には行っていない。と、いうのは、こいつは、日本一多忙な男だったからね。文芸座を脱退して劇団「暁」を結成して以来、劇団代表兼主演俳優として、東奔西走、寝る間もないような生活をしていたんだよ。ここの集まりは、十年間、一回も欠席しなかったけれど、北海道や九州公演にぶつかったときは、飛行機

でトンボ帰りを何回も繰り返したくらいだからね」

ここで森永は、いたずらっぽい目つきになると、

「ところで徹二君。この人の顔、どこかで見たような気がしないか？」

「えっ、僕がですか？」

戸惑って、顔を赤らめた徹二を見て、森永は

「ふふふ、ほら、テレビでさ……」

「テレビで？　……あっ、大石内蔵助！」

「それだ。ＮＫＫの大河ドラマ「赤穂浪士」の大石内蔵助の徳野博だよ」

「あー、あの徳野さん！」

「この徳野が、君の置き忘れた鞄を拾った男、つまり、俺の役をやってくれたんだ」

「あっ、そ、そうだったのですか」

徹二は、改めて森永と徳野を見比べた。確かに、背格好といい、顔付きといい、似てなくもないが、こう並べて見ると、やはり、明らかに異なった二人である。

「おいおい、似てないじゃないか、という顔付きだなあ……。もちろん、化粧をするんだよ。声も動作も真似る。それも、徳野のようなプロ中のプロにかかると、恐ろしいほど、そっくりになるんだ」

「それにね。徹二君、でしたね……。刑事が、森永振一郎のだと思って神田署へ持参したスナップ写真は、実は、私の顔だったのですよ」

徳野もほほえみながら、徹二に語りかけた。やはり、よく見ると、名優らしく、澄んだ目をしている。

「えっ、それ、どういう意味ですか？」

「つまり、この数年間の森永のアルバムには、私の写真きり貼ってなかったということ……。だから、刑事たちが、森永の細君のところに写真を借りに来たとき、何冊ものアルバムの中から自由に選ばせたんです」

「……　あっ、そうだったのですか。そんなにまでして！」

「そう、十年間も準備期間があったからね」

「それならばなぜ、もっと早く実行に移されなかったのですか？」

「徹二。それはなあ。われわれは、完全犯罪を狙っていたからなんだ」

中野が口を開いた。真新しい濃紺の背広に身を包んでいても、元自衛隊高級将校の精悍さは隠せない。

「完全犯罪？　なぜ？　お父さん」

「いや、わが身可愛さのための完全犯罪じゃない。横田家の名を絶対に出したくなかったからだ……」

「徹二君……。三十も年のちがう君に、われわれの『竜造寺芳栄殺害計画』を理解してくれ、とは言わないが、ま、聞いてくれ」

十七

「話は、今から約四十五年ほど昔に遡る。もちろん、君が生まれる十五年も前の話だ……。

昭和二十年の春から夏にかけて、われわれは、アフリカのアルジェリアのフランス陸軍外人部隊にいた。日本から見れば、地の果てのようなサハラ砂漠だ」

ふと、外に目をやると、いつの間にか、雨が雪になって、庭がすっかり白くなっている。池のまわりの石の飾り物が、薄い綿帽子を被っている。

森永は、それをちらっと見やりながら、

「われわれは、横田小隊長に心酔していたんだよ。横田さんという人は、おそらく百年に一度ぐらいきりこの世に現れない、あらゆる意味で素晴らしいお人だった。広い大きな心をもたれた……」

「あのときに竜造寺芳栄が現れさえしなければ、あの悲劇は起こらなかったのだ……。彼自身は、横田さんを敬慕していたのだが、その父親の竜造寺芳康というのが国家主義者の国会議員で、当時の陸軍と結託して、散々、うまい汁を吸っていた悪い奴でね……。これが、現地軍司令官のヴェイガン準将に大金をつかませて、芳栄の日本送還を依頼したんだ……。

ちょうど、ヴェイガンは、本国政府のドゴール大統領と植民地政策を巡って対立していたところだったので、金欲しさに二つ返事で承諾して、二等兵だった芳栄をいきなり中尉に任命し、しばらく司令部付きにしたうえで、日本へ送り返したんだ……」

「芳栄は、その司令部付きのときに、横田小隊を全滅させるような大変な罪を犯したんですよ……」

世間知らずの芳栄は、老獪なヴェイガン将軍の誘導尋問に乗せられて、横田小隊の機密――アルジェリア現地人の殺りゃくには加担せず――をしゃべってしまった。

これを聞いたヴェイガンは、即座に、横田小隊への弾薬、食料の補給を停止してしまった。

このため、横田小隊は、サハラ砂漠の真ん中で、まさに裸のまま、立ち往生させられる羽目となったのである。

そのせいか、たちまち、平井一等兵と日吉上等兵が続いて日射病で倒れた。ふたりとも古兵なのだが、日中は五十度を越えるサハラ砂漠の真っ只中での軍務には慣れていなかったのである。彼らは十分な治療も受けられず、息を引き取る間際まで、竜造寺芳栄の裏切りを呪って、死んだ。

さらに数日後には、突然、夜襲を受けた。敵は、何と、ヴェイガンの密命を帯びた、同じフランス陸軍外人部隊――トルコ人とイタリア人の混成部隊――だった。

小隊は、乏しい武器・弾薬で戦い抜いたが、結果的には、四名の戦友を失い、横田小隊長と森永二等兵は重傷を負った。残された中野軍曹、徳野上等兵、小出二等兵、安田二等兵の四名は、ほとんど連日徹夜で重傷の二人を看病しながし、悔しさに血の涙を流した。

「そうだったなあ……。しかも、あのときは、二度と再び日本の土を踏めるとは思わなかっただけに、竜造寺への恨みは、凄さまじいものだった……」

「さいわい、西園寺ルートと連絡が取れて、どうやら日本に戻れたが、無念なことに、この決行を目前にして小出、安田たちも病を得てこの世を去ってしまい、到頭この三人きりになってしまった」

「だから、今決行しなければ、仇の竜造寺芳栄ばかりか、われわれ自身も年をとってしまって、戦友の仇討ちができなくなると、焦り出していたんですよ……」

徹二は、この老人たちの恐ろしいまでの執念に、思わず背筋が寒くなった。父の京三の顔も、家では一度も見せたことのない怖い顔付きに変わっている。

「しかし、横田さんを、あんな半身不随の体にしてしまったのは、間違いなく、この俺なんだ！」

突然、森永が声を高めた。

「あの夜襲のとき、俺がナツメ椰子の根に足を取られて転がりさえしなかったならば、そして、小隊長殿が俺を救いに駆け寄って来なければ、あんな、十年も寝たきりの生涯をお過ごしになることも……」

「おいおい。森永。もう止せ。君ばかりじゃないぞ。小隊長に命を助けられたのは……」

「そうだ。何回も言うようだが、私も中野も助けられている……。それに、小隊長が負傷された一番の原因は、弾薬が不足して、充分な援護射撃ができなかったことなんだ！」

このときになって、それまで黙って聞いていた徹二が口を挟んだ。

「あの、大体のことは分かりました……。それで、その後どうなったのか、それに、僕の出番のことも教えてください」

「あっ、これは失敬した！　どうも、この話しになると、ついつい、いつもの調子が出ちゃって……」

「ふふふ、心を打ち明けあえる仲間だからさ……」

「……案外、心の底じゃあ、若かった昔に戻りたいという気持ちがあるのかも知れんぞ。ハハハハ」

「われわれが、決行に踏み切ったのは、市の要請で東大名誉教授の嵯峨博士が瑞鳳寺跡を訪れ、かっての恋人元白鳥子爵令嬢ひさえ夫人と再会したことからだった。その劇的な再会シーンを見て、申しわけないが、これを利用させてもらおう、と心に決めた。嵯峨博士は、横田さんの親友で、度々病床へも見舞に来ていたから、思い切って計画を話し、協力をお願いしたのだ」

「それが、三省堂近くからの電話ですね」

「そうだ。これが実現すれば、俺のアリバイが成立するからね……。君や徳野の芝居も生きてくる」

「しかし、よく、その見識高いと評判のひさえ夫人が承知したものですね？」

「ふたりが再会したとき、博士が五十年間も独身を通していてくれたと知った夫人は、思わず自室に駆け込んで、声を上げて泣いたそうだ。どんなことが起きても、眉ひとつ動かさないといわれた夫人がね……」

「それじゃあ……」

「そうなんだ。嵯峨さんが、電話による芝居を依頼したとき、彼女は、こう答えたそうだ。『五十年前には、あなたのプロポーズを受けておきながら、――例え、家名を守るための犠牲になったとはいえ――無断で竜造寺家へ嫁いで、あなたを裏切ってしまいました。今度こそ、あなたが付いて来いとおっしゃるのならば、あたくしは、喜んで、地獄の果てまでもご一緒いたしますわ』

賢明な彼女のことだ。この電話のカラクリが自分の夫の生死に関わることだと、すぐに悟ったに違いない。しかし、彼女は、自分に残された最後の人生を嵯峨博士の方に賭けた……。だから、電話の応対も、そばにいた女中たちがまったく娘婿の俺からの電話だと信じ込んでしまうような応対だった……」

「でも、警察の取り調べがあったのでしょう？」

「それは、あった。しかし、お二人とも、誇り高い方たちだ。まして、嵯峨さんは無二の親友のため、ひさえ夫人は恋人のために、初めから命を捨てる覚悟で承諾されたのに違いない。だから、もし、警察が礼を失した取り調べなどをすれば、おふたりとも、自決の道を選ばれる恐れがあった……。

だから、よほどの物証でも出てこないかぎり、警察は傍観するより仕方がなかったのだよ」

このとき、いつものように、横田老夫人が女中とともに、心づくしの夕飯を運んできた。いかにも、横田公彦の母堂らしい、物静かな立ち振る舞いの婦人である。

十八

老夫人の姿が見えなくなると、早速、徹二が尋ねた。

「あの、このことは、ご母堂もご存知なのですか？」

中野宗三が、あわてて答えた。

「冗談じゃない。大奥様は、全然ご存知ないことだ」

「あのね。徹二君。君は、横田さんとわれわれの信頼関係がどういうものかを知らないから、不思議に思うかもしれないけれど、この計画は、横田さんには絶対内緒で進めてきたんだ……」

「……」

「いや、横田さんの中止命令が一番怖かったんです。それが出れば、われわれはそれに従わなければならないからです。これは、地下に眠る戦友たちも同じです」

「あの方は、人を憎んだり、報復を考えたりするようなお人じゃないんだ……。だから、あれほど病床で苦しんでおられても、竜造寺たちを責めるようなことは、一言もおっしゃらなかった」

「それだけに、復讐の計画は帰国早々から立てられていたのだが、本格的に動き出したのは、十年前に横田さんが亡くなってからだった」

「そして、まず、森永が、大蔵省を辞めて、竜造寺家に入り込んだ……」

「将来の大蔵大臣を嘱目されていた森永が、すべてをなげうって敵地に飛び込んだと聞いて、私も、芝居を放り出しても参加したいと申し出たが、極秘で事を進めなければならないというので、断念したんだ」

「徹二。言っておくが、この気持ちは、父たち世代の考え方だ……。お前には分からなくてもいい」

父の言葉に、徹二は大きくうなづいた。確かに父の気持ちは理解できるのだが、心情的にはどうしても同化できないところがあった。

「ところで森永。井上記者はどうなった？」

「うん。そのことだが、あれは殺した……。博士と夫人の再会を見た彼は、新聞記者特有のカンで二人の関係を察知して、長男の芳胤から一千万円を脅し取った。それで止めておけばよいものを、われわれの計画まで嗅ぎ出し始めた。やむを得ず、呼び出して処置した」

「しかし、奴さん。よくノコノコ出て来たな？」

「野口署長の名を使ったんだよ」

「署長？、それじゃ、なお、出て来ないだろう？」

「おや、君は知らなかったのか？」

「……」

「野口と井上はホモの関係だったのだよ」

「ええっ、あの署長がホモ？　あの顔で……」

「ホモには顔は関係ないよ。井上がかみさんに逃げられたのは、博奕好きのせいとされているが、実はこれが本当の原因だったらしい」

「なるほどねえ！　しかし、井上には子供がいるぞ」

「いや、同性愛にはいろいろの型があるらしい。小さいころから女に全然興味を示さない型と、成人してからこのケが出てくる型と、両刀づかいと……」

「じゃあ、二人は、いつからなんだ？」

「五年ほど前、野口は、悪友に誘われて目黒駅裏のゲイ・バーに行ったんだ。君も聞いたことがあるかもしれないが、女装の麗人たちがつくり出すムードは、一種独特なものがある。その甘酸っぱい強烈な匂いに夢中になる者もいれば、異常さを感じて逃げ出す者もいる。

野口は、この匂いに生まれて初めてのエクスタシーを感じたのだ」

「うっ、気持ちが悪いなあ……」

「そこに、たまたま来合わせていたのが井上だ。そのときは、会釈をしただけだったが、互いに何か惹かれるものがあった。あの趣味の人たちは、同好者は一目で見抜けるのだそうだ。そして、野口が里見署長となって赴

任して再会すると、交際が始まった」
「そうすると、あの髭の生えた野口が女装して、土気色の顔付きの井上に抱かれるようなこともあるのか？」
「いや、女装したりするのは、マニアといって、けして男に抱かれることはないんだ」
「……お前、馬鹿にくわしいな。まさか！」
「違う違う！　誤解するな。俺には、そのケはない。二、三日前、テレビの深夜放送で、『ゲイ・バーのママ座談会』という番組を見た受け売りだ。カルーセル・真紀などが出演していて、『お客が、クラブのホステスの前では絶対見せない姿を、ゲイ・バーへ来ると見せる。やっぱり、男同士だと安心するのねえ』なんて、言っていた」
「……それで、二人の仲どうなっとるのだ」
「プラトニック・ラブの段階かな……。野口警視は、ああいうまじめな男だから、まだ手も握っていないのじゃないかな……。せいぜい、事件で顔を合わせたとき、二言、三言親しくしゃべる程度だったろう。井上の方は、いくぶん手慣れているようだから、焦れていたかも知れない。そこへ、野口からのデートの呼び出しだから、すぐに乗って来たのだ」
「うーん。それで、井上は、あまり目立たないように出掛けたのだな」
「一方、野口署長は、井上の姿が見えないので、何か不吉な予感がして、慌てて家宅捜査を命じたわけだ」
「どこへ連れ出したのだ？」
「うん、まあ……」
「……そうか。よし、分かった」
今度は徹二が、森永に向かって
「森永のおじさん。前から聞こう聞こうと思っていたんですが、竜造寺芳栄さんは、なぜ、あんな場所で、あんな時間に、そして、あの暑いのに上着まで着て殺されたんですか？」
「あ、それなら、われわれ三人の共同謀議だから、今度は私から話そう」
徳野が、美しい微笑をたたえながら言った。
「ピカール大尉のことは話しましたね。この男、その後、ヴェイガン準将の元を去って本国政府に仕えてね。ドゴール大統領の厚い信任を得て、到頭、陸軍大将にまで上り詰めたんです……。そして現役引退後は、副大統領経済使節団の軍事顧問として、現在来日しているんです。新聞にも、チラっとだけど、名前が出ている。われわれは、これを利用したんですよ。
この男から竜造寺にあてた手紙を偽造しました。ピカールの、本物そっくりのサインまで入れてね。文面は、『貴官に、ドゴール大統領がサインした正式のフランス陸軍中尉の任用証を渡したい。――貴官が所持しているのは、反乱軍のヴェイガン準将のサインした偽の証書

だから――　ただし、現在の本官は、かってヴェイガンと関係があったことは伏せておきたいので、なるべく人目につかない場所と日時を、森永と相談のうえで決めて、一日も早く返事がほしい』といったものです」
「竜造寺さんは、喜んだしょうね」
「喜びましたね。早速森永に相談したらしい。そして森永の提案を入れて、あのような運びになったのです」
「そうでしたか。これで上着の謎が解けました」
「サハラ砂漠の砂を詰めた弾丸のペンダントは、横田小隊の復讐の印として置いてきたのだ」
「森永。竜造寺芳胤を毒殺したのはだれだ？　竜造寺一族の中に犯人がいると警察はみているが……」
中野が、森永に尋ねた。
「うん、あれは、俺だ。俺が薬をすり替えたのだ」
「おかしいなあ？　君がねえ……」
「……」
「いや、分かったよ……」
「……」
中野には、森永がだれを庇っているのか、すぐに気づいた。けれども、それを口に出して言うのは恐ろしいことであった。それは、もはや一切を超越した強烈な愛の存在だった。
「しかし、こうして目的を達成してしまうと、何か、急に胸の中が虚ろになってしまったような気がするなあ」
「おいおい、森永。リーダーの君が、そんな弱音を吐いちゃ困る」
「竜造寺芳栄だって、老人だった……。何も殺さなくても、すぐ、寿命がきたのじゃないのかな？」
「私は、今ごろになって、横田さんの気持ちが分かってきたような気がするよ。復讐なんて、空しさが残るだけだってね……」
「おいおい、だからといって、俺は、後悔なんかしていないぜ……。戦友の仇を立派に討てたことに満足しているんだ。例え、地獄に落ちてもね……」
「それは、私も同感だ。なあに、地獄に落ちたって、日吉上等兵たちが、賑やかな拍手で迎えてくれるよ」
「ただし、横田小隊長殿は、おられないぜ」
「えっ。あ、それはそうだ。ハハハハ」
「小隊長殿が地獄におられるはずがない。ハハハハ」
数日後、東名高速道路を走っていた乗用車が、対向車の大型トラックに接触し、ガードレールを飛び越して大破した。乗用車を運転していた紳士は、全身を強打して即死したが、その所持していた名刺から、竜造寺ホテル社長森永振一郎（六十五才）と判明した。
事故の連絡を受けた「瑞鳳寺跡殺人事件捜査本部」は大騒ぎとなった。特に、須田警部は、青ざめた顔に唇を血が噴き出すほど噛み締めて、一日中沈黙していた。

十九

庭では、もう鶯の鳴き声が聞こえる。空には、早春の雲がぽっかり浮かんでいる。この辺りは寒冷地なので、桃と梅と桜があまり時期を置かないで咲く。

小さなフレームから、果樹と野菜の手入れを終えて、品のよい老夫婦が出てきた。有吉夫妻である。

十三代四百年にわたって仕えた竜造寺家が崩壊して一家が離散した後、執事の有吉光二郎は、竜造寺芳栄の遺言どおり家屋敷の一部を与えられて、悠々自適の生活を送っていた。

「……恐ろしいことでしたわ。芳栄様、芳胤様、森永様と、お三方が続けてお亡くなりになったのですもの……。それも、ふつうではなく……」

「まったく、あっと言う間に、竜造寺家が無くなってしまうとはねえ」

ふたりは、日当たりのよい縁側で茶を飲みながら、思い出話に花を咲かせた。これも、このごろの夫妻にとっては、楽しいひとときなのである。

「あなた。あたくし、先頃、森永振一郎様のお噂を耳にしましたわ」

「志津さん」

有吉は、志津夫人を（志津さん）と呼んだ。

「わたしは、これでも、旧竜造寺家の元執事です。主家の風聞を茶のみ話にすることはやめましょう」

「あら、あたくしとしたことが……。ホホホホ。それでは、大奥様のお噂はいかがですの？」

「……これは明るい話題だからいいでしょう」

「と、いうことは、嵯峨先生とのご婚約のお噂は本当ですの？」

「本当だよ。里江お嬢様も敬子お嬢様も大乗り気だそうだから……。なんだかまた、わたしたちの仕事がふえそうだね」

「ホホホホ、まあ、すてきですわ。大奥様は、今、おしあわせの最中ですのね」

「うん……。昔、大奥様がお輿入れのときは、芳栄様がお気の毒でならなかった。アフリカからお帰りになっても、仲を裂かれた恋人のリキさんのことばかり考えていらっしゃった。そこへ、突然、御前様が、元子爵家令嬢ひさえ様との縁談を決めてしまわれた。見栄っ張りな御前様は、それを条件に、戦後窮乏なさっていた白鳥元子爵に、財政的な援助をしていた……。

わたしは、はじめは事情を知らずに、好きでもない人を押し付けられた芳栄様に同情していたけれど、実際は、大奥様こそ、それ以上の悲しい辛い別れをなさって輿入れされたのだった……」

「ファインセの嵯峨様との仲を裂かれたのですわ。なんといっても、女には、愛がすべてですもの」

「そうですか。ところで、志津さん。あなたは？」

「えっ」

「わたしと一緒に暮らしていて、しあわせですか？」

「まあ！」

志津は、思わず頬を染めた。まるで、おぼこ娘のように……。有吉は、ほほえみながら

「思い出しますねえ。わたしが復員して、東京の焼け跡に立ったとき、あなたは絣のモンペ姿でボランティア活動をしていましたね……。あのとき、わたしは、なんて美しい乙女だろうと、思わず見とれてしまいました。それで、帰郷を少し延ばしてボランティアのお手伝いをしたのです」

「あら、あなただってすてきでしたわ。服こそ復員服を着ていらっしゃったけれど、男らしい顔付きにキビキビした動作。あたくし、今でもハッキリ覚えていますわ」

「いや、お恥ずかしい」

有吉は、照れて、額から頭の汗をそっと拭った。もっとも、頭頂部には一本の毛もない。

「ところで、志津さん。警察署長の野口さんが大学生のころ、病身の母上を抱えて困っているのを見て、金と手紙を送って励ました人は、あなたでしょう！」

「いいえ、旦那様の芳栄様ですわ」

「いや、それは違う。あの方は、絶対に慈善行為のできるお人じゃない……。確かに、芳栄様は慈善家として知られているけれども、それはすべて、芳栄様の名でわたしがやったことです。あの方は、心は優しいが、慈善家ではありません。社会福祉事業にも関心をもったことはありません。なにしろ、戦後、国民が飢えていたころでも、白米と肉、魚で過ごした方だから……。

そこへいくと、志津さん。あなたは、本当に熱心にボランティア活動に挺身していましたね。日本人にもこんな心の優しい人がいるのかと、思ったほど、あなたは、貧しい人や病んだ人の心の痛みが分かる人だった。そして、彼の家の近くに住んでいた……。」

「まあ、そこまでご存じでしたの！　匿名の奉仕ということと、もう何十年も昔のことなので、一生黙っているつもりでしたのに。ホホホホ……。

実は、彼の家は、あたくしの家の近くでしたの。

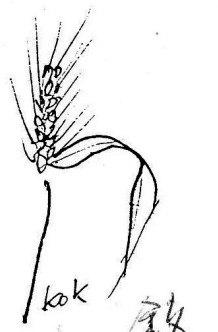
あたくしがキリスト教系の学校を出て、あなたもご存じのボランティア団体「清風会」に所属して働き始めたころは、野口幸雄さんは、多分、小学生か中学校へ入学したばかりでしたわ。成績もよく、親孝行で評判の子供さんでしたわ。それが突然、お母様が倒れて……」

「分かりました。やっぱりあなただった。あなたを一生の伴侶にできたわたしは、本当にしあわせ者ですよ」

「まあ、ホホホホ……」

早春の暖かい日差しが、老夫婦の笑顔を明るく照らし出していた。

（完）



有院家の人々（六）

大和禎人

第十一章　ハワイ官約移民・日本難民の救済

「ハワイ官約移民」とは日本とハワイの間に一八八六年（明治十九年）締結された「日布渡航条約」に基づいた移民を指して呼んでいる。布は「布哇」であり、ハワイに漢字をあてた場合を略した言いかたである。もちろん、この条約は米国に併合以前のことになる。

ハワイ移民の問題は一八三五（天保六年）にさかのぼり、同国のカウアイ島に製糖会社が設立されて以来、製糖業がハワイの主産業となり、多くの労働力を必要とするようになった事情に端を発していた。

しかし、ハワイの当時の国情としては原住民の人口減少に悩んでいたので、労働力を外に求めねばならぬ趨勢にあった。はじめ中国移民を迎えたが、思うようではなく失敗に終った。かわりに日本人をという要請があり、幕末には日本布哇親善協定が結ばれたりしたが、すでに斜陽明らかな幕府のことだから、実際にはなにら積極的な施策を見ないまま、国情の変化を迎えたのである。そして、明治新政府は出稼ぎ人のハワイ渡航は反対であった。

ところが、ここに横浜に在住のアメリカ人でバン・リード（Van Reed）なる人物があり、密かに明治元年（一八六八年）に日本人百五十三人を出稼ぎ人としてハワイへ出航させるという出来事があった。のちに（元年者）として知られた人々である。

ハワイは全島あわせて日本でいえば四国ぐらいの面積で常夏の離島であることは今日周知のことだが、この楽天地で日本移民は主として農業に従い、その勤勉ぶりは島の砂糖キビ、パインアップルの生産に大きな効果をあげていた。けれどもこの往時は非公式な移民で、ハワイ政府の黙認のかげで渡航していたのである。この事情は

時代を隔てたいま、しきりに日本に潜入を計ろうとする難民問題の裏を返したようないきさつなのであった。

さて、こうした世情の一面とは遠いように見えたわがロバート・ウォーカー・アルウィンだったが、そのかれにとって生涯でもっとも意義ある仕事が実は待っていたのである。

それは一八八一年（明治十四年）、当時もちろん立派な独立国であったハワイの国王カラカウァ王が日本に来朝されたということに思わぬキッカケを与えられるのである。王は大変な親日家であったから、王女の婿君に日本の皇室の親王殿下を懇望されたという流説が巷に伝えられたほどであった。

この時よりちょうど一年ばかり前、ロバートは米国総領事兼ハワイ国総領事だった友人が帰国した後、かれの推薦で何気なくハワイ国総領事を臨時に引き受けていたのだった。それまで名目だけで大した仕事もなかった役職が国王の来日で俄かに忙しくなったのである。

ロバートはあらゆる才能と政治力をふるって、ハワイ国王の受け入れに努力を傾けたのだった。国王の滞在は十三日間であったが、ロバートの誠実な人柄と完璧に近い受け入れと、接待に計らずも親しく会い、またかれの家柄、政治力、その上の財力にも感服した王は、即座にロバートをハワイ国全権公使兼総領事に任命したのであった。しかもそれは王の宿舎となった芝離宮、延遼館に列国の公使、日本の皇族、政府の高位高官を招待した席上で、公表されたのである。ロバート三十七歳の時であった。

カラカウァ王の訪日の最大の目的は正直で働き者という評判のある日本人を移民として招き、ハワイ砂糖産業を盛んにしたいということにあった。

ロバートは代理公使に任命されると、国王の意を体し早速日本人移民問題に取り組んだ。

日本の国土は狭い上に人口密度の高いこと、日本の農家の次三男は「田分け者」といわれ、田を持たない農家では一生日陰の扱いを受けている実情を知っていた。しかし、その反面では日本農民は勤勉で忍耐力をもち、質素で健康であることも観察していた。秀でた開拓者の素質があると考えたのである。ハワイ人は寛容な心を持つ民族であるから、そこへ日本人を送り、土地開発、農産振興に協力させれば両者の利益であると考えたのだった。ロバートは熱心に当局への働きかけをはじめた。

ハワイ国王カラカウァの委嘱に応えるため、かれはすでに能うかぎりの手を尽くしてきた。

（公許移民の道を開かねばならぬ）

これがかれの考える要請に応えるために譲れない筋道であった。もちろん官辺への働きかけではかねて知る政

界の井上馨を通すという手段をとっている。

井上は太政官制下の大倉卿を疑獄で渋沢栄一とともに明治六年にはいったん辞して下野していたが、十一年には政界へ復帰し工部卿から転じて十二年には外務卿の職に就いていたのだ。ロバートにとってこれほど都合の良いことはなかったのである。しかもその後の第一次伊藤博文内閣の外務大臣としてなお明治二十年まで在職するのだから、願ってもない巡り合わせだった。

「ロバートくん、わしはな、欧化主義者じゃからな、キミの話をわからんわけじゃない、むしろ大いに奨励すべきじゃと思うとる、だが……」

九歳年長の井上は若い異国の友人の目を覗くようにして、そう言った。

「ホワット、……、ホワイ？」

「だが、ものごとすべて順序というものがある、そう簡単にいかんのじゃよ、わかってくれんか」

「ジュンジョね、ステップ、バイ、ステップ」

「順序があるだけではない、手続きが大切なのだ」

井上は条約改正を大きな課題としていた。そのためにかれの欧化政策は凝って「鹿鳴館時代」の演出者の役割さえやがて熱心におこなうのである。

「まず、実態を調査する必要がある、キミもウォルシーにいたことのある人間だから知っているだろう、再生茶の「お茶場」に働く人たちの過酷な労働を見ているはずだったな、国の仕事として移民を考えることはキミの考えるほどには容易いことではないのじゃよ」

「まず、十分に調査をつくさねばならぬ、キミはどう考えているのかわからんが、窮民かならずしも真の窮民であるとは限らんからね、……ここだけの話だが、だいいち移民を窮民と考え、その救済を考えるという発想だけでは安易すぎるのだな」

「……」

条約改正を強く念願として、外交の衝に当たっている井上としては、いまロバートが熱心に働きかけようとしているハワイ移民の問題は迂闊に手を出しかねるのだった。いまは独立国の地位にあるとはいえ、その背後にアメリカ合衆国という強大な国が控えている、いずれはその勢力下に組みしかれる趨勢を井上は読んでいたのだ。

（移民を公許する条約となると、国は責任をもって保証を与え、一切のトラブルにも責任をもたねばならぬ）

軽々には処理しかねる問題なのだ。国王の来朝を迎えるに際しては、幸いロバートと協力して国賓としての儀礼を手厚くつくしたが、そのこととこれは別の問題なのだ。むしろ後に残された厄介な問題だった。

「ロバートくん、密航が後を絶たない状況を政府は知っているのだよ、キミも認識した上でことを考えてもらいたいのだよ」

そして、この場の会話をこう結んだのだった。

「まず、横浜へ行って調べて見たまえ、（元年者）の実態がどういうものか、またバン・リードとかいう男をつかまえ、当たってみることだな、十余年ももう昔のことだし、いまも実在する人物かどうか、仮に見つけたとしても、したたかな人物に違いないから、真相をつかめるかどうか疑問としてもだ、まずそこからだな、時間をかけることだ」

井上は伊藤博文と藩命で渡英したこともあり、四国艦隊の下関砲撃事件では講和全権を勤めるなどで、英語をある程度は話せたから、ロバートに要点だけは通じたのであった。ロバートのほうも話し言葉は苦手だが、聞くほうは井上の日本語は耳に慣れているから、ほぼ理解できたのだ。

ロバートはこんないきさつがあって横浜へ出かけてきた。

まず、オオタニをベーカー商会に訪ねて、しばらくぶりに会った。

オオタニはベーカー商会に籍を移し、ロバートもまたいまは政界人井上馨の引き立てをうけ、後年の三井物産である先収会社の創立に参加しているという身分であった。その二人が久々に顔を揃えたのであった。

「やぁ、しばらくだね、キミの結婚手続きの許可のほうはどうなっている、まだかね」

オオタニはロバートとたまに会うことがあれば必ずそう尋ねたものだが、この時も同じで真っ先にそれを聞かれた。親身な友情は少しも変わっていなかった。

「そうか、それはいかんな、まだとはね、……で、わざわざきょうはなに用かね」

オオタニは熱心にロバートの話を聞いてくれた。

「そういうことか、井上さん、さすがに慎重だな、ところで、お安いご用と言いたいが、そんなアメリカ人がいまもいるかどうか、居留地はキミの知っている時代とは大いに変わっている、アメリカさんだって数知れずいるのだよ、まるでハキダメみたいにね、なにがよくて、結局甘いものを嗅ぎつけて寄ってくるアリみたいなものなんだ、ハキダメは臭いにきまってるよ」

「ハキダメくさい、ホワイ？」

そこで、オオタニは笑いだした。ロバートも訳知らず同じように笑った。気の置けない交友はそうしたことでも変わらないのであった。

久し振りに訪ねた横浜の居留地はかっての辺鄙な芦荻茂る一寒村の姿からとくにあの「豚屋火事」いらい一変して、瀟洒な洋館が立ち並ぶ時代になっていた。イギリス兵の赤隊、フランス兵の青隊が闊歩し、財閥に対抗した冒険射利の商人たちが功利に走り、血眼になった時代はようやく終りを告げ、すっかり勝者、敗者の色分けのついた落ち着きが見られた。

バン・リードの居場所はオオタニの調べで分かった。居留地でもスラム化した一角、つまりオオタニの言っていた「ハキダメ」にリードは住んでいた。一獲千金の夢破れた敗者の街である。屋根裏同然の暗い部屋に潜み暮していたのである。

不意の訪れ客が一人は日本人であることに、はじめから警戒の色を濃くしていた。顎で戸外を指すかれの促すままに従った。ロバートたちもかれの黴臭い部屋に招き入れられるよりそのほうがましであった。かれが警戒する以上にこちらも警戒が必要だったのだ。海員くずれかなにか、男はたくましく、入れ墨でもしているのではないかというタイプだった。

「ハワイのことで、キミに話を聞きたいのだ」

「オー、ノーノー、その話は止めにしてくれ、それともなにかい、キミはあれかい、クレームでもつけるためにきたのか」

「ノー、ノー、そうではない、この人はハワイ移民のルートを正式のものとするために考え、十分な知識を得ようとしているのだ」

「それを言うキミはいったいなにものかね」

「これは失礼、わたしはオオタニ、スミス・ベーカー商会の社員だ、単に通弁ではなくキミと同じアメリカ人のこのアルウィンくんとは親しい友人だ」

ロバートに付き添ってきた日本の男のほうは当然ながらそう名乗った。

「ハワイ移民のことだ、あんたの世話をした日本人たちのことで聞きたいのだ」

「やっぱりな、だが、もう古いハナシだな、もう忘れちまったな」

まんざら、男はシラを切ったり、嘘をつくつもりもないようである。荒くれだが、案外単純らしい。

「すっかり、やつらに担がれたのさ、思い出したくもない、だからその話なら止めにしてくれって言ってるんだ」

「そっちの事情もあるだろうが、キミの取引きはどんなものだったか聞いておきたいのだ、あんたに迷惑はかけないつもりだ」

「取引？　トレードだと言うのかい、バカバカしい、ただやつらにうまく担がれたのさ、だから、そう言ったろう、トレードなんて立派なもんじゃないのさ、ちょぼだよ、つまらないちょぼさ」

男は（ちょぼ）、つまり賭博という意味の言葉を知っていた。

「それはどういう意味かな、マネーになったんじゃないのか、だれに頼まれたんだ」

「そいつは言えない、アチラの人間だ、口入れ屋を通したはなしさ」

口間搾取にあって、いくらにもならなかったらしい。

「では、まぁいい、どういう地方の人間たちだった、それを聞いておきたい、ホエヤ　ローカリティ」

オオタニの英語はブロークンだが、かまわず押しの利いた会話の進め方である。ロバートはすっかりまかせたあんばいで、男への注視の目を離さないでいる。

「わからない、それ知るわけない、船だけ用意したんだ、そのころわしの勤めていた船会社のほうで都合をつけたのさ、会社のボスもマネーで買われたんだな」

「そうか、大方のスジは読めた、キミはお人好し過ぎたようだな、なにもかも組織的なんだ、キミは利用されたんだ、アメリカ人バン・リードは傀儡にすぎなかったんだ、そうだろう」

「カイライ？　それナニ」

「わるかった、そう、ピエロがよかろう」

「オオ、ピエロね」

「キミは言うなれば人買いを手伝ったピエロだったんだよ」

バン・リードと呼ぶこの男は複雑な顔をして、大袈裟な身振りをして慨嘆を表現した。かれは悪者ではなかった。悪者にされたピエロにすぎなかった。

「みんな船出のときは泣いたよ、見ちゃいられなかった、人買いの仕事はもうごめんだ」

「そうか、日本人は泣いたか、女やこどもも大勢いたのかな」

「いたともさ、ベビーもいたよ、ヴェリー　ミゼラブル、悲劇ってもんさ」

かれは悲劇という言葉を使った。

「キミのこれから目指す仕事は大事なものになるだろう、精一杯頑張りたまえ」

オオタニはこの日の帰途、ロバートの肩を叩くとそう言って励ました。

第十二章　条約批准まで

日布渡航条約の成立とその批准はロバートと関わり、その実現には当時外務大臣の職にあった井上馨との提携とその援助により実現に導かれた。

批准にいたる経過は外交文書に照らし、知ることが出来る。少しく煩瑣であるけれども関係文書を写して後づけをしたい。

明治十九年一月二十八日

井上外務大臣より

伊藤総理大臣宛

布哇国へ随意渡航ノ御批准の件

付属書一　上奏案

二　御批准案竝ニ決済

三　渡航条約

往第八号
別紙之通上奏候間可然御取計相成度候也
十九年一月二十八日
外務大臣伯　井上　馨㊞
内閣総理大臣伯　伊藤博文殿

（付属書一）
上奏案
帝国人民布哇国へ出稼ノ件ニ付布哇国政府ノ全権委任ト協議決定ノ上別紙条約書締結仕候ニ付御批准ヲ仰ギ候尤右御批准ハ布哇国都府ニ於テ交換ノ約束ニ付今般同府駐在トシテ赴任候総領事安藤太郎へ御批准交換ノ件仰付度依テ御批准案竝御委任状条約書写訳文相添此段謹テ上奏ス
条約書写訳文
共別ニ収ム
明治十九年一月二十八日
外務大臣伯　井上　馨㊞

ここで文書中布哇国政府の全権委任と協議の上とあるのはロバートと井上が協議の上ということである。条約文章案が両者により勘案されたことは明らかである。また当時、官名の下に爵位の一字を加え伯とあることも珍しく目に映る。ここでは井上、伊藤の両者ともに同じ伯爵である。（聞多）と呼び、また俊輔と互いに呼んだ仲だからここまでは爵位も同等であることが認められる。どうやら二人は相拮抗しているようだ。聞多が俊輔の引き立てをうけ、一度は失脚しながら政界に復帰してこれらの文書に名を連ねる経緯に、明治政府のこの時期における長州閥の威勢は判然としたものがある。

（付属書二）
御批准案竝ニ決済
天佑ヲ保有シ万世一系ノ帝祚ヲ践ミタル日本国皇帝（御名）明治十九年即チ西暦千八百八十六年一月二十八日東京ニ於テ日本国人民布哇国へ随意出稼ノ件双方全権委員ノ記名シタル条約書ヲ朕親ラ閲覧点検セシニ能ク朕カ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ之ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百四十六年一月二十九日
東京帝宮ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ捺セシム
御名　国璽
奉勅　外務大臣　井上　馨

（天佑ヲ保有シ）に始まる文書の厳かさはさすがに大時代を感じさせるものがある。宣戦布告の詔勅で承知している語句である。こうした場合に目に触れようとは恐れ入るばかりで、啞然とするものがある。

（別紙）

明治十九年一月二十九日
法制局長官　㊞
内閣総理大臣（花押）
別紙外務大臣上奏帝国人民布哇国へ随意出稼ノ件同大臣上奏ノ通御批准相成可然ト信認ス
（以下朱筆）
明治十九年一月二十九日御批准

さて、いよいよ条約そのもののいかなるものであったかを知らねばならない。

（付属書三）
渡航条約
日本皇帝陛下ノ臣民ニシテ渡航シタルモノ数多アリ又本条約ヲ以テ確認セントスル従前ノ随意渡航方法ニ因リ向後渡航セントスルモノアルベク又日本皇帝陛下及布哇国皇帝陛下ハ右渡航人ヘ布哇国ノ憲法法律ニ遵ヒ最モ完全且有効ノ保護ヲ与ヘントノ希望アルヲ以テ右重要ノ事件ニ付条約ヲ締結センコトヲ決定セリ因テ渡航条約ヲ協議締結センガ為メ日本皇帝陛下ハ外務大臣従三位勲一等伯爵井上馨ヲ其全権委員ニ又布哇皇帝陛下ハ其代理公使兼総領事ナイト、コンマンドル、ヲフ、カラカハ勲章「ロベルト、ウヲルカー、アルウヰン」ヲ其全権委員ニ命シ双方互ニ委任ノ書ヲ示シ其誠実適当ナルヲ認メ以テ左ノ条々ヲ合議決定セリ

ここに見る文書ではじめてロバート・ウォルカー・アルウィンの名が明らかに登場する。そして、井上と二人の勲位が文書中にあたかもそれぞれの名誉を格付けするように用いられていて、奇異であり滑稽を覚える。ロバートは布哇国総領事としてすでに日本の勲位も授かっていて、明治十五年十二月、勲四等旭日小綬章。十八年四月、勲三等旭日中綬章と累進していたが、ここでは井上との対比上から触れない配慮が認められる。

さて、いよいよ条約の本文である。

第一条
本条約ノ条款中既ニ布哇諸島ヘ渡航シタル日本皇帝陛下ノ臣民ヘ適用シ得ヘキモノハ向後渡航セントスル臣民同様ニ之ヲ適用スヘキコトヲ双方互ニ結約セリ

第二条
本条約ノ効力ヲ有スル間其条款ニ因リ日本皇帝陛下ノ政府ハ其臣民ノ随意ニ布哇嶋ヘ渡航スルヲ許可スヘシト雖モ其国家ノ緊急若クハ臣民ノ安寧如何ニ因リ必要ト認ムルトキハ右渡航ノ都度之ヲ禁止シ又日本政府ノ独断ヲ以テ右渡航ヲ

一般ニ制限停止シ若クハ禁止スルコトアルヘシ
但日本皇帝陛下ノ政府ハ此権利ヲ猥リニ執行スヘカラス又本条約第三条ノ許可ヲ受ケ将ニ渡航セントスル者ニ対シテハ之ヲ施行セサルヘシ

第三条

本条約ヲ以テ取極メタル渡航ハ横浜及ヒ「ホノルル、」ノ両港間ニ限リ之ヲ行フヘク而シテ神奈川県令ハ日本政府ノ名義ヲ以テ右ニ関スル諸般ノ事項ヲ処分スヘシ又布哇皇帝陛下ノ政府ニ於テハ其移住民事務局ノ特派委員ヲ任命シ之ヲ横浜ニ在留セシムヘシ但右委員ノ任命ハ日本政府ノ認可ヲ経ヘキモノトス

右委員ハ布哇諸嶋ヘ渡航スヘキ日本臣民ニ関スル諸般ノ事項ニ付神奈川県令ト通信協議スヘク加之右渡航人ヲ搭載回送スルニ必要ノ処分ハ総テ之ヲ施行スヘシ又若シ渡航人ヲ要スルトキハ右委員ハ都度少クモ一個月前其旨ヲ右県会ヘ通知シ其人員及ヒ其職業ノ種類ヲ申出ツヘク而シテ右県令ハ其通知ニ対シ猶予ナク日本政府ノ諾否如何ヲ回答スヘシ但右通知ヲ欠クカ又ハ右県令ヨリ其請求ヲ承諾スルノ回答ナキニ於テハ前条項末項ヲ適用セサルモノトス

約定は日本政府優位の立場がかなり明瞭なものになっている。横浜駐在の特派委員の任命の許諾権限のほか渡航の便船の手配と世話の一切を相手国に負わせる内容になっている。欧化政策をとり、鹿鳴館を先頃（明治十六年）完成させた井上はその胸のうちに条約改正を念願としており、この相手国には厳しい態度を持していることが注目される。

第四条

本条約ヲ以テ取極メタル渡航ハ総テ契約ニ因ルヘク又其契約ハ何年間以下ヲ期限トシ両国政府ノ許可シタル式ニ従フヘシ右契約ハ布哇政府ノ名義ヲ以テ其移住民事務局特派委員横浜ニ於テ渡航人ト締結スヘク而シテ神奈川県令ノ認可ヲ経ヘシ

右契約継続中布哇政府ハ渡航人ニ対シ傭主ノ義務ヲ負担スヘキヲ以テ其諸条款ヲ正当誠実ニ履行スルノ責ニ任スヘク而シテ同政府ハ其法律ニ因リ渡航者タル日本人ヲ充分ニ保護シ且時勢ノ如何ニ系ハラス常ニ渡航人ノ幸福安寧ヲ計ルヘシ

第五条

布哇皇帝陛下ノ政府ハ本条約ニ因リ渡航スル者ヲ上等ノ乗客汽船ニ搭載シ之ニ相当ノ食物ヲ給与シ下等船客トナシ横浜ヨリ「ホノルル、」迄無賃ニテ渡航セシムヘシ但右渡航人ノ回送ニ供スル汽船ハ神奈川県令ノ至当ト認ムルモノニ限ル

ヘシ

第六条

布哇移住民事務局ト渡航者タル日本人ト締結シタル契約ノ条款ヲ相当ニ履行セン為メ及ヒ布哇国ノ法律ニ因リ右渡航人ノ権利ヲ充分ニ保護センカ為メ布哇皇帝陛下ノ政府ハ右契約継続中日本語及ヒ英語ヲ談話通弁シ得ル監督人及ヒ通弁人ヲ応分ニ雇入ルヘク而シテ右契約ノ事件ニ付右渡航人原告、被告、告訴人若クハ被告訴人トナリ布哇国法庁ニ出訴スルトキハ布哇国政府ハ右通弁人ヲシテ右渡航人ヨリ別ニ謝金ヲ要セス其職ヲ勤メシムヘシ

第七条

布哇皇帝陛下ノ政府ハ本条約ニ因リ締結シタル契約ノ継続中渡航人ヲ治療セシメンカ為メ日本医師ヲ応分ニ雇入レ之ニ官医ノ資格ヲ与ヘ又之ヲシテ渡航人ノ治療ニ時々必要ト成ルヘキ地方ニ住居セシムヘシ

第八条

布哇皇帝陛下ノ政府ハ在布哇日本外交官及其領事ヲシテ何時タリト故障ナク自由ニ渡航者タル日本人ト接近スルヲ得セシムヘシ而シテ右外交官及領事官ハ契約ノ誠実ニ履行セラルルヤ否ヤヲ視察スルニ充分ノ便利ヲ得ルト其契約違背ノ場合ニ於テハ布哇国ノ法律及其地方庁ノ保護ヲ請求シ得ルトノ権利アルヘシ

第九条

布哇国ニ渡航スル日本臣民ノ安寧幸福及ヒ繁栄ハ両政府ノ等シク希望スル所タリ故ニ不良不善無頼ノ日本人布哇国ニ到リ渡航人ノ中ニ紛議騒擾ヲ醸シ又ハ之ヲ放蕩ニ誘引シ若クハ布哇政府ノ負担トナルヘキ者ハ同政府ニ於テ之ヲ日本ヘ送還スルハ日本政府ノ承諾スル所ナリ

第十条

本条約ハ批准ヲ経ヘク而シテ其批准書ハ成ルヘク速ニ「ホノルル、」府ニ於テ交換スヘシ

第十一条

本条約ハ批准交換ノ日ヨリ五年間有効ノモノタルヘシ而シテ其後ト雖モ此条約国ノ一方ニ於テ六個月前ノ通知ヲ以テ之ヲ廃止セントスルノ意ヲ表スルニ非サレバ尚ホ効力ヲ存スルモノトス

右証拠トシテ双方ノ全権委員和文英文ヲ以テ本条約ヲ調製シ茲ニ記名調印スルモノナリ

明治十九年一月二十八日

西暦千八百八十六年一月二十八日於東京

井　上　馨

アール、ダヴリユー、アーウヰン

かくて官約移民時代は始まり明治二十七年へかけて約二万九千人が渡航し、主として山口、広島、熊本、福岡の諸県で三年契約に応じた二十歳代の若者たちが大半を占めた。

無約定渡航人の件

我カ邦人ノ内労働者トシテ布哇地方ヘ無約定渡航ノ儀ハ御許可相成ラサル旨既ニ各県下ニ御沙汰ノ趣承知仕リ居リ候処、今般別紙ノ通リ福岡県民四名在布同県人ヨリ誘引ノ由ニテ旅券ハ勿論何等約定モ締結致サス去ル三月十九日横浜出発ノ米船ペキン号ヲ以テ桑港ヘ渡航、夫ヨリ四月三十日風帆船ヲ以テ当地ヘ到着仕リ候旨当館届出之有リ、右ノ者共ニハ既ニ嚢中一銭ノ貯蓄モ之無ク進退谷窮ノ趣ニ付夫々取リ調ノ上、取り敢エス右ヲ誘引シタル同県人住地ヘ回送方取リ計ライ置キ申シ候、然ルニ次便桑港ヨリ又モ三四十名許ノ労働者渡来致スヘシトノ風評之有リ、尤モ右ハ前文四名ヨリ無根ノ流言相起リ候事カ、将又実事ニ之有リ候ヤ真偽未タ判然仕ラス候ヘ共御承知ノ通リ、爾来布政府ヘハ我ガ人民約定ナキ渡航ハ我カ政府ニオイテ決シテ許可相成リ難キ旨数回申シ通シ、異議モ御座無キ故今回ノ移民民ニ対シ同政府ニハ頗ル奇異ノ感覚ヲ懐キ候様子ニ付彼等ハ何レモ脱出セシ者ニテ我カ政府ニ公然ノ届出ハ更ニ之ナキ段ソノ筋ヘ委細相通シ置キ候ヘ共右ハ独リ布政府ニ対シ不都合ノミナラス国民等進退ニ於テモ向後迷惑ノ廉々少ナカラス明白ニ付何等別紙口供トモ篤ト御一読ノ上、猶再度各県下ヘ御下令相成ルヨウ仕リタク此段上申仕リ候也

明治二十年五月六日

在布哇総領事安藤太郎　公印

外務政務次官青木周蔵殿

しかし、現地総領事からの右のごとき上申に見られるような無約定の渡航は依然後を絶たず、該当の多い県に対し要請に基づく取締り上の内訓はしばしばであった。

移民は日本への送金という経済補助や国内人口過剰の解決にもなったので、政府は二十七年移民保護規則を制定して労働者の海外移住を民間事業に移した。ために相次いで移民会社が設立され、私約移民時代に入り二十九年には移民保護法が制定され移民の指導が行なわれたりしたが、同三十一年にハワイがアメリカに合併されたので三十三年以後は契約移民は廃止となった。この間の渡航移民は四万余人、契約を終って大半は帰国したが、賃金の高いアメリカ本国へ出稼ぎする者もあった。

―未完―（四・六・二八）

（本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。）

（小説）

近藤富蔵の生涯（十六）

第一章　八丈流人近藤富蔵

四、富蔵の妻女逸、溢死せんとす

金子正義

（一）

八丈島防禦隊の鉄砲に関って弘化二年の豊菊等の島抜けにも及んだが、五年程戻って天保十一年秋の近藤富蔵の妻女逸の自殺未遂に触れたい。

富蔵は金次郎の騒ぎが治まると再び観音堂に入り読経三昧の日々であった。密かに金次郎は勿論、喜三郎と共に島抜けして死んだ利八、久兵衛、常太郎の霊や、其の他抜舟して溺死したり自害した流人の霊を慰めていた。

夜の看経の後は一本の燈明が尽きるまで長楽寺や宗福寺から借りた書籍を読み耽り、闇となれば座禅で床に臥るのは暁近くであった、僅かの睡りによく国地の夢を見た。富蔵は夢に全く融け込み夢を真実と思い目覚めた現実が夢かと思えた。九月廿二日五更の夢もそうであった。

父、重蔵が恩赦を蒙って近江大溝藩お預けより許されたのか、衣服、佩刀昔の儘で誰か親しい友と肩を並べて談笑し乍ら江戸駒込の辺りを歩いていた。富蔵は数歩下って従いて行った。

寺構えの整った寺院があった、開け放された山門をずっと入ると境内は浪速長柄の指月堂のようであった。

薄昏い奥から庵主の琢成房が出て来た。重蔵達は奥の間に入り富蔵は別室に通され、琢成房が、娘園江を呼びましょう、と去ったがいつ迄待っても園江も琢成房も姿を見せなかった。痺れを切らした富蔵は廊下に出て何度か小声で園江を呼んでみたが森として答も無かった。

男共の急の来訪に恥ずかしがって部屋に潜んだのであろうと、勝手知った寺院なので園江の部屋に行き襖を引き開けると、叫っと声を上げて振り向いた園江は、眉青く鉄漿くろぐろとして、髪は耳朶を覆う丸髷であった。富蔵と知って柔撓に双手を重ねて畳につけ頭を下げた。富蔵はつと寄って手を把り引き起すと、園江は茫然と寄

添い乍らただ泪を溢れさせているばかりであった。

稍々あって園江は恥ずかしげに顔を背け乍ら、

「貴方様と憂き別れのときは胸詰まって言葉も出ませず、其の後は積る思いを胸に秘め夜毎枕を濡らしておりました。貴方様の俤を忘れまいとしながらも、遠く海を隔てて風の便り、人伝に知ることも無く臆て耐え果てて、兄の仰せ母の勧めに背かれず、貴方様に違反して嫁つぎましたが・・・十八年を経て今逢うことの嬉しさと女の身の悲しさに唯だ涙するばかりでご座ります」

と朱い花唇を震わせて跡絶々々に囁いた。

富蔵は胸詰まり一度は父も許した我が妻なりしに、浪速と江戸と遠く離れ一度も共に枕せしことも無き間に、武士の面目已む得ず人を多く殺めて南海に流島し十八年の星霜を経て今逢えば己れは三十四歳、配流の暮しの苦しさに脾肉衰え潮風に皮膚黝んだが、園江もまた指折り数えれば三十二歳なりや、昔の俤は夢か幻の如く、今は眉剃り歯染めて偕老同穴の良人ありて、部屋の片辺には哺育の嬰児も睡れる様子、と胸迫って激情抑え難く園江を抱き締めようと熱き血潮に全身燃え立つ思いにハッと目覚めた。

全身に汗が熱湯を浴びたように吹き出ていた、暫くは酒に酔ったように呆としていたが汗が冷え込もと次第に覚醒し、夢が真実かを見定めようと寒さに身震いし乍ら立ち上がって、内陣の仏像に合掌するのだった。

「南無大慈悲救世菩薩、我が三世の業障消滅させ給え我が煩悩を尽滅させ給え」

と繰り返し念じているうちに東天が白み始め、堂内が明るくなった。富蔵は暁の夢は観音菩薩が我れを憐んでの慈悲であったかと思い直して

「見し夢は正しき占といつなりて
　結ぶ縁にしをいつかなすらん」

と呟いた、恰度その時観音堂の扉を激しく叩いて長女操が転げ込んだ。

「トトサマ！大変ダァ、ホアドノ（母さま）がマルブガンダラ！（死にそうだ）」と泣き叫んだ。

（二）

秋口より長煩いの床にあった逸は、次第に気力も衰え、悩み募って前夜より何にか思い詰めていたが、暁近く物の怪に誘われたように起き上ると、土間に下りて梁に縄を打ち掛け首を括ろうと輪に結び、水桶を台にして首を輪にかけ、足で水桶を蹴り倒そうとしていた。

逸に添寝していた五歳になる長男守一が、頼り無い寝心地で目を覚まして床に居ない母の姿を求めて蚊張の外を見ると、唯事でない母の様子に吃驚仰天して、十一歳の姉の操を叫び起し乍ら母の膝に縋りつき、

「ホアドノ、ナゼ、マルブカ！」

と大声で泣き叫んだ、寝惚け眼の操も様子が分って愕き慌て、守一と力を合せて逸の手を縄から引き離し抱き抱え乍ら共に土間に転げ落ちた。操は健気に

「ホアドノ、マブラレ、ドケーオジャルカ」（死んでどうなさるか、と母を揺すり起した。

守一は、

「ホアドノ、マルブラ、アレ、ドケーイコー」（母どの死んだら我れどうするか）と縋りついて泣き叫んだ。

操は母の背を抱え守一は両足を持って床に横たえ、守一に介抱を言いつけ外に飛び出して未だ暗い裏の松山を駈け抜けて富蔵の籠る観音堂に急を告げたのだ。

富蔵は余りのことに懐古瞑想の夢も愕き破れ操の手を引き我家に駈け込んだ。

逸は床に蹲って啜り泣いていた、母の背に縋りつくようにして介抱していた守一が父の姿を見て、

「ホアドノ、トトサマ、オジャツタ、シッカリナサレヤモ」

と母の肩を揺った、逸は富蔵が飛び込んで来たので何にか嬉しい気持が沸き立って胸迫り一層激しく咽び泣いた。

逸は自害未遂のことを夫に詫びるより、母を思う守一の「ホアドノ、ナゼ　マルブノカ　ホアドノ　マルブダラ　アレ　ドウスルンダ」の言葉に搏たれて、泣き乍ら此の子の為に生きよう、腹の子も生んで立派に育てようと決心していた。

富蔵は逸を労わり励まし乍ら床に直し入れ掛布団を抑え乍ら、何故、逸は自害など謀ったか、思いも寄らぬことに警駭していた。

一日中朝早くから夜遅く迄働き通してきた逸は心身共に疲れ果てたのであろうか。二度の出産前後以外は家事と機織仕事に追われ、朝から三根の機織場に行き、昼に戻って二人の子供に昼飯を食べさせるとまた織場に戻り、夕刻帰ると直ぐ家近くの僅かの畑を真暗になる迄耕していた。

富蔵はそうした逸を憐れに思った、富蔵が流罪の身に非ざれば御目見を許された旗本の室として手も汚さずに過す生涯であろうに、逸とて浮喜田中納言家に繋がる武士の娘である流人に嫁したが為に苦労を重ね、水汲女として辱かしめを受けているのが耐えられなくなったのか否否、そんな高ぶった心の持主ではない。一体如何したと言うのだ、自害など企てるとは過労の為の心の迷いからであろうか、武士の流人の中には自尊心を捨て切れず鍬を持つことを恥辱と思う者もいた、富蔵より身分の低い旗本御家人でも、流罪人として夫役を命ぜられると、武士に有るまじき事と抗して自害する者すらいた。

富蔵は農耕、労役を少しも賤しいとは思わないが、八丈の流人になってから若き頃の学問嫌いが一変して仏典漢籍、古典と書物を手にして暮らす日々となった、それ

も書籍写本は寺社旧家より借り得ても、八丈では米以上に高価な紙筆墨を手に入れられるのは逸の織女の働きがあればこそであった。それが逸を他の水汲女の何倍もの心身の負担となっていたのであろうか。

数年来の飢饉続きをやっと乗り切っての疲れが一度に出たのであろうか、富蔵は沈痛の思いを様々に馳せ乍ら、逸の涙が乾いて腫れ上った寝顔を瞻めて、流人に嫁いだ為の様々の苦しみを思い浮かべていた。

（三）

八丈島は太古よりの火山島で地味悪く、四時吹き渡る潮風に加えて不時の大風雨で塩害甚しく、作物の実りは僅かであったが、島人は此の悪条件は天与のものと、永年努力して山坂下の僅かの平地の焼石、石灰を取り除き、赤土を塗って水を溜め少々の田畑を耕していたが、夏の早魃や秋の暴風雨で三年ごとに大凶作となるのであった。

四方海に囲まれ乍ら潮流急で普段でも魚漁振わず、凶年時には海も一層荒れて漁船はおろか本土よりの救援の船も入れなかった。忽ち、蓄えの無い貧農や農耕の心得の無い流人は飢え、金銭は勿論名産の八丈紬でも米穀との交換が困難で、紬の売買をして利食する仲買商も黄金千両を枕に餓死する有様となるのであった。

斯うした全島大飢饉の時は、飢えた流人達は地主や旧家の蔵を破って穀物を盗み出したり、山野に流離して草根木皮を喰い尽し、三原・西山の牛を仆して生肉を啖らい、果ては人も牛も野山の獣も共に斃れる有様となった。

其の餓鬼地獄を父祖伝来幾度も経験した島人は、烈風塩害で草木悉く凋み枯れ果てる山野にも強く繁るあした葉を食べ、蘇鉄の蕊を粉にして命を繋いだが、それでも飢饉の年ごとに数百人が餓死するのだった。

富蔵には八丈島人の宿命的とも云える地獄絵図さながらの苦しみが、まざまざと脳裡に泛んでくるのだった。

天保九年伊豆七島巡察の羽倉簡堂は八丈島役所の記録によってその惨状を知り、義倉在庫穀物の確保充実や甘藷等の救慌作物の作付奨励をして帰ったが、其れで風浪塩害や痩土壌や大旱魃大暴風が無くなった訳でなく、飢饉は打ち続いているのであった。

富蔵が文政十年五月八丈配流になった年の秋は暴風雨に依る塩害となり翌年は大飢饉であった、幸い富蔵を庇う流人僧などによって餓死を免れたが、其の後逸を迎えて後の幾度もの飢饉、特に天保になっての度々の大飢饉にも一家が餓死しなかったのは逸のお蔭であった。実家の沖山栄右衛門の助けもあったが旱魃、大風雨、塩害の大凶作では島全体に食うべき物が無くなるのであった。織女の逸の紬でも代えるべき米穀は手に入らないのである、逸が野を這い山に分け入り草の根山の実を採って一家の餓死を防いだのだった。余りにも苛酷なその苦しみに精根尽き果したのであろうか。

富蔵は逸を痛ましく哀れむと共に、己れを始め妻子が今日命あるは、凶作続きの大飢饉で誰もが飢えて他を顧みないとき、手を差し延べて呉れた義人が居たからこそと深く想いを致すのであった。

天保三年の旱魃飢饉で次々と老幼の弱きものが死んでいった年の暮れ、仙台船が難破して三根の浜に打ち上げられ、その積荷の米、大豆等で餓死寸前の島民の命が救われたが、既にその前に三百人程が死んだ、その中に旱魃中の渇水で六月七日枯れ木の如く干涸び死んだ流人僧楽西坊がいた、富蔵が深く恩義を感じている一人である。

楽西坊は富蔵より十年早く傷害の罪で流されて来た芸州浪人山田栄蔵であった。江戸での浪人生活中神田新銀町の米穀商甚兵衛店に、用心棒の居候中に商売取引のこつを身につけ流島後は、流人仲間との物々交換で次第に手を拡げて、御薬金次郎等と手を組み国地の商人との紬と穀物の闇取引を大ぴらにやり、米麦、芋類等の食物は困らなかった。だが金次郎と違って我欲ばかりでなく、多くの流人の衣食の苦しみを救っていた。特に富蔵は武士仲間として何度も助けられた、山田栄蔵の義侠心は長の浪々の中で苦労を嘗め尽しても、武士の魂を見失なわなかったこともあるが、同船で流されて来た芝増上寺山内瑞華院の僧周練の教化影響によるものが大であった。

周練は初め鴫山観音の久世堂に入って浄土教を布教し、後八丈富士の山麓九蔵金土に一宇を建てて八丈最初の念仏講を開いた聖人であった、奇しくも富蔵が八丈流人として永代橋より出帆した文政十年四月十二日に周練は病没し、今は亦その久世堂に屢々参籠しているのだった。

流人山田栄蔵は師の周練の入寂により翻然として出家し、楽西坊として周練に代って念仏講を守り立て、島人に来世浄土の夢を持たせ、流人を慰め励ましていた。

富蔵が深く感謝しているのは奇特な義人僧侶ばかりでなく、多くの情深い島人や村役、船役の中にも居た。

八丈ばかりでなく伊豆七島の役人達は大飢饉の時こそ、自分の村の餓死者を一人でも少なくしようと努めていた。

三根村の船年寄笹本平三郎は打ち続く天保の大飢饉の最中の天保五年の二月七日、餓死に及ばんとする極貧の百姓達に粟籾三十俵を恤供し、流人達にも京桝で二升ずつ頒け与えた。

偶々逸の実父沖山栄右衛門が前年より病床にあったが、重篤となり逸は子を連れて実家に帰り、正月十一日父は没したがその葬儀の後も飢饉を避けて豆留していた、富蔵は先に帰って鴫山観音の久世堂に参籠起居していた。

折からの飢饉で食糧絶え、毎日あした葉ばかり茹でて飢に耐えていた、その時笹本平三郎の救いの粟が平等に頒けられ、富蔵は蘇える思いであった。

笹本家は代々船年寄役を勤め家蔵には米穀の蓄えもあったが、此の非常恤民の粟籾一俵は米百俵にも換え難いものと、富蔵は笹本半三郎の義捐に感涙したのであった。

（四）

打ち続く大飢饉の天保五年七月六日、待望久しい江戸より船が三宅島より入ったが、商人船で救援穀類の塔載なく、船頭達が交々伝える話では、全国的の大凶作で江戸表にも米穀類は入らず、救援どころか毎日の米価次々と高騰して、平常米一升銭百文のところ僅か三合となり、諸物価もそれにつれて高値となり、江戸ですら餓死行き倒れが出る有様だと、暗い顔で伝えた。

天保初年の江戸の日傭賃が銭二百文、大工等の職人で銀四匁（銭約四百文）であった、この一日の働きで四升の米が買え充分妻子を養い、内弟子小僧も世話できた。

処が、天保三年以降全国的な天災、凶作と飢饉続きで米価の高低変動激しく、銭百文で米三合より二合、今はより少なくなっている有様だと口々に伝えるのだった。

八丈の織物仲買商はそれでも、漸く入港した商業船であるからと紬と米・麦との交換を再三交渉したが、積荷が少ないからと仲々応ぜず、漸く商人船側で最高の交換率だと示したのは、何んと、丹後縞一反で粗ら麦島桝三升（京桝一斗五合）、八丈紬一反で同じく麦二升（京桝七升）であった、余りにもそれは非道だと更に交渉したが足元を見て譲らなかった。

時の相場にも依るが当初鉄砲洲の島会所の公定は紬一反米一俵を基準としていた。如何に凶年飢饉の穀類不足とは云え余りの安さに交換に応ずる者も無く、仲買人も肝腎の織物が集まらずに交換取引を断念した。

商人船の言い分は米の交換率を勝手に吹っかけた訳でもなく、八丈織女の手間賃ぐらいは出そうとしたのだ。

織女の賃金は丹後織りで島桝三升、紬で二升だった。鉄砲洲島会所の麦一升の公定は銀一匁であるので、銀相場にもよるが三升で約三百文程度である、米に採算して京桝三升である、一反を織るのに十日を要するので、休み無く一ヶ月織り続けても一人三反、米九升であった。それも船が順風を得て八丈に入ってのことだった。更に米麦、織物相場の関係で上り下りがあった。飢饉の年では一反の織賃で米一升を得るのも容易でなかった。

飢饉が旱魃や暴風雨、塩害ばかりでなく米麦相場や海上運輸等の諸要因が搦み合っておこることなど毛頭考えもしない富蔵は、飢饉の最中の一人暮しで毎日鳴山観音堂に籠って読書・看経に努めていたが、朝は芋蔓、昼は炒麦夕べは芋粥で痩せ細り、次第に気力も萎え日夜うとうとと過すようになった。

此れでは餓死するばかりと気を取り直し、思い切って逸が実父の葬儀後も、子供の為にも飢饉の間実家に逗留している大賀郷に行った。

僅か十町程の道程をトボトボと半日がかりで夜になって漸く辿り着いた。逸は勿論、幼い娘の操まで、余りの富蔵の弱まりように驚いて、掘り出したばかりの薩摩芋

を茹でて食べさせた。

翌日から逸は自分の食を減じて富蔵の為に米粥に乾魚等を添えて食べさせていると次第に富蔵の体力も恢復し始めた。然し如何に逸の実家とは言え、島全体が飢饉の時に富蔵一家がいつ迄も寄食しているのは逸にも、実父の死後は弟栄松夫婦の世帯なので気苦労があった。

そんな折に、富蔵が大賀郷に来ていると知った三島大明神の神主奥山忠昌が顔を見せ、後で稗一俵を届けて呉れた、逸は大喜びで栄松夫婦と一緒に稗俵から出して臼搗にすると、一升は七合五勺ぐらいに減じて仕舞った。逸は惜んで籾のまま粉にして団子汁を作り、朝夕の食事にした。逸は此の時の一俵の稗にどんなにか助かったか後々迄も語っていた。

不思議なことにそんな飢えの中でも逸が身籠ったので元気になった富蔵は、新しい年は三根の我が家で迎えようと鳴山に年の暮れに帰った。

天保六年は夏の旱天続きもあって旱魃となり又又凶作かと案じたが、各村の雨乞祈禱に天も感じてか旱天の慈雨もあって平年作となり、甘藷も出始めると島人の顔にも生気が蘇った。

天保七年は再び凶作となって富蔵一家にも食欠く日が多くなった、大賀郷の逸の実家の母が栄松夫婦に隠れて呉れる粟・稗等を逸が、重い臼で粉に搗き団子にして食い繋ぐのであった。

時に富蔵が旧家の子弟に教える素読の礼に何にがしかの米麦を得て帰ると、逸や幼い長女の操や乳吏子の長男守一までも大喜びで、久々に米入りの粥にして漸く生気を取り戻すのであった。

富蔵は、早く煮えないかと生唾を呑み込み乍ら鍋を見守っている子供達が不憫であった。鬼界ヶ島の俊寛の苦しみは俊寛独りが耐えれば良かったろうが、富蔵には、己れが犯した人を殺した大罪を天は憎んで罪なき妻子迄も餓鬼道地獄の苦しみを与えるのか、と己れの罪深さに目を閉じて嘆き耐えるのだった。

漸く甘藷が出始めたが、畑を持たない流人達は容易に手を入れることが出来なかった。僅かに畑に捨て残った藷の葉や、芋蔓を拾い集めて茹でて飢を凌ぐのであった。

少しばかりの畑を耕す逸ですら、紬一反で醤油樽二樽程の甘藷を交換する有様だった。

其の時も天の助けか富蔵一家を救って呉れた流人仲間が居た、富蔵より一年後に流されて来た加藤稲五郎であった。

稲五郎は火消役本多六郎組下の御家人であった、勤務中に些細な事で同役と喧嘩口論し傷害の罪で島送りとなった。処が稲五郎の父の文五郎が、近藤重蔵が寛政二年の頃江戸市中見廻り役の先手与力代番の時の下役であった。稲五郎は父文五郎から度々近藤重蔵に恩義を受けたことを聞いていた。八丈に流されて近藤重蔵の長子富蔵

が居るのに驚き、何にかと富蔵の為に小忠実に働いていた。亦、稲五郎は天保三年の大飢饉で死んだ楽西坊によって国地との交易の手蔓を教えて貰っていたので、商人船が入ると闇取引で得る僅かの穀類を富蔵に削いて、一家の危期を救って呉れるのであった。

其の年の秋の商人船が入った時は、稲五郎ばかりで無く、名主小宮山善右衛門の妻亀代が密かに紬、生糸等の穀類との交換があると知らせて呉れた。此の船も紬一反で大麦三升五合程であったが、腕の良い逸でも打ち続く凶作で、嫁ぐ時母ヒロが呉れた五反程の紬や自分で織った二十反程の紬も次々と米麦と交換し尽して残りも無かった、亀代は気の毒に思って麦二升、粟五合程を密かに施して呉れた。

冬より翌年の端境期までどう食い繋ぐかが命の瀬戸際であった。逸は五歳の操と二歳の守一の単に已れは餓死しようとも、子供達には飢えて泣かせるものか、と三根の裏山に登って山芋・葛・あした葉は勿論のこと、蘇鉄歯朶、ヘンゴ、イグマの根まで掘り良く煮出して搗き崩し団子にして食べさせ、悪臭のする山桂（まだみ）の実まで拾い集めて団子にしたが、幼い守一は苦い山桂の餅などは食べられず、食物を探し求めて山野を歩き廻り、疲れ果てて床に打ち臥している逸の胸懐を探って泣き乍ら出ない乳房を吸っている有様だった。

斯うした悲惨な天保の大飢饉で国地の各藩の田畑は荒廃し農民は山隠れ逃散、或いは一揆強訴が各地におこり江戸・大阪の大都市には大商人・米穀商等の打ち壊しの騒動相次ぎ、果ては天保八年の大塩平八郎の乱ともなって幕府を震駭した。

然し八丈では五穀の不作凶年飢饉の周期が一巡して、平年通りの作柄豊作となると、昔通りの女人天国桃源郷に戻るのであった。

（五）

逸は天保十一年の春の頃から躰の調子が悪くなり、身籠ったと分ると、今度ばかりは堕胎すと言い張って富蔵と諍った。

富蔵は逸が自害せんと思い詰めたのはその為かとも思った。

逸は、昔から八丈では土地狭く食糧乏しき為に子の多きは無益であると言われ、富蔵夫婦には一姫二太郎と恵まれ、もう此れ以上はいらないと言い、もうこれ以上生むと身体が保たないとも言った。

富蔵は逸が嫁いだ後も判っきりと自分の歳を言わないかったが、相当の歳であろうと思い当った。

八丈では優れた織女程、婚期が遅れた、それは別に恥しいことでも無く寧ろ誇りとしていた。

逸は別に自分の歳を隠していた訳でも無く富蔵も余り気にしなかったが、逸の父沖山栄右衛門が天保五甲子年正月十一日に没した時、残された家族は寡婦となったヒロ、長男栄松、次男鶴次郎、四男仙松であったが、他に三男富士六がいたが童子のうちに死んでいた。

栄右衛門埋葬の時、沖山家墓地に天明九己酉五月廿九日、善夢童子と小さな墓標があった。富蔵は其れより推して、長女逸の下に弟の栄松、鶴次郎、仙松がいて富士六が天明九年没とすると兄弟が年子であっても逸は天明五年以後の生れでは無く、天明五年出生とすると富蔵が文化二年の出生なので逸は二十歳も年上であると気付いて驚いた。

勿論逸を迎えた時富蔵は二十三歳であったが逸は四十三歳であったのかと首を捻ったが、島娘は奥手で織女は腕のよい程婚期が遅いと聞いていたので当時は逸の歳を気にしなかった。だが、逸が長女操を生んだのは四十八歳であり、守一は五十四歳の時であると思えば、確かにもう子を生む歳でないと思ったが、子は天の授けるもの、夫婦和合して子を得るは、夫婦の欲望を以って私事で交合するのでなく祖先の奉祀を断絶させない為である、貧しくして食糧なくば已れの食を分ちても子を養うべきである水子にするなど子を殺すに等しい、親として子を殺すは親を殺すと同じく人倫に反するものであり、神を冒瀆するものだ、と言って逸の悪阻が長びいて全身衰弱し、其の儘では出産どころか母体も保つまいと思われたが、富蔵は頑として堕胎すことを許さなかった。

此れを非情と恨み病み衰えた身を嘆いて自害しようとしたのであろうか、と富蔵は訝った。

或いは富蔵が唯、流人暮しの不便さから水汲女を求め形ばかりの妻として、十二年もの夫婦生活を続け二人の子供を育てて苦楽を共にし乍ら、今だに昔の女を恋い焦れ国地の女に想いを馳せていると富蔵の心底を見通し、絶望の余り溢死を図ったのであろうか、と逸の枕頭に黙念として一昼夜坐り続けていた。

散々思い巡らせて最後に突き止めたのはやはり富蔵の園江への恋情を知った逸の嫉妬と絶望であると思った。

先頃、船便で浪速天満の指月堂から富蔵流島後始めての便りがあった。封書は年を経て風潮に晒され茶褐色に干涸びていたが内に奉書で包んだ、茶の湯で使う黒文字を入れる揚子入れがあった。その唐草文錦の裂に見憶えがあった。園江が茶席に臨む折懐中する愛用の品であった。流人の身に故障なきようとの園江の心配りからか玉章は無く

「墨染のかわらぬ色と詠むれば心嬉しき法の道かな」

とあるばかりであった。

流人の国地との文通は見届物を含めて一々御代官に願い出て許可を受け、島通い船の便ある時に許可目録を添えて船頭に託す、船が無事に島に着くと、船頭は島役人に許可目録を引き合せて手紙なり見届物を渡し、更に島役人立会の下に目録と引き合せて当人に渡すのであった。

だがそれも暴風雨、時化等の難破で積荷は海中に沈んで半ばも届かなかった。

富蔵は、厳しい掟を通し、十有余年の星霜を経ても、南海三百里の激しき波濤を渡り来てよくも届いたものと感嘆し、長々しき文藻はなくとも一首を以って園江の心の音ずれを感じ取り、富蔵の心に昔の紅の恋の灯が点じたのであった。

富蔵は一生の形見とせんと密かに文箱の底に納めた。病床に臥していた逸は、何にやら珍らしくも富蔵に国地よりの便りがあったと感じ取ったが、富蔵は何も語らず憂愁に心乱した逸は密かに文箱を開け園江の便りを見て嫉妬の炎に身を焦し無明の奈落に転がり落ちたのであろうと漸く富蔵は推定したのであった。

園江の書信は、十二年前に富蔵が八島流罪となったことを知って、思い悩んだ末に伝手を頼って密かに出したものだった。

文政十年の春、富蔵は小伝馬町の獄屋に収監中で、既に評定所の吟味も済んでその判定を待っていた。

獄屋で富蔵の付人となっていた本郷の角兵衛獅子の直吉が微罪で近く出牢し、その暁には讃岐へ御礼参りに行くと云うので、鎗ヶ崎変事のことが、世間に誤った風説で流れているので浪波天満の称法山本教寺に寄って、住職の娘園江に富蔵の口述する鎗ヶ崎の変の真のことを伝えて呉れと頼んだ。

亦、園江への渝らぬ愛の誠を二首の歌に託した。

歌は

「我がのぞみ空しくくちん仇し野に
都の花をよそに見なして」

「語るべき人し無ければ岩清水
男の心汲みにて知れまし」

であった。十数年を経て届いた園江よりの便りはその返歌であったのだ。

「鎗ヶ崎の変事」のことは、評定所での近藤重蔵・富蔵父子の吟味のことが人伝に流れて、文政十年四月中旬には江戸、大阪で『武荏鎗丘興廃録』として草紙に発行された。

浪速天満の園江も草紙を読み直吉より富蔵の伝言を聞き、心を決して遙けき南海の果に便りしたものであった。

富蔵は逸に済まなかったと深く慚愧していた、如何に夢寐にせよ昔の女に逢うことを悦び、歌や日記に屢々書き留めていたが、逸が文机の塵を払う時読んだとしたら、其の愕きは如何ばかりであろうか、園江の便りが逸に致命的な衝撃を与えたのだ。己れは神仏に罪障の消滅を祈り、日々の営みは修証一如の行と澄しているが、此れでは非道、無情の極道者と変らぬではないかと自責の念に言葉も出ず、逸を見守るばかりであった。

翌朝大賀郷の栄松に頼んで正月や祝い事以外には手に

入らない米を貰い、操が健気に大根、株菜を入れて米粥を作り、干魚などを供えて無理に逸に食べさせた。

富蔵は操や守一の母の介護を嬉しそうに見守り乍ら、操や守一の出産の時、逸の母ヒロが来て、あした葉の生葉の絞り汁が出産を軽くすると呑ませていたのを思い出した。

あした葉は（朝多葉）と書き、間草（アヒダ草）とも言った。糧食絶えた飢饉の時、救援米の届く迄の間の生命を食い繋ぐ貴重な生命草である、草性強く旱天続きや塩害で他の野草が枯れ縮む時も一層青々と繁る程で、自から繁茂し乍ら荒地を肥やす薬草でもあった、従って普段でも腎薬として用いられ、ハラメ（妊婦）には根葉を食に混ぜ、生葉を絞って飲ませ精気をつけさせていた。

幼い守一も母の枕辺に坐りきりで、

「ホアドノ　シッカリ　カミヤレ」

と操の作った米粥を口に入れてやり、夕餉にはあした葉入りの粟粥を勧め、薩摩芋の煮付を口に運び乍ら

「オオセカンモ（薩摩芋）ヲ　カメカメ」

と母の容態を気使って

「早ヨ　ハラヤミ（腹痛）ウレシクナロンテ　ナモ（治らないかな）」

と逸の顔を覗き込むのであった。富蔵は守一の母逸への思慕の情の強さに胸搏たれ、己れが生みの親の梅への愛情に欠けていたのを思い知って、守一の親孝行に目を瞠るのだった。

父近藤重蔵は度々の千島、蝦夷地探検で屋敷に居らず、母梅は富蔵を生むと直ぐ離別されて板橋在赤塚の実家に去って、富蔵は顔も知らず、祖父母に育てられたので母子の愛情を知らなかった。それだけに守一は仕合せだと思った。だが、今度の逸の自殺未遂はどんなにか守一の幼い心を痛めたであろうか、守一は何故母が死のうとしたのか、何故、父が流罪人と言われているのか、幼ない心には理解できず、深い疑惑を生むであろう、今度の強い衝撃を和らげる為にも、己れの出自、流罪の顛末を伝え、母の苦労をも話して守一が父母の家柄や祖先に誇りを持って将来の大成に資するようにしたいと思った。

旬日を経て逸の病状も治まり身重乍らも再び機織場に通い始めるようになった。富蔵も観音堂に籠ることを暫く止めて、夜は家族と共に囲炉裏辺で食事を共にした。

夜毎守一と枕を並べて近藤家の系譜、祖父母のこと、特に重蔵守重の千島蝦夷地の探検より、書物奉行、大坂弓槍奉行のこと、目黒抱屋敷より富蔵の流島に至る顛末を語り出した。

前々から守一に島言葉だけでなく将来を慮って国地の言葉を憶えさせようと努めていたが、此の寝物語りは武家言葉多く幼い守一には理解できなかろうと、成長した後に読む様に『弁多守一エ遣ス庭訓物語之事』と一文を草して残した。

続く

編集子のメモ

◆バルセロナ五輪開幕の話題と参議院選挙の動向定まる日、この号の校了を迎えた。梅雨晴れの炎帝猛暑の中だが、やがて暦は秋、この号は爽秋号である。

◆いまさらながら、あるいはあらためてと言うべきか、手近かな辞書にあたってみた。

［小説］主として散文で書かれた文学。組み立てた人物と筋を通して、人生・社会に対する作者の意見を、読む人に訴えるもの。

三省堂「新明解国語辞典」

［小説］文学の一形態。作者の構想を通して人物や事件、人間社会を描き出そうとする、話の筋をもった散文体の作品。

岩波書店「岩波国語辞典」

二つながらニュアンスに多少の異りがあって面白い。散文による表現に心を砕き、しかも構想のもと組み立てに腐心し、一編の作品を産もうとする努力の難さが思われる。

◆書き下ろし長編第五弾「修羅の銀行」上下二冊を世に問うた三戸岡道夫は産経新聞の依頼により文芸春秋社の近刊「頭取の首」山田智彦の書評の依頼うけた。同じ企業小説作家の組み合わせの妙、マスコミの鋭い勘によるものとして面白く、氏のためには自らの地歩を定める上でプラスする仕事になるだろう。

（お）

「まんじ」第四十五号

平成四年八月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本内
「作家群」（まんじ）編集部

☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと

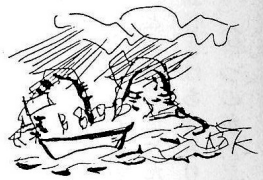
郵便振替口座　東京二―一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（三二六一）五七四三

目　次

銀線花の蔓……三戸岡道夫　1
Gone are the days……山根三枝子　22
詩「茄子紺」ほか三編……青木昭成　31
【連載】
前橋公園殺人事件（一）……佐々木一郎　35
近藤富蔵の生涯（十七）……金子正義　45
有院家の人々（七）……大和禎人　51
編集子のメモ……61

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



銀線花の蔓

三戸岡道夫

（一）

夏の夜はとっぷり暮れた。

そよとの風もなく、むし暑い。窓の外の暗闇を、蛍が一匹すいーっと飛んでいくのも、深川の場末の飲み屋にふさわしい風情といえた。

闇の上にひろがる夜空に、銀河が白い。

おしまは朱の珊瑚玉の簪の足で、くずれた髷の根をごしごしと掻きながら、

「もう一本つけておくれな」

空になった徳利を逆さに振った。

「まだ飲むのかい。もう、いい加減におしよ」

おかみのお咲は、おしまの前にころがっている徳利の数を眼で追いながら、そう答えた。

おかみといえば聞えはいいが、お咲が一人でやっている〝ささ舟〟は、店といっても屋台店に毛の生えた程度の、場末の飲み屋にすぎなかった。

「いいのよ。今夜はどうしても飲みたいんだから。もう一本、お願い」

おしまは深酔いの渕をさまよいながら、お咲の方へ両手を合わすような恰好をしてみせた。

「もう一本、一本って、この人ときたら、本当にきりがないんだから。また例の病がはじまったね」

おしまの病とは、男あさりである。

「う、ふ、ふ…」

おしまは低く、ふくみ笑いをした。

「はいよ、ご注文通り、もう一本」

お咲は熱燗の徳利を差し出すと、最初の一杯だけ、おしまの盃に酒を注いだ。あとは手酌である。

新しい熱酌をうまそうに喉に流しこむおしまの耳許へ、お咲はつと口を寄せると、

「でも、今夜はあぶれらしいね」

と、いたずらっぽくささやいた。あぶれとは、おしまが目当てにするような男が、今夜は来そうもないという意味である。

「こう暑くちゃね、男もこんな店へは寄りつくまいよ」

おしまもそう悪態をついて、とろりとした眼で店の内を見廻した。おしまが座っているのは、客の席ではなく、調理場の横の、小さな台の前である。そこからは狭い店内が一目に見渡せた。

なにせ、五十の坂を越したお咲が、女手一つでやっている店であるから、そんなに広いはずがない。小さな飯台が二つほどあるだけで、客が六、七人も入れば、もう満員であった。

しかし〝ささ舟〟は、安い飲み屋やめし屋が軒をつらねる一角という、立地条件のよさと、値段の安さ、それに店の雰囲気の気安さから、案外人気があって、夕方になると木場の人足や、職人、遊び人などで結構にぎやわうのだった。

今夜も四、五人の客が来ていて、大声で派手に飲んだり、また、しんみり飲んだり、いろいろだったが、その中におしまの情をかき立てるような男はいなかった。

(今夜はあぶれらしいね)

とお咲は言ったが、本当にそうかもしれない。だが、おしまはあっさりあきらめなかった。

(待つのだ)

と思った。夏の夜が更けるまでには、まだたっぷりと時間がある。いつ、闇の中からひょっこりと、ふるいつきたいようないい男が現われないでもない。

(辛抱強く待つ)

それが気に入った男を咥えこむ秘訣だということを、おしまの長年の経験が知っていた。

そんな思いの中で、ものうげな視線を窓の外に投げると、闇の彼方に深川の灯がちらちらと見えた。その灯の集まりの下でさんざめく夜の深川のにぎわいが、この場末まで届いてきそうだった。

「ねえ、お咲さん、あたしたちも最後まで、ああした派手な灯の下で、働いてみたかったねえ」

夏の夜の遠い灯が、おしまの感傷をさそったらしい。だが、小さいながらも一軒店を持ったお咲の方は割り切っていて、

「あんなところの、どこがいいものかね。外からは華やかで、うらやましいように見えるけど、中に入ったら汚い地獄さ。それより、あたしたちみたいに、世間態はあまりよくなかったけど、好き気ままに生きてきた方が、ずっとよかったと思うわさ」

そう言われてみると、おしまも、

(ほんと、そうだったかもしれない)

と、酔いの底で、自分の過去を納得させるのだった。

お咲とおしまは長いこと、深川周辺を根城に、茶屋女、

岡場所の切見世などで働いてきたが、最後は夜鷹の世界に落ちてそれきりだった。

(これが生きるための仕事だ)

と、気がついた時には、もうどっぷりと泥沼の中に浸っていて、二人はそれ以来の仲間というわけであった。

場末の飲み屋で寄りそうようにして生きている、五十の坂を越した二人は、ふっとした拍子に、切見世で派手に客の名前を呼んだり、手拭を風流にかぶり、薙を抱えて、荒稼ぎをしていた頃のことを、振り返ってなつかしむ。だが、結局のところ、

(好き気ままに生きてこられたのだから、あたしの人生はこれでよかったのさ)

そう思うより外に、仕方がないのだった。

その泥水稼業の中で、お咲は懸命に稼ぎ、小金をためて、〝ささ舟〟を一軒開くまでに漕ぎつけたわけであった。

「あんたはしっかり者だったから、よかったのさ。こんな店まで持ててね」

「店といっても、おんぼろだもの。店のうちには入らないよ」

「ところがあたしは駄目だった。全部男に使っちまったもの。あの男、この男と、浮かれ歩いてさ。お咲さんと違って、男なしでは生きられなかった」

酔うとおしまは、思い出の中の男の話をするのが癖になっていた。

威勢のいい時のおしまの周囲には、いつも男が集っていた。色と欲との二筋道だった。おしまは気の向くままに、次から次へと男を変えた。しかし、寄る年波には勝てず、男たちは潮の引くように離れていって、おしまは無一文になった。

もう、街角に立っても売れない。いつしかおしまは〝ささ舟〟へやって来て、お咲の仕事を手伝うようになっていた。

昔は浴びるほど飲んだ酒も、今はおだやかになっていた。しかし、〝ささ舟〟に来れば、目の前に酒がある。飲むなと言う方が、無理である。つい、売り物の酒に手がのびる。酒がいったん口に入ると、もう止めようがなかった。こうして、おしまは手伝いに来ているのか、ただ酒を飲みに来るのか、わからなくなっているのだが、お咲は昔のよしみでそれを許していた。

男がいなくなったからといって、男一筋に生きてきたおしまは、身体に泌みついた男の臭いを忘れることはできなかった。時々〝ささ舟〟へ来るおしまの狙いが、男あさりであっても、不思議はなかった。

年はとっても、若づくりをすれば、まだ男を惹きつける自信が、おしまにはあった。そんな夜は思いきりめかしこんで、〝ささ舟〟に現れる。酒を飲みながら、じっくりと狙っていれば、二回に一度、いや三回に一度ぐら

いは、おしまの気に入った男が、ひっかかってくるのだった。そんな夜は、おしまの酒量がきわだって上がるから、お咲にはすぐ判った。

今夜のおしまも、そうだった。

厚化粧の上に、昔の着物を引っぱり出して無理に若づくりにしている手の内が、お咲には判るだけに、おかしくもあり、また、あわれにも思えるのだった。

おしまは気に入った客が入ってくると、猟犬のように店の方へ出ていくが、そうでなければ調理場の横の、その席から離れなかった。

調理場と店との境の柱の竹筒に、銀線花が一輪さしてあった。おしまはその花の色を、所在なげに眺めていた。花はおしまが今日、家を出るとき、裏庭から切ってきたものだった。

おしまの住いは、〝ささ舟〟からちょいと歩いた、裏長屋の一隅にあった。裏がすぐ広い草地になっていて、草地の中へ大川の支流が銀色にくねって入りこんでいた。

その草地に生えた銀線花を、おしまは上手に垣根に這わせて、咲かせていた。手をかけはじめて、かれこれ三、四年になるので、垣根が今では銀線花で埋まり、崩れかけた垣根が、まるで銀線花の蔓で支えられているかのようであった。

菱形の花弁が五枚組合さった銀線花の花は大輪で、鮮やかに咲いた。色は純白であったが、花弁の中央に、江戸小紋のようなうす紫の斑点が散っているので、光の当る角度によって銀色に見えた。硬質な細い柄から、すっく首をもたげた花は、あたかも鋭利な南京出刃打ちの刃の集合のようだった。

花弁が大きいので、花は派手に見えるのだが、その銀色のために、時に花は淋しく見える。おしまはその違和感が気に入っていた。

銀線花の特色は、その蔓にあった。蔓は細くて、強靱で、まるで本物の鋼鉄線から葉が茂り、花が咲いているように見えた。銀線花という名前の由来も、この辺に起因しているのかもしれなかった。その蔓でもし縛られたならば、人間も本当に死んでしまうのではないかと、花の手入れをしながらおしまは思うことがあった。

おしまは今朝起きた、ちょっと奇怪な事件のことを思い出した。〝ささ舟〟へ持ってくる銀線花の花を摘み取ろうと手をのばしたとき、おしまは銀線花の蔓が奇妙な形にのびて、その先端が奇妙な形のものを捕えているのを見たのである。

それは銀線花の長い蔓が、一匹のかまきりを捕えているのだった。だが、鋼鉄の線のような硬質な細い蔓で、首や胴体を幾重にも巻かれ、締めつけられたかまきりは、すでに息絶えて死んでいた。

それは身体全体がうすみどり色に透き通った幼いかまきりで、まだ力の十分でない幼さが、蔓の力に負けたのであろう。細い足を曲りくねらせて四方にのばした形は、断末魔の苦しみのように見えて、おしまをぞっとさせた。

銀色の花弁のかげからのびた蔓と、息絶えたかまきりとの、組合せの奇怪な形相は、なにかの予兆のように思えて、おしまをふと不安にさせたのだった。

おしまはその不吉な幻影をふり払うように、柱の竹筒に咲いている銀線花の花に手を伸すと、

（今夜は、いい男が…）

と言いながら、花弁を一枚、一枚、指先で数えながら、

（来る、来ない、来る、来ない……）

と、花占いをはじめてみた。すると、

「ねえ、吉と出たわよ」

おしまは顔をほころばせて、お咲の方を向いた。

「ふーん、本当にそうだといいけどね。そんなことより、少しお店を手伝ってよ」

お咲はまともに相手にならなかった。

その時であった。

店の外の暗闇で、あわただしい足音がした。ど、ど、どっと、地響きが聞えた。足音は一人ではない。大勢である。暗闇の底をゆるがすように乱れた足音が、〝ささ舟〟の前の方で聞えたかと思うと、後の方でも聞えた。明らかに大勢の群衆が、夏の夜道を走り廻っている音であった。同時に、

「ピーッ」

鋭い笛の音が聞えてきた。

「捕物だ！」

客の一人が叫んだ。店内の人間はいっせいにおびえた顔になり、窓の外に目を向けた。

闇が窓まで迫ってきている。その闇の中に、御用提灯の灯が、狂い舞う蛍の群れのように見え、すばやい速さで闇の底へと消えていった。

店の中は、一瞬シーンと静まった。

「どこへ盗みに入ったのだろう」

さっきから派手な声をあげて飲んでいた客が、急に神妙な顔でそう言った。

「そんなこと、わかるものか」

「まさか、あの怪盗じゃあるめえな」

「うーむ、ひょっとしたら、そうかもしれねえよ。この前も、深川の材木問屋へ押し入ったっていうからな」

この頃、江戸を騒がせている怪盗がいた。仲間と徒党を組んではやらない。一人働きの盗賊であった。その手口の残虐非道さに、人々は恐れおののいていた。狙った家へは強引に押し入り、手向う者は誰彼かまわず、殺してしまうという。つい最近も、深川の山兼屋という材木商が襲われ、二百両の金が盗まれた上に、一家六人が皆殺しになるという、惨劇が起ったばかりであった。

賊は背中に銀線花の刺青があることから、〝銀線花の辰三〟と呼ばれていた。町方が必死になって追っている

のだが、その動きが神出鬼没で、容易に網にかからなかった。

「銀線花の辰三に狙われたら、おしめえだな。なにしろ皆殺しだからな」

「安心しな。奴は金持ちしか狙わねえよ。ぶっ壊れそうなこの店で飲んでるぶんには、安心だ」

「ちがいねえ」

「すっかり酔いがさめてしまったじゃないか。もう一度、飲み直しといこうぜ。おーい、熱いのを、二、三本くれ」

客の一人がそう叫ぶ。お咲は、

「なんだい、ぶっ壊れそうな店だとはよく言ってくれたねえ。もう、酒なんかないよ」

と悪態をつきながらも、徳利を飯台の上に並べた。

「さあ、熱いのが来た。どうだい、もう一ぺえ」

客は再び酒を注ぎあって、元の賑やかさに戻ったが、いったん中断された盛上りは、元へは戻らなかった。夜が更けるにつれて、客は一人去り、二人去りして、誰もいなくなり、お咲とおしまの二人きりになった。ひっそりとなった店の中で、お咲はぺたりと飯台の前に座り、

「今夜はこれで客も終りらしいね。あたしたち二人で、ゆっくり飲もうよ。あんたもここへお座りな」

おしまがお咲と向いあうと、

「ね、今夜はやっぱりあぶれだったね」

おしまの顔をのぞきこむようにして、お咲が言い、

「さあ、一杯」

二人は酒を注ぎあって、飲んだ。

夜はすっかり更けて、虫の音も聞えない静けさで、無音の闇が〝ささ舟〟に向って、四方から押し寄せて来るようであった。

夜空に銀河だけが白かった。

(二)

その時、〝ささ舟〟を取巻く濃い闇が、かすかに動く気配いがした。

闇を切り裂くようにして、一人の男が、〝ささ舟〟へ入ってきた。

あまりに遅い時間のその客に、お咲もおしまも、ふと尋常でないものを感じた。が、そこは商売である。お咲は、

「いらっしゃい」

と声をかけた。

男は、嵐に吹きとばされた鳥が、不意に部屋の中へたたきつけられて入って来たような感じだった。だまって、お咲たちとは別の飯台へ座った。

「お酒だね」

男はだまって、首をたてに振る。

お咲が立ち上り、調理場から徳利を運んで、酌をした。

男は酒を飲みはじめた。だまっていつまでも、飲みつづけていた。一本では足りずに、二本、三本と、徳利の数はふえていったが、ほとんど酔った様子を見せなかった。酒が強いのか、それとも酔えない心の屈折でも、胸の奥に抱いているからなのか。

おしまはちらりちらりと視線を送りながら、男を盗み見ていた。男がおしまの心に、動揺を与えている証拠だった。

男は三十の半ばを越えた、やくざっぽい感じだったが、正体不明のところがあった。職人のようには見えないし、商人でもない。もちろん浪人ではない、遊び人でもない。強いていえば渡世人の感じだったが、それもちょっと違うなと、おしまは思った。男の道で甲羅を経た、女の直感である。

無愛想に酒を飲むその横顔に、おしまはふと、自分の昔の男の面影を見た気がした。

(誰だったかしら)

だが、酔ったおしまの頭には、昔の男の名前など、すぐには浮かんでこなかった。

(そんなことは、どうだっていいんだ)

だまって酒を飲む、凄味のある横顔と、三十男の熟れた身体に、おしまはすでに魅せられていた。

おしまは徳利を片手に持って、ぞろりと立ち上ると、

「ねえ、一杯注がせてくださいな」

そう言って男の横へ座ると、盃へ酒を注いだ。

男の眼が一瞬鋭く光っておしまを見たが、だまって注がれた酒を飲んだ。

「あたしにも注いで」

おしまが男の肩にしなだれかかるようにすると、男は盃をおしまに渡して、酒を注いだ。おしまがその盃を、一気に呑みほすと、まるで、生き物が喉の奥をすべり落ちていくような感じがした。

「はい、ご返盃」

おしまが盃を返したとき、お咲が、

「ちょうど熱いのが入ったわよ」

調理場から徳利を持って出て来ると、

「さあ、どうぞ」

おしまの動きを見てピンと来たお咲が、熱燗をつけて、応援にかけつけたわけである。

「あたしたち二人で、この店、やっていますのさ。あたしがお咲で、この人がおしま。お婆さんの店で気に入らないでしょうが、でも、おしまさんは若いんですよ」

「あら、無理しなくてもいいのにさ。あたしだって、同じ年令のお婆さん」

お咲から徳利を受取ると、今度はおしまが酌をした。

男はいくら飲んでも、喋らなかった。お咲とおしまが喋るのを、時々、

「ふん」

とか、時には面倒くさそうに、
「ああ」
とか合槌を打つだけで、自分ではまったく喋らなかった。だが、この店の雰囲気が嫌ではないらしく、女のおしゃべりと、頻繁に往復する盃のやりとりを、結構たのしんでいるようであった。だまって飲むのが好きな性分らしい。
おしまの身体はいつしか、男の身体にぴったり寄り添っていた。男の腰のほてりが、着物を通して、おしまの膝に伝わってきた。おしまは片手を男の膝の上に置いた。ずしりと固い筋肉の感触が、おしまをしびれさせた。
男の身体からは、血の臭いがした。臭いというよりも、血の気配といった方がいいのかもしれない。男の着物にしみた血の臭いが、漂ってくるというのではなかった。男の身体に、見えない血の気配が漂っているのを、おしまは感じたのである。
おしまが男の魅力にぐんぐん引さずりこまれていったのは、あるいはその血の気配であったのかもしれなかった。おしまの身体の芯が、きりきりとうずいた。
夏の夜はもう深更をすぎていた。いつもなら、とうに店を閉めている時刻なのに、おしまのためにお咲は店を開けていてくれるのであった。
やっと男がおしまの誘いになびいてきたのは、そんな頃であった。
「もう、帰りましょうか」
おしまは男の肩を抱いて、立ち上った。
二人が外に出ると、闇が二人をねっとりと押し包んだ。夏の夜の闇は、暗く、重たく、むし暑い。
中天に銀河だけが高く、冴え冴えと白かった。
男とおしまは闇の中を、前後して歩いた。
(この男は本当にその気になっているのかしら)
おしまの胸には、まだ一抹の不安があり、それがいっそう、おしまの情念をかきたてるのだった。
うらぶれた長屋の前まで来たとき、
「あたしの家へ寄っていく？」
男はだまって、ついて来た。それが承知の答えだった。
長屋の中は、もう寝しずまっている。おしまの家は、長屋の一番端で、裏はすぐ広い草地になっていた。
部屋へ入ると、昼間の熱気がむっと立ちこめていた。すばやく障子をあけて夜気を入れると、黒々と拡る草地の彼方で、雷の鳴るのが聞えた。夏の夜空は変化が激しい。
「夕立が来るかもしれないわねえ」
男はだまって壁にもたれ、雷の鳴る方角を眺めていた。
「お酒、飲む？　冷やだけど」
「ああ」
相変らず男は言葉少めだった。おしまは勝手場から一升徳利を持ってくると、茶碗を二つ並べて、どくどくと

酒を注いだ。
二人は狭い部屋の中で、小半刻も飲んだ。
飲むにしたがって、男の目の色が、次第に発情していくのがわかった。だが、男の方から仕掛けてはこない。おしまが、
「ずいぶんむし暑いじゃないか。ちょっと身体でも拭いたらどう…」
と、勝手場から手拭を濡らして持ってきた。男の背にまわり、着物を脱がせて、背中を拭こうとすると、
「自分でやるから」
男は短かく言って自分で片肌ぬいで、二の腕から肩を拭いた。その左肩に、暗い行灯の灯に浮かんで刺青が見えたとき、おしまはそこに男の過去を覗いた気がした。
おしまの手がのびて、やにわにもう片方の袖も脱がせた。一瞬、男はびくっと身体を固くしたが、すぐおしまのするままに任せた。
男の背中にはいちめんに、銀線花の刺青が拡っていた。
(あっ…)
おしまは声にならない声をあげた。さっき〝ささ舟〟で見た御用提灯の波が、頭の中で渦巻いた。だが、そんなものは一瞬の幻想のように、すぐ消えた。
おしまは男のがっしりした背中に顔をうずめると、男の臭いを嗅いだ。三十半ばの肌は、男ざかりであった。このけもののような男とは、この先もうめぐり逢うようなことはあるまいと思うと、
(この男となら、死に滅んでもいい)
おしまは身をひるがえして、男の前へ廻ると、男のひろげた足の間へ、吸いこまれるように入っていった。
男の両手が伸びてきて、おしまの首に巻きついてきたのかと、錯覚した。
男は音をたてて、おしまの乳房を吸った。おしまの視界は一瞬にして闇になり、無限地獄に落ちていく恍惚にしびれていった。
五十の坂を越したというのに、おしまの裸身は、白く、つややかで、ふくよかに盛り上っていた。その豊かな肌に男の指先がふれると、どこに触れても吸いつくようで、
(ヒッ、ヒ、ヒーッ)
とおしまは悲鳴をあげて反応し、
(駄目よ、駄目よ)
と全身を波打たせた。男の毛深い太股が、そのしなやかな肌をこすりあげると、おしまはそのざらついた毛の感触で、悶絶の快感に泣くのだった。
最初は受け気味だった男の方も、いったん身体に火がつくと、狂暴なまでの情欲に燃えあがって、おしまの吸いつくような肌におぼれ、残酷なまでに犯しつづけて、果てしがなかった。
夏の真夜中の時間が、ゆっくりと流れていった。

男の浅黒い肌には、玉のような汗が光っている。やがて男はゆっくり起きあがると、汗を拭いた。がっくり崩れた髷の下の顔は、蒼白だった。

犯されて満足しきったおしまは、痴呆のようにころがって、身動きもしない。

それを横目に見ながら、男は茶碗に冷や酒を注ぐと、ぐいっと飲んだ。太い勁動脈が生きもののように、ぐびぐびと動く。男はいくら飲んでも、酔わなかった。眼だけが赤く充血していた。

しばらくして、おしまの身体が虫のように動くと、

「あたしにも飲ませておくれな。あんたの口からだよう」

男は酒を口にふくむと、おしまの顔に顔を重ねて酒を移した。

「甘露だねえ」

それをきっかけのようにおしまも起き上ったが、さすがに全裸の自分が気恥かしく、浴衣をまとった。男は、おしまののろのろとした動作に目をやりながら、

「おめえ、銀線花の刺青の男といえば、もうわかっているんだろう。番所へ突き出したって、かまわないんだぜ」

それはおどしで言っているというよりも、男の中にある哀しみが、自分を告白しているようなひびきだった。

「馬鹿だねえ、あたしがそんな真似をするものかね。おまえさんとなら、死んだっていいと思っているのにさあ」

「……」

だまっている男の心の中で、何かが動いたようであった。

「それにしても銀線花の刺青だなんて、珍らしいねえ。背中の刺青っていえば、金太郎とか、龍とか獅子とか、勇ましいものと決っているのにさあ」

「おれは捨て子だったんだ」

男はぽつんと言った。心の糸がどこかで切れたような言い方だった。

「捨て子？」

「そう、赤ん坊のとき、捨てられたんだ。銀線花の模様の浴衣にくるまって、寺の山門に捨てられていたんだとさ。住職が拾って育ててくれた。だが、おれには寺の生活は合わなくて、途中で逃げ出してしまったんだ」

「それで、銀線花の刺青を…」

「そうだ。だから、おれはおっかさんの顔は知らねえ。もちろん、知りたいとも思わねえ。でも、心のずっと奥の方にや、おっかさん恋しさみてえなものが、あるんだなあ。そんな気持ちが、銀線花の図柄を選ばせたのかもしれねえ」

おしまの胸に、男ざかりの男の心の悲しさが、ずんと泌み渡るように伝わってきた。おしまの中を、裏の垣根

に咲く銀線花の花が、白い蝶のようにより切った。

「おめえさんが、そのおっかさんに似ていたんだよ」

あれほど無口だった男が、急に饒舌になっていた。

「似ているといったって、おまえさん、赤ん坊のとき捨てられて、おっかさんの顔なんて知らないって、いま言ったじゃないか」

「たしかに、おれはおっかさんの顔は知らねえ。でも、おれの胸の底には、いつもおっかさんへの思いがあるんだ。知らないうちに、おっかさんの面影を追い求めている。そうしているうちに、いつしかおれなりのおっかさんの顔が、心の底に出来てしまっているんだよ。もし、おれに絵を描く力があれば、その顔をはっきり絵に描くことも出来る。その眼、その唇、髪の形まで、すべて瞼の裏に見えるのさ。その瞼のおっかさんに、おめえが似ていたというわけだ」

「ふーん、じゃあ、おっかさん恋しさに、あたしを抱いたというわけだね」

「いや、恋しさというよりも、恨みからだったかもしれねえな」

また、男は茶碗に酒を注いで飲みはじめた。夏の夜は短かいというが、酒を飲みつづける男には、今夜の夜はいつ果てるともしれないように思えた。

翌朝、しらじらと明けた朝の光に、おしまが眼をさましたとき、もう男はいなかった。

おしまの枕許に、五十両の小判の包みが置いてあった。

（これは、あたしにくれたんじゃない。瞼のおっかさんへ置いていったんだ）

そう思いながら、おしまは、男が昨夜どこかで盗んだに違いない小判の包みを、しばらく眺めていた。

おしまはものうげに起きあがると、下駄をつっかけて裏へ出た。夏の朝の空気はひやりと涼しく、草地は露に濡れていた。

その朝露を吸って、垣根に今朝も銀線花の花が、乱れ咲いていた。おしまは指先でその花弁をはじきながら、長い間もの思いにふけっていた。

（どこへ行ってしまったんだい、あたしを置いて）

おしまの中で、銀線花の花群が、男を追いかける御用提灯のように揺れて見えた。

（三）

その日の夜、〝ささ舟〟へ来たおしまの姿を見ると、お咲は、

「ゆうべの男、どうだった」

と、まっ先にそう聞いた。

「う、ふ、ふ……」

と、おしまは意味ありげに笑ったが、男の精気を吸いつくしたおしまの顔のつややかさを見れば、昨夜の首尾

のほどが判ろうというものだった。
おしまは袂から手拭にくるくると包んだものを取り出すと、
「これ、取っておいてよ」
とお咲の目の前に差し出した。
「何なのさ」
手拭を解くと、小判が十両。お咲は驚いて、
「小判じゃないのさ。どうしたの」
「ゆうべの男が置いていったのさ」
「なぜ、こんな大金を…。それに、どうして、あの男がこんな大金を持っていたのさ」
「う、ふ、ふ」
とおしまは再び笑って、
「だって、五十両もくれたんだもの、仕方がないじゃないか。いつもあんたには世話になっているからね。少しだけど、持ってきたのさ」
「なんの、少しであるものかね。でも、もらって本当にいいのかい。なんだかうす気味が悪いねえ」
そう言いながらも、お咲の顔には笑いがひろがり、そくさと小判を懐に押しこみながら、
「やっぱり小判の感じはいいもんだねえ。ぐっと気分が若返ってくるわ」
今日もおしまは、銀線花の花を持ってきて、柱の竹筒へ投げ入れた。

が、もちろん、昨夜の男の背中に銀線花の刺青のあることなど、お咲に喋りはしなかった。それは自分一人の心の秘密なのだと、おしまは思った。だが、言わなくてもお咲は、さっきの十両の小判で、昨夜の男が銀線花の辰三だと見当をつけたにちがいない。
その夜を境にして、それまで怠りがちだったおしまの〝ささ舟〟への勤めに、休みがなくなった。
「どうしたのさ、おしまさん、まるで〝ささ舟〟へ日参して来るみたいじゃないか」
お咲は理由がわかっていて、そうからかった。
毎夜おそくまで、おしまは〝ささ舟〟で辰三を待ちつづけた。あの夜の余韻が、おしまの身体の芯に、熱いしこりとなって残っている。
（もう一度逢いたい）
しかし、辰三はどこへどう消えてしまったのか、ぷっつりと行方をくらましたまま、姿を見せなかった。噂も聞えてこなかった。あの夜のことは、幻だったのだろうか。
そんなある日のことだった。
〝ささ舟〟の夜は更けて、店には誰も客はいなくなった。お咲が、
「もう今夜は看板だねえ」
と、後片付けの手を動かしながら、
「おしまさん、あの男はもう来ないよ。そんな気がするねえ」

「なぜ」
「なぜってこともないけれど…、わたしの勘ね」
そう言われてみると、おしまも、
（やはり、そうかもしれない）
という予感にかられて、自分のあきらめの悪さに愛想がつきるのだった。
窓の外の濡れ濡れとした闇の上空に、今夜も銀河が白かった。
するとその時、闇から湧き出るように、一人の客がぬーっと入ってきた。その見すぼらしい風態を見て、お咲はすかさず、
「もう看板なんだけど」
と言ったが、男の耳には入らぬようで、男はおしまの前へぺたりと座ると、
「久しぶりだったな」
おしまの顔を覗きこむようにした。
「あんた、誰？」
「おれだよ。おめえがここに居るって聞いたんで、なつかしくてやってきたのさ。音吉だよ」
「ああ、音さん」
音吉は、おしまの昔の男だった。だが、あんまり老けて、見すぼらしい恰好をしているので、そう言わたるまでおしまには、見当がつかなかったのである。

「音さん、ずいぶん変ったねえ」
「まあ久しぶりだ。一杯飲まねえか。おい、姐さん、酒をおくれ」
お咲はなんとか口実を作って、態よく追っぱらってしまおうと思ったが、なにか、おしまとわけありのようなので、仕方なく徳利を一本、どんと飯台の上に置いた。
音吉は震える手つきで自分で酒を注ぐと、二、三杯、たてつづけに飲んだ。それは、しばらく酒を切らしている飲み方だった。
「うーむ、腸に泌みるねえ。さあ、おめえも飲めよ」
音吉の差し出す盃をおしまは受けながら、
（二十年も昔の男が、今ごろ何しに来たのだろう）
なんだか厄介なことが起りそうで、おしまは気分が重かった。
音吉はおしまが岡場所に出ていたころの、なじみの客の一人だった。当時は木綿問屋の番頭とかで羽振りがよく、おしまにぞっこん入れあげていた。そして、おしまの方も音吉を憎からず思っていた。
その頃のおしまは、しなしなとした身体つきで、「吸いつきのおしま」とあだ名され、評判が高かった。その肌が、しっとりとした餅肌なので、男の全身は吸いつかれたようになり、男を狂喜させるのであった。その肌を求めて、男たちが目の色を変えて寄ってきたのである。
音吉もその中の一人で、一時、惜しみなくおしまに金

を注いだが、いつの間にか間違うになった。金の切れ目が縁の切れ目というやつで、音吉は店の金に手をつけて、追放されたとかいう噂であった。その後の音吉がどんな人生を渡ってきたかは知る由もないが、目の前の落ちぶれはてた姿を見れば、おおよその見当はつこうというものであった。音吉はまだ四十代のはずなのに、すっかり老けて、六十を越した老人のように見えた。

音吉はしきりに、おしまの胸もとや肩のあたりに、ねっとりした視線を這わせていたが、

「昔の吸いつき肌は、そのままだなあ」

そう言いながら、音吉はやにわに手をのばすと、おしまの二の腕を摑み、着物の袖をまくり上げようとした。

「なにすんだい」

おしまは激しく、その手を振り払った。すると、音吉の眼がにやついて、

「そう邪険にするなよ。昔なじみじゃないか」

音吉はまた酒を注文した。これでもう五本目になる。そんなに飲んで、金はいったい持っているのだろうか。

「なあ、おしま、ちょいと頼みがあるんだがな」

ほら来た、予想していた通りだと思い、おしまは返事をしなかった。

「金を二両ばかり、貸してほしいんだ」

「お金…、そんなもの、ないよ」

おしまはつき放すように言った。落ちぶれはてて、昔の女に金をせびりに来るなんて、いい加減にしてくれと言いたかった。

「ばくちに負けてしまってな、首が廻らねえ。それにこのところ、酒代にもこと欠いてな…」

「そんなこと、あたしの知ったこっちゃないよ。おかみさんや、子供はどうしたのさ」

「かかあには逃げられた」

当り前だと、おしまは思った。おしまの頭の中は、そんなことよりも辰三のことで一杯なのである。

(なんで辰っつあんが来ないでさ、音吉なんかがやって来るんだよ)

そんな様子を見るに見かねたお咲が、

「お客さん、もう店を閉めるんだけど…」

と助け舟を出してきた。それをしおに、おしまが立ち上ると、

「じゃ、また来るから」

音吉も仕方なしに腰を上げながら、

「今日のところは持ち合せがねえんで、勘定はこの次いっしょにしてくれ」

言い訳がましくそう言った。おしまは心の中で、

(もう来なくてもいいんだよ。あたしの待っているのは、別の人なんだから)

そうつぶやいて、知らぬ顔をしていた。

音吉は闇の中へ出ていった。その後姿がすっかり消えてしまうと、おしまは、

「ああ、嫌だね。あんな厄病神に来られてさ。酒がさめちゃった。もう一度飲み直そうよ」

おしまとお咲はまた飯台を前にして、夜の更けるのも忘れて、飲みつづけた。

それからの音吉は、三日とあけずに〝ささ舟〟へ姿を現わした。時間はいつも、看板ま近の、客の居なくなった頃を見はらかってやって来て、おしまを相手に飲んでいく。そして、金の無心はするが、勘定は払わないで帰っていくのだった。

おしまは次第に音吉が店に来ても、相手にしなくなった。ついには、音吉が来そうな予感がする夜は、おしまは早目に〝ささ舟〟を引き上げて、家へ帰ってしまった。

するとある夜、お咲が、

「この間、あんたのいない時に音さんが来てね」

と眉をひそめた。

「何かあったの」

「ちょっとかわいそうになって、少し飲ませてやったのさ。そしたら、くどくどいろんなことを喋っていたが、ずいぶん苦労したらしいね。それを聞いたら、なんだかかわいそうになってね…」

「あんた、同情なんかしちゃ駄目よ」

「そこまでお人よしじゃないよ」

「まさか、あんたに金の無心をしたんじゃないだろうね」

「そこまではさすがに、しなかった」

「五十両のこと、絶対言わないでね。あれが狙われると、大変なことになるんだから」

おしまは音吉の蛇のような目つきを思い出した。

「わかっているさ」

そんな日がつづいたある日のこと。お咲が、

「あんたの待っている男ねえ」

「えっ、辰っつあんがどうかしたの」

おしまは悪い連想にとらわれて、聞き返す声が思わず大きくなった。

「ついこの間、この先の店へひょっこり現れたっていう話だよ」

「へーっ、どこの店?」

「ほら、〝たぬき〟っていう、変な若い女を置いている店があるじゃないか。そこさ」

(どうして、ここへもう一度来てくれないのさ)

おしまの女が嘆いた。

「若い女をつれて、出ていったというよ」

「若い女ねえ」

辰三の逞ましい肉体が、若い女を抱いている痴態が、おしまの脳裏に浮かぶと、おしまの頭の中は一瞬まっ白になった。あの夜のことは、もう辰三の中に何の痕跡も

残してはいないのだろうか。

（嘘だ、嘘だ！）

と、おしまはうめき声をあげた。それは嫉妬というよりも、深い淋しさであった。

おしまは柱の銀線花を思いきりち切ると、土間へたたきつけるように捨てた。

（四）

それから十日ほどすぎた。

早くも秋の気配いが立ちはじめていた。

おしまは朝起きると、いつも裏庭へ出た。もっとも、それは裏庭などといえたしろものではなく、裏の草地といった方がいい。彼方の川っぷちまで拡った草地と、長屋との境に、申しわけ程度の竹の垣根があって、垣根の崩れを支えるようにからみついた銀線花の蔓に、花が咲き乱れていた。

毎朝、その花を見ないと、おしまは落着かないのだった。花を見ていると、それは辰三の刺青の花模様へと、変っていった。すると、辰三の背中の厚い肉の感覚が、熱く甦ってくる。

銀線花の花を二つ三つ、邪険に摘み捨てながら、おしまは草地の彼方を見た。

荒れ茂る夏の草地は修羅のようで、今にもその草をかき分けて、追手を逃れた辰三が、姿を現わすかと思えるのだった。そうかと思うと、草地を流れる川の水面に、土左衛門姿で辰三が浮かぶのではないかとも心配した。

でも、

（あの人は、そんなどじじゃない）

その時、また、おしまは銀線花の蔓が奇妙な形にのびて、その先端が奇妙な形のものを捕えているのに気がついた。それはいつかの、銀線花の蔓がかまきりを捕えた時と、同じ形だった。

だが、今朝捕えているのは、かまきりではなくて、女の髪であった。一つかみほどもある黒髪を、蔓の先端がくわえるようにして、首をもたげているのである。

髪は朝つゆに濡れて生き生きしく、なぜか歓喜に震えているように見えた。おしまは自分の髪が、寝ている間に抜かれたのかと怖れ、頭に手をやって確めたが、その形跡はなかった。蔓はどこから髪をくわえこんできたのか。それはなにかの予兆のような気がして、おしまを怖れさせた。

銀線花の辰三が捕ったという噂が流れたのは、その翌日のことであった。おしまは、

（ああ）

と思い、昨日の銀線花の蔓はそのことを、告げに来ていたのかと思った。

一ヵ月ほどすると、処刑が行われた。

極悪非道の怪盗なので、江戸市中引き廻しの上、磔（はりつけ）という極刑であった。

処刑のある日、おしまは群衆に混って、辰三の引き廻しを、言問橋まで見に行った。

その凶悪な盗賊を一目見んものと、橋も道路も人の海で、その人垣の間からおしまが背のびして見ると、馬に乗った囚人の姿が遠くに見えた。囚人は秋空の下をゆっくり近づいてきて、次第に大きく姿を見せた。

白衣を着せられ、高手小手に縛り上げられた辰三が、裸馬にまたがり、おしまの前を通りすぎた。おしまはそれを、まるで夏祭りの御輿が渡っていくようだと思った。

辰三は顔をまっすぐに上げ、群れさわぐ観衆の存在など、無視していた。おしまがそこに居ることすら、もちろん知りはしないであろう。

辰三の顔は、あの夜の顔そのままだと、おしまは思った。鬢はのび、髪は乱れていたが、その精悍な横顔は少しも衰えを見せていなかった。おしまの中に、あの夜の辰三の狂暴な生命力が、熱い瀑布のように甦った。

おしまの前で、二、三人の娘たちが、

「ねえ、ねえ、極悪な怪盗だっていうのに、いい男じゃないの」

「わたし、ああいう男に抱かれるのが念願なんだわ」

嘘とも、本気ともつかぬことを喋りあっていた。

（馬鹿だねえ、その抱かれた女がここに、こうしているんだよ。お前たちみたいなひよっ子が、抱いてもらえるものかね）

おしまはそう叫んでやりたかった。

（おまえさん、死んじゃ嫌だよ）

おしまは、はじめて心の中で泣いた。

そのまま引き廻しの後について、おしまは刑場までついて行った。

刑場にはすでに竹矢来が組まれていて、辰三は処刑柱の上に高々とゆわえられた。

空の高みに吊された辰三は、馬の背のときと同じように、まっすぐ者を立てて、はるか遠くを見つめていた。

辰三は少しも死を恐れているようには見えなかった。

辰三が空の彼方に見ているのは、何なのであろうか。それは幻の銀線花の浴衣か、それとも瞼のおふくろの顔かもしれなかった。だが、そう思うのは女のおしまの感傷で、本当は何も見てはいないのかもしれなかった。

やがて、錆び槍が二本、辰三の左右の脇腹を刺し貫いた。みるみる鮮血で、白衣がまっ赤に染っていく。

しばらく辰三は、気丈に槍の痛みに耐えていたが、やがてがっくりと首を折った。

その時、おしまはその遠い血の匂いを、身近かに嗅いだように思った。すると、おしまの中を荒々しい恍惚感が走り、両手で竹矢来にすがりつくひまもなく、地面へ崩れ落ちていった。

あの夜、おしまが〝ささ舟〟で感じた血の気配は、この処刑の血の予感だったのかと、うすれていく意識の底でおしまは思った。

辰三の死体は見せしめのために、翌日までそのまま人目に曝されていた。すると処刑柱に異変が起きた。

次の朝になると、いつの間に生えたのか、処刑柱の根元から銀線花の蔓が、一夜のうちに柱にからみついて這い上り、こぼれ落ちるほど葉を茂らせて、処刑柱はまるで銀線花の茂みの十字架になってしまっているのであった。もちろん辰三の死体もその茂みに埋まり、そこだけが人の形に盛り上っていた。

それは地から湧いたのか、はたまた辰三の死体から湧き出たものかは判らなかったが、その日見物に集った人々は、

「死体が銀線花に化けたのだ」

と、竹矢来の外から、恐怖の目ざしを奇怪な処刑柱に向けた。

その噂を耳にすると、おしまも刑場に駆けつけた。

緑したたる処刑柱には、点々と銀線花の花が咲いていたが、その銀色の花の中に一輪だけ、赤い花が辰三の胸のあたりに咲いていた。それは昨日辰三が流した血湖よりも赤く、あたかも、死にきれないで生きている辰三の心臓のように、おしまには思われた。

辰三が処刑されてからというもの、おしまはもう魂が抜けたようで、酒びたりの連日であった。

まだ陽の高いうちから〝ささ舟〟へやって来て、茶碗酒をあおった。だが、すでに〝ささ舟〟へ着いたときから酒臭いところをみると、おそらく家でも朝起きるとすぐ酒を飲んでいるのにちがいない。

〝ささ舟〟に着くと、おしまの定席になっている調理場の横に崩れるように座って、また憑かれたように酒を飲み、

(どうしてあたしを置いていって、しまったんだよう)

と、くり言をのべつづけるのだった。

やがてその〝ささ舟〟へも、おしまは次第に姿を見せなくなった。

そんなおしまは、時々、

「死にたい、死にたい」

と口走ることがあった。そんな時、おしまは裏の垣根から銀線花の長い蔓をむしり取ってきて、首にぐるぐる巻きつけると、

「辰っつあん、あたしを殺しておくれ」

そう口走りながら、息のつまるほど強く、蔓で首を締めつけるのであった。おしまは辰三の両手で首を締められている幻覚に、酔っているらしいのであった。

そうかと思うと、時に、銀線花の大きな蕾を、両手いっぱいに摘みとった。そして、居間へ戻ると、ぺたっと

両股を開いて座ったその奥の、暗い秘所へ、ぷっくりふくらんだ蕾を、いくつも、いくつも押しこんで、うっとりとしていた。それを裏の草地で遊んでいた長屋の子供たちに見られて、大騒ぎになるという一幕もあった。

そんな噂が耳に入るとお咲は心配になって、ある日、おしまの長屋を訪れた。するとおしまは茶碗酒を飲みながら、垣根の銀線花にさかんに何かを話しかけていた。

「おしまさん」

と呼んでも、返事もせず、うつろな眼をお咲の方へ向けるだけだった。おしまはまるで辰三と話しているように、銀線花と話している。すでにおしまの狂った頭には、辰三と銀線化との区別がつかないのかもしれなかった。

そんなある日、相変らず冷や酒をあおっているおしまは、ふっと裏口に人の気配いを感じた。ふり向くと、そこに音吉が立っているではないか。

「相変らず飲んでるな」

そう言いながら音吉は、ずかずかと上ってくると、おしまの茶碗で自分も飲んだ。

「この間から探していたんだぜ。こんなところに住んでいるとは知らなかった」

「あんたなんかに、もう用はないよ」

「そっちになくたって、こっちには大ありだ。五両でいいから貸してくれ」

「あら、あの時は二両と言っていたじゃないか。いつの間に五両になったのさ」

「いい鴨をくわえこんだっていうじゃないか。おれはちゃあんと知っているんだ」

「鴨だなんて、知らないね」

おしまは強気にはね返したけれども、どきりとした。誰が金のことを喋ったのだろうか。喋ったとすれば、一人しかいない。お咲から、うまく聞き出したのにちがいない。

「五十両も入ったんだから、五両ぐれえ、端した金だ。どういうことも、あるめえじゃないか」

「五十両だって…、聞いてあきれるよ。そんなお金、どこにあるんだい」

「そうしらばっくれちゃあ、仕方がねえ。ないというのなら、俺がこの手で探してやらあ」

音吉は立ち上ると、押入れの戸を開けて、蒲団や古着が積んである間へ、両手をつっこんだ。

「なにをするのさ、この人は」

おしまは音吉にむしゃぶりついた。だが、音吉は荒々しくおしまを突きとばした。おしまはもんどり打って畳にころがり、長火鉢の角にいやというほど頭をぶっつけた。

「痛てえ…、やったね、畜生!」

こうなると、おしまも負けてはいない。再び音吉にむ

しゃぶりつくと、二人は組んず、ほぐれつの大喧嘩になった。

しばらく二人はもみ合っていたが、やはり男の力には勝てない。ついにおしまは音吉に組み伏せられ、ごつごつした両手で首を締めつけられた。

「苦しい…」

おしまは音吉の手首に噛みついた。

「痛てえ！」

おしまはその隙に音吉の両手を払いのけたが、音吉の両手はまたすぐ、おしまの首をがっきと締めつけた。そして、今度はおしまがもがいても、わめいても、音吉の両手の閂（かんぬき）は外れなかった。

「む、む、む……」

ともがきながら、おしまの意識は次第に混濁していった。その朦朧とした意識の中で、おしまは首にかかった両手は辰三の両手で、辰三によって締め殺されている幻覚に陥っていった。

（うれしいよ、おまえさんに殺されるなんて）

だから息の絶えたおしまの顔には、断末魔の苦しみはなく、むしろ恍惚とした安らぎがあった。

「ちえっ、世話を焼かせやがった」

音吉はおしまの死体を足蹴にすると、もう一度、押入れの奥に手をつっこみ、古手拭にくるまった小判を探しあてた。

「ふ、ふ…、聞いた通りだ」

音吉は小判を懐ろにねじ込むと、満足そうにうなずいた。

その時音吉は、ふとつまずいたようになって、よろめいた。足首を何かに摑まれたのだ。一瞬、死んだおしまの手が伸びてきて、足首を摑んだのかと、ギョッとなって見ると、足首に銀線花の蔓が巻きついているではないか。

「なんだ、草の蔓か、びっくりするじゃあねえか」

音吉は蔓を足首から外そうとした。だが、それが外れないのだった。見ると、裏の垣根から銀線花の長い蔓が部屋の中へ、何本も魔の手のように這いのびていて、それが音吉の足首に巻きついているのであった。その蔓の茂り工合は、ただ事ではない。音吉はぞっと背中が寒くなった。

音吉が蔓を外そうと思えば思うほど、ますます蔓は足にからみつき、ち切ろうとしてもその強い蔓は、固い鋼のようで切れなかった。蔓は次第に右足だけでなく、左の足にもからみつき、さらに太股へ、腰へ、両腕へ、そして首や頭へもからみついてきた。

「助けてくれ！」

懐から小判が、音をたてて散り落ちた。しかし、今や小判どころではない。

蔓は音吉の全身に襲いかかり、まるで歌舞伎の土蜘蛛の舞台で、降りかかる無数の蜘蛛の糸でからめられたように、音吉は銀線花の蔓でがんじがらめになってしまった。

やがて蔓が音吉の首に、深く深く喰いこむと、音吉はそのまま動かなくなった。

次の日。

長屋の者によって二人の死体が発見されたとき、おしまはさながら観世音菩薩のような安らかな顔で死んでいた。それに反して音吉の顔は、恐怖のあまり引きゆがみ、まるで縛られ地蔵のように、銀線花の蔓によってぐるぐる巻きになって死んでいた。そのまわりにおびただしい小判が散らばっている。人々は、そこで一体何が起ったのか、理解することは出来なかった。

しかし、お咲だけにはすべてが判っていた。おしまは殺されたのだけれど、

（おしまにとっては、辰三への後追い心中だったのだ）

と思った。

しかし、世間へは、夜鷹のなれの果てが、銀線花の蔓で締め殺された、という奇怪な噂となって流れていった。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

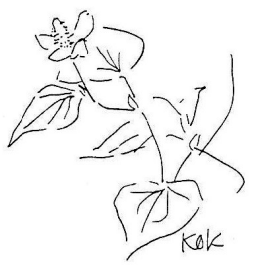
あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からぜっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

※同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。



Gone are the days

山根三枝子

十二月四日
林の中の一軒屋である病棟に佐藤歌子さんを見舞った。

キャンパス内の東の部分には雑木林が可成りそのまゝに残されていた。残したというよりはむしろ開拓されずにそのまゝ残っていたと言うほうが正しいかも知れない。その林の中を南から北に小径が通っていた。アン物語の中に出てくる道にそっくりだということでそのまゝラバーズレインと呼ばれていた。その小径を少しそれて木立の中に入った所に何処からか移築してきたと云う木造の日本家屋があった。二間位しか無かった家であったがベッドが二つ三つ備えられていて寄宿舎内に伝染しそうな病人が出た時には臨時に其所に収容されることになっていた。朝子も一度アンギーナと言って扁桃腺がひどくはれて白いものがつき高熱が出た時に二、三日其所で暮らしたことがあった。林に囲まれていてもの淋しいけれどとても静かなたたずまいであった。現在のように性犯罪や殺人鬼その他の犯罪など皆無に近いような良き時代であったのでそういった事故に対する心配など全然思いつくことすらなかった時代であった。三度三度の食事は寮から女中さんがお盆にのせ更に白い風呂敷に包んで提げて運んできてくれていた。おきのちゃんだのヨッちゃんだのが運んで来てくれた時の様子や食べ物の匂までもが何んとなく思い出される。彼女達の表情や態度にはその余分な労働に対する不平不満などみじんも表われていなかったし又朝子も彼女達に大して感謝するでもないし、又人手をわずらわさねばならぬことに対する卑下した気持なども皆無であった。朝子より少し年長か或いは同年輩ではなかったかと思われるのだが朝子は今この年令になって彼女達のことも思い出して会って見たいような気持もする。勿論、渡辺ハナさんという看護婦の世話にもなったわけだ。彼女はその病棟に夜は泊りに来てくれたような気がするがはっきり覚えていない。まさか若い娘が一人で林の中の一軒屋に寝ていたのではないと思うが。

十二月五日
放課後、堀川常夫氏(同盟通信特派員)の「広東攻略に従軍して」と題する講演があった。とても堅苦しいしゃちほこばった話ぶりで聴衆一同も堅くなって聞いていた。

十二月六日
この二十三日に上演するプレイの出演を頼まれた。放課後ミス・タムソンの家に行って下読みをした。ティーの御馳走にあずかり楽しい一時であった。

十二月七日
西脇順三郎先生が休講なので遊べるから皆喜んだ。

十二月八日
放課後、またタムソン先生宅でプレイの読み合わせ。

十二月九日
珍しいことに粕谷先生がお休み。体育のブレイスウェイト先生もお休みだったので午前中三時間のお休みがあり体も頭も休まった。
放課後、弁論大会があった。
全部、それぞれ面白く聞くことが出来た。
島原逸三先生の批評があった。

十二月十日(土)
午前中は蜂谷先生の所でヴァイオリンの練習。十一時半に高円寺駅で中島先生と待合わせて有楽座に行き新劇の築地劇団が「ハムレット」を上演するのを見た。先生が切符をおごって下さった。演劇時間は四時間位で長かったがずっと惹付けられどうしで長ったらしいなんて全然思わなかった。幽霊をどんな風に舞台に出すのか期待があったのでその演出のうまさに感心した。衣裳もよかった。この悲劇中の悲劇とも言える事件が起こる大本の原因はというと殺された父が幽霊となって夜毎城壁の回廊に姿を現わして或る夜ハムレットに語り教えたことに端を発している。若し幽霊の話したことが実はハムレットの猜疑心からの妄想であって間違いであったとしたら……なんてことも考えてみた。でもやっぱり幽霊がハムレットに告げてくれたことは本当だったんだ。芝居はそれをしっかり証明していくことにぬかりはない。最も感動した所。
一、ハムレットがオフィーリヤを愛していながらも真実を言わない所。
一、オフィーリヤが気が変になってしまい歌をうたう所と兄の悲しみと怒り。
一、王の良心の苛責を見極めるための劇中の劇を上演する場面。ダンスも良かった。
一、お墓の場面。兄が墓穴に飛び込んで妹を抱きしめる所、そこにハムレットが飛び出して来て「オフィーリヤを愛したのは自分一人だ」とどなるところ。

又骸骨を手に持ちそれに語りかける募掘り人夫のおしゃべりも印象に残った。

帰寮して入浴。夜は阿部さんの室でお菓子とお茶を御馳走になりながらナポレオンをした。そのあとダークミーティングのお喋りで二時まで起きていた。自室に戻って寝ようとした時に本箱の横の白壁にきょう見て来たような幽霊が今にもボーッと現れ出そうでこわかった。ふとんを頭からかぶってちぢこまっていたがすぐに眠ってしまった。

十二月十一日（日）

七時頃一度目を覚ますが眠くて起きられない。阿部さんがトイレに行ったり食堂に行ったりする度にドアをドンドンと強く叩いて声をかけていく。阿部さんはどうして眠くないのか不思議に思った。うつらうつらしながら色んなことを考えてエンジョイする。それは冬休み中の計画に関することだ。あちこちの知人宅を訪ねてみよう。先ずは長野の中島先生の実家、その次は金沢の奥田さんの所、そして神戸の阿部さんの家、奈良女高師の寮にいる松本さんの所……などとまるで実際に行ったように考えながらウツラウツラしてとうとう十時頃までベッドの中にいた。起床して室の掃除。昨日からひどく風が吹いていたが開き窓を押し開けてみると窓枠の下に細かい埃が積っていた。掃除を済ませてから長田新著の「ペスタロッチ」を読みはじめた。しかし十一時半頃になるとおなかがペコペコになってきて我慢が出来ない位でもじもじしはじめた。（お寝坊したので朝食が食べられなかった。）夕食後何んとなく気分がすぐれずヴァイオリンの練習をするがやはり駄目。くたびれているんだな。もう早く卒業したい。

十二月十六日（金）

十七日の傷病兵慰問会のための計画や準備の相談で浅田さんや東寮の委員長達と星野塾長宅を訪ねたり吉川幹事の家にも行って相談をしたりした。クリスマスの劇練習のためにはタムソン先生宅に行ったり十六日にある教育学の試験の準備があったりで大変忙しく一週間の日日が過ぎた。

十二月十七日（土曜日）

昨日まであんなによいお天気が続いていたのに朝、目を覚ましてみると非常に曇っていて今にも雨が落ちてきそう。朝食に食堂に降りていく頃には霧のような雨で林の梢がぼんやりかすんで見える。きょうは駄目なのかしら……。そうすると明日に延期ということになるが明日は日曜学校のクリスマス祝会で学内のＹＷＣＡのメンバーの人達が近在の児童を招待することになっている。二組もの外来者達があったのでは何かと混雑するだろうし困った雨だと思った。

きょうは陸軍病院の傷病兵達を塾に招待して慰問しようという計画があるのだ。朝食を食べながらも気になり

星野塾長に電話をかけてみた。すると東寮西寮の舎監と委員長は相談があるから塾長室にすぐ来るようにと言われた。塾長室に行ってみるとキャンパス内の教師館に住んでおられる先生方も四、五人集まっていた。とにかくお天気が相手なので誰も何んとも言えない。中止するようにするかそれともあちらから何んとか連絡があるのかどうしたものかと相談している所に高田馬場駅から電話がかゝってきた。そして傷病兵達はもう出発したという連絡がはいった。低迷していた塾長室の空気は一気に散り去り歓声が挙がった。私達は寮にとんで帰り中庭からメガホンで皆に知らせる。寄宿舎の中は急に活気づいてきた。気が付くと雨は止んで空は幾分、明るくなってきていた。

準備万端、整えて十一時頃に皆で校門の所に出て待っていた。やがてずっと向うの畑や林の間から姿を現わして来たバスは全部静かに校門から入って来て玄関脇に停車した。バスから降りて来た兵隊達はお揃いの白衣の傷病兵の服を着用していた。（今日の柔道着をもっと長くしたもので布地もかためで厚地にしたものを想像するとよい）列を作って規則正しく体操場に入って整列した彼等はそこで迎える側の寄宿生一同と向き合って挨拶を交わした。

そのあと皆バラバラに散って運動場に出た。ありがたいことに薄陽も差しはじめてきた。寮生達は兵隊達と組んでお話相手になったりして慰問の会とは言いながら結構自分達も兵隊達と遊べるチャンスをエンジョーイしていた。テニスやバレーボールが出来る程元気に快復した兵隊もいた。バドミントンの道具で羽根つきをしたり鬼ごっこや中にはお話しながら散歩する人達もいた。運動場の芝生の上は楽しそうに笑う兵隊、くつろぐ兵隊や学生達、少数の先生も交じってゴッタがえしの賑やかさであった。十二時頃になった時彼等はサッと集合し列を作って東寮と西寮の食堂に案内されて昼食をとった。寮生達は食堂がふさがったのでお握りの包みが与えられてそれぞれ自分の室で食事をとった。

一時十五分まで自由時間。そのあと校舎と梅林（今は無くなっている）に囲まれた中庭の芝生の上で兵隊と学生達は向き合ってラヂオ体操をした。彼等は愛国行進曲体操と日の丸行進曲体操というのをして見せてくれた。やっぱり兵隊さんだ。キリッとしていてとても上手だ。そのあと舞台のある体操場に彼等を案内して余興が始まった。先ず龍村さん達が仕舞をやってくれた。日本舞踊もあった。又、"Enchanted Pictures"という簡単なオペレッタのようなものも上演した。これはコーラス部の人達の合唱に合わせて次次と色色な服装をして跳びはねながら舞台に出て来て踊るものであった。春の小文学祭の折に練習して上演したもので特に此の慰問の会の為に用意したものではなかった。大へんチャーミングなも

ってあげた。つまり生徒の役をしてあげた。

教授法の一例

英語を使って英語を教えるというやり方。先ずはじめに英語でショートストーリーをゆっくり読んで聞かせる。次に難しい所をやさしい英語で説明する。そして普通の速度でもう一度読んで聞かせる。次に内容について色色な質問をして英語で答えさせるというやり方。学校では予科生が生徒がわりになり外部の学校に教育実習生として行くことはなかった。

鏡子さんは日曜学校の校長先生をやっていた。日曜毎に午前中に近在の農村の子供達を集めて礼拝をし聖書の中からのお話をしたり讃美歌を教えたりしていた。朝子は子供相手のその学校には一度も顔を出したことはなかった。鏡子さんは素直に神さまを信じていた。たしか一年生の時にダブルのお部屋で鏡子さんと半年位同室の生活をした。消燈になりベッドに入ればすぐ横になってしまう朝子であったが鏡子さんはベットに入っても横になる前に必らず少しの間ではあったが手の指を組み合わせてお祈りをする習慣があった。消燈になっても外からの外燈とか廊下の電燈からの光が入って来ていたし月夜などにはお部屋の中はとても明かるかった。それでパジャマ姿でお祈りをする彼女の姿を朝子は横になっていてよーく眺めることが出来た。そして不思議でしようがなかった。

「よく　あなた毎晩忘れずにお祈りするのね」とか、

「あなた　何んてお祈りしているの」とか、

「どうしてお祈りをするの」とか色色な質問をする朝子であった。返事としてはただ、

「あたしとっても小さい時からずうっとねる前にはお祈りしてきたわ。両親から仕付けられた習慣みたいなものよ」

というのが彼女の答であり、それは決して朝子を満足させてくれる返答ではなかった。

それでよく彼女にそんな質問を繰り返えしたし又他の友人達とも宗教について考えるお話合いなどをとりとめもなくするような具合になっていった。そして更に他のクリスチャン達の行動に何故？という思いを持ち続けその疑問は一種の苦しみにも近い思いにまでなって行った。

その日曜学校のクリスマス祝会のあった夜おそく何かがきっかけとなって鏡子さんがメソメソ泣いているのに気付いた。訳をいろいろ尋ねてみたところ、どうやらきょうの日曜学校のクリスマス会が思い通り出来ず失敗だったというようなことらしかった。

「あんまり子供達があさましくて……」

とだけ言ってあとは何も言わなかった。泣く程のどんなことがあったのだろうか。予定以外の腕白小僧共が押しかけて来て御し切れず予定通りに運ぶことが出来なかったのではないだろうか……などと思った。

十二月十九日

きょうは久保田明光講師がお休みだったのでその時間にプレイの練習が出来た。彼の青白い顔色と普通より赤い唇、そして時折の休講が気になる。効用漸減の法則を熱心に説く彼。

十二月二十日

放課後五時迄プレイの練習、夜は鏡子さんの室でお茶を飲みながら雑談で過ごす。

先日の兵隊さん達から寄宿舎のみんなにあてた沢山のはがきが来た。彼等の中にはやっとひらがなで手紙文が書けたというような人も結構いることが分かってほんとに驚いた。小学校二年生位かな。

夜の残りの時間はお手紙書き。

兵隊さんとアイリスさんと　ドンへ。

M君にはクリスマスカードと小さなカレンダー。家に久しぶりで長い手紙。

毎年のようにクリスマス行事が終り寄宿生達はそれぞれ自宅に帰省し、台湾や満州其の他の遠隔地出身の者達が十人そこそこ位居残り寮の中はひっそりして淋しくなる。夜になっても電燈のともらない窓の数が多くなる。

朝子は淋しがり屋のくせに又孤独を愛してもいた。その最後の冬休みを福岡の鏡子さんの家で過ごすよう散ざん彼女に誘われ又すゝめられもしたがやっぱり行かないで寮にとどまっていた。非常識なところのある娘ではあったが他人の家に十日間も泊めて貰うことはさすが遠慮せずにはいられない位の気づかいは持っていたようだ。

十二月二十八日の昼過ぎであった。その淋しい寮に——何んの楽しいもの、美しいもの、賑やかなもの、目をひいたり心を奪ったりするものの無いほんとに広漠としたとでも今日にしては思われる寮に　ドンがひょっくり訪ねて来た。来客を告げる女中さんの声が中庭の方から聞こえて来たので急いで階下に降りて行った。寮の個室にはたとえ父親であっても男性は入室禁止でありこのことは寮生全部に当然のこととしてしっかり守られていた。朝子は彼をパーラーに案内した。運よくと言おうか珍らしくもと言おうか暖炉には燃えさしの火種があった。火箸でつついてそばにあった木片を入れるとそれは炎を出して燃えはじめた。自室にもどってりんごとミルクココアの缶をとって来た。台所でお湯を貰いコーヒー茶腕なども運んできて彼のために林ごをむいたり温かいココアなどもサービスした。其所には極く日常的な家族同志の様なあたゝかな雰囲気はあったがそれ以上のものは朝子の側にはなかった。彼は卒業後の計画や就職のことなども話しはじめたが朝子は先のことにはあまりふれたくなかった。二人は寮の外に散歩するため出て行った。彼はその日写真を撮るつもりで来ていた。校舎の正面玄関

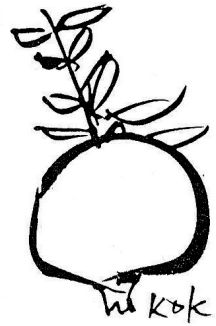
を背景にしたり寮の近辺や木立の脇などで数枚の写真をとってくれた。彼は外国製のいゝ写真機を持っていたし腕前もよかったので出来あがる写真には期待がもてた。朝子も一、二枚彼の姿を撮った。

この日のことはずっと後の日になってから考えられるのであるがやはり朝子の人生の過程の中でいくつかあるマークすべき事柄の一つであろう。あの写真は黒のつめ襟の学生服の上に白っぽいダスターコートを無雑作に着て朝子の方をジッと見つめていた。

あんなに淋しい武蔵野の冬枯れの中、冷たい風の吹き抜けていく畑地の連らなり、何一つ女らしいおしゃれもしていない、未熟で無雑作で　気の利かない女、の所に彼はわざわざ訪ねて来たのであった。恋とは哀れなものだ。そんな愛されるに価しない女であっても自分が愛したものならその女と共に居られることの幸福感を、満足感を、十二分に味わっていることをその写真の表情は控え目に又おさえるようにあらわしていた。

この写真が三ケ月そこそこ経った時に彼の遺影として飾られることをどうしてこの日に計り知ることが出来たであろうか。

（未完）



社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～

公園の入口にコンクリートの崖の
頷をなでたくなるしずけさ

心は沈黙し　振幅をなくしてしまう
ふと秋のはじめの瘤高い声が走りぬける
これはなんときつい坂路の姿勢
わたしがわたしの影についてゆき
どうしても「逆」という観念に捉えられる

みの虫の　いぶし銀で巧みな
ふるい巣の垂れている梅林がある
そこに青ぐろい銅像が
礎石に押しあげられて立っている
誰かがカメラを腹にぶらさげて　その下に
のっそりやって来そうな気がする

だが四十雀や山雀が　つぎから　つぎから
歌いながら涌きあがってきた
石垣を破ってつづく脇道の
梢の空中をほんぽうに流れてきえた
秋のふかまる明度をのこしていった

堰がよこたわる深い淵がある
つぎの町まで道路と連れだって
ずっと続いているのか　暗緑色の水面は
ボートが三隻浮かんで止まっている
こんな時も人間は「かいつぶり」のように
動いて　ひそかに波紋をひろげて
静止していることが　ちっともできないものか

今ごろは遠くでは
子鹿やつる草や石ころまでが
ワインレッドに染まっているだろう
赤石の連山のみなみがわの我が故郷へ
そろそろ土産を選びに寄ってみようか
それからさて　どこの町を通りすぎて
都会の人いきれに帰るとしようか

ひろがる

千上がった川上の方角が蒼い朝

そんな日和の正午
川原で肘を揺すりながら女が
山藨の生糸をほぐしていた
その風のように頬にさわる優しい偶然

もくもくと稲穂が空の碧にたえている午后

神社の裏山をまわる林道のわきの
両肩の真上で
さいかちの莢が裂けずに
梢でプロペラみたいに体をひねって
うぐいす色に吊りさがっていた

パスカルのパンセに
「彼は河の向こう側に住んでいる」
という言葉がある　そのあとは
「子午線が真理を決定する」というのだ

そんなふうに何時でも人は
おのれのモラルをひどく気にするものだ
強いものには強い影が
弱いものには弱い影が差すというのか

くったくなく
りんどうの蕾に見入っているときも人は
なぜか生命がふっと希薄になる
と感じなければならない

瞑想の量とこの現実の分量と
風に吹きながされて　しかし
ふしぎな芒の丘に罠がしかけてあった

この宇宙と呼ぶにふさわしい晃晴らしに
脳天を吹かれてたたずめば
手のとどくかまつかの紅い実を
もぎって嚙んでみた記憶の
無味の追憶がどこまでも　ひろがる

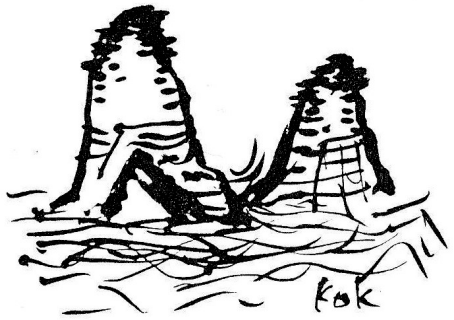
斜陽

里にきて柿の古木で
こけし人形を彫った
とがった神経をやわらげるように
陽にさらして目を凝らす
野趣の表現とやさしさの念を持続させるのだ
それでもなお不明な欲求がのこる気がして
里道のあのカーブするガードレールの
無粋な白色だけはさけて
ワニスでにんじん色に染めあげるのだ
それから
ふしぎな言葉の彩をもとめて出掛けよう
里での挨拶には片手にやかんを携えた人にも

すみれ色の煙のなかでバリトンで歌うように
おおげさにやるのだ

ときにはキャンパスへ
洞としか見えない鼻孔の人を描いて
〝人、それから獣類、そして花花
これらは皆ひとつの奇妙な波動して
やまないケイオスのなかに棲息している〟
と言うロレンスの言葉を繰り返してみるのだ
なかなか厳密な意味で点とか線
線とか点に意味はもたせられない
ふっと　光りが肌に触れずにかすめるのを
感じると誰でもののあわれを覚える

ところで
良寛和尚ほどざくろの好きな「お人」も
「めずらしい存在だ」と誰かが言っていた
かきてたべ　つみさきてたべ　わりてたべ
さてそのあとは　くちをはなさず
とか
けれど何だ垣根になっているのは烏瓜か
銀杏の葉っぱが斜陽を吸う漏斗のように
しらじらとしている寺の背戸のやぶ
林の雑木もそれぞれ独り言をいっているのか
それぞれ微光の彩を織っているのか
どれもほどほどに冷たい



前橋公園殺人事件（一）

佐々木一郎

一

「あらっ、啓くんじゃないの！」
路上で、突然、後ろから幼名を呼ばれて、群馬県警捜査課警部補上田啓太郎は、驚いて振り返った。
「まあ、やっぱり、ホホホホホ……。ほら、あたしよ。京子よ。花咲小学校、水上中学校のときの同級だった……」
「……えっ、あの、西花咲の？」
上田は、向き直って、声の主を見た。
明るい柄の夏服を涼しそうに着こなした、色の白い、三十才前後の美しい女性が笑っている。
「そうよ。その京子よ……。しばらくねえ」
確かに、こどものころの美少女京子の面影が残っている。あいかわらず、形のいい脚がミニスカートの下からすらっと伸びている。
「驚いたな！。ここで君に会うなんて……」
傍らの前橋地方裁判所のポプラ並木の青々とした葉が、じっとこの光景を見下ろしている。

ふたりは、向かいの「かみつけ会館」の地下食堂に入ると、コーヒーを注文した。
「うーむ、この日本美人が、あの京子ねえ……」
「あら、啓くんの方こそ、立派になったわ……。さっき、ことによると人違いかなと思って、ためらったんだけど、思い切って声をかけたのよ……」
「……んだけんど、ぶったまげたなや！」
照れて、啓太郎が、小声で、花咲村の年寄りたちのなまりで、おどけて見せると
「んだんだ。だけど、おらの方も、そんだがや！」
と、彼女も、やり返したので、互いに吹き出した。
「何年ぶりかなあ」
「もう、二十年近いわよ……。あたしが、花咲村を

出たのが中学二年生のときだったから……。
同窓会にも一度も出られなかったしね。出席したいと思っても、いつも忙しいときにばかりぶつかるものだから、しまいには、面倒くさくなっちゃって……」
「いや、その点、僕も同じなんだよ。せいぜい二、三回顔を出しただけかな。いつも事件とかち合っちゃうものだから……」
啓太郎は、京子から、故郷花咲村の匂いを嗅いだ。
花咲は、水上温泉郷の一番奥に位置して、正面に谷川岳の偉容を仰ぐ、二軒の宿屋きりない小さな温泉村である。しかし、厳しい冬が過ぎて春が来ると、冷たい雪解け水の小川が一斉にせせらぎの音を立て始め、梅、桃、桜がほとんど同時に咲く。そして、谷あいが色とりどりの花で埋まるのである。
「あ、啓くん。さっき、事件とか何とかいっていたわね。きみ、警察官か、新聞記者になったの？」
「うん。これでも、群馬県警察本部の刑事なんだよ」
「うっそー。その顔はどう見たって、群馬銀行の預金係長って顔だわ……」
京子は、改めて、いかにも垢抜けた半袖姿の上田を、ちょっとまぶしそうに見た。
「きついことをいうなあ。京子は……。これでも、県下に知られた鬼刑事なのに……」
「もう、お子さんもいらっしゃるんでしょ？」
「冗談じゃない。こんな貧乏刑事のところに嫁にくる物好きな女なんかいるものか。きょうだって、非番だってのに、これから、前橋署の刑事とデートなんだ」
「あらあら……。でも、啓くん。きみ、もう、三十二よ。どうしても見つからないのなら、あたしが、お嫁さんになってあげてもいいわよ。どうせ、啓くんは、あたしの初恋の人だったんだから……」
京子は、ちょっと、首をすくめて、耳たぶを染めた。
「……ところで、京子、いや、もう京子さんと呼んだ方がいいかな？」
「あ、それは止めてちょうだい。ふたりだけのときは、いままでどおりでいきましょうよ……。ねっ」
「う、うん。わかった」
「さあて、こんどは、あたしの番ね……。あたしは、こういう者でーす」
彼女は、小さな名刺を出して、上田に渡した。
まつもと　小奴（こやっこ）
「小奴？　芸者、さん？」
「そうよ。芸者よ……。それも、前橋一の売れっ妓（こ）芸者よ」
「……」
「中二のとき、あたしがいなくなったでしょう」
「うん。どこかに養女に貰われていったとか……」
「それが、ここなのよ。とうちゃんが博奕で借金をた

くさん作っちゃってね。その工面のために、あたしを芸者置屋の養女にしたの。早くいえば、売られたのよ」
「いま、だれか、スポンサーがついているのか？」
「スポンサー？　あ、旦那のこと？　いたわよ。だけど、死んじゃったの。この間……。でもね。そのおじいちゃんね。あたしを受取人にして、二億円の保険に入っていてくれたの」

二

上田警部補が前橋公園「さちの池」に来てみると、もう、前橋署の蛭田部長刑事は、「平和の女神」像の回りを調べていた。
「いやあ、部長刑事さん。どうも遅くなって……」
上田が、階級の下の蛭田に、ていねいな言葉をかけたのには理由があった。蛭田は、今から約三十年ほど前は、県警本部捜査課部長刑事だった。しかし、警部補昇進直前、殺人犯を追って負傷し、結果的には犯人逮捕を遅らせてしまった。彼は、そのことに、終生責任を感じ、その後、優れた捜査員として讃えられながらも、どんなにすすめられても、推薦も試験も受けようとはしなかった。
そしてその一徹さは、偏屈と呼ばれる反面で、刑事仲間からは、絶大な信頼をかち得ているのだった。
「いえ、わしも来たばかりですから……。それより、警部補。あんたもなかなか隅に置けませんなあ。昼日中からデートだなんて……。それも、相手が、当市随一の売れっ妓芸者の小奴とは……」
「えっ、もう、チョウさんの耳に入っているの？　いやいや、あれは、そんなんじゃないんだ。中学の同級生なんですよ。それも二十年ぶりに出会った……」
「ほら、もう嘘がばれた……。あの妓はまだ二十七才ですぜ……」
「いや、間違いなく三十二才だよ」
「ハハハハ……。今月号の『こんばんは、ぐんま』の表紙には、小奴の写真と年が出てますよ」
「……」
「ま、いいでしょう。それより、さっそく、実地検証を始めましょうや」
やおら立ち上がると、女神像の右手を指して
「ここへ、琴野田が倒れていたわけです。そして、そのあたりに、問題の足跡があった……」
この事件――正しくは、事件とは認められていないのだが――がおきたのは、三月中旬のことだった。
午前六時ごろ、前橋公園を散歩中の人たちが、「さちの池」の女神像の前で倒れている老人を発見して、一一〇番に通報した。知らせを受けて、前橋署員が駆けつけてみると、この老人は、すでに三十分ほど前に死亡していた。心筋梗塞の発作による心臓麻痺で、特に外傷は認

められなかった。所持品から、この老人は、近くの大手町で産婦人科の医院を開業している琴野田奥次郎（六十五才）と判明したが、家人および主治医の話によると、本人の心不全はかなり慢性化しており、すでに何回か発作をおこしたことがあるという。

結局、琴野田は病死と判定され、捜査はうち切りとなった。

しかし、署内で、部長刑事の蛭田彦十だけは、頑強に（捜査の必要性がある）と、署長に食い下がった。

彼は、死体から十数メートル離れた場所に残された足跡とその動きを問題にした。

これは、その人物（仮にXと呼ぶ）が前方から歩いて来て、いったん琴野田の方を見て立ち止まり、再び歩き出して東照宮横の小道を上って行ったことを示している。

この東照宮とは、幕末、前橋（厩橋）藩主松平氏が、先祖徳川家康を祭った神社のことで、明治維新後、その社領は市に寄付され、最初の前橋公園となった。この公園と、下段の「さちの池」のある前橋公園とは、この狭い坂道で結ばれていた。

（ことによると、Xは、生前の琴野田の姿を見ているのかも知れない。もし、そうだとしたら、なぜそのまま立ち去ったのか？　それとも、心臓発作を起こすような働きかけをして立ち去ったのか、これを明らかにする必要があるのではないだろうか）というのが、蛭田の主張であった。

それを援護するかのように、足型の研究では全国有数といわれている群馬県警の鑑識が、

（琴野田の倒れる一時間ほど前まで小雪が降っており、その雪の結氷の具合や足型の深さ、移動などの状況から、両者が対面することも、不可能ではない）という見解を発表したものだから、前橋署長も放っておくわけにはいかなくなった。特に、申し立て者は、定年を控えた、署長の信任厚い、名物刑事蛭田である。

続いて、もう一つの足跡も発見された。これは、東照宮横の坂道を下って、女神像の前を通り抜け、その前方にある教員住宅街へ帰宅した足跡だったが、これも、県の鑑識はほぼ同一時刻の可能性があると鑑定したので、

（ことによると、この人物は、東照宮横で、Xとすれ違った可能性がある……。もしそうならば、この人物を手繰って行けば、琴野田の前にたたずんだXにたどり着くことができるかもしれない）と考えた署長は、蛭田部長刑事を当分軽微な事件担当に回し、その余力で、非公式に、この捜査を担当させることにした。

また、県警も、捜査課長が蛭田の見解に興味を示し、これも非公式に、蛭田と親しい上田警部補を組ませることにした。ここで、蛭田と上田のコンビは、勤務時間の合間や勤務終了後、または、非番の日を使って、捜査本

部なしの捜査活動を続けることとなった。

「教員住宅街に戻った人物の方は、すぐに、矢田川小学校教諭の宇都木晃四八才とわかりました。帰宅時間も、奥さんがよく覚えていてくれて、六時前後と確認できました。ただ、肝心な本人が泥酔状態だったので、『だれかとすれ違ったような記憶はあるけれども、だれだったかはまったく思い出せない』というんですよ……」

「なるほど」

「ですから、今日は、医師たちのほかに宇都木宅にも寄りたいんですが……」

「結構ですよ……」

「どの家でも、あまり歓迎されませんよ」

「もう慣れてるから、大丈夫だよ。チョウさん！」

その危惧は、最初の琴野田医院訪問で、まず、現れた。応接室で一時間近くも待たされたあげく、新院長琴野田真一郎はすこぶる不機嫌な顔で出て来た。三十五、六才の青白い顔つきの男だった。

「もう、院長、いや、父の死因については、何の疑念もないはずだが……。あんたたちの鑑識さんとうちの主治医の見解が完全に一致しているんですよ……」

彼は、突ったまま、いきなりいった。

「ええ、そのことについては、よくわかっています。ただ、お亡くなりになる前の琴野田先生の病状について少しうかがいたいと思いまして……」

「君たちは、まさか、父の散歩にケチをつけに来たのじゃあるまいね。それだったら、とんだ見当違いですよ。心臓病の治療といえども、現代医学では、適度の運動が必要とされているんですからね」

「はあ、しかし……」

「さ、このへんで、お引き取り願えませんか？　きょうは、急患を何人も待たせてあるのだから……」

「わかりました。それでは、また、出直すこととして……。おや、これは凄いトロフィですね！」

帰りかけた蛭田部長刑事は、つと、玄関前の廊下の壁にはめ込まれている、一メートルはありそうな、金色の大トロフィと賞状額の前に立ち止まった。

「ああ、それかね……。それは、父が、千九百八十×年に、WHO系の『世界AID（非配偶者間人工授精）研究協会』から戴いたものですよ……。父の長年にわたるAIDの研究に対しての功績が讃えられましてね」

「ずいぶん、立派なものなんですなあ」

「ええ、一年おきに、五名以内の世界的なAIDの研究者に授与されるものらしいんです」

「へーえ、まさに、琴野田先生は、日本の誇る大学者だったようですなあ……」

「ええ、それはそうなんだが、肝心な日本の学会がね

え……」

「えっ、日本の学会が？」

「いまだに、この父の功績を認めようとしないんですよ……。どうも、日本の医学は、この方面では、まるで、発展途上国なみですからねえ……」

「ははあ、なるほど。そういうものですかなあ」

トロフイの話になったら、忙しいはずの真一郎が、ひとが変わったように、能弁になった。

帰途、ふたりは、念のために、顔なじみの医師数人に会って、このことを話してみたが、予想どおり、どの医師も、一笑に付した。なかには、（その会は、ＷＨＯ―世界保健機構――とはまったく関係のない、倫理的にもかなり問題を残している私的団体ですよ。したがって、あのトロフイは、何の権威もない賞なんです）と苦り切った顔でいう医師会役員もいた。

「どこの社会にも、商売敵はあるものですねえ」

「多価値時代と、いうんでしょうかなあ……」

教員住宅街は、前橋公園から歩いて十分ほどの利根川河川敷に作られた県の分譲地にあった。

宇都木晃は、教職員組合の役員を何期かやって来た男なので、警察にはよい感じをもっていなかった。

「僕は、どうも、権力の手先は好きじゃなくてね」

宇都木は、開口一番、こう切り出した。

「いや、それはどうも……。しかし、きょうは、別のお願いで伺ったものですから……」

蛭田部長刑事は、サラッとかわして、なごやかに話を進めた。このあたりは、さすが、ヴェテランである。

「琴野田先生の死因は、心臓麻痺なんでしょう？　なんで、僕に、すれ違った人のことを聞くんですか？」

「いや、われわれは、事件の記録を正確に保存する義務があるんですよ……」

「あ、そう……。あの晩は、『教育会館』で革新党の国会議員百瀬謹吾さんの歓迎会がもたれましてね」

「ほう、今を時めく副書記長の？」

「うん、その百瀬です……。実は、彼は、二十年前までは、僕なんかと一緒に県教組中央執行委員として、組合活動に汗を流していた仲間だったんです。それが、ひとたび、国会議員になると、あのとおり、いつのまにか有名人になって、僕らとは別世界の人となっちゃった……。それに比べると、僕などは、このところ二年続けて教頭試験に落ちるというぶざまな有様でね。ついつい、飲みつぶれちゃったんですよ。ハハハハ……」

宇都木は、自らを嘲けるように、笑った。

「ところで、すれ違った人は、男の感じでしたか？」

「前に警察に聞かれたときは、『全然覚えてない』って答えたんだけど、いま、思うと、男だった感じだね」

「背丈とか、服装などは？」

「身長は、僕とあまり違わなかったように思うから、百七十前後かな。服装は、どうしても思い出せない」

ふたりは、その足で、県警の鑑識や琴野田の主治医にも会って、話を聞いた。しかし、特に目新しい情報は得られなかった。

帰途、蛭田は、上田を自宅へ誘った。彼の家は、そこから四、五分の距離にある、平凡なモルタル造りの二階家だったが、芝生を敷き詰めた庭とそれに続く雑木林は驚くほど広かった。室内は、簡素ではあったが、きちんと整頓されていて、いかにも、蛭田の居宅らしかった。

「ずいぶん、広い庭ですね」

「うちは、何代か続いた百姓でしてね。それで、土地だけは広いんですよ」

「旧市内でこれだけの土地をもっておられたら、資産十数億の大金持ちですねえ」

「いや、それは土地を売った場合のことですよ。わたしは、先祖から受け継いだ土地を売る気はありません。来年、退職したら、庭の半分を畑に戻して、百姓をして余生を送るつもりです」

そこへ、廊下に足音がして、女性たちが、冷たい飲み物などを運んできた。それを見ると、蛭田は、

「あ、ご紹介しておきましょう。これが家内で、そっちが娘の幸子です。短大の英文科を卒業して、今は、市内の『蛎沢種苗』の社長秘書をやっています。

それから、この方が、いつもお噂している、上田警部補さんだ」

上田は、幸子ばかりか、夫人までがぎこちなく挨拶をするのを見て、（ははあ、どうもこれは、チョウさんの書いた見合いの筋書きに乗せられた恰好だな）と気づいて、思わず苦笑した。しかし、初々しく給仕をする幸子の印象は、けして悪いものではなかった。

それでも、さすが蛭田は気がひけたらしく、女性たちをほどよくさがらせて、早速、捜査の話に移った。

「ところで、警部補。きょう、小奴と催眠術の話をしていましたね。あれは、どういうことなんですか？」

「えっ、そんなことまで！　あ、マダムだなっ」

「かみつけ会館」の地下食堂は、県庁や県警、前橋警察署の食事や小さな会合によく使われる。したがって、上田も蛭田も長い間の顔なじみである。そういえば、コーヒーを運んで来たのは、珍しく、ウエイトレスではなく、マダム自身だった。おそらく彼女は、売れっ妓芸者の小奴に興味をもって、身近かく観察しに来たのだろう。

「小奴とは、ほんとうに、同級生なんですよ。水上温泉郷の花咲のね……。あそこは、子供の数が少ないから、複式か複々式の授業なんです。つまり、一年から三年までが一クラス、四年から六年が一クラスなんですよ。全校が集まっても五十名にも満たないから、みんな、きょうだい以上に仲がいいんです。もちろん、おとなになってからも同じです。前橋生まれで、前橋育ちのチョウ

さんにはピンとこないでしょうがね……」

「いやいや、よくわかっていますよ。警部補……。ところで、さっきの催眠術のことなんですがね……」

「ああ、あれは、小奴のところの女将の孫が、登校拒否をおこして困っているので、一昨年、赤城山麓にできた『国立深層心理研究所』に紹介してほしい、と頼まれたんです。あそこに、後輩がいるといったら……」

「そこで、催眠術を？」

「あの研究所では、誤解を避けるため、ショウなどで使われる「催眠術」という表現を使わないで、「催眠」といっていますがね……。それが何か？」

「……。いろいろ考えたんですが、宇都木晃を、催眠にかけたらどうかなと思うんですよ」

「なるほど。記憶が深層に残されていれば、何か出てくるかも知れませんね……」

「警部補。これは、さっき思いついたんですがね。あのとき、Xが、琴野田奥次郎に催眠をかけて殺した、という考え方は、どういうもんでしょうかね？」

「催眠による殺人ですか！　うーむ、奇抜な着想だが、もしそれが可能ならば、確かに、十メートル離れていても声は届くから、外傷ひとつ付けずに人を殺すことができるわけですねえ……。しかし、これは、専門家に聞いてみないと、何ともいえませんよ」

三

「国立深層心理研究所」は、赤城神社の一の鳥居を過ぎてすぐ、左折した山麓にあった。江口源助のいる「第三棟（児童生徒治療棟）」は、その中央の小高い丘の上に立つ四階建の瀟洒な建物だった。

案内を請うと、すぐ、白衣姿の江口が現れた。

「きょうは、我がままをいってすまんな」

上田は、改めて、江口に頭を下げた。

「どういたしまして。先輩。さ、どうぞ……」

彼は、すぐ、広い応接室に案内した。

「しかし、えらい立派な建物ですなあ……。治療に見える方も、さぞかし、大勢なんでしょうなあ」

蛭田は、感に堪えないように、いった。

「最近は、どんな依頼人が多いんだ？」

「はあ、来談者ですか。これをご覧になってください」

江口は、部厚な「事業案内」をふたりに配った。

「これに、大体は出ているんですが、この第三棟では、登校拒否が一番多いですね……。そのほか、家庭内暴力、喧嘩、家出、盗み、学力不振、不純異性交友、夜尿、不眠、円形禿げ、拒食、等々ですね……」

「それを、催眠術でなおすんですか？」

「えっ、いえいえ、催眠療法も少しはやりますが、主力は、非指示療法、そして、受容と呼ばれる療法です」

「ずいぶん、難しそうですなあ……」

「いや、そうでもないんですよ。これは、愛情と根気さえあれば、だれにでも習得できる技術なんです。刑事さんの中にも、犯人に進んで自白させることが、ことのほかお上手な方がいらっしゃるでしょう。あれの一種と考えてくだされればいいと思います。ま、聞き上手ですね。それを、学問的に理論づけしたものなんですよ。

さっきあげた症状の原因は、ほとんどが、家庭や学校でのいろいろな欲求不満に由来しているものですから、それを聞いてやることで、すぐ、治療効果はあがります」

「一体、どのくらいの期間で治しているんですか？」

「一週間一回、原則として、六か月間一単位期間です」

「そんな短期間で？　それで、成功率は？」

上田が呆れたような声を出した。

「円形禿げなんかは、ちゃんと、毛が生えてきますよ。学校で絶対に口をきかない子を喊黙児というんですが、ここの相談員の手にかかると、もう、二回目から、楽しそうにしゃべり出しますからね……。治療の成功率は、平均して八十パーセントでしょうかね」

さらに、江口は、この研究所で行われているロージャーズの発言分析やユングの言語連想検査、また、遊戯療法や箱庭遊び療法について説明した。

ここで、上田が、急に、話題を変えた。

「江口、お前に折り入って頼みがあるんだ……。

昨日ちょっと電話で話したように、この蛭田刑事が、催眠で、酔ったときの記憶を取り戻せるか、それから殺人が可能かどうか聞きたいのだそうだ」

「えっ、殺人ですか？」

「いや、これは、極秘の調査なんだ。詳しいことが話せなくてすまないんだが……」

「江口先生。ある男――泥酔状態だったんですが――が、だれかとすれ違ったんです。おぼろげながら、男らしい、とまではわかったんですが、だれだか思い出せない。これを催眠で思い出させることはできませんか？」

蛭田は、すがるような目つきになった。無理もない。これまで、影も形も見えなかったXを、特定できるかも知れない期待が湧いてきたのだ。

「そうですねえ。催眠状態にして、すれ違ったときの記憶を思い出させる、という方法きりないでしょうね」

「えっ、そんなことができるんですか？」

「できます。次長や上席相談員なら、小学生や幼児のころの記憶まで思い出させることができますよ。ただ、問題なのは、実際に見ていなかった場合です。記憶の痕跡が残されていませんから、何も聞き出せません」

「いや、それはそれでいいんです。そう得心できれば、また、別の方面を洗いますから……」

蛭田部長刑事は、いささか興奮気味なのか、しきりに、額の汗を拭った。

「うん、そこまではいいとして、あとは、どうやって

宇都木晃に催眠を掛けるかだな」
「そうなんです。先生。何かいい方法が……」
「ちょっと待ってください」
江口は、忙しく、行事予定表を繰っていたが、
「あ、ありました。九月五日、教育相談研修会。全県対象だけれども、前橋市の割り当て数が十名だから、これに、宇都木を参加させればいい」
「その点は、上司を通して、市教委や校長に働きかけるとして、あとは、どういう方法で、宇都木教諭に被催眠者になることを納得させるかだな……」
「先輩。それはこっちに任せてください。当日の講師は、次長ですから、ふたりで相談して決めましょう。例えば、宇都木先生の席番が十二番だったとしたら、『きょうは、無作為抽出で、二の数字の方をお願いしましょう』というふうにもっていくんです」
「ちっとも、無作為じゃないじゃないか」
「いえ、それは、そう思わせるんですよ」
「ま、まさか、集団催眠！」
「ハハハハ、まあ、その点、任せてください」
「しかし、考えてみると、恐ろしいものですなあ。催眠術というのは……。これでいくと、可愛い娘をものにするなんて、たやすいですなあ。ちょっと、催眠をかけちゃえばいいんだから……」
「ハハハハ、それがそうはいかないんですよ……。催眠暗示は、被催眠者が催眠面接を受ける気持ちにならなければ、よく、かからないのです」
「おや、そうなんですか？」
「刑事さん。優れた催眠者は、よい被催眠者でもあるんですよ……」
「つまり、純粋な心が要求される、ということだな」
「ええ、催眠術を使った犯罪『ハイデルベルヒ事件』を挙げるまでもなく、犯罪目的や興味半分で使用することは、不純なんです……。フロイトやユングという大家たちが、催眠療法を止めたのは、――神経症患者が対象でしたが――必ずしもだれでも催眠に誘導できるとは限らないことと、一時的に神経症の症状が消失しても再現する危険がある、という理由からでした。われわれが行う場合でも、これに類した危険があるんです」
「江口先生。上手な人がかけても、かからない人って、いるんですね？」
「います。小さな子や精神薄弱者、泥酔者、何かに心が惹かれている人、そのほか、催眠者の暗示に応答しない人――新人類に多いそうですが――にはかかりませんね」
「うーむ、琴野田奥次郎に催眠で発作を起こさせるのは、どうも難しいようですなあ……」
「ええ、まず不可能に近いでしょうね。ただし、琴野田が、催眠に誘導されやすい状態にあった場合は別ですがね……」

（未完）

（小説）

近藤富蔵の生涯（十七）

第二章　浮沈の近藤家三代

一、鶏声ケ窪の茶人

金子正義

（一）

堀部安兵衛の書いた看板で名高くなった、本郷三丁目十字街の歯磨粉を売った町医兼康祐元の店が「本郷も兼康までは江戸のうち」と謳われるようになったのはいつの頃からであろうか。

近藤富蔵の父重蔵が生まれた明和八年（一七七一）の頃には、既に「かねやす」といえば歯磨粉を意味し、兼康祐元の考案した歯磨粉は江戸の時好に乗って何処でも売られていた。

安兵衛が揮毫した「かねやすゆうげん」の店看板の平仮名も煤けて、下には小間物類が多く並べられ、店内には日用雑貨も豊かだった。

春日通りと本郷通り（中仙道）が交差する十字街なので、付近の顧客も多く、北に起伏する武蔵野の景勝の地には由緒ある社寺が在り、屋敷森の中には大名の下屋敷や、旗本、御家人の家屋敷、長屋も在って、其処からの使いの小者や婦女子が歯磨粉や楊子・塵紙手拭から糠袋などの日用品や、元結・紅白粉・鉄漿まで買いに来た。

近くの神社の祭礼や寺院の法要縁日には参詣の帰りに、櫛、簪、ビードロなどを求める娘達が寄っていった。

尤も元祿十五年十二月十四日吉良邸討入の堀部安兵衛武庸が書いた店看板だとの評判が、明和年代迄七十年も続いている訳では無かろう。亦、江戸の商家の看板は奉行所へ届けその検使の許可を必要とし、看板の材質、価格まで検使に報告したので、安兵衛の書いたものは討入前の江戸潜伏時でなく、越後新発田より江戸に出て浪々中の赤鞘のクズ安、中山安兵衛として、看板揮毫で潤筆料を得る正業としての看板書きであった。

江戸商家の看板は商売によっては、門口に立てる立看板から、取り付ける建看板、幟看板、旗看板、器物看板と様々で、材質も木地、金物、鉄銅に、それぞれ工夫を疑らし、内には金銀の箔押等の技を競って、安兵衛のよ

うな浪人者の口凌ぎの良き方便ともなったが、商売繁昌の為次第に豪華な看板となるので、奉行所より度々看板禁止令や制限令が出される程であった。だが利き目なくずっと後の天保十四年にも老中水野忠邦が奢侈禁止令で「市中諸商人諸職人の看板　金銀の箔を押し　蒔絵梨子地　金具めっき　金物無用にいたし　木地の看板　墨にて書き付け　金物　鉄銅の外　一切致し間敷き旨　先年相触れ候処　近来　金銀箔押　其外　彫り物等いたし品々手を込み　結構に仕立て候趣き相い聞き　不埒の事に付き　急度申し付ける可き処……」と禁止している。だが、かねやすの看板は場所柄もあって、古色蒼然として木目も墨色も真黒に煤けたまま掛けてあった。

扨て此の本郷三丁目から北へ進むと右側には加賀前田侯の上屋敷の築地垣が続く、其の頃は未だ赤門は無く、街道に面した大門は当主の江戸城登城時以外は閉されていた。街道は銀杏や椚、欅などが並木のように大きな枝葉を延ばす坂の多い道で、両側が畑となって九町程北へ行くと榎の一里塚のある本郷追分となり、岩槻街道（日光御成街道）が岐れた中仙道を更に九町程行くと人家も次第に疎らとなり、街道は緩やかな下り坂となる。此の辺りの低地を鶏声ヶ窪と言った。後の小石川原町と本郷曙町との間で現在は文京区白山五丁目辺であろうか。

広大な武蔵野の地形、地層は複雑で高低起伏が多いが、太古より鬱蒼たる原生林に覆れ、北方上越の山岳や、秩父、多摩の奥地より流れ来る利根、中川、荒川、多摩の河川に、武蔵野台地の割目の湧水が流れ寄って合流し、曲りくねって江戸湾や相模の海に注ぐまで、その川縁の台地を削って渓谷をなし、或いは崖に懸って滝となるなど、見事な景観を呈していた、特に江戸城の外郭を為す武蔵野台地の切れ目は変化の多い見事な景色だった。

街道は坂道多く特にお茶之水を経て本郷より北へ向う中仙道は起伏に富み坂あり谷ありで今でも地名に、谷中白山、駒込、指ヶ谷、富坂、大塚、窪町、団子坂、動坂向ヶ丘等々と形状の名を残している。

鶏声ヶ窪と云う地名も白山神社の高地と、駒込富士に促迫された低地で湧水多く、樹木も鬱然としていた。其の西側を北へ抜ける街道に沿って円城寺、大円寺、高村寺等の由緒ある寺院が多く、近藤家の菩堤所西善寺も窪地に下る手前に在った。窪地の北側は一橋公の下屋敷を始め、酒井雅楽頭、森川伊豆守等の下屋敷が並び、中でも広大な土井大炊頭を主とする土井一問の下屋敷が多かった。大名屋敷の門前の道より窪地にかけて旗本、御家人の住居が垣を接して建ち並んでた。

鶏声ヶ窪の名の起りは、いつの頃か土井利勝の屋敷辺で毎晩鶏が夜啼するので、不審に思った家人共が尋ね当てたのが屋敷内の繁みの地の底で、掘り出したのが金無垢の金鶏であった。爾来、鶏声ヶ窪と呼ぶようになった

と伝えられたが、近郷の農家や鶏を飼う御家人の家宅などで、寅の刻の一番鶏より刻を告げる鶏の声が頻りなので鶏声ヶ窪と呼ばれるようになったのであろう。

そうした長閑な一角に住む幕府御先手与力近藤右膳守知が待ち望んでいた第三子が孤々の声をあげた。

家督を継承する長子以外は将来他家に婿入するか、一生部屋住みで終る封建の世に、第三子の出生を待ち望んでいたとは可怪しい話であるが、先年、男子二人を生んだ前妻の悦女が病没し、迎えた後妻の美濃が始めての出産であった、既に将来家を継ぐべき長子や次男がいる上に生れ出る子を思うと、喜憂相半ばするものがあった。

（二）

近藤富蔵が書いた『近藤略系一覧』に依れば、遠祖は古事記の時代に朔上って天児屋根命より二十一世大織冠藤原鎌足を経て七代の藤原俵藤太秀郷で更に五代の後裔景頼が近藤武者と称され、其の子能成が近藤性を名乗って右近将監を冠し、次の小左衛門守善が三河国守利庄に住し、初め藤堂和泉守高虎に従い、後徳川二代将軍秀忠に従い、以下代々先手与力を勤めた。

徳川幕府に従ってより五代目の小左衛門（円次郎守行）は、八代将軍吉宗の先手与力前部伍長として、御先手朝岡勤負組を勤めていたが、家を継ぐ男子に恵まれず、宝暦六年長女悦に旗本福間題右衛門の二男右膳守知を迎えた。

悦女は延享三丙寅年生れ数えて僅か十一才、守知も亦元文四己未年生れ十七才の若さであったが、守知は幼少の頃より文武両道に励んで誇れ高く、近藤円次郎守行が、特に見込んでの入婿であった。従って翌年十二月には、五代円次郎守行跡番代被仰付、守知家督相続し、九代将軍家重の先鉾騎郎となり御先手頭跡部九郎三郎組の与力として本高百俵足高百二十八俵二斗御役扶持七人扶持であった。

右膳守知は特に砲術に長じて、将軍家治の代に入ってより幾度か砲術の練武上覧に供し其の都度正確に的に命中させて褒賞を賜う程であった。

十代将軍家治は幼時より英明の聞え高く、祖父吉宗に熱愛されていたので、吉宗の好んだ鷹狩も屢々行なったが、砲術を好み新たに鳥銃を作らせたり、年間数回吹上げの庭で騎射砲術競らべを催し近従、番士等に競演させていた。

宝暦十三年五月廿六日の騎射競べに、近藤右膳守知は撃ち込んだ鉄砲玉十発悉く命中して競演者三十三人中随一の誉に、将軍家治より御褒美銀子二枚を頂載し、其の後も一層文武両道に励み、将軍家治の覚え愛でたく将来を属望されていた。

然し禍福は糾える縄の如しとか、悦女が宝暦九年に長子伝を生み明和二年次子慶を生んで、隠居円次郎は近藤

家の子孫の繁栄と安泰を見届けて安んじたのか、明和三年春眠るが如く六十二歳で没した。其の冬より風邪を拗らせた悦女が医薬効なく明和四年七月十七日二十二歳の若さで永眠した。幼な妻乍ら二子を上げ、長女として最後迄親を見届け、克く夫に仕えての貞女は更に家人従僕を良く使いこなす主婦として家事万端に身を粉にして婦道に励んだ為であろうか、と余りも疾く逝った悦女の薄命を惜んで守知は暗然とした。然し打ち続く不幸を嘆くより母を失なった幼な子達を不憫に思った、既に九歳の伝はともかくとして二歳の慶の保育を案じて、実父の福間題右衛門に頼み良き乳母を得て漸く胸を撫で下した。

題右衛門は更に守知の身辺の不都合を慮って、茶道の友の紹介により福山藩阿部侯の藩医藤田隆の娘美濃を後添として迎えさせた。

思慮深い福間題右衛門は、凶慶日を経た後に、将来美濃女に生まれる子供と先妻の二子との事を考え、偶々福間家の縁者で姫路藩酒井侯に仕える行方与左衛門が後継無く猶子を求めていたので、故悦女の生んだ長子伝を行方家を継がさせるよう守知、伝親子を説得して伝を行方家へ入らせ、行方幸次郎と改めて継嗣となった。

次男慶は五歳となって梅丸と名付けられ、東叡山権律師継運に預けられ、その稚児小姓となり後に得度して浄明律師となった。

斯うして右膳守知は後妻美濃を得てより三年後の明和八年待望の男子を得た、美濃には初めての子であるが、守知には第三子であった。大きな丸々とした赤ん坊で産湯を使う大盥の縁から両足が食み出る程であった。産後の肥立ち良く十日もすると溢れ出る母の乳戻に満ち足りて微笑み、一ヶ月程でもう何にか言う如く双手を振って声をあげた。夫婦はその度ごとに顔を寄せ合って喜び合い、愛し子の吉祥を念じて幼名も吉蔵（後の重蔵守重）と呼んで成長を怡しみにしていた。

然し悦女の生んだ二子を外に出して純たる血統は断たれ、近藤家の名跡は形ばかりとなったと難ずる者もいた。守知も内心忸怩たるものがあったが、それを天が罰するように突然の災害に巻き込まれるのであった。

明和九年二月廿九日、目黒行人坂よりの大火で江戸城内にも火煙の及ぶ大事となり、蓮池御門当番であった近藤右膳守知は、防火作業中築地より転落し右脚を骨折する大怪我を負い、その療養が長引いて予後も芳しからず、文武の修練にも支障をきたし、前途に翳りが生じた。

江戸は火事と喧嘩と犬の糞と俗に伝えられ、火事は大小毎年の如く起きたが、此の目黒行人坂の大火は、明暦三年の振袖の大火以来百十四年来の大火災であった。

二月廿九日未の刻過ぎ目黒行人坂の大圓寺で失火し折から季節外れの南風強く、忽ち火は各所に飛び散り白金麻布西久保、桜田へと延び多くの大名旗本屋敷を類焼して江戸城曲輪辺に及び、遂に桜田より城郭内に飛火した。

其の間火の手は本町、石町、神田、下谷、浅草、千住の村里までに焼け広がり、酉の刻（午後六時頃）に本郷菊坂に別の火の手があがって駒込、千駄木、谷中の里辺にまで燃え移り東叡山に焼け登って、心観院殿霊牌所はじめ仁王門、山王権現社より、谷中本村に出て夜明け頃に漸く鎮火した。江戸市中焼けること幅一里、長さ四、五里に及び焼死者四百余に及ぶ大火災であった。

近藤右膳守知の鶏声ヶ窪の家宅は類焼は免かれたが、夫守知の勤番不在中の家を守る美濃は、東叡山内より谷中を巡る劫火に怖れ戦く従僕下女等を庭に避難させ、乳呑児の吉蔵を胸に抱きしめて真赤に焼け映える江戸の夜空を見上げ乍ら夫の無事を念じていた。

幕府は大火の災害を被った東叡山を始め、町方の類焼家屋再建の手配などを一通済ました後に、類焼した幕府宿老、大名、旗本、御家人への手当や、消防に当った諸大名や有司への褒賞の後、江戸城中火消役の親藩大名家人、旗本、御家人へ消火褒詞となった。

近藤右膳守知は、先手頭井出助次郎正興組一同と共に褒詞を受け、更に西の丸持番一同としても褒詞を授けられ、特に「消火中の怪我にも拘らずの消防天晴れ」との将軍の言葉を側近を通して伝えられた。

然し守知は脚の骨折で登城できず、いずれも鶏声ヶ窪の病床にあって組頭より伝えられたものであり、武門の誉とは云え、弓矢鉄砲、刀剣執っての武勇の誉とは趣が異なるものと感動も薄く、病褥長くして折れ脚は癒着しても蹇て、先鉾騎郎の番役果し難く朧ては目付支配の無役の身となるのであろうかと滅入るのであった。

然し守知は三河以来の武骨一辺の士ではなく、花鳥風月を愛で物の哀れを知る好学の士でもあった、思わぬ災害に身の自由を奪われて不遇を託つより、枕頭に漢籍を積んで読み耽り、時には床柱に凭って割竹の副木で結わえた脚を伸ばし、太股の上に文机を置き、好きな墨絵で寒山拾得を描いたり『翠中軒日乗』に日々の思いを書いていれば悩みも消えよう、寧ろ天下泰平封建の世である生涯跛行となり目付支配の無役となっても、吉蔵の成長を待って家督を譲り、行雲流水に身を任せて自由気儘の隠居に過ごすも宜かろうと思い直すのであった。

元亀天正の戦国の世は遠く、江戸幕府創業より既に百五十年、戦い無き世には生涯分に従って家を守り主君に仕えるを武士の本分とし、幼少より文武に励んで修身斉家治国平天下の臣たるを理想とした。従って諸藩の臣、旗本等が武芸よりも文芸、学術に長ずる者も多かった。

右膳守知も亦文武両道に優れ特に砲術に長じていたが、文に於ても儒学ばかりでなく和歌俳句は元より、絵画も巧みであり、茶道も師範を許され、漢詩文に於ては其の道の専門儒者を凌ぐ程だった。

桜の名所王子飛鳥山に難解を以って知られる「飛鳥山碑」がある。此れは八代将軍吉宗が元文二年（一七三七）

大岡忠相に命じて山林を拓いて桜を植えさせ、後江戸市民に解放して遊覧の地にした。其の由来を石碑に彫ったものである。其の撰及び書を成したのが幕府儒官鳴鳳道筑（成島道筑）であった。

彼は江戸城吹上にあった紀州産の緑泥片岩に撰文を彫ったが、石の疵に合わせた書体や古字・異体字多く難解であった。後道筑の子成島忠八郎和鼎が父の撰文が読めず、右膳守知に解読を請い右膳守知はこれに応えて「飛鳥山碑解」を草して与えた。此れに依って成島和鼎は将軍家治飛鳥山お成りの際、祖父吉宗が造らせた山碑の撰文を見て成島和鼎に種々下問されたとき、辛うじて答え儒家の面目を保ち得たという。

斯うした守知の博学は鶏声ヶ窪の武家屋敷ばかりでなく、他の大名家臣の間にも知れているので、守知の安静療養中にも諸家の子弟が教えを請いに来た。幸い半年程で少々跛行しても番役を果せるようになると、非番の日には漢籍の手解きを受ける弟子達で賑った。

吉蔵はヨチヨチ歩きの頃から守知の膝下に寄って、子弟に漢籍を訓話注釈する守知を瞶め、素読の声を繰返し聞いているので、門前の小僧習わぬ経を読むで三歳にして孝経大学を諳じたと神童振りが伝えられる程だった。

神童と謂われる程の知脳に加えて生まれつきの大きな骨格の吉蔵は、腕白盛りともなると百坪程の屋敷庭内を竹刀を振って走り回り、守知の丹精こめて造った茶庭の露地に踏み込み跼蹲の水を撒き散らし、築山の松に登って枝を揺り動かす有様だった。見嫌ねて家僕が制止すると一層勇んで生垣を潜り抜けて隣家に入り込む始末だった。其の裡歳を重ねる頃には、鶏声ヶ窪の旗本、御家人の腕白仲間に混って近くの御鷹匠屋敷に忍び込んで御用鷹を騒がせたり、龍雲院の築山富士に登って辺りを展望し、時には駒込名主屋敷高木嘉平治邸を駆け抜けて富士神社迄遠出し、石段の登り競べに興じて刻を忘すれた。

だが、重蔵は唯遊び回る悪童でなく、それ以上に幼児よりの好奇心益々強く知識欲も一層旺盛となって、父守知が子弟に書経を教える非番の日には終日講義する父の傍にあって飽きなかった。

後年重蔵が蝦夷地や千島択捉島の探検開拓や植林造園に打ち込むようになる心身の素地は、斯うした鶏声ヶ窪周辺の野山を駆け巡り、父の膝下で自然に学んだ学問に依って培われたのであろう。

だが守知は、重蔵の資質を一層伸ばすには親の身辺にあって自然に四書五経を諳じても役に立たず、師に就いて正しく学び直す必要があるとした、だが親の欲目とは云え、重蔵が生まれつき尋常ならざる性格なので、武芸は勿論、学術文芸に於ては並大抵の者では重蔵の天分を充分に啓発し得ないであろうと思案にくれていた。

続く

有院家の人々（七）

大和禎人

第十三章　移民のツァー（皇帝）

官約移民の一方に絶えず密航者が少なからずあり、現地総領事からその該当多き県への内訓要請のあった事実は、当時の世情を抜きにしては考えられない。渡航条約の締結されたこの往時の日本は大変な不景気の嵐のさ中にあり、とくに農民の疲弊は極度で、餓死寸前のもの多く、一家心中の続出するという暗い世情に見舞われていた背景を見逃す訳には行かないであろう。

そうした折から、三年契約で、旅費、食費、燃料、家賃、医療費までも無料、一ヶ月の賃銀を十五ドルとする条件を前にして、布哇移民は死中の活路として大きな反響を呼んだのであった。応募は押すな押すなの盛況を見たのである。反面、その選に洩れたものが潜行を企てることがあったとしても、それは必死の挙なのであった。

当時の農民の働きは賃銀に見積もれば月約三円という時代なのだ。為替の交換率では一円が〇・五セントであったから、十五ドルは垂涎に値する魅力を呼んだのだ。

すでに触れたとおり、第一回船を出した明治十八年から明治二十七年までの九年間に約三万人の男女、子供の移民がハワイへ渡ったのである。そしてこの官約の移民を皮切りとして、その後に続いた私約移民、さらには自由移民へと推移するのだが、ハワイのみならず米国本土への進出も目立つようになるのであった。

日布官約移民はほどよく選択され、また組織化もされていて、移民史上もその例を見ないといわれるほど好評であった。この組織をリードしたものこそわがロバート・アーウィンに外ならないのであった。官約移民は「アーウィン・システム」と呼ばれ、かれはそのツァーになぞらえられた。

ところで、ロバートは自ら手がけたこの移民の第一回の渡航に際し、妻イキと生後一年二ヶ月の長女ベラを伴いシティ・オブ・トウキョウ号でハワイへ向かっている事実を見落とすわけにはいかない。そしてこのことはいかにかれが当時この事業に全力を傾けていたかを物語るものでもあった。

ツァーとは帝政ロシアの皇帝の称号である。なぜにことさらロバートに対しニックネームしたものか根拠は明らかでない。布哇にはエンペラーが存在していたからであったろうか。あるいはまた、航海中のかれの一挙手一投足が明かに貴族的であったことに由来し、いくぶんか揶揄を込めたものであったかも知れない。

シティ・オブ・トウキョウ号は商船とはいえ大きな船ではない。かれは家族とともに船長室の隣にある応接室をあてがわれ起居していた。船室に等級なぞない貨客船だった。移民はすべて薄暗い船底詰め込まれていた。

「あの人たち、あまりにかわいそう、そして不安に怯えているようです」

「なにも不安ないのです、ノー、アニージネス、この航海はニホンの国の保証するものです。オヤフネに乗っているのです」

「オヤフネ!、よくそんな言葉を、でも、ひどすぎます、もっと待遇を良くできないのですか」

「タイグー?、オー、トリートメントのことを、あなたは心配だというのですね」

「そうです、もっと人間味のあるあつかいはできないのですか」

イキにとって移民の人々は皮膚も毛色も同じ、それこそ同胞であった。

「あなたは少しも心配をしなくてもよろしい、あの人たちの保護が十分でないとすれば、改善をさせます、そのためにこの航海に同乗しているのです。サブスタンス（実体）を知るためなのです」

「それはわかっています、あなたのお仕事を理解するために、ベラを連れてこうしてお供しているではありませんか」

乳飲み子を抱えるイキのこの航海に同行する決断は容易なものではなかったはずだ。

「あなたはベラのことを見ていてくれればいい」

長崎時代に初子を失ってから、十二年ぶりに授かった嬰児ベラをロバートは宝物のように思っているのだ。

「この子の安らかな眠りを見たまえ、まるでエンゼルのようだ、この航海を見守っていてくれる」

イキとしてもそれはそのとおりに思える。この時期のベラは両親の愛を一身にうけて、ひたすら健やかな眠りをむさぼり、船旅の明け暮れをひとり無心であった。

イキは出帆いらい船酔い気味で、ロバートを心配させていた。遠く外洋に出る船旅はもちろん初めてであった

し、小さな船の動揺は凪ぎの航海ばかりとは限らないから避けられない。洋上の風浪次第で大海原に浮かぶ木の葉のように弄ばれた。

「イキさん、どう、この旅行、無理でしたか、それを心配しています」

「いいえ、お国のためになることでしたら、あなたについて行くのが、わたしの（おつとめ）です」

イキは（おつとめ）という言葉を使った。

「わたしのことは大丈夫です、それよりもあの移民の方たちの中にはおなかの大きな人がいます、それに赤子を抱えた人もいます、なんとか見てあげたいのです」

「オー、それは、わたしも気づかぬことではありません、だがどうしょうもない、アチラへ着くまでの辛抱です、我慢です」

ロバートは「律儀者の子沢山」という日本の言葉を知らなかったが、同行して見て日本人移民の貧しさ、貧しさにかかわらず子沢山の実際に気づいていた。

（考えようによっては、これがこの人たちを移民に向かわせる逞しい生活力の根源かも知れない）

と思った。

「ベラに飲ませるだけでは、わたしの乳は余りますから、あの子にあげたい、お話した親子ですよ、いつもあの子はひもじいらしく泣いています、ねぇ、そうさせてください」

突然、イキの言いだしたことにロバートは道理としては理解出来たが、なぜか躊躇を示した。他人の嬰児にわが妻の乳房を含ませる、その行為にかれは嫌悪を感じたからだ。親子水入らずの、長崎の新婚時代のような生活がこの船旅にはあった。大勢の使用人にかしずかれた生活をしばらく離れ、誰に気兼ねのない睦じさが船の上の一室に守られてきた。これは移民護送を自ら買って出た事情とは切り離すべきプライベートなのであった。

「……」

「いけないとおっしゃるのですか」

明らかにロバートの顔をよぎった否定的な感情をイキは感じ取っていた。無言のまま後ろ手をして歩き回り船室の天井を仰ぐ動作はかれの不機嫌な時のいつもの仕草である。

「乳を飲ませるというなら、ここへ連れてきてもらいそうしてやりなさい」

「なぜですか、あのものたちのところへわたしは下りて行って授乳させます」

「いけない、それは許しません」

「なぜですか、なぜいけないとおっしゃるのですか」

「いけません、施しは大勢の皆がいるところでするものではありません」

ロバートは窮余、とっさにそんな理由を思いついた。

「いいえ、わたしは日本人なのです、あなたの許しが

なくても、あの人たちのところへ下りて行きます」

イキは言ってしまってから、言ってはならないことを口にしたことに気づいた。夫に対して自分は日本人であると口走ることはこの場合夫婦間の対立を意味しかねないのである。

「そう、あなたは日本人でしたね、わたしはアメリカ人です、困りました」

はたしてロバートの顔にそれまで見たことのない苦悩が浮かんだ。

「勝手になさい、だが、可愛いベラには将来とも内緒にすることです」

なお、そこまでロバートがこだわる可笑しさに気づくよりなにより、一心なイキの申し出だった。そして、船酔いをおして授乳を敢行したのであった。

イキの経験した船酔いは酷かったので、この時のハワイ渡航を最後にして、その後かの女はいかなる船旅もしようとせず、ついに夫の母国へも行くことがなかった。

この第一回の移民渡航は明治十八年一月二十七日のことだ。男子七百三人、妻百七十二人、小児六十八人合計して九百四十三人である。とくに妻の数、小児の数に注目したい。募集にあたって当時としては、とくに農村の海外思想に乏しい事情を考え、応募者の数を懸念したので、厳密に選考を行わなかったきらいから、受け入れ先耕地での評判は芳しくなかった。このため同年六月第二回の山城丸による渡航からは対象を純農に限ることとして、その選択に注意を払い好評を得るようになった。ことに山口、広島両県人がもっとも優良とされた。日布間に条約の締結されたのはこの試行のあげくであった。移民保護のため布哇政府は日本人の移民監督官および医師若干名を採用し各地に配置した。監督官長に中山譲治、医長には日赤病院副院長岩井禎三があてられた。東京における事務取扱主宰ははじめ大中直三、やがて武智直道に変わった。直道はロバートとイキの婚姻を成立させるため武智に迎えられたあの養女キクの夫である。

ロバートの脳裏に焼き付いて消えない一つの光景がある。それは明治十四年三月八日のことである。かれはまだ将来に移民事業にいまほど熱意をもつことになろうとは思ってもいなかった時のことだ。

（この日寒威凛冽、午後雪降る）

とある空の下であった。

八日、午前九時三十分第二公式鹵簿を整へ正装して御出門、日比谷陸軍操練所に幸す、天幕内便殿に入御せらるるや、布哇国皇帝亦来着せらる、乃ち轡を並べて近衛・東京鎮台及び教導団諸兵の観兵式を覧たまふ、陸軍中将三好重臣之れを指揮す、侍従長米田虎雄・侍従二人騎馬

にて扈従し、親王及び大臣・参議・各省長官竝びに各国公使・皇帝随員等陪覧す、畢りて便殿に復御、皇帝辞去の後十一時四十分還幸あらせらる。

これは明治天皇側から見た記録であるが、ロバート・アルウィンにとっても鮮明の記憶に残る一日であった。かれは駐日大使としてもちろん陪覧を許されていたのである。

まだ明治も十年代のこの時期、日本という国がここまで近代君主国家として体裁格式を整え、外国からの賓客に対し、それも太平洋上に浮かぶ微小の君主国の皇帝を遇し、かくまで手厚く厳粛な扱いようにロバートは驚いたのだった。布哇皇帝カラカウァの訪日は当初（微服間行）を旨とし、アリー・カラカウァの匿名を用い、日本訪問の後には支那、新嘉坡、印度の東洋諸国巡遊し、欧州に向かわれるものと伝えられていた。しかし、その随員として侍従長ジャッドの外に移住民事務長官アームストロングを従えており、真意としてわが日本国人を布哇に移住せしめる条約締結を希望せらるる由について、同国外務卿より在横浜米国総領事あての書簡があり、いちはやく外務卿井上馨は鋭敏な触手をもってこれを知ったのである。逃すべからざる好機として、直ちに国賓の礼を建言し、すべての事が運ばれたのである。

皇帝滞京中の宿舎に延遼館をあて、嘉彰親王（伏見宮家八男、後の小松宮彰仁）を御用掛とし、大蔵省三等出仕蜂須賀茂韶・従二位伊達宗城等を接伴掛に命じた。

さて、三月四日横浜港に着かれた折は接伴掛、海軍将官、神奈川県令等が直ちに乗船に至り、奉迎し、宮内少輔土方久元、東海鎮守府司令長官中牟田倉之助等が鎮守府埠頭に奉迎、同夜は伊勢山の御用邸に一泊、嘉彰親王は面謁して歓迎の聖旨を伝えている。

五日、御料汽車にて上京、嘉彰親王ならびに接伴掛これに同乗して午後零時二十分新橋停車場に到着し、大臣はじめ、参議、宮内卿、式部頭、警視総監、東京府知事の出迎えをうけ、指し廻しの馬車で参内した。儀仗として近衛騎兵二小隊供奉し、東京鎮台兵沿道に堵列し、御車寄では親王、大臣以下奉迎、天皇は正装され八景の間に午後一時三十分に迎えられ、歓迎の辞を述べられ、これに対する答辞があり、次いで御座所に誘われ、皇后またこれを迎えられ、少時歓談の後、皇帝の辞去に際しては御座所敷居際まで送り給う。次いで午後三時には答礼とて延遼館を訪わせられ、暫時の歓談あり、四時三十分に還幸されている。さて、布哇皇帝の滞留は三日の予定にて辞すべきところを外務卿井上馨が外国皇帝初めての訪問を記念せんと観兵式挙行を叡慮に訴え、出発期日の遷延を取りつけたのである。

皇帝乃ち出発の期日を稽延せらる、皇帝叡慮の厚きを感謝し、他日、日本、布哇両国間に行

わるる条約を改正し、治外法権に関する条項を悉く削除せんとし、随行のアームストロングをして其の意を我が外務卿に致さしめらる。

井上外交の成果と見るべき内容が伺える記事である。

そして、「寒風凛冽」の中に観兵式が行なわれたのであった。ロバートはもちろん陪覧の列にあり、歯の根も合わぬ寒さに耐えながら、日本の国の威武を目のあたりにしたのである。この場合、ひとり布哇皇帝ならびに随員に限らず、各国公使の招かれていたことであるから、この際はここを先途として、多分に示威を目的とするところがあったと思ってよいであろう。

布哇皇帝の滞日はこの後、さらに一週間の日延べに及ぶのだから、当初三日とされていた予定とは大幅に違ったものになっている。

十一日になると、皇帝親しく密意を天皇に告げんことと望まれ、外務卿井上馨この旨言上、八景の間において侍臣を遠ざけ、馨を通訳として午後二時より一時間二十分会談が行なわれた。その内容は日本を盟主とする東洋諸国連盟を画すべしなど、その他の提言などに及んだ。

抑々東洋諸国連盟の事たるや、清国が日本の盟主たるを肯ぜざるは明かなるのみならず、遥羅印度の如きは相距たること遠く、且言語、風俗全く同じからざるを以て望み難し、又海底電線架設の事は、既に米国人の請う所ありて、之れに補助を約せる事あり、又外国皇室と婚嫁を通ずる事も、累を将来に及ぼすの虞なきにあらず、外務卿は、三事皆言ふべくして行はれ難しとせり。

要約して会談の内容がほぼ察せられる。この時より六十一年も後の太平洋戦争に標榜された大東亜共栄圏構想に似た考え方を皇帝から話題にされている。だが、当時の日本としては清国の脅威を考慮せねばならない国威のほどを察せられる。海底電線のことも今日の通信手段の発達からいえば未開の挿話に等しいとしても、ここには米国の利権が絡み、すでに布哇の背後にはこの強大国が控え、やがてはその膝下に組み敷かれる運命さえ予見される。皇帝来日の内報がいちはやく在横浜米国総領事にもたらされていた事実に照らしても明らかである。わが米国人ロバート・ウォーカー・アルウィンが布哇の代理公使の親任をうけている事実もまた奇異を免れない。

ところで、ここに「婚嫁を通ずる事」とあるのは余事ながら、当時もっぱら世上の噂に上ったことだが、布哇皇帝の皇姪カピオラニーを定麿王に配したいというものであった。延遼館の宴席に海軍兵学校在学中の同王を見て鍾愛せられたことによる、とされている。無根のことではないらしい。これを流説とする見方はむしろ覆される。定麿王は伏見宮家の十七男、後東伏見宮家を創立し、依仁親王となった人である。後年朝鮮の李王家とのわが

皇族婚姻の例もあり、「if の歴史」を想定すればいっそう数奇を重ねることになったであろう。ロバートの網膜に焼き付けられた明治十四年三月八日の寒風凛冽の中に陪観した観兵式、そしてその日の日本兵の歩武への感動はかれがその後に生きた時代、また、ついにはその国の土に骨を埋めることになった一外国人の栄光の生涯のなにものかを象徴するように思える。

第十四章　洋装したイキ・アルウィン

ロバートが精魂を傾けた官約移民も明治二十六年（一八九三）年の一月、布哇君主制を崩壊させる革命が起こり先行きに不安の陰りが射した。

米国政府はこの時、艦隊を布哇へ派遣するのだが、その司令長官に任命されたのはロバートの異母兄海軍少将ジョン・アルウィンであった。奇しきことと言わねばなるまい。さらに、旗艦の名もまたかれらの故郷に同じフィラデルフィア号であったことは偶然ながら奇縁であろう。ロバートはこの兄の旗艦に起居を共にし、外交事務の処理に当った。

この際、日本政府としては布哇居留の日本人保護の目的をもって、東郷平八郎を艦長とする軍艦浪速を派遣している。

米国の時の大統領マッキンレーは帝国主義政策をもって露わに布哇革命に干渉し、同国は明治二十七年七月にいったん共和国の成立を宣言する。アーウィンは弁理公使としてあらためて任命され、大統領の信任状を同年九月十一日に奉呈している。折からの日本は先立つ八月一日清国を相手とする宣戦布告をし、戦端をひらくいきさつを見ていた。

布哇共和国の主権は明治三十一年八月十二日をもって正式に亜米利加合衆国に移り、布哇国政府の外交権能は消滅した。

布哇共和国大統領サンフォード・ビー・ドール
謹テ威徳隆盛ナル良友
日本国皇帝睦仁陛下ニ白ス
我共和国設立ニ目的茲ニ終結シ亜米利加合衆国ニ移リ之ト合併セントスルニ因リ余ハ数年ノ間弁理公使ノ職ヲ帯ヒ陛下ノ宮城ニ邇ク駐箚セルロバート・ウォルカー・アーウィン氏ニ命スルニ別ヲ陛下ニ告ケンコトヲ以ツテシ而シテ斯ク貴我両国間ニ存在セル国交ヲ終了スルニ方リ親厚友愛ナル従来ノ国際関係ニ対スル余カ喜悦ノ意ヲ披陳シ且完全ナル和協ト好誼トヲ以テ該国交ヲ終結スルノ希望ヲ言明スヘキ旨ヲ命シタリ
余ハ茲ニ恪テ貴国ノ昌栄ト陛下ノ福祉ヲ切望ス

この親書の奉呈は天皇鳳凰の間に出御、これを（延見ししたまふ）とあり、外務大臣伯爵大隈重信が侍立している。革命後四年、この親書を呈するに至った布哇の政情を察する時、共和国大統領はすでに暫定の傀儡政権の代表者に過ぎぬとしても、儀礼の親書は情理を尽くし、その紙背に万斛の涙を滲ませる内容である。

天皇之れを領し、アーウィンに勅語を賜ひ、アーウィンが多年忠実勤勉、能く両国の友誼を増進したるの功績を賞したまふ。

ロバート・ウォルカー・アーウィンはここに、駐日大使の任を解かれ、精魂を傾けてきた官約移民という大事業にも終止符がうたれた。時に五十四歳である。

月を越えて、十月三日、

元布哇国弁理公使ロベルト・ウォルカー・アーウィン任終り、夫妻参内し、皇后に謁して御暇を奏す。

とある。

このたびはあらためて皇后さまに御暇を頂く趣旨に重きをおく参内だから、かさねがさね念のいったことであった。そして、イキは洋装し、夫に伴なわれ参内を果たしたのだった。

この時のような伝える手紙が残されている。それは父ロバートのもので、愛娘ベラに左のように書き送っているのだ。

……ママと一緒に御所（皇居）にあがり、天皇、皇后にご挨拶申し上げた。皇后様は、ママに私たちの子どものことを色々とおたづねになった。皇后様は実に優美であられた。そしてこの時ママは洋装して参内したが、とてもよく似合って綺麗に見えたので、私はもっとたびたびママに洋装を着せればよかったと思った。美しいガラスでできた馬車の置物をお土産に頂いた。ママは皇后様からおせんすを頂戴した。……

ほのぼのとして、しかも巧まず夫婦の間の愛を表現していて、微笑しい手紙である。

時の皇后はもちろん後の昭憲皇太后であるが、日本婦人で外国の外交官夫人はイキが初めてであることにいたく関心をもたれ、また同情もされて、種々のご質問を頂いた。

「日本婦人のあなたはよく勇気をお持ちでした、外国人との結婚にはさぞかし、人には言えない苦労がおありでしたろう、ご立派です、あなたは広い太平洋に日本からアメリカに一本のかけ橋をかけ渡されたのです。どうかしっかりお励みください、勇気と健康をもちつづけられるように」

というお言葉であった。思い遣りの深い皇后さまの言葉にイキは思わず涙がこぼれそうになった。

皇后さまが仰せられた「勇気」という言葉ははからずもイキの心を捉え、それまで耐えてきた言い知れぬ苦労がどっと胸に這い上ってきて、思わず涙を誘ったのだった。だが、それと同時に「勇気」というその短い言葉の前に、淡雪のようにこれまでの苦労が、胸のうちからいっぺんに溶け去るのを覚え、なにやら熱いものに変わったのである。

思い遣り深い皇后さまのお言葉に恐惧し、感泣したこの日のことをイキは何べん周囲に物語ったか知れない。お言葉は別の意味ではイキに外交官アルウィンという公人の妻としての自覚を強く促すものになった。そして、この時に皇后さまの下された扇子はイキにとって終生の宝物として持ちつづけられた。

ロバートとイキ夫妻が礼装して並ぶ一枚の写真が残されている。それは群馬県伊香保町が別邸を保存し、「有院家」に関する若干の資料を並べる中にも見ることができる写真である。明治二十二年の憲法発布の大祝賀会の際を記念したものであった。諸外国公使夫妻の列席した招宴だからイキは当然ながらこの時も洋装だったのである。かたくなまでに日本の生活習慣に固執したかの女にとっては珍しい写真である。時にロバートは四十五歳であり、イキは三十七歳であった。

いま明治神宮外苑の聖徳記念絵画館の収蔵される「憲法発布式典」関係の絵画、とくに「祝宴図」ではハワイ公使としてのロバート夫妻のこの日の姿が画中に見られる。

この時から二年の後、ロバートは台湾製糖会社の設立に参画し、井上馨、益田孝、渋沢栄一、鈴木藤三郎らとその発起人の一人となった。日清戦争の結果台湾が日本の領土となり、その気候がハワイによく似ていることに着眼をおいたロバートがいちはやくハワイ種砂糖栽培研究を進めてきた、言わば夢の実現であった。

さきに触れたことだが、井上馨の創立した日本最初の貿易会社である先収会社が三井財閥との提携により三井物産となり、やはり同じ井上グループの益田孝が初代社長となり、ロバートは請われてその顧問に就任したいきさつがあったが、この場合、糖業進出とは別の過去のことである。外国人のロバートがこのように政、財界に驚くべき活躍をなし得たのは、日本の友人らとの交流に円満を保ち、人脈に恵まれたことによるところが多い。

ロバートの若くして来日したそもそもは太平洋郵便汽船会社の社員としてであったが。その経験を生かしてすでに一方では海運業にも手を出していた。やはり井上の力によるのである。明治十六年（一八八三年）に設立した共同運輸会社がそれである。奇しきことにはロバートとイキ夫妻の間に長女ソフィア・アルベラ・アルウィンが誕生した年に一致していた。

この共同運輸会社では益田、渋沢を取締役に、副社長にはもと東京帆船会社社長の退役海軍大佐遠武秀行がなった。ロバートは三田綱町の邸宅をその遠武から譲り受けているのだ。佐土原藩主島津氏の屋敷だったという由緒の敷地一万坪に構えられた広壮な邸宅で、設計も英国人建築家コンドル博士の手になり、手洗いはすべて水洗という当時としてはきわめて珍しいものだった。かれはここを本宅とし、玉川と伊香保に別荘を持ったのであった。

ところで、ロバートはこの会社でも井上と益田の要請をうけ、顧問兼外国人支配人になっているのである。かれは社長だった退役海軍少将伊藤雋吉と共に、新造船六艘を購入するためにロンドンに渡ったりしている。旧船でも当時の十五万ドルから三十万ドルが相場であったから、新造船は約その二倍と見てよいだろう。ロバートは三井物産も、共同運輸もともにコミッション契約であったから、四十歳になるころはすでに巨万の財をなし、三井に匹敵するほどの大富豪になっていた。

当時の海運業界では三井系の共同運輸と三菱汽船の二者の競合が灼熱化していた。土佐の地下浪人出身で「海坊主」とあだ名された岩崎弥太郎は三菱商会を主宰し、強引な商法を展開して、艦船、鉄砲類の購入で利をおさめ、一方、後藤象二郎らを通じて政府の保護をうけ、海運業界を独占する勢いにあり、さらに大隈重信との結びつきを深めていて、政争がこれにからむ状態を招き、益田、渋沢対岩崎の個人的な泥仕合に輪をかける様相を呈していた。本来なら仲裁役であるべき伊藤、井上など政府閣内の大物までが巻き込まれ、翻弄されるいきさつがあった。

しかし、それも岩崎の急死で終りを告げ、伊藤、井上の仲介で、両社は合併の合意に達して、明治十八年（一八八五年）日本郵船会社の発足を見たのであった。

だが、ロバートはこの時期ハワイ移民という大きな、意義ある事業にあらん限り努力を傾けており、運良くその渦中を免れていた。

アメリカがハワイを併合した年にはハワイに日本人排斥運動が起こり、次いで、カリフォルニアにも飛び火して、日清、日露の戦いに勝利を収めた日本の国粋主義、ひいては軍国主義傾向に対する欧米の「黄禍論」が唱えられ始めていた。

ロバート、ウォーカー・アルウィンの駐日ハワイ公使としての進退は時流に従うものであったが、この場合に限らず、異国にありながらつねにパイオニアとして順風に恵まれ、しかも逆風は知らずしてかれを避ける、という運命の不思議を生きたのであった。

―未完―（四・九・二五）

本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。

編集子のメモ

◆近頃、本屋さんの大方はあたかも大根、にんじん同様、に週刊誌をはじめ雑誌類と文庫本、漫画本を並べてこと足りる時代のようだ。手近い店頭ではマシな単行本は買いたくとも手に入らない。雑誌類が書店売上げの大部を占める時代なのだそうだ。雑誌類の創刊は相次ぎ、十二月には中央公論社からも小説雑誌が出るそうである。読み捨て読者が大勢を占めるからだろう。ああ、と言うのみ。

◆三戸岡道夫が「江戸妖草伝」の好評に応え、構想新に続くシリーズを今号より連載を始めた。大方の期待が大きいだけに作者の自重を望み、かつ期待したい。

◆山根三枝子は津田英学塾の思い出に生きる自分史を倦まず書き続ける。

◆青木昭成は詩の分野でつねに新風をもたらす。

◆佐々木一郎はミステリーの世界に挑み、意表をつく着想の作品を発表し続ける。

◆金子正義と大和禎人は地味な史伝の分野開拓に努力の筆を振るう。

かくは挙げ来たるとき、「まんじ」は〈まんじ巴〉の多彩、まさに本誌の性格を物語り、百花繚乱のありさま、誌運の隆昌を喜んで良いのであろう。（お）

「まんじ」第四十六号

平成四年十一月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本内
「作家群」（まんじ）編集部

☎〇三（三二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（三二六一）五七四三